神　並　遺　跡　Ⅰ

1986

東大阪市教育委員会
財団法人 東大阪市文化財協会

序

財団法人東大阪市文化財協会は、昭和57年にそれまで市内の各遺跡の調査を続けていた東大阪市遺跡保護調査会、国道308号線関係遺跡調査会を統合する形で発足いたしました。この中で国道308号線関係遺跡調査会は、国道308号線の拡幅と東大阪生駒電鉄株式会社による新鉄道建設工事に伴う発掘調査を実施するため、大阪府教育委員会と東大阪市教育委員会の合同の形で昭和55年2月に組織されました。以後、本協会が発足するまでの間に国道308号線関係の遺跡調査を続けてまいりました。

今回報告いたします神並遺跡第1次調査も、昭和56年11月25日から昭和57年3月31日まで国道308号線関係遺跡調査会で実施したものであります。神並遺跡は、今回の事業計画によって新たに発見された遺跡で、縄文時代早期から室町時代頃まで続く複合遺跡であることが明らかとなり、重要な遺構、遺物がこの調査のあとも続々発見されています。この報告書は、その契機になった調査の報告であり、今後刊行される報告書によって遺跡の性格・範囲も解明されることと思います。

本調査は、大阪府教育委員会と合同の形で行い、以後の整理は本協会が引き継ぐ形で実施しましたが、この間大阪府教育委員会文化財保護課をはじめ、関係各位の御指導・御協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げますとともに今後とも一層の御指導・御鞭撻を切にお願い申し上げます。

財団法人　東大阪市文化財協会
理事長　木　寺　　宏

例　　言

1．本書は、東大阪生駒電鉄株式会社が建設を進めている東大阪都市高速鉄道東大阪線計画事業並びに大阪府八尾土木事務所が計画した国道 308 号及び都市計画道路築港枚岡線建設計画事業に伴う神並遺跡第１次の発掘調査概要報告書である。

2．本調査は、国道 308 号線関係遺跡調査会が、東大阪生駒電鉄株式会社並びに大阪府八尾土木事務所の委託を受けて実施し、その後の整理作業は同調査会より財団法人東大阪市文化財協会が一切を引き継いで実施した。

3．現地調査は、昭和56年11月25日より昭和57年３月31日まで実施した。

4．昭和57年４月以降の整理は、次の事務局体制により進めた。

理 事 長　木寺　宏（東大阪市教育委員会教育長）
事務局長　寺澤　勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事）
庶務部長　小川　満（東大阪市教育委員会文化財課主幹）昭和58年４月まで
　　吉田照博（東大阪市教育委員会文化財課課長代理）昭和58年５月より
調査部長　原田　修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
庶 務 部　安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
　　上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）
調査担当　下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主任）
　　才原金弘（東大阪市教育委員会文化財課）
　　曽我恭子（財団法人東大阪市文化財協会）
　　小西優美（財団法人東大阪市文化財協会）

5．遺構の名称は略号で示している。ＳＢ……柱穴、ＳＤ……溝、ＳＥ……井戸、ＳＫ……土坑とし検出した順に１・２・３…の番号を付けている。現地の土色名は、農林省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所色票監修の新版「標準土色帖」に準じており、記号の表示もそれにしたがった。

6．本書の執筆は、Ⅱ・Ⅳ1)-(３）を才原、Ⅴを曽我、その他の項及び編集を下村がおこなった。編集は下村があたった。遺構写真は各担当者が撮影した。遺物写真は新生堂フォト・落合信生氏に委託した。

7．調査の実施にあたっては、林野全考（東大阪市文化財専門員）、木下密運（東大阪市文化財保護委員）氏に御指導・御教授をいただいた他、中世遺物について橋本久和、川越俊一、尾上実の各氏より多くの御教授をいただいた。又、鈴木秀典、宇治田和生、渡辺昌宏、三宅俊隆の各氏には出土遺物を観察させていただいた。これらの方々に厚くお礼申し上げます。また、東大阪生駒電鉄株式会社並びに大阪府八尾土木事務所及び大成建設株式会社の方々に、現場作業について格別な御配慮、御協力をいただいた。お礼申し上げます。

本　文　目　次

序……
例言……
Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．調査の経過と方法……3
1)．試掘調査と神並遺跡の発見……3
2)．調査範囲と地区割……4
Ⅲ．遺跡の立地と歴史的環境……6
Ⅳ．調査の概要……8
1)．A地区の調査……8
(1)層位……8
(2)中世の遺構……8
(3)古墳～奈良時代の遺構……17
2)．B地区の調査……21
(1)　層位……21
(2)　遺構……21
3)．C地区の調査……22
Ⅴ．出土遺物……24
1)．土器の概要……24
(1)　瓦器……24
(2)　土師器……30
(3)　須恵器……32
(4)　陶磁器……33
補足　瓦器椀の地域性……34
2)．A地区出土土器……35
3)．B地区出土土器……56
4)．C地区出土土器……56
5)．その他の遺物……58
Ⅵ．まとめ……61
観察表……69

挿　図　目　次

第１図　現地説明会風景……2
第２図　No.２トレンチ試掘調査風景……3
第３図　調査地点と地区割図……5
第４図　遺跡周辺図……7
第５図　Ａ地区断面図……9
第６図　建物１・２実測図……10
第７図　柱穴群１実測図……11
第８図　柱穴群２実測図……12
第９図　井戸（ＳＥ01～04）実測図……13
第10図　井戸（ＳＥ05～07）実測図……14
第11図　ＳＫ22実測図……16
第12図　羽釜棺１実測図……17
第13図　羽釜棺２実測図……17
第14図　羽釜棺１・２土器実測図……18
第15図　Ａ地区遺構配置図……19
第16図　古墳時代遺構実測図……21
第17図　Ｂ地区断面図……22
第18図　Ｃ地区断面図……23
第19図　ＳＥ01出土遺物実測図……36
第20図　ＳＥ02出土遺物実測図……38
第21図　ＳＥ02出土遺物実測図……39
第22図　ＳＥ02出土遺物実測図……40
第23図　ＳＥ03・04出土遺物実測図……41
第24図　ＳＥ05出土遺物実測図……43
第25図　ＳＥ05出土遺物実測図……44
第26図　ＳＥ05出土遺物実測図……45
第27図　ＳＥ05出土常滑甕実測図……46
第28図　ＳＥ06・07出土遺物実測図……47
第29図　ＳＫ22出土遺物実測図……48
第30図　ＳＫ22出土遺物実測図……49
第31図　柱穴・土坑内出土遺物実測図……50

第32図　落ち込み状遺構２出土遺物実測図……51
第33図　溝内出土遺物実測図……52
第34図　ＳＤ58出土遺物実測図……53
第35図　包含層内出土遺物実測図……54
第36図　包含層内出土遺物実測図……55
第37図　包含層内出土遺物実測図……56
第38図　ＳＫ47出土遺物実測図……57
第39図　銭貨拓影……58
第40図　砥石実測図……59
第41図　その他の遺物実測図……60

表　目　次

第１表　瓦器椀分類表……28
第２表　瓦器小皿分類表……30
第３表　土師器皿分類表……31
第４表　ＳＥ02・05出土土師器小皿形態別一覧表……32
第５表　砥石観察表……59
第６表　その他遺物観察表……60
第７表　遺構内出土瓦器椀型式別分類表……63
第８表　遺構内出土瓦器椀個体数……64
第９表　各時期別土師器皿の口径表……65

図　版　目　次

図版一	調査地航空写真		
図版二	A地区遺構		
図版三	A地区発掘前の状況	1．A地区全景（東から）	2．人力掘削風景
図版四	A地区遺構	1．SK22・落ち込み状遺構1検出状況	
		2．SE05・落ち込み状遺構2検出状況	
図版五	A地区遺構	1．建物1・2全景(南から)	2．建物1・2全景(西から)
図版六	A地区遺構	1．柱穴群1（北から）	2．柱穴群1（北から）
図版七	A地区遺構	1．柱穴群1・SD52(北から)	2．柱穴群1(東から)
図版八	A地区遺構	1．柱穴群2（北から）	2．柱穴群2（北から）
図版九	A地区遺構	1．SB199～208・359・360（東から）	
		2．SB347全景	
図版十	A地区遺構	1．SB132全景	2．SB204全景
図版十一	A地区遺構	1．SE01全景	2．SE01内土器出土状況
図版十二	A地区遺構	1．SE02全景	2．SE03全景
図版十三	A地区遺構	1．SE04全景	2．SE05全景
図版十四	A地区遺構	1．SE05内土器出土状況	2．SE05内断面
図版十五	A地区遺構	1．SE06全景	2．SE06内遺物出土状況
図版十六	A地区遺構	1．SE07全景	2．SE07礫検出状況
図版十七	A地区遺構	1．SK22上層礫・土器検出状況	
		2．SK22下層礫・土器検出状況	
図版十八	A地区遺構	1．SK22下層礫・土器検出状況	2．SK22完掘状況
図版十九	A地区遺構	1．SD58土器出土状況	2．SD58土器出土状況
図版二十	A地区遺構	1．落ち込み状遺構内土器出土状況	
		2．落ち込み状遺構内土器出土状況	
図版二十一	A地区遺構	1．包含層内土器出土状況	2．包含層内土器出土状況
図版二十二	A地区遺構	1．古墳～奈良時代、溝・土坑（東から）	
		2．古墳～奈良時代、溝・土坑（北から）	
図版二十三	A地区遺構	1．SD70・71内製塩土器出土状況	
		2．SD70・71内製塩土器出土状況	
図版二十四	A地区遺構	1．羽釜棺1検出状況	2．羽釜棺1検出状況(北から)
図版二十五	A地区遺構	1．羽釜棺2検出状況	2．羽釜棺2検出状況(北から)
図版二十六	A地区遺構	1．羽釜棺2検出状況	2．羽釜棺2墓壙検出状況

図版二十七	B地区遺構	1．発掘前の状況	2．掘削完了の状況
図版二十八	B地区遺構	1．柱穴検出状況	2．柱穴検出状況
図版二十九	C地区遺構	1．発掘前の状況	2．遺構全景
図版三十	C地区遺構	1．ＳＫ47全景	2．ＳＫ47土器出土状況
図版三十一	A地区遺物	1．ＳＥ01出土土器	2．ＳＥ01出土土器
図版三十二	A地区遺物	ＳＥ02出土瓦器椀	
図版三十三	A地区遺物	ＳＥ02出土瓦器椀	
図版三十四	A地区遺物	ＳＥ02出土瓦器椀	
図版三十五	A地区遺物	ＳＥ02出土瓦器椀・小皿	
図版三十六	A地区遺物	ＳＥ02出土遺物	
図版三十七	A地区遺物	ＳＥ02出土土師器小皿	
図版三十八	A地区遺物	ＳＥ02出土土師器小皿	
図版三十九	A地区遺物	ＳＥ02出土土師器小皿	
図版四十	A地区遺物	1．ＳＥ02出土瓦器椀	2．ＳＥ出土土器・磁器
図版四十一	A地区遺物	ＳＥ03・06出土土器	
図版四十二	A地区遺物	ＳＥ05出土瓦器椀	
図版四十三	A地区遺物	ＳＥ05出土瓦器椀	
図版四十四	A地区遺物	ＳＥ05出土瓦器椀・小皿	
図版四十五	A地区遺物	ＳＥ05出土土器・陶器	
図版四十六	A地区遺物	1．ＳＥ05出土磁器	2．ＳＥ05出土須恵器
図版四十七	A地区遺物	ＳＥ03・05・06出土土器	
図版四十八	A地区遺物	ＳＥ06出土瓦器椀	
図版四十九	A地区遺物	ＳＫ22出土瓦器椀	
図版五十	A地区遺物	ＳＫ22出土瓦器椀	
図版五十一	A地区遺物	ＳＫ22出土瓦器椀	
図版五十二	A地区遺物	ＳＫ22出土瓦器椀	
図版五十三	A地区遺物	ＳＫ22出土瓦器椀	
図版五十四	A地区遺物	ＳＫ22出土土器	
図版五十五	A地区遺物	落ち込み状遺構２出土土器	
図版五十六	A地区遺物	1．落ち込み状遺構２出土磁器	
		2．落ち込み状遺構２出土土器	
図版五十七	A地区遺物	1．落ち込み状遺構２出土磁器	
		2．落ち込み状遺構２出土磁器	
図版五十八	A地区遺物	1．落ち込み状遺構２出土磁器（内面）	
		2．落ち込み状遺構２出土磁器（外面）	

図版五十九	A地区遺物	ＳＢ11・ＳＢ189・ＳＢ387・ＳＤ56出土土器
図版六十	A地区遺物	ＳＫ67・ＳＫ37・ＳＫ40・ＳＢ207・ＳＢ327・ＳＢ332 ＳＤ52・ＳＤ56・ＳＤ58・ＳＤ63出土土器
図版六十一	A地区遺物	１．ＳＤ16・ＳＤ３・ＳＤ52・ＳＤ56・ＳＤ58・ＳＤ63 出土磁器 ２．ＳＤ３・ＳＤ40・ＳＤ52出土土器
図版六十二	A地区遺物	１．ＳＥ01・ＳＥ02・ＳＥ06・ＳＫ47・ＳＫ22・ＳＢ64 出土磁器（外面） ２．ＳＥ01・ＳＥ02・ＳＥ06・ＳＫ47・ＳＫ22・ＳＢ64 出土磁器（内面）
図版六十三	A地区遺物	包含層内出土土器
図版六十四	A地区遺物	包含層内出土土器
図版六十五	A地区遺物	１．包含層内出土陶器　　２．包含層内出土須恵器
図版六十六	A地区遺物	１．包含層内出土磁器（外面） ２．包含層内出土磁器（内面）
図版六十七	A地区遺物	１．包含層内出土磁器　　２．包含層内出土陶器
図版六十八	C地区遺物	ＳＫ47出土遺物
図版六十九	A・C地区遺物	１．ＳＫ22出土土器　　２．ＳＫ47出土土器
図版七十	A地区遺物	１．包含層・ＳＥ05・ＳＫ30・ＳＤ52・ＳＢ225出土の 各種の遺物 ２．ＳＥ02・ＳＫ22・落ち込み状遺構２・包含層内出土砥 石
図版七十一	A地区遺物	羽釜棺１・羽釜棺２

Ⅰ．はじめに

大阪府と奈良県を結ぶ近畿日本鉄道奈良線は、近年の奈良県側の宅地開発による人口増によって、朝夕の通勤電車は飽和状態にあり、この混雑の緩和と東大阪市域の奈良線から以北の再開発に伴い新鉄道の建設が熱望されていた。これら地元の要望に答える形で、昭和46年以降に大阪市営地下鉄中央線の長田までの延伸と長田から奈良県生駒市を結ぶ新鉄道建設が計画された。また、国道170号線（大阪外環状線）以東の国道308号線の拡幅及び阪神高速道路東大阪線の延長など道路網整備計画と合わせて実施されることになり、東大阪市北部地域の交通網の整備が一挨に実施に移されることになった。しかしながら、予定路線内には鬼虎川遺跡、西ノ辻遺跡などの周知の遺跡が数多く存在するほか、新遺跡の発見も予想された。

昭和52年に新鉄道建設の事業主体となった東大阪生駒電鉄株式会社では、昭和54年には用地確保ができている国道 308 号線分離帯内の試掘調査を東大阪市教育委員会に依頼した。市教育委員会では、とりあえず東大阪市遺跡保護調査会へ調査を依頼して実施するとともに、その後の遺跡の取り扱い・調査体制の整備について対応を迫られることにな った。 昭和55年になると東大阪生駒電鉄では、全予定路線の中で鬼虎川遺跡の調査を先行させる形で橋脚予定地について発掘調査を市教育委員会へ依頼した。市教育委員会では今後の遺跡の取り扱い、調査方法及び調査体制等の諸問題について大阪府教育委員会と協議を重ねる一方で、工事計画上どうしても急を要する地区については、大阪府教育委員会の協力を得て東大阪市遺跡保護調査会の主体で発掘調査を実施することになった。この調査が鬼虎川遺跡第12次調査（その１）である。調査は、昭和55年７月21日より12月20日まで実施し、弥生時代中期の方形周溝６基、大溝などを検出した。しかしながら、東大阪生駒電鉄より引き続いて鬼虎川遺跡内の調査が要望され、さらに調査体制の強化の必要に迫られることになった。そこで市教育委員会では、大阪府教育委員会と協議の上、両者合同の形であらたに国道 308 号線関係遺跡調査会を組織し、当面の調査に対処していくことになった。調査会へは東大阪市と大阪府の職員が出張し、現場の発掘調査をおこなうことが申し合わされた。当時の調査組織は以下のとおりである。

（職名は、調査時のものである）

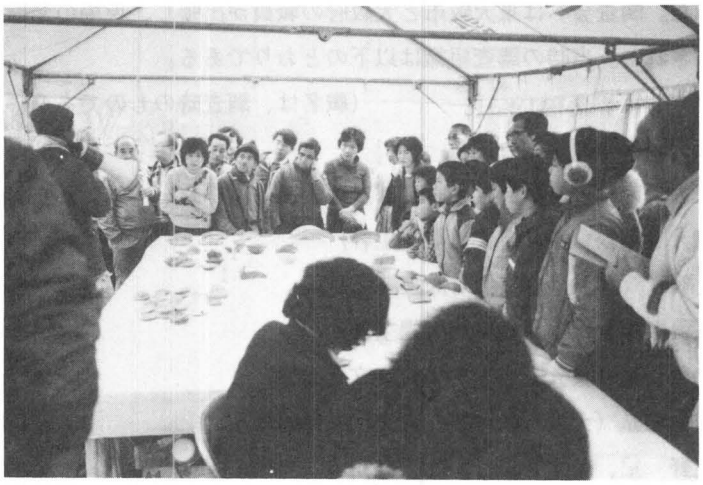
理　事　長　　秀平勇造（東大阪市教育委員会）
事務局長　　寺澤　勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事・文化財課長）
事務部長　　小川　満（東大阪市教育委員会文化財課主幹）
調査部長　　井藤　徹（大阪府教育委員会文化財保護課係長）
調査副部長　　原田　修（東大阪市教育委員会文化財課主任）
調査部員　　下村晴文・才原金弘（東大阪市教育委員会文化財課）
　　松岡良憲・田中和弘（大阪府教育委員会文化財保護課）
　　山本芳彦、北野　重、曽我恭子、小西優美
事務部員　安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）

調査補助員　浦元英俊、相田正明、綾仁正人、山口靖弘、有山淳司、長峰繁己、岩田一彦
綾仁清隆

整理補助員　成海節子、梶山絵理、岡本美恵、浅野喜美幸、中谷浩子、松本卓子、山田晴子
前田真由美、真鍋京子、見好理恵子、丸山美由起、木田裕子、大橋陽子、庄
野由利子、角野智美、藤井典子、白鹿広子、水上鈴子、高野伊登子、中西久子

事務補助員　井口雅之

上記の体制で昭和56年１月以降に鬼虎川遺跡第13次調査（その２）、第15次調査（その2―2）を実施し、すでに報告書も刊行されている。その後、国道308号線関係遺跡調査会では３件の調査を実施している。まず１件は、石切神社参道より東側地域の試掘調査である。石切神社参道より東側は、トンネル工事の進入口にあたるため、工事着手が急がれていた地域である。この地域に遺跡が存在するかどうかの資料を得る必要があったので、鬼虎川遺跡第13次調査と併行して試掘調査を実施した。この結果、新遺跡として神並遺跡が発見された。この経過については第Ⅱ章の中で詳しく記述している。この間、国道170号線以東の用地買収が進められていたが、容易には進まず調査の日程、工事計画も大幅に遅れることになった。昭和56年11月になってようやく石切神社参道東側地区のトンネル進入口の買収が完了し、11月25日を以って調査に着手した。これが神並遺跡第１次調査である。調査の結果、鎌倉時代後半の建物跡・井戸・土坑や古墳時代～奈良時代の土坑、溝、羽釜棺を検出したのは後述のとおりであるが、さらに下層に縄文時代早期の包含層が広がることを確認した。包含層は、Ａ地区の約530㎡の範囲に広がるとともに、深いところでは地表下約1.5ｍ以上の深さに達することがわかった。この予想外の遺構の検出によって調査は、到底昭和56年度内に終了することはできないと判断された。このため、下層の縄文時代早期の調査は、神並遺跡第２次調査として昭和57年度の調査に組み込まれることになった。なお、鎌倉時代後半の遺構については、昭和57年２月11日に現地説明会を実施し、一般市民の方々に公開をおこなっている。



第１図　現地説明会風景

３件目の調査は、西石切地区の試掘調査である。国道170号線（大阪外環状線）以東の西石切地区には、周知の鬼虎川・植附・西ノ辻遺跡などが存在するほか、あらたに神並遺跡が発見されるなど相当な規模の調査が必要になった。そこで全線について、買収が完了している土地を対象として、遺跡の範囲、調査の必要面積などの基礎資料を得る目

的で試掘調査を実施した。試掘調査の結果、工事予定地全線にわたって弥生～室町時代まで各時期の遺物・遺構が検出された。特に西ノ辻遺跡内では弥生時代落ち込み遺構などが検出され、良好な遺構の存在が予想された。この結果、国道170号線以東の西石切地区については、全工事予定地が調査対象となった。

神並遺跡第1次調査は4052㎡を対象として昭和56年11月25日より昭和57年3月31日まで実施し、西石切地区の試掘調査は、昭和57年3月1日より3月30日まで1500㎡について実施した。この事業終了とともに国道308号線関係遺跡調査は発展的解散をし、財団法人東大阪市文化財協会がすべての事業を引き継ぐ形で発足した。以後の新鉄道建設等に伴う調査は、財団法人東大阪市文化財協会と大阪府教育委員会が各々調査区域を分担して進めることとなった。

Ⅱ．調査の経過と方法

1）試掘調査と神並遺跡の発見

神並遺跡発見の契機となった試掘調査は、用地買収の関係で二次に分けて実施した。1次試掘は、No.2・3・5・6トレンチの計4地点（1地点3m×3m）で昭和56年3月18日より20日まで実施した。2次試掘は、No.1・4・7～11トレンチの計7地点（1地点3m×3m）で昭和56年4月22日より5月2日まで実施した。調査地の周辺には若宮古墳群や法通寺跡などの遺跡が知られており、これらの遺跡に関係する遺構の追求とともに、あらたな遺跡の有無を確認する目的で調査をすすめた。

調査の結果、No.1・6・7・8トレンチより中世期の遺構・遺物が確認された他、No.9・10・11トレンチで中世期の遺物が出土した。特にNo.7トレンチでは中世期の遺構の下で奈良時代及び縄文時代の遺物も少量出土しており、複合遺跡の性格を有することが判明した。これらのトレンチ設定地点は、比較的平坦で遺構の存在が予想されるところである。No.2・3は、既存の建物があったところで、すでに削平を受けていた。No.4トレンチも公園となっていたところで整地がおこなわれており、遺構・遺物とも確認できなかった。

第2図　No.2トレンチ調査風景

No.6トレンチは、後述のように調査範囲外になったので、ここで少し詳しく記述してお

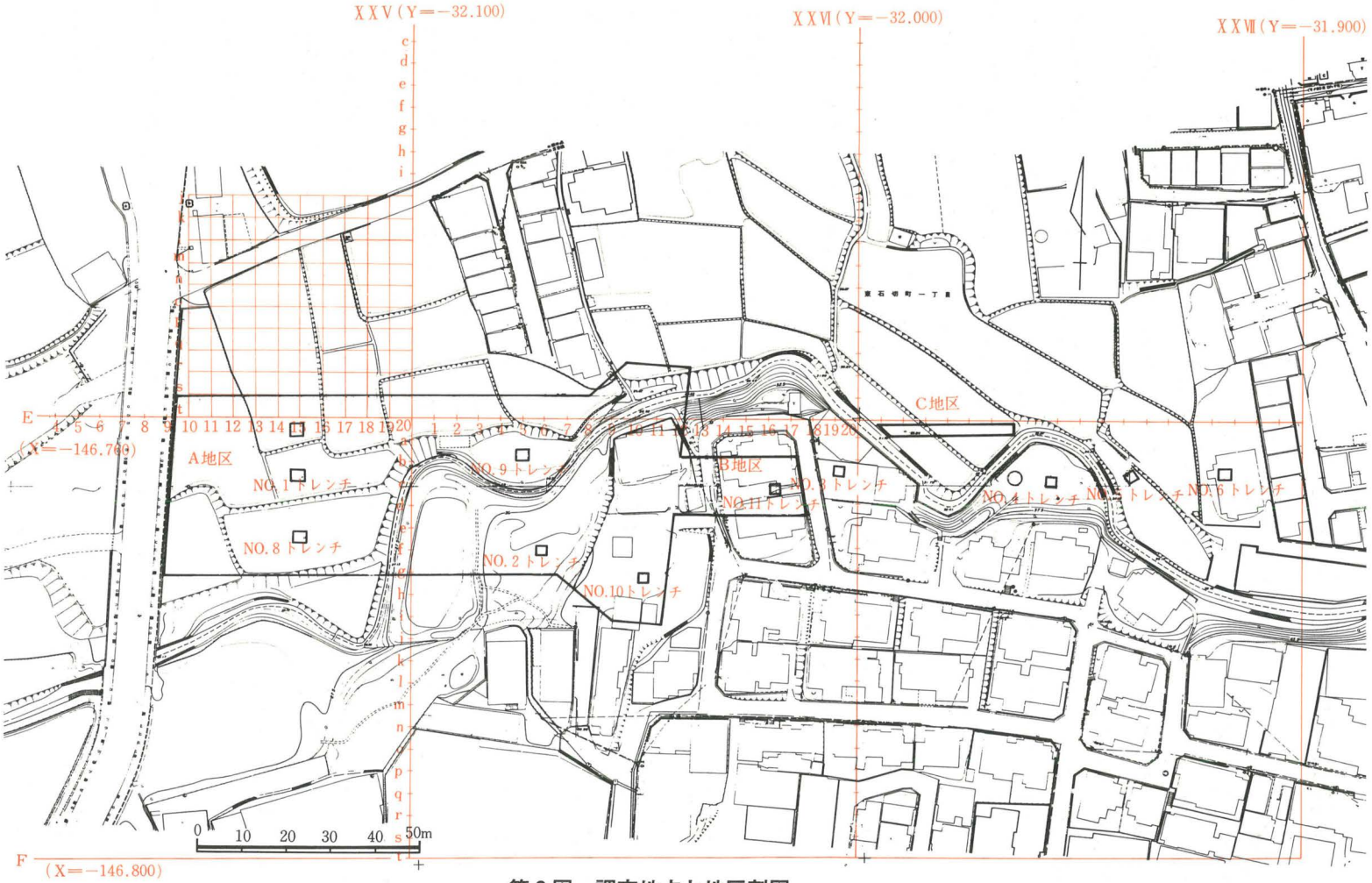
きたい。調査地点は、既存の住宅があったところで住宅徹去後の廃棄物処理のため、中央に大きな攪乱坑が認められた。この攪乱坑を避けて敷地北西にトレンチを設定した。調査は、まず機械掘削によって建物の基礎・整地層を除去することから開始した。地表下約70cmで南北に走る石列を検出した。石列は30～40cm大の自然礫を一段並列したもので、中世期の包含層上面から切り込まれている。試掘調査の性格上、遺構の性格についての追求はできなかった。この石列を残して、トレンチ内をさらに掘り下げると厚さ30～40cmで中世期の包含層を確認した。包含層内から鎌倉時代後半の時期の瓦器・土師器・須恵器が多量に出土している。包含層下面は、地表下約1.5ｍまで掘り下げたが湧水が激しく詳細は不明である。ただ、礫の混入が多くなり、中世期の遺構面を形成すると思われる。以上から中世期の遺構が存在する可能性が高いと考えられる。また石列付近より宋銭（紹聖元宝、1094年鋳造）が１点出土しており、石列の上限をうかがうことができる。

以上の試掘調査の結果、鎌倉時代から室町時代を中心とする遺跡の存在が明らかになるとともに、下層には奈良時代から古墳・縄文時代の遺跡が存在する可能性も考えられた。これは、従来の周辺の遺跡とは性格を異にするものであり、新遺跡として把えられる内容であるため、あらたに神並遺跡と名付けられた。

2）調査範囲と地区割

試掘調査結果にもとづいて調査範囲が決定された。No.１・No.７～９トレンチの設定地域及びNo.10・11トレンチ設定地区については全面調査を実施することになった。ここでは前者をＡ地区、後者をＢ地区と仮称した。その後、水路（鬼虎川）の付替工事に伴う調査が追加され、これをＣ地区と呼ぶことになった。No.６トレンチの地域は、中世期の遺構・遺物が検出されたが、トンネル工法によるため、現状を破壊する恐れがないことより調査範囲からは除外された。

今回の調査範囲であるＡ～Ｃ地区全体を５ｍ方眼による地区割を実施した。地区割は、昭和55年度に実施した鬼虎川遺跡の調査時に、新鉄道建設予定地全線の地区割をおこなっており、今回の調査においてもその地区割を踏襲した。地区割は、国土座標系に基づいて、100ｍ方眼の大区画とさらにその中を５ｍメッシュの方眼の小区画とした。地区割の基点（０点）を東大阪市川中（Ｘ＝－146.3、Ｙ＝－29.9）に置いて100ｍ毎の大区画のＸ軸を西から東へⅠ・Ⅱ・Ⅲとローマ数字で表わし、Ｙ軸を北から南へＡ・Ｂ・Ｃのアルファベットの大文字で表記し、それぞれの南東の交点をその地区名とした。小区画は、100ｍ方眼の大区画を５ｍメッシュで区画し、Ｘ軸を１・２・３の数字で表わし、Ｙ軸をａ・ｂ・ｃのアルファベットの小文字で表わすようにした。この地区割を今回の調査地点にあらわすとＡ地区の中央とＢ地区の東側で XXV ライン（Ｙ＝－32.1）と XXV Ｉライン（Ｙ＝－32.0）がのり、Ａ地区北端をＥライン（Ｘ＝－146.7）がのることになる。この大区画をさらに５ｍの小区画で地区割をしたのが第３図の地区割図である。つまり、Ａ地区の西北隅は XXV Ｅ10ｔ区、Ｂ地区の西北隅は XXV ＩＦ10ａ区、Ｃ地区の西北隅は、XXⅦ Ｆ２ａ区にあたる。遺構図面に出てくる区画はすべてこの国土座標系に基づく地区名を付した他、出土遺物は、すべて地区毎に取り上げをおこない、それぞれに整理番号を付している。



第３図　調査地点と地区割図

Ⅲ．遺跡の立地と歴史的環境

神並遺跡は東石切町１丁目に所在する縄文～室町時代までの複合遺跡である。現在の市道若宮線より北側に位置し、石切神社参道をはさんで東西に遺跡は広がる。生駒西麓の中位段丘上に立地し、標高が20～40mである。遺跡の南側には旧鬼虎川が流れる。神並遺跡は第７次まで調査を実施しており、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、鎌倉～室町時代の各時期の遺構、遺物が確認されている。

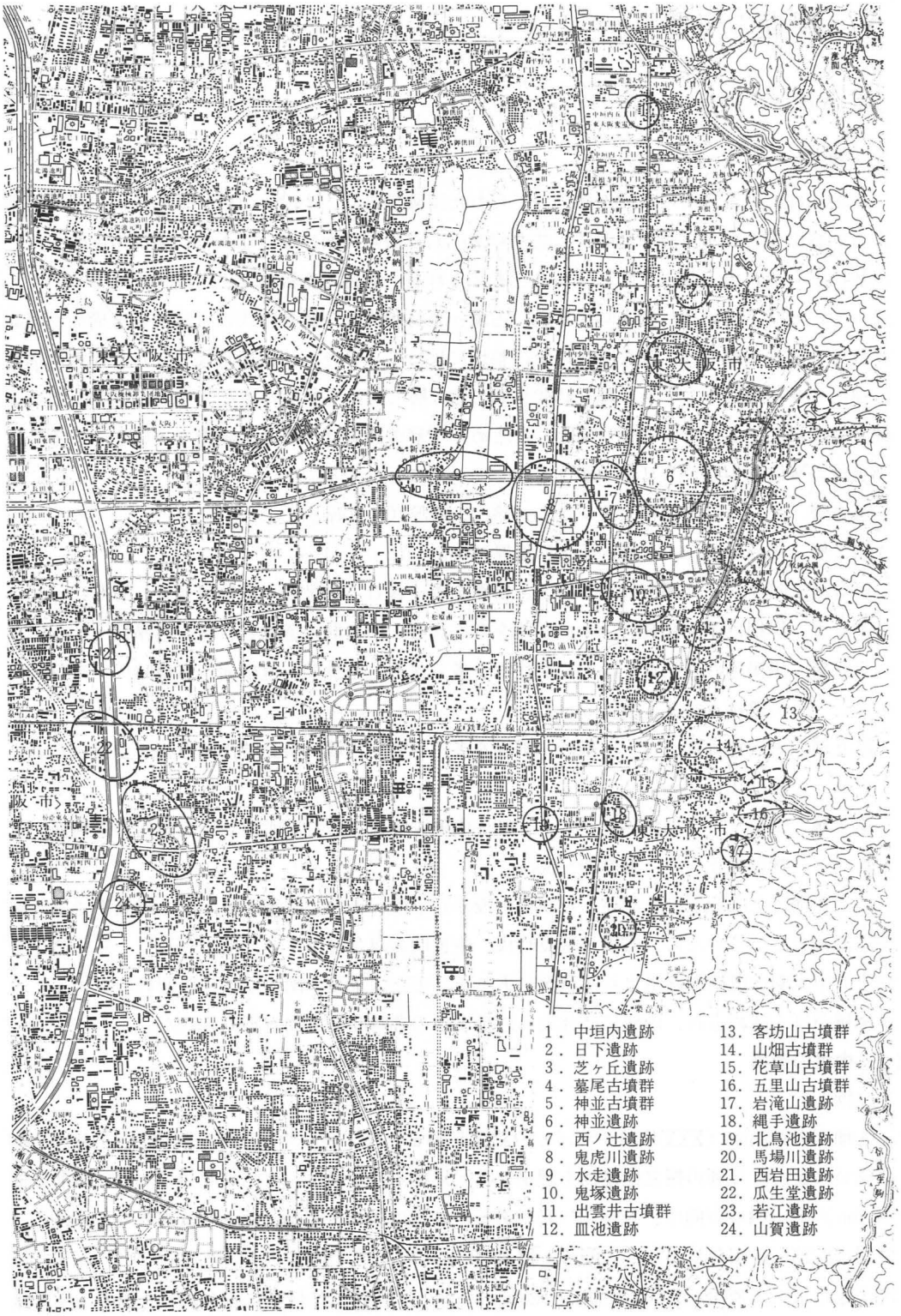
神並遺跡は縄文時代早期に開始される。早期の遺跡は大阪府下でも数少なく、交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡などが知られている。当遺跡では縄文時代の遺構、遺物は早期の時期だけであり、継続しない。東大阪市域では中期以降に遺跡数は増加し、集落の立地も扇状地へと移る。北より日下遺跡（後～晩期）、鬼塚遺跡（中～晩期）、縄手遺跡（中～後期）などがあげられる。日下遺跡は森ノ宮遺跡とならんで府下でも数少ない貝塚として著名である。近年の調査で晩期の土壙墓14基、甕棺墓３基が検出されている。鬼塚遺跡でも昭和57年に調査を実施しており、晩期の洗骨再葬墓が２基検出されている。両遺跡の発見例は縄文時代の葬制を考える上で貴重な資料となっている。

弥生時代の遺構は中～後期の自然河川が第４次調査で検出されている。東大阪市域では弥生時代の遺跡は縄文時代以降と同様に扇状地上に立地するものや、新たに平野部にも広がる。また、中～後期には標高80～100ｍの高所にも存在する。前～中期にかけこの集落は大集落を形成するものが多いが、後期になると集落の規模も縮少し、分散する。神並遺跡のすぐ西には西ノ辻遺跡、鬼虎川遺跡と続き、北には植附遺跡がある。これらの遺跡は神並遺跡と隣接して集落を形成していた。一方、西方の旧大和川の自然堤防上にも山賀遺跡や瓜生堂遺跡が存在する。生駒西麓の扇状地や平野部には農耕を基盤とした集落が形成された。

古墳時代には神並遺跡の東側に神並古墳群が築造される。神並古墳群は後期の群集墳であり、現在、すでに消滅したものを含めると７基が確認されている。今回の調査では、古墳内に副葬されることの多い耳環、双孔円板、紡錘車などが出土しており、周辺部にすでに消滅した古墳があった可能性も考えられる。生駒西麓の尾根上には神並古墳群と同様な後期の群集墳が点在する。数基から数十基単位のものがあり、前者は墓尾古墳群、出雲井古墳群、花草山古墳群、五里山古墳群などがある。後者は客坊山古墳群、山畑古墳群がある。

奈良時代～中世の遺構、遺物は今回の調査では多く確認した。奈良時代には調査地北側に法通寺跡があり、同時に関連した遺構と考えられる。また、中世の遺構は集落跡と考えられる建物跡や井戸などが検出されている。近年の調査では隣接する西ノ辻遺跡や鬼虎川遺跡でも確認されており、点々と集落があったことが窺える。

神並遺跡は縄文時代～中世に至るまでの各時代の遺構、遺物が検出されており、各時代の集落の変遷を考える上で重要な遺跡である。


東大阪市
1．中垣内遺跡
2．日下遺跡
3．芝ヶ丘遺跡
4．墓尾古墳群
5．神並古墳群
6．神並遺跡
7．西ノ辻遺跡
8．鬼虎川遺跡
9．水走遺跡
10．鬼塚遺跡
11．出雲井古墳群
12．皿池遺跡
13．客坊山古墳群
14．山畑古墳群
15．花草山古墳群
16．五里山古墳群
17．岩滝山遺跡
18．縄手遺跡
19．北鳥池遺跡
20．馬場川遺跡
21．西岩田遺跡
22．瓜生堂遺跡
23．若江遺跡
24．山賀遺跡

第4図　遺跡周辺図

Ⅳ．調査の概要

1）Ａ地区の調査

(1) 層　位

Ａ地区は、調査以前には段々状につくられた田圃であり、上段と下段では約３ｍの高低差がある。水田化される以前の地形は、北から南へ向う緩傾斜面になっており、遺構の南側では、生駒山から流れ出る谷川に面していたと考えられる。遺跡内の層位は、上段と下段では大きく違っている。上段では、縄文時代早期、古墳～奈良時代及び鎌倉時代の三時期の遺構面が確認されている。下段では、鎌倉時代以降の整地による削平のため、古墳時代～奈良時代の遺構面は検出できなかった。また、縄文時代早期の包含層も認められなかった。今回の第１次調査は、縄文時代早期上面までを調査対象としたため、下層の調査は、第２次調査で実施している。以下上段の層位を中心にして基本層位を記していくことにする。

第１層　オリーブ黒色粘土質シルト、耕土、層厚10～20cm。

第２層　褐色砂混シルト層、床土、層厚15cm。

第３層　暗オリーブ褐色砂混シルト、砂礫を多く含む。中世期の遺物包含層。層厚10～30cm。

第４層　黒褐色砂混粘質シルト、砂礫を多く含む。中世期の遺物包含層。層厚15～20cm。

第５層　黒褐色砂混粘質シルト、炭化物を多く含む。中世期の遺構面、古墳時代～奈良時代の遺物を含む。層厚５～25cm。

第６層　黒褐色粘質シルト、細砂・細礫を多く含む。古墳～奈良時代の遺物を少量含む。層厚10～15cm。

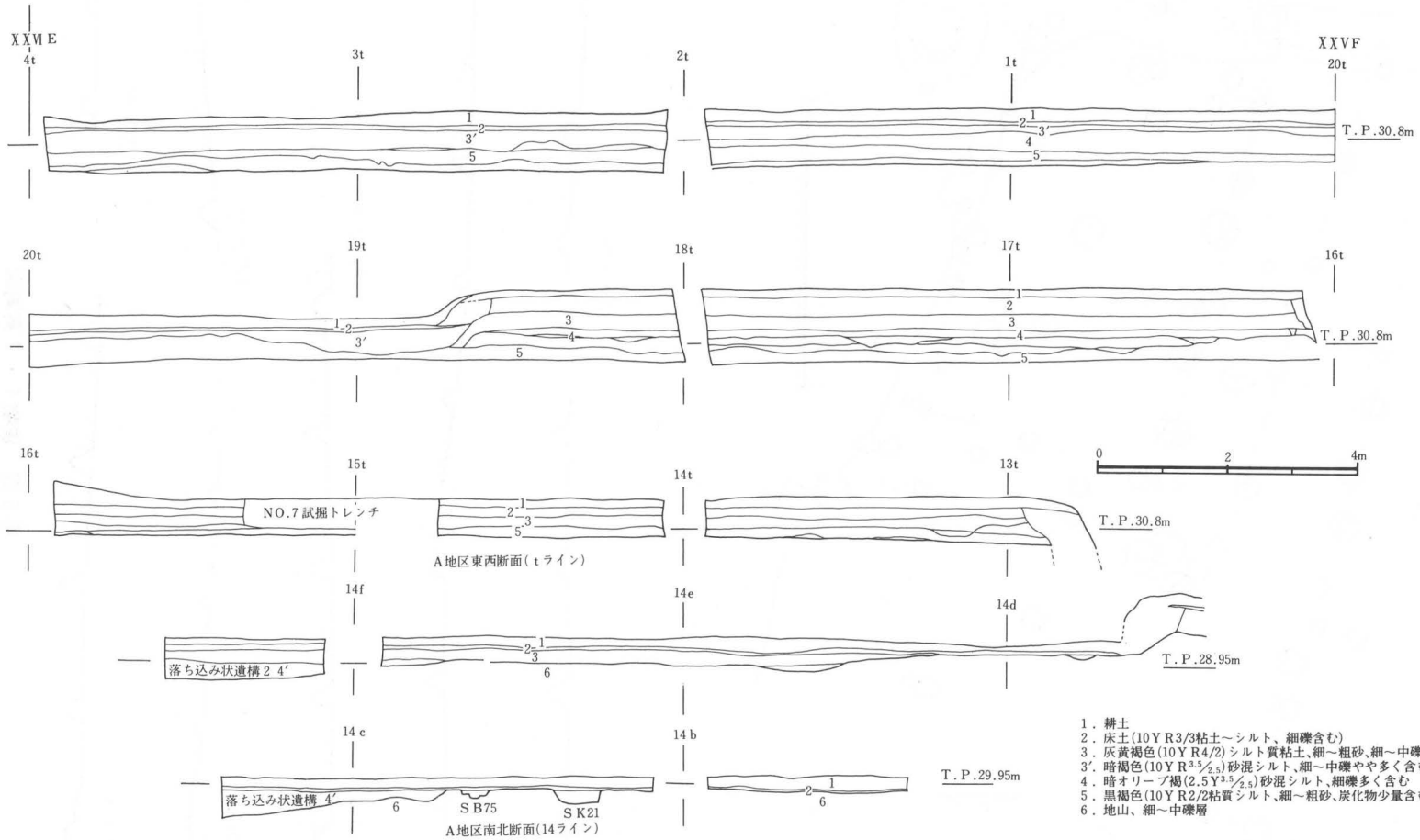
第７層　暗オリーブ褐色砂混シルト、細～中礫を多量に含む。古墳～奈良時代の遺構面、遺物は含まない。層厚30～50cm。

以上Ａ地区上段の層位を記述したが、中段から下段にかけては第１層・第２層直下で第７層が認められる。このため、古墳～奈良時代、中世期の包含層はすべて削平されており、第７層直上で中世期の遺構が確認される状況にあった。また、下段の南端では、斜面に流入する二次堆積層が厚く認められ、内部には弥生～近世までの各時期の遺物が認められた。

(2) 中世の遺構

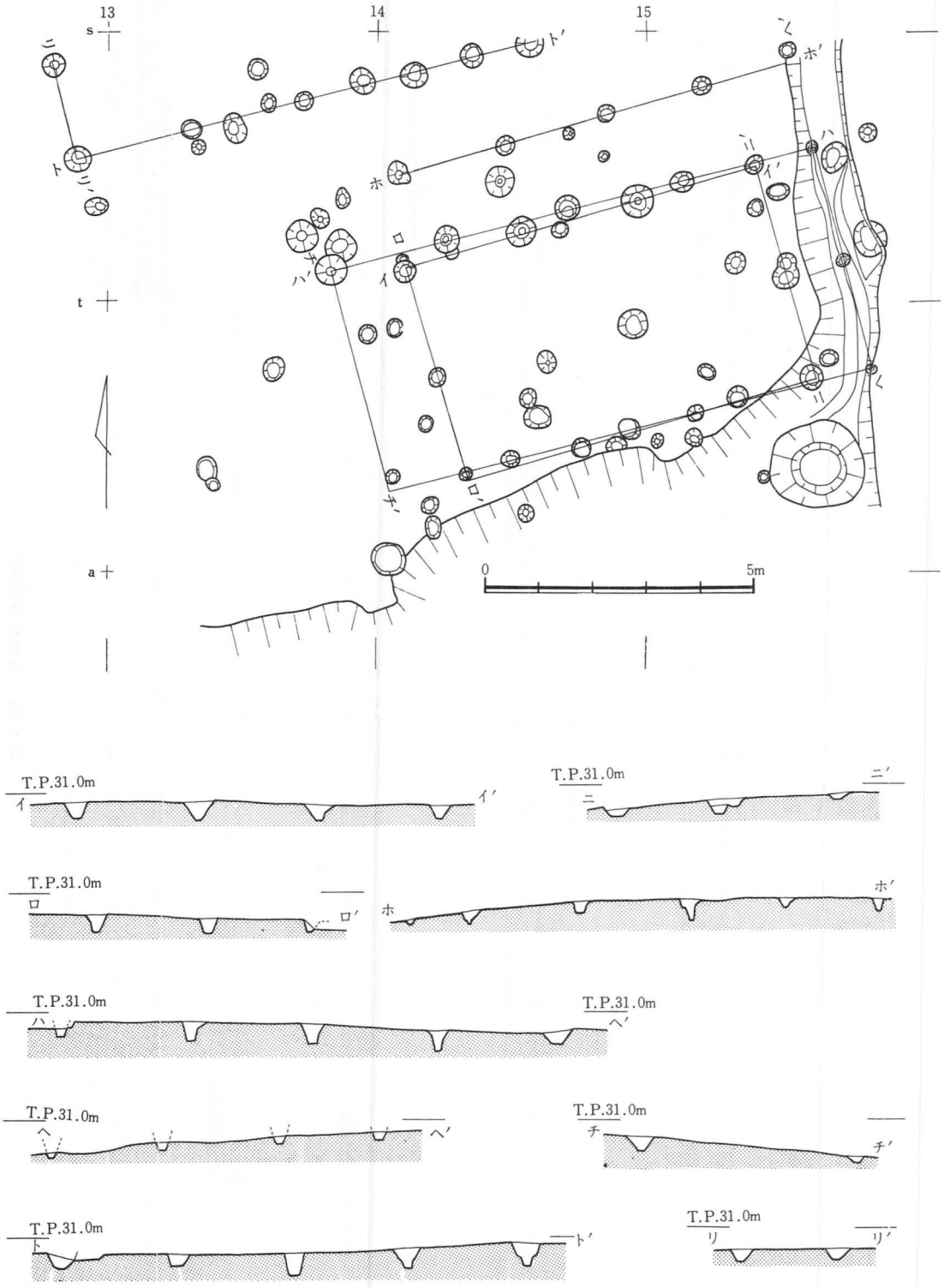
建物１

Ａ地区の最高所（XXⅤＥ13ｔ～16ｔ・XXⅤＦ13ａ～16ａ区）で柱穴群を確認し、主軸の方向の違いによって２棟の掘立柱建物を想定した。建物１の規模は、東西３間(6.75m)、南北２間(4.0m）で主軸の方向は、Ｎ―73°―Ｅである。柱穴は径42～55cm、深さ40cmを測る。東西の柱間は2.25m、南北は2.0ｍを測る。建物１の３ｍ北側で同方向に並ぶ柱穴列がある。柱穴は径35cm、深さ18～35cmで柱間は、2.05mを測る。建物１に付属するものか、柵のような施設か現状では判断できない。

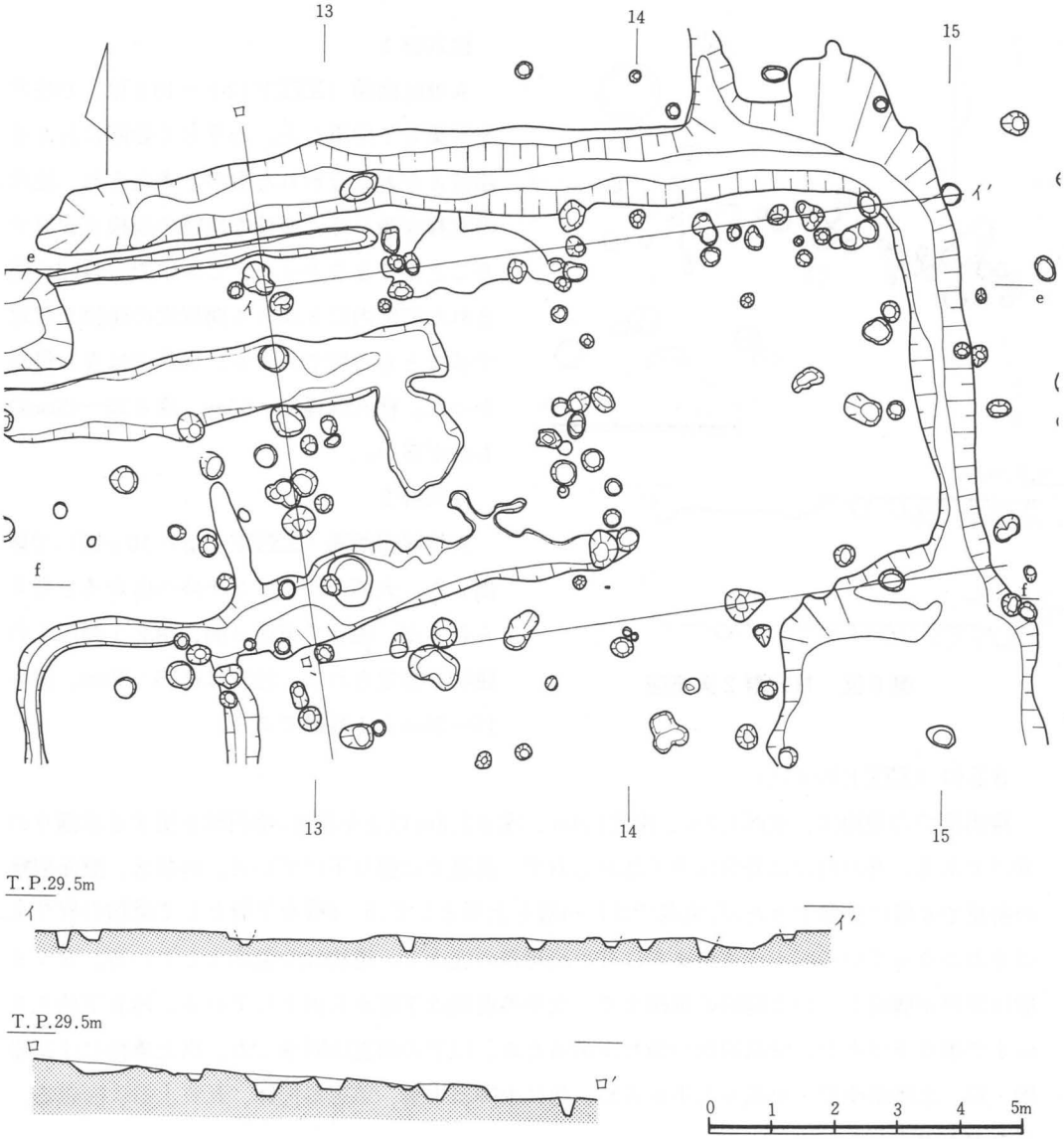


1．耕土
2．床土(10YR3/3粘土～シルト、細礫含む)
3．灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土、細～粗砂、細～中礫混じる
3′．暗褐色(10YR3.5/2.5)砂混シルト、細～中礫やや多く含む
4．暗オリーブ褐(2.5Y3.5/2.5)砂混シルト、細礫多く含む
5．黒褐色(10YR2/2粘質シルト、細～粗砂、炭化物少量含む
6．地山、細～中礫層

第5図　A地区断面図



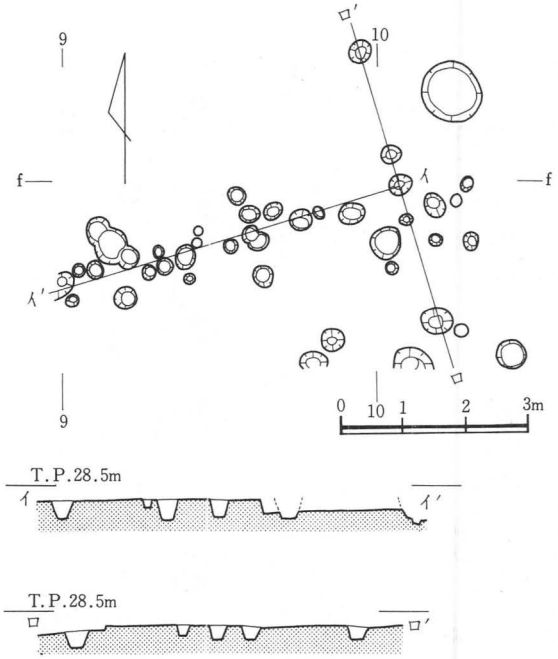
第6図　建物1・2実測図



第７図　柱穴群１実測図

建物２

建物１と重複して存在しているが、主軸の方向が若干西へふる。建物１との先後関係は不明であるが、規模を大きくしているところから後出のものと考えられる。規模は、東西４間(9.2m)、南北２間（4.2m）である。柱穴は径50cm、深さ30cmを測る。東端の柱穴は、ＳＤ63に切られている。東西の柱間2.3m、南北2.15mを測る。建物２の北側で同方向の柱穴群がある。大部分がトレンチ外へ広がっていると思われるが、現状で東西４間以上、南北１間以上を検出できる。柱穴は径35～50cm、深さ30～40cmを測る。柱間は、東西で2.1～2.2mを測る。



第8図　柱穴群2実測図

柱穴群1

A地区南端（XXVF12f～15f区）で柱穴を密集して検出した。おそらく数回にわたる建替えがおこなわれたものと考えられ、柱穴の重複が激しく、明確な建物の規模を復原することができなかった。この中でSD52に囲まれた範囲内に3間×4間程度の建物を想定することも可能であるが、現状ではなし得なかった。柱穴は径35～50cm、深さ25～45cmのものが多い。

柱穴群2

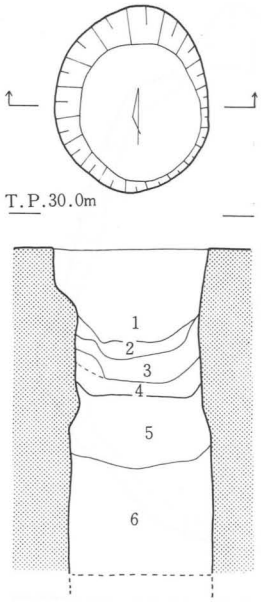
A地区南西隅（XXVF11g・10g区）で検出した。大部分がトレンチ外へ広がると考えられるが、現状で東西3間、南北1間以上の建物が想定される。柱穴は径25～30cm、深さ15～25cmと小規模である。

SE01（XXVE10t区）

検出面での規模は、東西1.2m、南北1.4m、深さ2.8m以上を測る。楕円形を呈する素掘りの井戸である。井戸内には井筒は全く認められず、真直ぐに掘り下げている。内部は、断面観察の所見で6層に分層できたが、現場では1～4層を上層として、5・6層を下層として遺物の取り上げをおこなっている。1～4層までは井戸廃絶後の埋土で、遺物は少量出土している。5～6層は井戸が機能していた時期の堆積土で、大半の遺物は下層から出土している。地表下約2.5mまで掘り下げたが、壁面崩壊の恐れがあるため、以下の調査は断念した。出土遺物には瓦器椀・皿、土師器中皿・小皿が大半を占め、他に土師器土釜、須恵器捏鉢、瓦質土器、陶磁器、瓦などが出土した。

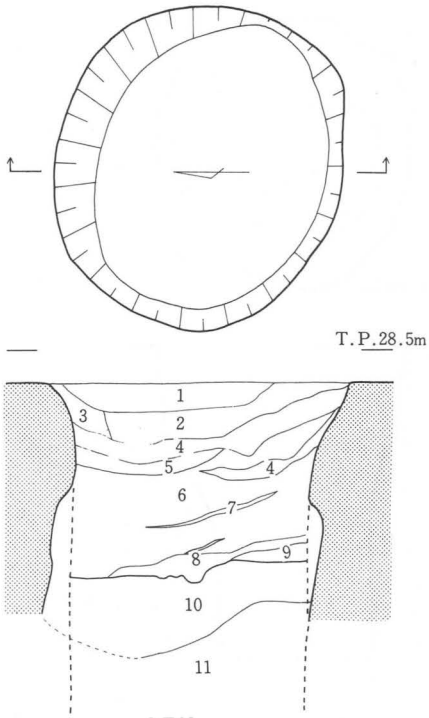
SE02（XXVF11e区）

検出面での規模は、東西2.6m、南北2.3m、深さ2.3m以上を測る。平面で楕円形を呈し、ほぼ直線的に掘られた素掘りの井戸である。井戸内の堆積土は、断面観察の所見では13層に分層できるが、大きく1～11層までを上層、12層以下を下層に分けることができる。上層は地山の土混りの層が互層になっており、5層までは井戸廃絶後の埋土である。6～11層は、井戸内部の壁面崩落時の土を含み、廃絶時期の堆積土であり、12層以下が井戸が機能していた時期の堆積土と判断できる。地表下約2.3mまで掘り下げをおこなったが、湧水が激しく底まで達していない。遺物は、大半が6層以下より出土している。出土遺物には、瓦器椀・皿、土師器皿が大半を占め、土師器土釜、須恵器捏鉢、陶磁器、砥石が少量出土している。



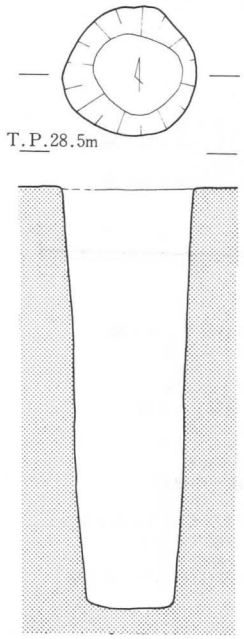
S E01

1．淡茶褐色(10Y R$^{3.5}/_{2.5}$)粘質シルト層
2．黄褐色砂質シルト混り礫層
3．淡茶褐色(10Y R$^{3.5}/_{2.5}$)砂混り粘質シルト層
4．黄褐色粘質シルト層
5．灰色(7.5Y4/1)粘質シルト層
6．灰色(7.5Y4/1)砂混り粘質シルト層

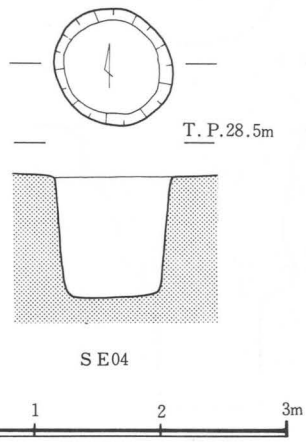


S E02

1．にぶい黄褐色(10Y R4/3)砂混りシルト層
2．にぶい赤褐色(2.5Y R4/3)粘質シルト層
3．暗赤褐色(2.5Y$^{3}/_{2.5}$)粘質シルト層
4．暗赤灰色(2.5Y R$^{3.5}/_{1.5}$)砂混り粘質シルト層
5．黒褐色(10Y R3/2)シルト質粘土
6．灰色(5Y4/1)砂混り粘質シルト層
7．オリーブ黒色(10Y R3/2)シルト質粘土層 炭化物を多量に含む
8．灰色(5Y4/1)砂混り粘質シルト層 礫をやや多く含む
9．灰オリーブ色(7.5Y$^{5}/_{2.5}$)粘質シルト層
10．灰色(10Y4/1)砂混り粘質シルト層
11．緑灰色(10G Y5/1)シルト質粘土

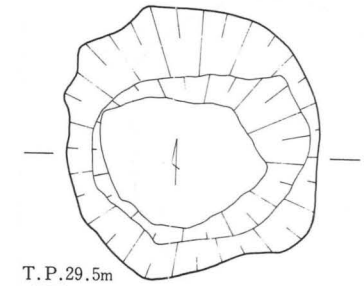


S E03

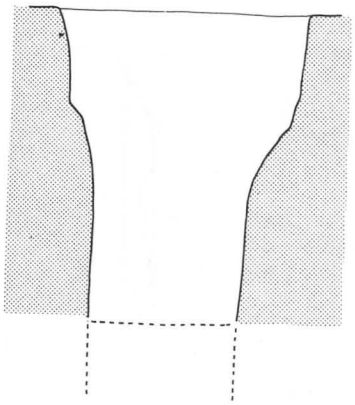


S E04

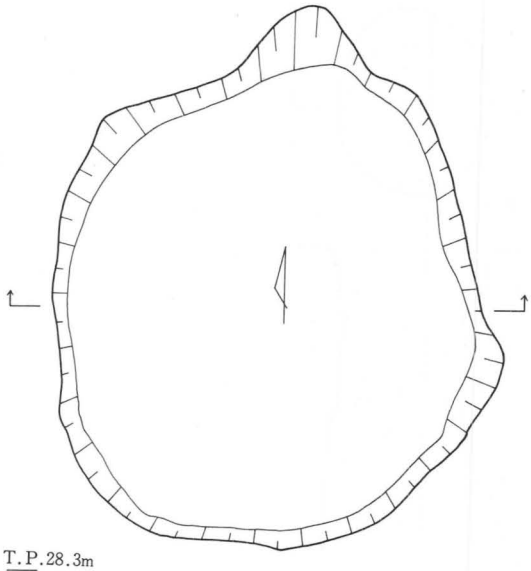
第9図　井戸実測図



T.P.29.5m



SE06

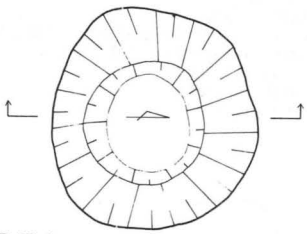


T.P.28.3m

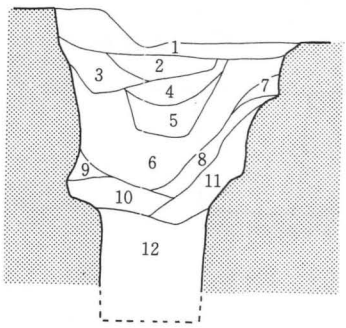
SE05

1．埋土
2．黒褐色(2.5Y3.5/2)シルト層
3．暗オリーブ褐色(2.5Y2.5/3)シルト層
4．炭層(焼土を多量に含む)
5．灰オリーブ色(5Y4.8/2)粘質シルト層

0 1 2 3m



T.P.29.0m



SE07

1．暗褐色(10YR3/3)砂混りシルト層
2．暗褐色(10YR3/3)シルト層
3．黒褐色(2.5Y3/2)シルト層
4．黒褐色(10YR3/2)シルト層
5．黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルト層
6．黒褐色(2.5 3/2)シルト層
7．黒褐色(2.5Y3/2)シルト混り
　黄褐色(10YR5/6)小砂層
8．黒色シルト混り小礫～中礫層
9．黒褐色(2.5Y3/2)小～中砂層
10．オリーブ黒色(10Y3/1)砂混りシルト層
11．黄褐色(2.5Y4/1)砂混りシルト～
　褐色(7.5Y R4/4)小砂の互層
12．オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂混りシルト層

第10図　井戸実測図

ＳＥ03（XXⅤＦ12ｅ区）

検出面での規模は、東西1.1m、南北1.0m、深さ3.3mを測る。ほぼ円形を呈する素掘りの井戸である。断面観察用の畦が崩落したため土層図は作成できなかったが、地表下約1.5ｍまでは埋土が認められ、以下は井戸機能時の堆積土と考えられる。内部より瓦器椀・皿、土師器皿土釜、瓦質土器、陶磁器、瓦などが少量出土している。

ＳＥ04（XXⅤＦ11ｆ区）

検出面での規模は、東西0.9m、南北0.9m、深さ0.95mを測る。円形を呈する素掘りの井戸である。深さ0.95mと他の井戸と比較して浅く、湧水点まで達していない可能性がある。井戸以外の用途も考えられる。瓦器椀、土師器皿、須恵器が少量出土している。

ＳＥ05（XXⅤＦ17ｅｆ・18ｅｆ区）

検出面での規模は、東西3.3m、南北3.8m、深さ2.0mを測る。楕円形を呈する素掘りの井戸である。底は平坦でなく、西に高くゆるやかに東へ傾斜している。井戸内の堆積土は、５層に分層できる。１～２層は、井戸廃絶後の埋土である。２層内より人頭大～こぶし大の礫が多く認められた。４層内には炭、焼土が多量に認められ、土師器土釜、常滑焼の甕などが出土した。特に土師器土釜の器表面には、焼土や二次焼成の痕跡が認められた。ＳＥ05は、壁面は焼けていないが、内部より焼土、炭などが多量に出土していることと、径３ｍ以上の規模をもちながら深さ２ｍと他の井戸と比較して浅いことなどから、井戸以外の用途も考えた方がよいかもしれない。遺物は、瓦器椀・皿、土師器皿が多量に出土している他、土師器甕・練鉢・土釜、須恵器揑鉢・甕、瓦質土器、陶磁器、鉄片などが出土している。

ＳＥ06（XXⅤＦ16ａ区）

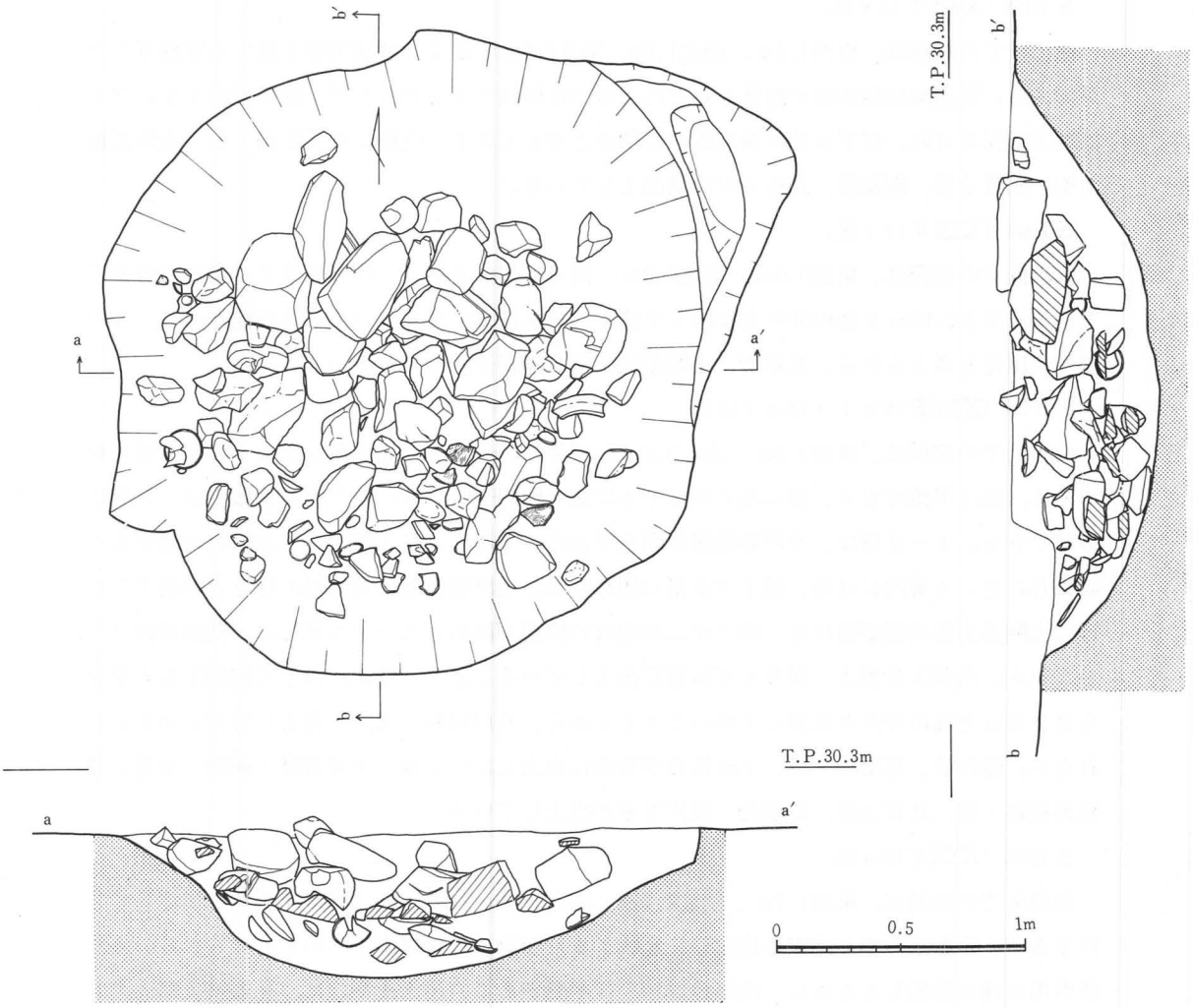
検出面での規模は、東西1.7m、南北1.6m、深さ1.8mを測る。ほぼ円形を呈する素掘りの井戸である。建物１のすぐ南東に位置し、建物１また建物２に付属するものと考えられる。土層観察用の畦が崩壊したために、内部の堆積土は不明である。出土遺物には、瓦器椀・皿、土師器皿・甕、須恵器揑鉢・甕、瓦質土器・土釜・甕、陶磁器が少量出土している。

ＳＥ07（XXⅤＦ14ｄ区）

検出面での規模は、東西2.0m、南北2.1m、深さ2.3m以上を測る。検出面では隅丸方形を呈する素掘りの井戸で、内部は円形に掘り下げている。地表下約1.6ｍで二段掘りの状況を示し、下部では径0.8ｍほどにすぼまっている。土層３～５層が示すように上部に何らかの井筒があった可能性が高い。地表下約2.3ｍ付近で0.6～0.8m大の礫が遺棄されており、以下の掘り下げはできなかった。遺物は、瓦器椀、土師器皿、須恵器、陶器などが少量出土している。

ＳＫ22（XXⅤＦ15ｃ区）

Ａ地区のほぼ中央で検出した。規模は、東西2.3m、南北2.5m、底面はすり鉢状に凹み、中央での深さ0.6mを測る。内部には20～30cm前後の礫が多量に投棄されていた。礫の間に瓦器椀、土師器皿・土釜などが出土している他、炭・焼土が多量に含まれていた。しかし壁面や礫には焼成を受けた痕跡は認められなかった。出土した瓦器椀には、炭素をまったく吸着せず、素焼



第11図　ＳＫ22実測図

きの完形のものが２点含まれていた。遺物は、瓦器椀、土師器皿・土釜、瓦質土器、須恵器、陶磁器、砥石が出土している。

ＳＤ52（ⅩⅩⅤＦ13ｅ～15ｅ・15ｆ区）

13ｅ区から始まり、東へ約13ｍの地点で南へ直角に折れまがり、最後は斜面に向かって大きく広がっている。溝の規模は、幅1.0～1.4ｍ、深さ0.15～0.3ｍで南に行くにしたがって深さを増している。柱穴群１を囲む形で掘削されており、建物の雨落ち溝的な用途も考えられる。

ＳＤ58（ⅩⅩⅤＦ14ｅ・14ｆ区）

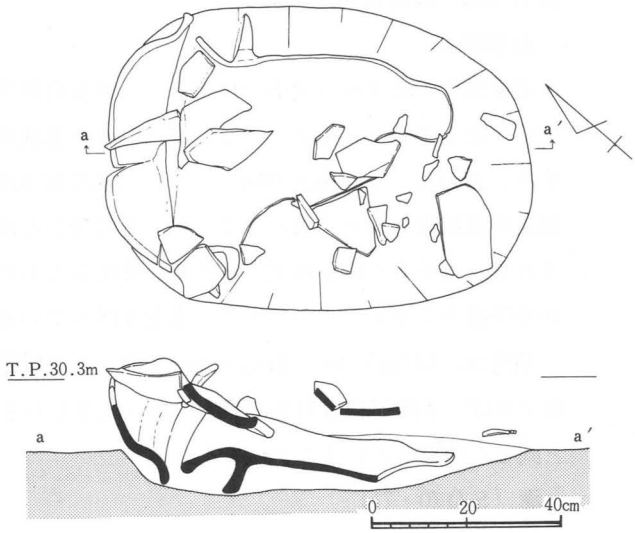
ＳＤ52に隣接して検出した。検出当初は、溝状の遺構と考えていたが土坑の性格をもっていると思われる。規模は、幅1.2ｍ、深さ0.16ｍ、全長で7.5ｍを検出した。内部からは、土師器小皿が多量に投棄された状況で出土した。

ＳＤ63

建物１・２の東端を切って北から南へ続いている。規模は、幅 0.7～0.85m 、深さ0.1m でＶ字状に凹んでいる。ＳＥ06付近で広がって終っているが、ＳＥ06との先後関係は不明である。建物１・２の廃絶後に掘削されたものと考えられる。

落ち込み状遺構１（ＳＤ16）

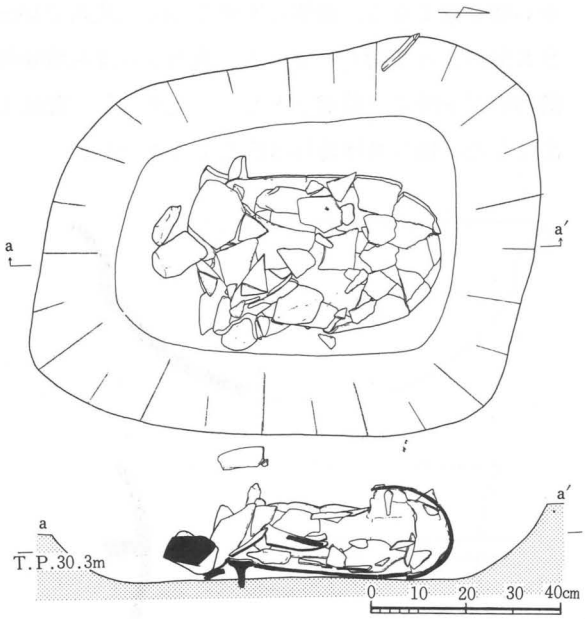
Ａ地区中央の12ｄ区～16ｄ区にかけて、深さ20～30cmの落ち込み状遺構を検出した。検出当初は、溝状遺構の可能性も考えられたが、遺構内の掘り下げによって溝・柱穴が多数確認された。この結果、落ち込み状遺構は、中世期の遺構を切っていることから、建物廃絶後に耕地拡大のための整地作業によって生じたものと思われる。



第12図　羽釜棺１実測図

落ち込み状遺構２（ＳＫ30）

Ａ地区のｄラインより南側で深さ30～50cmの落ち込み状遺構を検出した。中段の場合と同様に、遺構内の掘り下げによって、溝・柱穴・井戸などが検出された。この落ち込み状遺構の場合、上面を削平するのではなく盛土による整地をおこなっているため落ち込み内より、弥生時代～近世に至るまでの多量の遺物が出土している。落ち込み状遺構は、建物廃絶後に耕地拡大による整地作業によって生じたものであろう。



第13図　羽釜棺２実測図

(3)　古墳～奈良時代の遺構

羽釜棺１

Ａ地区東南端で、谷川に面した端部で検出した。後世の削平によって上部は欠損している。墓壙の輪郭線も不明瞭である。検出時の状況では南北約44cm、東西約32cmを測る。棺は、羽釜の口縁部と土鍋の口縁部を合口にして、主軸Ｎ―42°―Ｗに向けて、ほぼ水平に埋置している。羽釜は、下半部を欠損しており全長は不明であるが、復原口径25.1cmを測る。土鍋は、復原口

径31.2cm、器高12.0cmを測る。

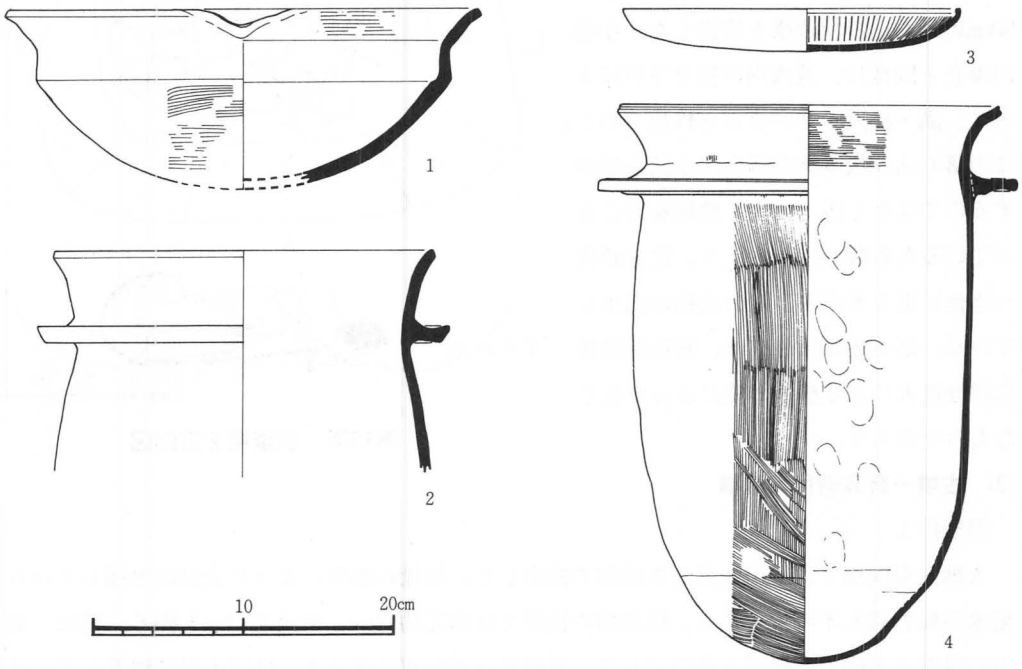
羽釜棺２

羽釜棺１の北４ｍの地点で検出した。後世の削平によって一部欠損するが、ほぼ全形を復原することができた。南北77.5cm、東西60cmの墓壙中央に、口縁部をやや上に向け横方向に埋置する。主軸は、ほぼ南北方向にとり、口縁部側を南に向けている。棺は、羽釜の口縁部に土師器皿の底面を合わせて蓋としている。蓋に接した地点と東側の中央付近に10cm前後の石が認められた。おそらく棺を固定するために使用したものと考えられる。また、羽釜の鍔も墓壙床面を若干掘りくぼめて入れており、安定を保っているものと考えられる。

羽釜は、口径25.2cm、器高36.8cmを測る。土師器皿は、口径22.3cm、器高21.8cmを測る。復原すれば、土師器皿は羽釜口縁内にすっぽりとおさまるところからこの棺の全長は、土釜全長と同じく約37cmということになる。

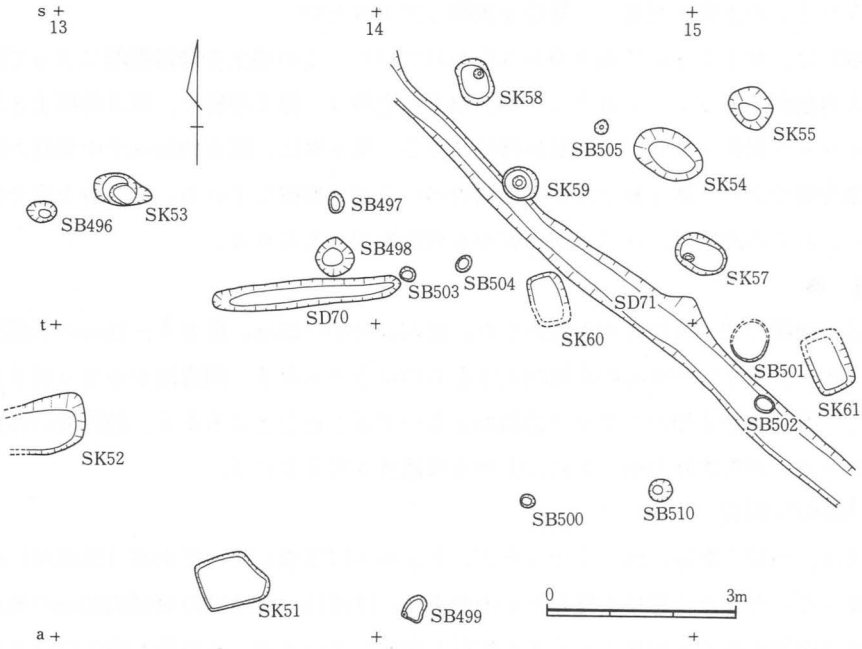
溝（ＳＤ70・71）

溝はＳＤ70とＳＤ71の２本を検出した。ＳＤ70はほぼ東西方向に伸び、長さ３ｍで終る。溝幅は40cm、深さ15cmを測る。ＳＤ71は南東から北西方向に伸びる溝である。北西にいくにしたがい幅が狭くなる。溝幅は南東で70cm、北西で40cmであり、深さが20cmを測る。溝肩の一部はＳＫ59によって切られている。溝内からは古墳時代の製塩土器が多量に出土した。製塩土器は溝内の二ヶ所で土器溜りとなって検出した。製塩土器溜りは製塩土器と炭とが混じった状態で出土した。他に共伴遺物は出土しなかった。



第14図　羽釜棺１・２土器実測図

第15図　A地区遺構配置図



第16図　古墳時代遺構平面図

土坑（ＳＫ51～55・ＳＫ57～61）

土坑はＳＫ51～55、ＳＫ57～61を検出した。ＳＫ51は平面形が長方形、ＳＫ60・61は隅丸長方形、他のものは楕円形を呈する。ＳＫ51は長辺110cm、短辺82cm、深さ10cmを測り、四隅の一角がすでに崩れており、不整形を呈する。ＳＫ60は長径60cm以上、短径56cm、深さ10cm、ＳＫ61は長径80cm以上、短径66cm、深さ15cmを測る。ＳＫ52は長径98cm、短径86cm、深さ17cm、ＳＫ53は長径94cm、短径52cm、深さ35cmを測る。ＳＫ54は長径110cm、短径75cm、深さ26cm、ＳＫ55は長径70cm、短径60cm、深さ38cm、ＳＫ57は長径86cm、短径56cm、深さ27cm、ＳＫ58は長径76cm、短径50cm、深さ21cm、ＳＫ59は長径54cm、短径52cm、深さ25cmを測る。ＳＫ53、57、58、59は二段で落ちる。

2）Ｂ地区の調査

Ｂ地区は、Ａ地区の東側で鬼虎川を挟んで対面に位置している。地区割ではXXVIF10b～10i、11ｂ～11ｉ、12ｂ～12ｅ、13ｅ～17ｅ、14ｄ～17ｄ区にあたる。

(1) 層　位

調査地は、調査以前には民家、市営住宅が建っていたところで、すでにかなりの造成がおこなわれているものと思われた。事実、機械掘削で盛土を除去するとＢ地区の東側及び市営住宅が建っていた付近は、すでに削平されており、何らの遺構・遺物も検出できなかった。Ｂ地区の西側では、鬼虎川に面した西と北ではかなりの盛土が認められ、もとは斜面であったことがうかがわれる。比較的安定してのこっているのは、Ｂ地区南端の付近であった。ここでは、9

h～11hラインの土層を記述し、層位を説明しておきたい。

調査地には、厚さ1.5mで盛土がおこなわれていた。この盛土を機械掘削によって除去し、以下を人力掘削で掘り下げをおこなった。以下の土層は、第2層耕土、第3層床土と続き、第4層暗オリーブ褐色シルト、第5層砂礫層に至る。第4層は、厚さ約20cmで中世期の遺物を少量含む包含層であり、第5層上面が中世期のベース面を形成している。第5層上面で柱穴を検出した。これらの遺構は、さらに南へ広がる可能性が考えられる。

(2) 遺　構

B地区の南端で12ヵ所の柱穴を検出した。柱穴は径20～25cm、深さ5～15cmの小規模なものと径40～50cm、深さ10～20cmの比較的大きなものに分けられる。調査地がかなり削平をうけていることと西側及び北側がかなりの急斜面となって落ち込むところから、柱穴群の性格を把握できなかった。調査地外の南へさらに広がる可能性が考えられる。

3）C地区の調査

C地区は、当初の調査計画になかったが、トンネル口工事に伴って水路（鬼虎川）の付替工事が必要になったために急拠実施したものである。位置は、B地区の東側約30cmの地点にあたる。遺跡の南側を流れる鬼虎川が大きく蛇行し西流しているが、その最も南へのびる先端部に位置している。このような現状から、旧地形はかなり急斜面であったことが予想された。

(1) 層　位

調査地の層位は、基本的には4層に分層することができた。

1層　オリーブ黒色（10Y3.5/1.5）シルト。表土。

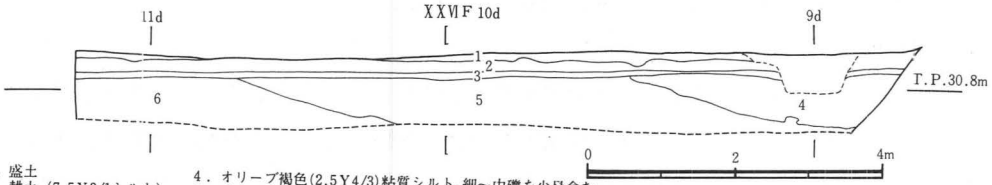
2層　暗緑灰色（7.5GY3.7/1）シルト質粘土。

3層　オリーブ灰色（10Y5/1.2）シルト。

4層　緑灰色（10GY5.5/1）粘質シルト。

5層　礫層

1・2層は、耕土及び表土層である。第3層は中世期の遺物包含層であり、16bラインの2m西より認められ、徐々に西へ厚さを増しながら、鬼虎川に面している。14hライン付近で最も厚く約30cmの厚さで認められた。4層は、遺構内の堆積土と考えられる。5層は、中世期の遺物包含層のベース面となる。上部でこぶし大から人頭大の礫が認められ、下部にいくにしたがって礫が大きくなる。



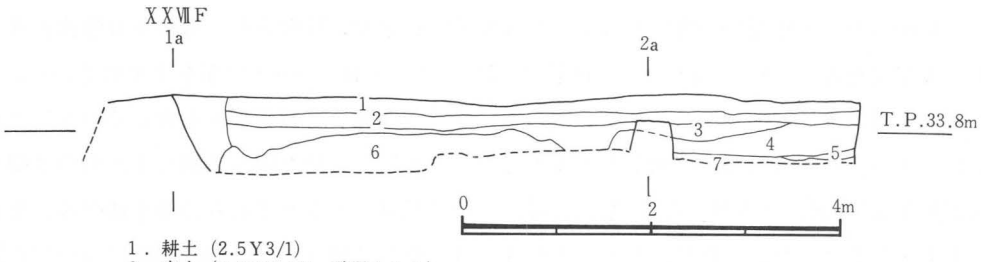
1．盛土
2．耕土（7.5Y3/1シルト）
3．床土（2.5Y3/1.2シルト）
4．オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質シルト、細～中礫を少量含む。
5．暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト、1mm前後の細礫をやや多く含む。
6．青黒色(5BG2.5/1)シルト、細礫をやや多く含む。

第17図　B地区断面図

(2) 遺　構

ＳＫ47

当初、第３層が最も厚くなる14ｂライン付近を中心とした土坑と思われた。しかしながら、精査したにもかかわらず範囲が明確でなく、性格・規模とも明らかにすることはできなかった。一応約１ｍ以上の範囲に広がり、深さ0.3ｍの規模と考えておきたい。内部からは、瓦器椀、土師器皿、羽釜、須恵器甕などが一括出土したほか、獣骨等も出土しており、特殊な用途をもった遺構と考えられる。出土した瓦器椀は、後述のようにＡ地区で検出した瓦器椀よりも古く位置づけられるものである。Ｃ地区には、Ａ地区とでは約60ｍ離れており、時期的にも先行するところから、別の遺構と考えられる。



1．耕土（2.5Y3/1）
2．床土（7.5YR4/4、砂混シルト）
3．黒褐色(10YR3/2)砂混シルト、細～中礫多量に含む、炭化物多く含む。
4．黒褐色(10YR3/1.5)砂混シルト、細～中礫多量に含む。
5．細～粗砂、細～中礫層、5YR2/1の酸化物有り
6．黒褐色(10YR3.8/2)砂混シルト、細～中礫やや不規則に層を成す。
7．黒褐色(2.5Y3.8/1)細～粗砂、細～中礫層

第18図　Ｃ地区断面図

Ⅴ．出土遺物

1）土器の概要

(1) 瓦　器

椀　本遺跡の瓦器椀は各遺構からそれぞれ形態、調整手法などにまとまりをもった良好な資料が出土している。瓦器椀を大きく分類すると口縁部内面に沈線をもつ大和型と、沈線をもたない和泉型の２つの生産地の異なる型[注2]がみられ、それぞれの遺構の中で共伴している。そこで遺構の時期差、また比較的判別しやすい瓦器椀における大和型と和泉型の併行関係を知る手がかりをつかむため、次に各遺構毎に分類を試み検討を加えていきたい。

瓦器椀の中で大和型の特徴をもつものをＡ型式、和泉型の特徴をもつものをＢ型式と呼ぶ。更にＡ型式をA_1・A_2・A_3……、Ｂ型式をB_1・B_2・B_3……と分類をすすめていく。なお大和型の椀の中には楠葉型、和泉型の椀の中には「河内型」[注3]と楠葉型をも含んでいることが考えられるが、今回は明確に分類しきれなかった。しかし、可能な限り判別しえたものは個々に楠葉型をＡ′型式、「河内型」をＢ′型式と呼ぶ。後に私見になるがこれらの差を述べる。なお、次下本文中ではＡ型式、Ｂ型式をそれぞれＡ・Ｂと略して使う。その他の器種についても同様に略する。

本遺跡で黒色土器の椀の形態・手法に一番よく似る瓦器椀を検出した遺構はＣ地区のＳＫ47である。大和型Ａと和泉型Ｂがみられるが、それぞれに黒色土器に似るものと、そうでないものもあり、２型式に分類できる。黒色土器に近い型式の椀は、もうひとつの型式のものより先行すると考えられる。前者を大和型A_1、和泉型B_1、後者を大和型A_2、和泉型B_2とする。A_1・B_1の特徴をまとめると次のようになる。

A_1　丸味をもった深い椀形の体部にしっかりした高台（断面は逆台形のものが多い）をもつ。器壁は厚く特に底部の厚みは７㎜に達するものもある。口縁部内面の沈線は浅い。ＳＫ47出土の瓦器は全体に風化が著しく調整は不鮮明である。かろうじて判別できるものをみると外面は体部下位までミガキ調整を、見込みは連結輪状の暗文を、内面体部は密な圏線状のミガキ調整を施す。胎土は精良である。

口径は14.75～15.1㎝、器高は5.3～5.9㎝、径高指数は35.1～40.0である。

B_1　A_1に比べると出土量は少なく完形に近いものは１例である。A_1と同じく椀形の体部に断面が逆台形の高台をもつ。器壁は厚い。口縁部は外方に向き端部を丸く納め沈線をつけない。外面は指押えの凹凸がみられ、かろうじてミガキ調整が窺える。見込みの暗文は良好な出土例がなく不明。内面の体部は密にミガキ調整を施す。

口径は14.9㎝、器高は4.6㎝、径高指数は30.8である。

ＳＫ47の椀の中ではA_1・B_1より新しくなると考えられるA_2・B_2と同じ特徴をもつものがＳＥ02からまとまって出土している。ＳＥ02の瓦器椀は全体に遺存状態がよく、またまとま

りをもつが、その中で少し異なった様相をもつものを若干含む。大和型Aの中では内面のミガキ調整が密なものに対してやや粗くなるものがあり、和泉型Bでは見込みの暗文に斜格子文を施すものと平行線文をもつものがある。大和型Aの内面のミガキ調整がやや粗くなるもの、また和泉型Bの見込みの暗文は平行線文の方が新しくなると考えられる。一方、この大和型Aによく似た椀が多量にみられるＳＫ22からは、和泉型Bの見込みの暗文に平行線文をもつものがまとまって出土しているものの、ＳＥ02の和泉型Bより口径が大きく調整にも違いがある。従ってＳＥ02出土の大和型A及び和泉型Bの中で大勢を占めるものと、少し様相の異なるものとの間にはあまり時期差がないと考え、前者をそれぞれA_{2-1}・B_{2-1}、後者をA_{2-2}・B_{2-2}と分類する。

A_{2-1}　丸味をもった椀形の体部に口縁部が少し外弯して立つ。体部はA_1よりやや浅い。高台は断面が三角形を呈す。器壁は全体にA_1より薄く、口縁部内面の沈線文はしっかりと施す。 外面は上半分を粗くミガキ調整する。 一部、外面全面を粗くミガキ調整するものや分割法によるものもある。見込みの暗文は連結輪状のものは少なく、概ね３～４連の同心円文状である。体部内面はほぼ密に30条以上の圏線状のミガキ調整を施こす。胎土は精良のものが多いが、一部に粗い砂粒を含むものがある。

口径は14.0～15.0cm、器高は4.7～5.2cm、径高指数は32.0～36.6である。

B_{2-1}　底部から口縁部までなだらかにひろがる鉢形の体部。高台はしっかりした断面三角形を呈す。器壁は大和型と異なり底部が薄く口縁部が厚い。外面体部は指押えのままのものとミガキ調整を痕跡程度に施すものがある。見込みの暗文は斜格子状、体部内面は幅の太いミガキ調整を施す。胎土は精良なものが多い。

口径は14.7～15.6cm、器高は4.9～5.2cm、径高指数は33.0である。

A_{2-2}　出土量はＳＥ02の中ではA_{2-1}に比べると少ない。全体的にA_{2-1}とあまり変わりないが、器高が少し低くなり、体部内面のミガキ調整も少し粗くなる。

口径は14.2～15.0cm、器高は4.2～4.8cm、径高指数は28.0～32.0である。

B_{2-2}　B_{2-1}より口縁部は少し外方にひろがり気味で器高も低い。高台は低く雑につくり、断面が三角形のものや台形のものがある。外面はミガキ調整がない。見込みの平行線の暗文は細い線で施し、体部内面は太い線で粗いミガキ調整を施す。胎土は精良である。炭素吸着の不良のものが多い。

口径は14.4～15.2cm、器高は4.45～4.6cm、径高指数は29.2～29.7である。

先にも記したが、ＳＫ22からA_{2-2}・B_{2-2}のタイプに近いものがまとまって出土している。更によくみると、大和型Aに関してはＳＥ02のA_{2-2}に比べると口径が小さくなり、和泉型Bに関してはB_{2-2}に比べると口径が大きいなどの違いが認められる。そこでＳＫ22の大和型AをA_3、和泉型BをB_3とする。

A_3　形態はA_{2-2}とあまり変わりないが口径がやや小さく器壁も少し薄い。高台は低く底部の先端面より上部につけるものがある。外面のミガキ調整、見込みの暗文は

あまり変わらない。体部内面のミガキ調整は粗く30条以下の圏線状のものが多い。圏線状にならないものもある。炭素吸着の皆無のものがみられる。胎土に精良である。

口径は13.8～14.7cm、器高は4.35～4.8cm、径高指数は30.4～33.1である。

B_3　形態はB_{2-2}とあまり変わらないが口径が大きい。高台は幅が太く、断面が逆台形を呈する。外面は指押えのままで、見込みの暗文は平行線文を施すが、線の幅の太いものが多い。体部内面は幅の太いミガキ調整を施す。炭素吸着の不充分なものもある。胎土は粗い砂粒を含むものが多い。

口径は14.8～15.8cm、器高は4.3～4.7cm、径高指数は28.0～31.4である。

今までみてきた大和型A_1～A_3と和泉型B_1～B_3と共に、更に小型の椀がＳＥ05から出土している。ＳＥ05の瓦器椀は全体に色調が薄く退色しており、また数型式に分類できることから、時間的な幅があるものと考えられる。A_1～A_3・B_1～B_3よりも小型化した椀をみると、大和型Ａでは、外面のミガキ調整を口縁部に施すものと、ほとんど痕跡程度のもの、和泉型Ｂでは、見込みの暗文が平行線文をもつものと、見込みから体部にかけて、一連のミガキ調整を施すものがみられる。調整や施文が粗略化する過程に時期差が考えられ、それぞれをA_4・A_5、B_4・B_5とする。

A_4　形態はA_3と同じであるが、全体に小ぶりになる。外面は口縁部のみをミガキ調整し、内面のミガキ調整は更に粗く20条以下になる。胎土は粗い砂粒を含むものが少しある。

口径は11.8～12.2cm、器高は3.6～3.9cm、径高指数は29.5～33.1である。

B_4　形態はB_3と同じであるが、全体にひとまわり小さい。高台は低く体部の形状に埋まってしまうものがある。見込みの暗文は平行線文を施し、体部内面に粗くミガキ調整を施し、いずれもB_3と比べるとミガキ調整の線の幅が太い。

口径は13.2～13.8cm、器高は3.6～4.0cm、径高指数は26.8～29.9である。

A_5　量的には出土量は少なく全形を窺えるものはない。形態はA_4に似たものでますます小さくなる。一部、丈高になるものがみられる。外面のミガキ調整にほとんどなくなる。内面のミガキ調整もますます粗く15条以下になる。見込みの暗文は完全にわかるものがないが、体部にかけて一連のミガキ調整になると考えられる。胎土は精良である。

B_5　大和型のA_5に比べると完形品をはじめ出土量が多い。器高が低く偏平な形である。高台は低く痕跡程度のものになる。内面は見込みから体部にかけて渦巻状にあるいは切れ切れのミガキ調整を施す。胎土は粗い砂粒を含む。

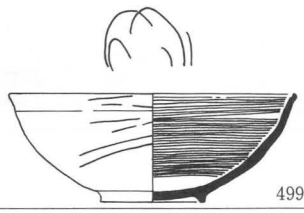
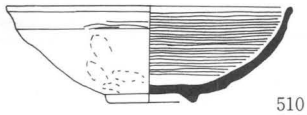
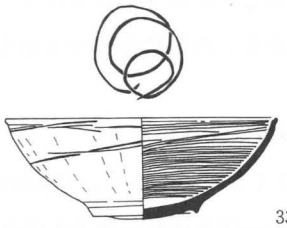
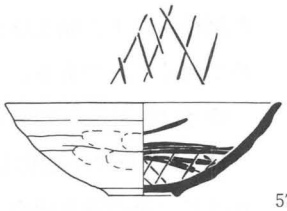
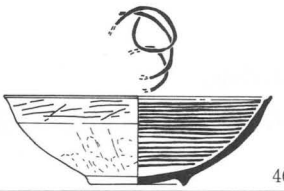
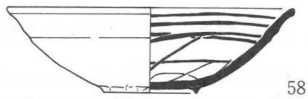
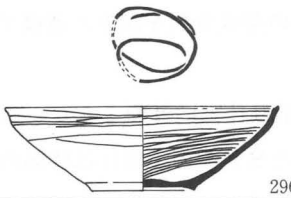
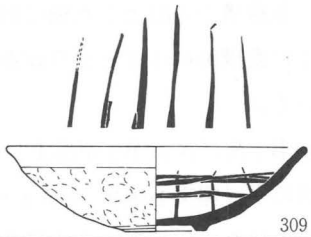
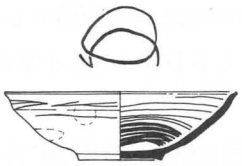
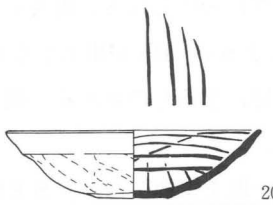
口径は12.6～13.5cm、器高2.9～3.35cm、径高指数は22.8～25.4である。

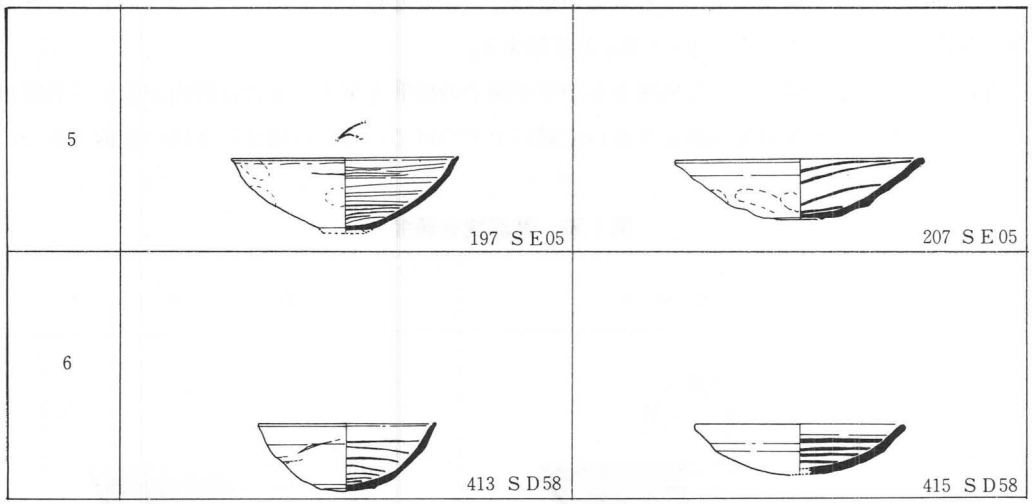
大和型Ａは同じような形態のままA_1からA_5にかけて徐々に口径、器高共に小型化していくようだが、ＳＥ05の椀A_5の一部に口径の割に器高が高くなるものがある。この丈高の大和型

Aで、外面にミガキ調整が全くみられないものと、和泉型Bで全く高台のつかないものがSD58で共伴している。それぞれA_6・B_6と分類する。

A_6　小型で体部に少し丸味をもつやや深手の椀形を呈す。高台は断面が低い三角形のものを底部の先端部より高い位置にナデつけている。口縁部には浅い沈線をもつ。

第1表　瓦器椀分類表

型式	大和型A	和泉型B
1	 499 SK47	 510 SK47
2－1	 33 SE02	 57 SE02
2－2	 46 SE02	 58 SE02
3	 296 SK22	 309 SK22
4	 194 SE05	 203 SE05



外面のミガキ調整は全くない。内面は見込みから体部にかけて一連の渦巻状のミガキ調整を施す。胎土は少し粗い砂粒を含む。本遺跡全体でも出土例は少なくSD58の2例ぐらいである。

口径は9.35cm、器高は3.6cm、径高指数は38.5である。

B_6　B_5より更に小型化し、高台は全くなくなってしまう。内面は見込みから体部にかけて一連の渦巻状のミガキ調整を施す。切れ切れに施すものもある。胎土は粗い砂粒を含む。出土例は大和型A_6に比べるとやや多く、他の遺構からも少しづつ出土している。

口径は10.5～11.0cm、器高は2.65～2.75cm。

以上、大和型A、和泉型Bの共伴関係をみながら、それぞれ6型式ずつ分類したが、編年的な位置づけに関しては後のまとめの項にゆずる。

小皿　各遺構から出土した椀に対して皿の出土数は約¼～⅕位である(底部の数)。皿は瓦器椀のように遺構毎にはまとまりがみられない。椀の型式分類を試みた遺構で共伴した皿の状況をみていく。

椀A_1・B_1及びA_2・B_2が出土したSK47の小皿は体部内外面をミガキ調整し、見込みにジグザグ状の平行線文を施す。椀A_2・B_2が出土したSE02の小皿には体部の外面にミガキ調整を施すものはない。SE02の小皿の出土量は比較的多く、形態的にも見込みの暗文にも幾種類かのタイプに分けられる。椀A_3・B_3が出土したSK22の皿はそれぞれ異なった特徴をもつ。椀A_4・A_5とB_4・B_5が出土したSE05からはSE02の皿と同じ形態のものと、本遺跡の中ではやや小型になるものがある。椀A_6・B_6が出土したSD58からも小型の口縁部の小片が1例みられる。

以上、小皿を概観したが、SE02から出土した小皿を中心に形態別に分類をすすめていく。

a．平底から屈曲して口縁部が外上方に立つ。口縁端部は丸く納める。見込みの暗文はジグザグ状の平行線文が多いが、斜格子文を施すものもある。胎土は精良である。

b．aとほぼ同じであるがやや薄手で口縁端部は更に外方を向き、尖り気味に納める。胎土は精良である。

c．やや丸味をもつ底部から口縁部までなだらかにつづく。口縁端部は丸く納める。見込みの暗文はジグザグ状の平行線文、胎土は精良である。

d．丸底、口縁部は底部との境に稜を残して外上方に立つやや深手の皿である。口縁端部は丸く納める。見込みの暗文は斜格子文、線の太い平行線文と見込みから体部にかけて渦巻状のミガキ調整を施すものがある。胎土は粗い砂粒を含む。

以上、4形態に分類できる。地域性はもうひとつ定かではないが、a・b形態は大和型の椀の丁寧なつくりの技法に似ており、また、天理市布留遺跡出土[注4]の小皿と極似する。又、c・d形態はa・bに比べるとやや雑で、特にd形態は和泉型の椀の調整に似ている。

SK47で出土した小皿のように体部内・外面にミガキ調整を施し、口径が10cm前後のものは本遺跡ではa・b・d形態にみられる。それぞれ1段階としてa_1・b_1・d_1とする。またSE02には口径が10cm前後のa・b・c・d形態と9cm前後のa・b形態がみられる。口径の大きい方が先行すると考えられるので、10cm前後のものを2段階としてa_2・b_2・c_2・d_2、9cm前後のものを3段階としてa_3・b_3とする。SE05出土の一番小型の皿は暗文がほとんどなく、口径は7.8cmで、やや時期が新しいものと思われる(仮にa_4とする)。 a・b・c形態のジグザグ状の平行線文の暗文は1・2段階では密に施すものが多く、3段階では粗いものが多いが、その逆のものもあり必ずしも口径の大きさに伴わない。d形態の皿は形態と暗文の施し方にバラつきがあり、

第2表　瓦器小皿分類表

段階＼形態	a	b	c	d
1	168 SE03	515 SK47		169 SE03
2	65 SE02	213 SE05	71 SE02	170 SE03
3	273 SE06	68 SE02	274 SE06	

a・b・c形態に比べると口径が小さい。

その他の瓦質土器

羽釜、練鉢、盤などがみられる。いずれも量的には少なく完形になるものもない。羽釜は口縁部が段状になるもの（ＳＥ02）とならないもの（ＳＥ05）がある。口縁端部は平坦面にするものが多い。ミニチュアで炭素吸着が皆無のものがある。練鉢はＳＥ05、攪乱層出土の和泉産のものがみられる。盤は口縁部が内方に肥厚し内傾する上端面をもつものが小片である。

羽釜は小型のものが多く、足釜などもみられるが、菅原氏の分類、編年[注5]によると12世紀末～13世紀前半の「山城Ｅ・Ｆ型」に似る。

(2) 土師器

皿 瓦器と共に各遺構から多量に出土しているものは皿である。皿は大形のものと小形のものがある。目やすとして口径が８cm前後から10cm未満のものを小皿、10cm以上のものを中皿と呼ぶ。更に16cm前後の大皿があるが出土量は少ない。遺構から出土している皿をみていくと、大きく３型式に分かれる。先の瓦器の項でみた古い瓦器椀を検出したＳＫ47の土師器皿には口縁部が外上方に伸びたあと更に水平近く屈曲し、端部を上方に肥厚して丸く納めるものが何点かみられる。また、瓦器椀の一番新しいものを検出したＳＤ58の皿には底部が小さく口縁部がやや外弯気味にひらき、他の土師器皿に比べると丈高になるものがある。前者の皿はいわゆる平安時代にみられるもので、後者は鎌倉後期～室町時代に出てくるヘソ皿に近い形態のものである。このどちらにも入らない皿が各遺構から多量に出土しており、これらは形態的にもいろいろ分類できるが混在している。従って皿をみていくのに一番古い平安時代の皿をａ型式、新しい皿をｃ型式、そのどちらにも入らない皿をｂ型式とし、ｂ型式の中で更に形態的にｂ₁・ｂ₂・ｂ₃……と分類していく。

第３表　土師器皿分類表

型式	小皿	中皿
a	372 ＳＫ30	
b1	80 ＳＥ02	145 ＳＥ02
b2	90 ＳＥ02	156 ＳＥ02
b3	236 ＳＥ05	535 ＳＫ47
b4	423 ＳＤ58	536 ＳＫ47
b5	137 ＳＥ02	408 ＳＤ52
c	428 ＳＤ58	431 ＳＤ58

ａ　平底から屈曲して外反しながら外上方に伸びる口縁部。口縁端部は更に水平近く屈曲し丸く納める。口径は9.8cm、器高

は1.4㎝。

b 1　丸底気味の底部から口縁部が屈曲して外上方へ伸びる。小皿の口径の平均は8.6㎝、器高の平均は1.6㎝、同じく中皿は12.8㎝、2.3㎝である。（以下同じように平均値）

b 2　平底（やや丸底気味のものもある）から口縁部までなだらかに内弯しながらつづく。小皿の口径は8.5㎝、器高は1.4㎝、同じく中皿は13.0㎝、2.1㎝である。

b 3　中央部が上げ底気味の底部から口縁部までなだらかに内弯しながらつづく。小皿の口径は8.3㎝、器高は1.3㎝、同じく中皿は13.9㎝、2.3㎝である。

b 4　平底から口縁部が屈曲して外上方へ伸びる。小皿の口径は8.3㎝、器高は1.4㎝、同じく中皿は12.2㎝、1.9㎝である。

b 5　平底。底部と口縁部の境は厚くなり外方に出張り気味で口縁部が外上方へ伸びる。小皿の口径は7.95㎝、器高は1.3㎝、同じく中皿は11.8㎝、2.3㎝である。

c　やや小さい底部から口縁部が屈曲後、外弯しながらひらく。先端部は尖り気味になる。小皿の口径は8.2㎝、器高は1.6㎝、同じく中皿は11.6㎝、2.1㎝である。

調整は口縁部内外面から見込みにかけて右廻りに横ナデをするものが通常で、b型式の各タイプの中には二段ナデを施し、口縁端部をつまみあげたものがみられる。b 2とb 3には底部がいびつなため、同一個体でありながら器高は反対側になるとかなり違うものがある。ＳＥ02とＳＥ05から出土した小皿はb型式のものであるが、全破片数を可能な限り分類すると第４表になる(但し、b 2かb 3か判別不能のものはb 2に数えている)。b 1からb 5までの各タイプの皿はＳＥ02よりＳＥ05のものが小型になり、瓦器椀、皿と同じ傾向を示す。ちなみにa型式を伴うＳＫ47のb型式の皿の口径の平均は小皿が9.2㎝、中皿が15.4㎝であるのに対し、c型式を伴うＳＤ58のb型式のそれは小皿が7.8㎝、中皿は11㎝である。また小皿の完形品の重量をみると上は50gから下は30gで粘土の使用量もかなりちがってくる。小皿と中皿の割合は小皿13か14個に対して１個の割合でみられる。なおＳＫ40からは脚付の土師器皿が１点出土している。

色調はa型式は灰白色、b型式は概ね7.5ＹＲの灰白色8/1～浅黄橙色8/6のものが多い。遺構によってはそれらの埋土状態の影響のためか、色調がほぼ同じ傾向を示すことがある。c型式は2.5Ｙの浅黄色のものと橙色がかったものがみられる。

胎土は大体において精良であるが、石英などの粗い砂粒を少量含むものも、¼位みられる。色調・胎土ともに肉眼でも判別できる生駒西麓産の皿が１点ある。

時期については、共伴の瓦器椀や平安京の分類・編年[注6]からaは12世紀後半、bは13世紀を中心、cは14世

第４表　ＳＥ02・05出土土師器小皿形態別一覧表

遺構			形態 b 1	b 2	b 3	b 4	b 5	計
ＳＥ02	個数		5 1/12	46 1/4	5 2/3	10 5/6	15 5/12	83 1/4
	総個数に対する割合		6.1%	55.6%	6.8%	13.0%	18.5%	100%
	法量（平均値）	口径(cm)	8.8	8.6	8.6	8.3	8.1	8.48
		器高(cm)	1.6	1.3	1.3	1.2	1.3	1.34
ＳＥ05	個数		1 7/12	31 1/6	5	9	5 7/15	52 13/60
	総個数に対する割合		3.0%	59.7%	9.6%	17.2%	10.5%	100%
	法量（平均値）	口径(cm)	8.2	8.3	8.2	8.1	8.0	8.16
		器高(cm)	1.4	1.3	1.3	1.2	1.2	1.28

(注) 個数は各個体の破片を口径の合う円周にあてはめ、それらを合計し、算出したもの。

紀前半のものといえる。口径の大きさを瓦器椀の編年と共に遺構毎に比較した結果をまとめの項で述べる。

羽釜　羽釜は各遺構から出土しているが完形になるものは少ない。包含層からは7～8世紀のものが出土している。羽釜は大きく4型式に分かれる。

A　砲弾形の体部から直立する肩部に鍔をつけ、内面に鈍い稜を残して口縁部が少し外反する。鍔の基部は厚く水平につき、先端部は薄くなる。胎土は粗い砂粒を含む。

B　内傾する肩部に鍔をもち、口縁部が「く」の字形に外反する。口縁端部を内側上方に玉縁状に丸く納めるもの（B_1）と内側に肥厚するが矩形のままのもの（B_2）がある。胎土は砂粒を含む。

C　球形に近い体部から内傾する肩部に鍔をもち、口縁部が「く」の字形に外反し、端部を丸く納めるもの（C_1）と、口縁部が退化し肥厚気味につくるもの（C_2）がある。C_2には器壁が厚手のものと薄手のものがある。胎土は粗い砂粒を含む。

D　内弯する肩部に断面が三角形の短かい鍔をもち、口縁部が「く」の字形に外反し、上端部を内側に肥厚させる。胎土は微砂粒・砂粒を含む。

このA～D型式は菅原氏の分類[注7]によるとAは「河内A型」、Bは「大和B型」、Cは「河内B型」、Dは「大和I型」にあたると考えられる。

また同氏の編年によると8世紀前後のAは墓壙内及び包含層から、21世紀後半～のBはSK47、CはSK22から、13世紀後半～のB_1・C_2はSE05からそれぞれ出土している。

(3)　須恵器

甕・揑鉢などがみられる。いずれも完形になるものはなく、概ね東播系のものである。

甕　SE05から比較的多量に出土している。口縁部の形態から2型式に分かれる。

A　口縁端部が下方に外折するもの。

B　口縁端部の上面に凹線及び凹みをもつもの。

甕AはSE02・05、甕BはSE05から出土している。体部外面は平行、綾杉状、格子状叩き目調整などがみられる。焼成が悪く、黒色を呈した瓦質に近いものもある。SK22からは体底部が砲弾形の甕が出土している。

揑鉢　口縁部と底部がそれぞれみられるが、1個体に復元できるものがなく、各遺構の出土量も少ない。底部内面には摩滅痕がみられる。口縁部の形態から4型式に分かれる。

A　口縁端部の断面はほぼ矩形を呈す。

B　口縁部の下端部を下方に拡張し丸く納める。上端部はそのままで鋭角をなす。

C　口縁部の上端部は内上方につまみあげる。下端部はそのままにする。

D　口縁部の上・下端部を拡張する。

口縁端部が重ね焼きのため黒色で、自然釉がつくものは各型式にみられる。

甕はB型式が多く、魚住窯の大村、水口氏の分類・編年[注8]によると、12世紀中頃～末位の「甕A類」に相当し、13世紀以降のものは少ない。

揑鉢は同上の分類・編年によると、13世紀以降に多くなる「鉢C類」や「海あがり」にみられる古い形態のもの（14世紀前半位）が出土している。

(4) 陶磁器

出土量は瓦器・土師器に比べると少ない。以下出土した遺構などと共に、挿図に掲載した遺物番号も記しておく。

緑釉陶器　遺構からの出土は少ない。包含層から貼り付け高台で、先端部を段状につくるものが出土している（486・483）。色調は暗緑色を呈す。その他、体部・高台部の小片がみられる。近江系のものが多い。

中世陶磁器　常滑・備前・瀬戸・信楽・丹波焼がみられる。包含層からの出土が多く、遺構からは常滑焼の壺・甕が出土している。

常滑焼の壺・甕は、赤羽氏の分類・編年[注9]によると、12世紀中葉～13世紀中葉の第Ⅱ段階の時期のものからみられ、ＳＥ05の壺（268）、ＳＫ47の甕（57）が相当する。13世紀中葉～14世紀中葉の第Ⅲ段階の時期のものには、ＳＥ05の甕（270）、底部（269）がある。（270）の甕は器高78cmを測りほぼ完形に近いものである。

備前焼の擂鉢は、間壁氏の分類・編年[注10]の15～16世紀のⅣＢ～Ⅴ期に相当するもの（493・494）がある。他に瀬戸焼は15世紀以降の天目茶碗、信楽焼は壺底部などが出土している。

輸入磁器　白磁・青磁・褐釉磁がみられる。いずれも完形によるものはなく、細片～小片のものである。白磁・青磁はともに碗が多い。

白磁は碗・小碗・皿・四耳壺などが出土している。太宰府の横田・森田氏の分類・編年[注11]によると、11世紀中葉～12世紀初頭の碗Ⅱ・Ⅴ・Ⅷ類、小碗、皿Ⅳ類、四耳壺などと、13世紀中葉の碗Ⅸ類、15～16世紀の小碗がある。碗Ⅳ類はＳＥ02・05、落ち込み状遺構、包含層から多く出土している。碗Ⅱ類はＳＥ05（266）、Ⅷ類はＳＢ11（346）、Ⅸ類はＳＥ05（265）と落ち込み状遺構に、皿Ⅳ類は包含層（488・490）と落ち込み状遺構にみられる。四耳壺はＳＥ05（264）、ＳＤ16（401）がある。

青磁は龍泉窯系と同安窯系の碗・皿が出土している。森田・横田氏編年によると12世紀中葉～13世紀中葉の龍泉窯系の碗Ⅰ類、皿Ⅰ類、同安窯系の碗Ⅰ類、皿Ⅰ類と上田氏編年による15世紀の「口縁部の外反するＤ－Ⅱ類」、「ヘラ先による細線の線描蓮弁文をもつＢⅣ類」、「見込みに印花文をもつＥ類」等輸出用雑器がみられる。外面に蓮弁文をもつ碗Ⅰ－５類はＳＥ06の（275）、ＳＤ58（419）がある。他に小片ではＳＥ05、ＳＤ52から鎬蓮弁文をもつもの、落ち込み状遺構、包含層からは鎬をもたないものも出土している。外面が無文で内面に刻花文をもつ碗Ⅰ－2類は落ち込み状遺構、包含層から少量出土している。同安窯系の碗Ⅰ類はＳＥ05の（267）、落ち込み状遺構、包含層から小片が出土している。皿Ⅰ類は落ち込み状遺構から（397）と、包含層から（489・492）が出土しており、他にＳＥ01にも少片がみられる。

褐磁　出土量は少ない。12世紀のものでＳＥ02から四耳壺（77）が出土している。

〈補足〉

瓦器椀の地域差

先に各遺構から出土した瓦器椀の中で、比較的地域差のはっきりした（沈線の有無による）大和型、和泉型の分類を試みた。更に細かくみていくと、出土量の多い大和型A_2～A_4の中には楠葉型、和泉型B_2～B_4の中にはいわゆる「河内型」の椀を含んでいるようだ。楠葉型の椀については、高槻市上枚遺跡、枚方市藤田山遺跡[注12]等の資料を、「河内型」の椀については大阪市長原[注13]・大園遺跡の資料を実見し、大和型や和泉型の中で少しづつ異なった特徴をつかむことができた。次に大和型と和泉型の違いを明らかにしてから、大和型の中で、和泉型の中でそれぞれ特徴になると思われる点を述べる。(但し、２段階から４段階のA_2～A_4 B_2～B_4の時期のものが中心になる。)

大和型Ａと和泉型Ｂの違いについて

1）Ａは椀形をなし丈高で、Ｂは口縁部が大きく広がる鉢形を呈す。高台はＡの方が断面三角形を呈すものが多い。Ｂは断面が三角形～台形になり雑につける。

2）Ａは器壁の厚みが口縁部より体部、体部より底部が厚くなるものが多く（口縁部＜体部＜底部)、Ｂはその逆で底部より体部、更に口縁部が厚くなるものが多い（口縁部≧体部＞底部)。大体においてＡは薄手でＢは厚手である。

3）Ａの体部外面の指頭圧痕は浅いが、Ｂのそれは椀の形態をかえてしまうほど凹凸が大きい。またＡは体部外面にもミガキ調整を施すのが普通であるがＢはB_3からほとんど施さない。

4）Ａは内面のミガキ調整は圏線状に施し、条線の幅が細い。Ｂは条線の数が少なく、切れ切れになるものもあり、幅は概ね太い。

5）Ａは見込みの暗文に連結輪状や同心円文状のように輪状のものを施すが、Ｂは斜格子状や平行線状のように線状のものを施すものが多い。

6）Ａの胎土は大体において精良であるが、Ｂは精良なものと粗いものの両方がみられる。

以上、みてきた大和型の中でも更に２型式に分かれる。それぞれＡとＡ′としてみていく。

1）Ａは椀形の体部から口縁部が少し屈曲後、わずかに外弯しながら立ち上がる。沈線は段状にかなり明確に施す。Ａ′は椀形のまま体部から口縁部までつづき、口縁端部は内方を向く。沈線は段状に施さないで、溝状につける。なかには１本の線状に施したもの、あるいは粗略化したものがある。Ａ′はＡに比べると形がいびつで口縁部周縁が楕円形を呈するものが多い。Ａの高台は断面三角形が多いが、Ａ′の高台は先端を押えて断面が台形になる。

2）Ａは器壁の厚みが口縁部≦体部（体部下半部はやや薄くなる）＜底部となり全体に薄手である。Ａ′は口縁部≧体部≧底部となり全体に厚くボテッとしている。

3）Ａの口縁部内外面のナデ調整に比べるとＡ′は強いナデ調整を施すため、平行な線が明瞭に残る（一部、細い線によるミガキ調整がみられる)。Ａのミガキ調整はその幅が狭くなりつつもA_5の時期までつづくが、Ａ′はもっと早い時期になくなる。

4）Ａ・Ａ′とも内面のミガキ調整は圏線状であるが、見込みの暗文はＡは連結輪状、司心円文

状であるのに対し、A′は螺線状で直線的なものが多く、一部に連結輪状がみられる。

5）Aの胎土は精良なものが多いが、A′の胎土は精良なものと粗いものがある。

Aの特徴をもつものが大和型、A′の特徴をもつものが楠葉型になるのではないだろうか。

和泉型も同じく2つの型に分けられる。BとB′としてみていく。

1）Bは鉢型であるが口縁部が屈曲して外反する。B′は屈曲せずにそのまま口縁部までつづき、端部がやや外方を向く。高台は断面が三角形～台形とやや粗略なつくりに対し、B′は断面三角形のものが多い。

2）Bは器壁の厚みが口縁部≧体部＞底部で、B′は口縁部＜体部＜底部である。

3）Bは外面に指頭圧痕の凹凸を残すが、B′はそれほどでもない。またBは外面のミガキ調整がB′よりやや早い時期になくなる。

4）Bは内面のミガキ調整、暗文の条線の幅が太い。B′は条線の幅が細い。両方とも暗文は直線的なものを施すが、Bの形態のものに連結輪状が混じる。

5）Bの胎土は粗い砂粒を含むものが多いが、B′は精良なものが多い。

6）Bは新しくなるにつれ炭素吸着が悪くなるが、B′は良好である。

これらのうちBの特徴をもつものが和泉型、B′の特徴をもつものが「河内型」になるのだろうか。以上、それぞれの違いをみてきたが、例えば楠葉型は大和型以外に和泉型、「河内型」とも共通点をもっているようで破片では判別できない。また、これらの違いは肉眼観察という限界もあり、今後更に検討を要する。いずれ明らかにされるのを期したい。

2）A地区遺構内出土土器

1）SE01

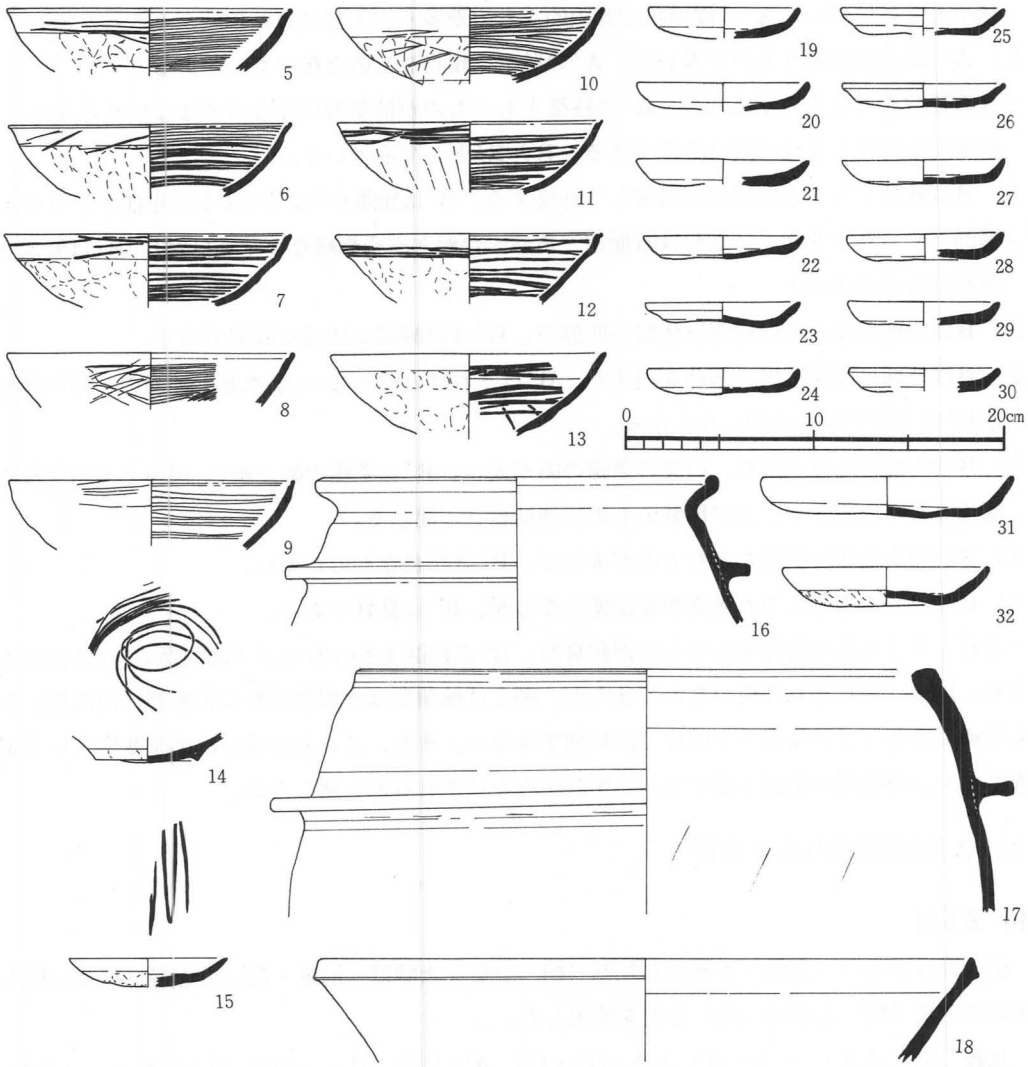
出土量は少ない。上層・下層から瓦器（椀・小皿）、土師器（羽釜・皿）、須恵器（揑鉢）、輸入磁器の白磁（碗）と青磁（皿）などを検出した。

瓦器　椀にはA$_{2-2}$（5～9）とA$_3$(11・12)、A′$_2$(10)、B$_{2-2}$(13) がみられる。いずれも完形になるものはない。高台は断面が低い三角形を呈するものが多い。椀A′$_2$(10) の口縁部の沈線は1本の線によるほとんど痕跡程度のものである。また、口縁部の小片に内面に沈線をもたないB型式と考えられるものがある。小皿c$_3$(15) は炭素の吸着が悪い。

土師器　羽釜には大和型B（16)、河内型C（17)と小片で口縁部の薄手のものもある。小皿はb$_1$(19)、b$_2$(20～24)、b$_4$(25～30)、中皿はb$_2$(31)、b$_3$(32) がみられる。

須恵器　揑鉢A（18）は下層から出土しており、東播系で13世紀後半のものである。

白磁・青磁　いずれも小片で白磁碗は太宰府の横田・森田氏の分類・編年(以下同じ文献)によると碗Ⅳ類（11世紀末～12世紀)、青磁皿は見込みに猫描文を施す同安窯系(12世紀後半～13世紀）にあたる。



第19図　ＳＥ01出土遺物実測図

2）ＳＥ02

瓦器（椀・小皿・羽釜）、土師器（皿）、須恵器（甕・揑鉢）、陶器・輸入磁器の白磁（碗）と褐磁（壺）、（他に砥石）などを検出した。

瓦器　全体に炭素吸着が良好で、完形に近いものが多いなど遺存状態が良い。体部内外面のミガキ調整、見込みの暗文は他の遺構から出土した瓦器に比べても鮮明で、全体の色調は黒色に近い灰色を呈している。椀にはＡ$_{2-1}$（33～45）とＡ$_{2-2}$（46～48）、Ａ′$_{2}$（49～51）、Ｂ$_{2-1}$（56・57）とＢ$_{2-2}$（58～60）がある。椀Ａ$_{2-1}$のミガキ調整は外面を分割気味に施すものが若干残るが、大部分は口縁部から体部中位にかけて不規則に施す。体部内面にはほぼ密に施す。見込みの暗文は連結輪状のものと、同心同状のものがあるが後者の方が多い。高台はしっかりして

おり、断面が三角形～台形を呈すものが多い。椀（33）のように、丸底の底部より高い位置に高台をつけるものもある。椀A$_{2-2}$は量的に少なく、体部内面のミガキ調整がやや粗くなる。底裏面に焼成後に細い線の「十」印をヘラ先でつけたものが2例ある（底部の総数136個のうち）。椀（51）は体部内面のミガキ調整の上に綾杉状の文様を1対ずつ6～7ヵ所に描いている。口縁部がやや厚っぽい。椀A′$_2$になると考えられる。胎土は精良で黒色に近い色調を呈す。体部内面に文様を描く手法は少ないが14世紀の資料には見られるようである。[注14] 椀A′$_2$（50）は体部内面のミガキ調整が細い線で交差している。出土例はあまりなく楠葉産になるのかどうか断定できない。B型式の椀は見込みの暗文が斜格子のB$_{2-1}$と平行線のB$_{2-2}$がほぼ同数出土している。椀B$_{2-1}$の外面体部には少しミガキ調整がみられる。椀B$_{2-1}$・B$_{2-2}$は共に体部内面のミガキ調整の条線は太いが、見込みの暗文には太い線と細い線の両方がみられる。

小皿は他の遺構に比べると量的に多く、また形態的にもいろいろあり、a$_1$(63)、a$_2$(64・65)、a$_3$(66・67)、b$_2$、b$_3$(68～69)、c$_2$(71)、d$_1$・d$_2$(72) などがある。小皿a$_1$(63) は見込みに斜格子文を施すが、斜格子文をもつ例は少ない。a$_2$・b$_2$型式のものが多い。椀の出土数に対して小皿は約4：1位の数である。d型式は和泉型と考えられるが、B型式の椀の⅙位の出土量である。

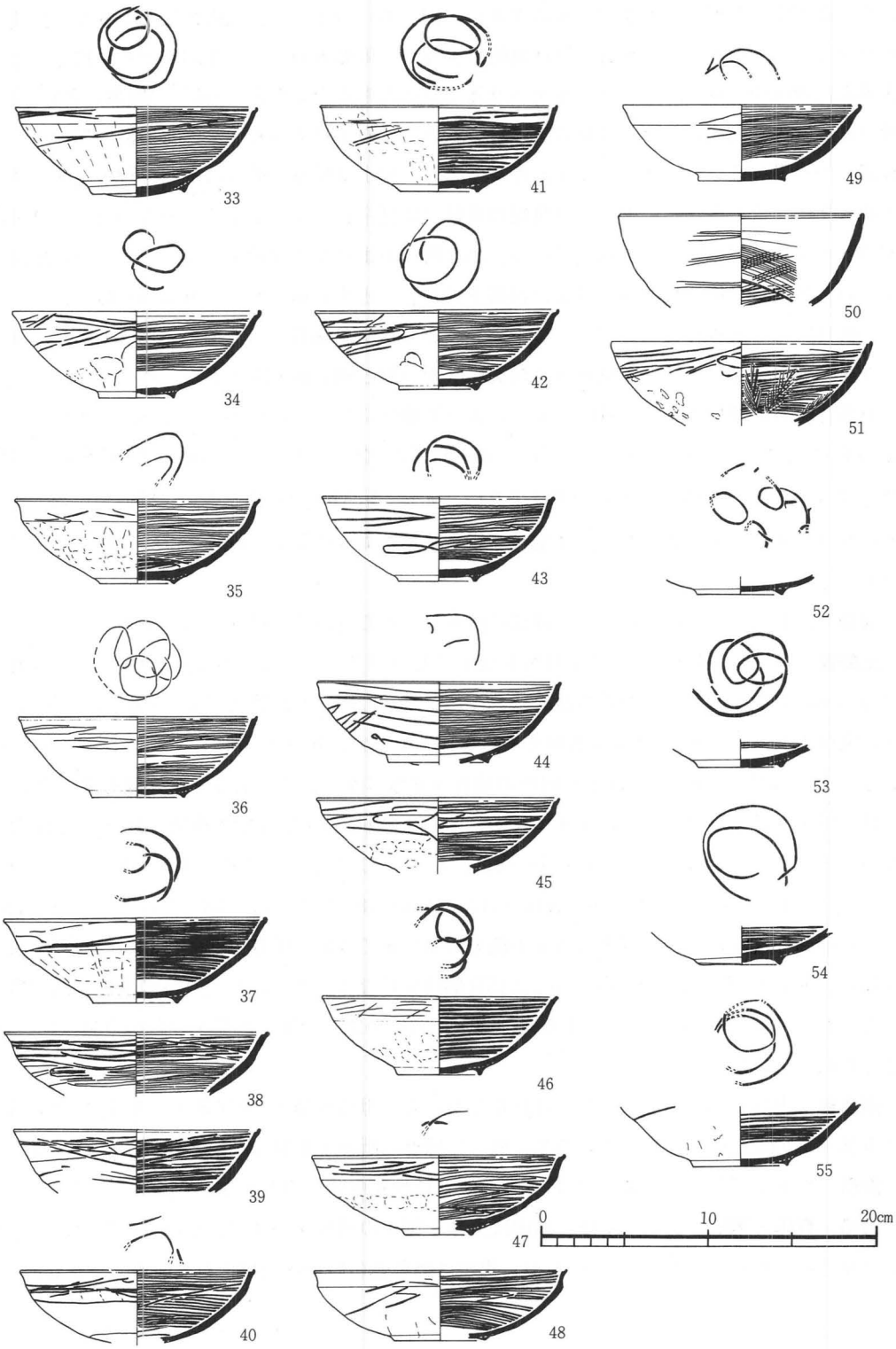
羽釜　完形になるものはなく、口縁部に段をもつもの（73）と脚部（74）がある。

土師器　皿は全体に灰白色7.5YR$\frac{8}{3}$を呈するものが多い。小皿の出土量が多く、中皿の他に口径16cmの大皿もある。b型式の皿がほとんどで、その中でも形態的にb$_1$～b$_5$まで分類できた遺構でもある。b$_1$～b$_4$は底部から口縁部まで多少、差があるにしてもほぼ同じ厚みである。それに対してb$_5$は底部と口縁部の境界が非常に厚く、また最後に口縁部を横ナデして境目の粘土がはさみ出てもそのままにしている。このb$_5$の小皿は他の遺構に比べると出土量が多くまとまりをもつ。小皿はb$_1$(79～81)、b$_2$(82～101)、b$_3$(102～112)、b$_4$(113～132)、b$_5$(133～143)、中皿と大皿はb$_1$(144～147)、b$_3$(148～152)、b$_4$(153～157)、b$_5$(158～160)にそれぞれ分けられる。口縁部のある小皿を円周にあてはめて個数を数えるとb$_1$は5½、b$_2$は46¼、b$_3$は5⅔、b$_4$は10⅚、b$_5$は15⅖個体分になる。但し、b$_2$とb$_3$の小片で区別のつかないものはb$_2$に入れている。また同様の数え方で小皿と中皿（大皿を含む）の数の比をみると約14：1になる。

須恵器　甕B（75）は焼成が悪く瓦質化したもので黒色を呈す。魚住窯系である。揑鉢C(76)は東播系（13世紀中頃以降）のもので、他に口縁部の断面を矩形に納める鉢の小片がある。

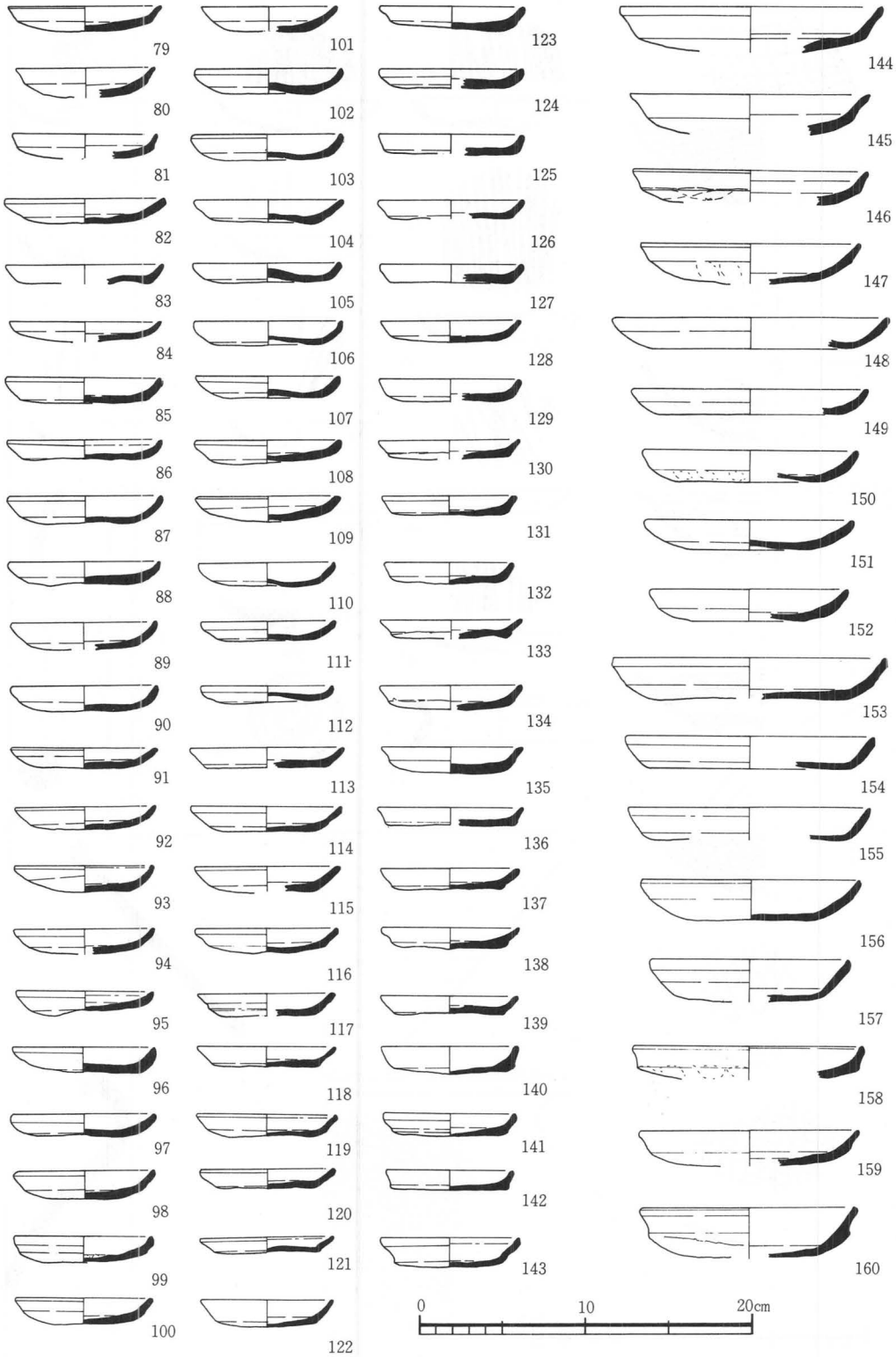
陶器　小片で渥美窯（12世紀中頃）、備前焼（13世紀中頃）のものがみられる。

白磁・青磁・褐磁　白磁は森田・横田氏分類・編年の碗Ⅳ類の体部、底部の小片がある。青磁は見込みに片彫りをもつ碗底部（78）、褐磁は四耳壺の口縁部が出土している（12世紀）。



第20図　ＳＥ02出土遺物実測図

第21図　ＳＥ02出土遺物実測図



第22図　ＳＥ02出土遺物実測図

3）ＳＥ03

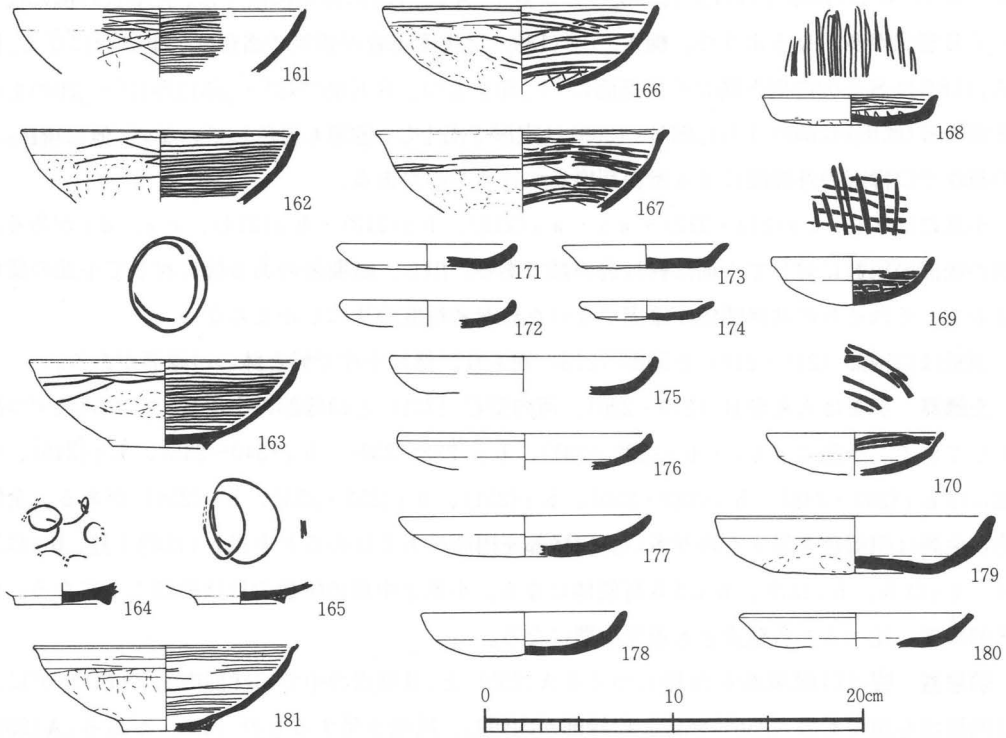
出土量は少ない。瓦器（椀・小皿）、土師器（皿）、輸入磁器の白磁（碗）を検出した。

瓦器　椀にはＡ$_{2-1}$(162)、Ａ$_{2-2}$(163)、Ａ′$_{2}$(161)、Ｂ′$_{2-1}$(166)とＢ′$_{2-2}$(167)がある。高台だけ残存するものに断面が台形でしっかりしたＡ$_{1}$になると考えられる小片もある。椀Ｂ$_{2-1}$、Ｂ$_{2-2}$は共に外面にミガキ調整を施す。小皿はａ$_{1}$（168）、ｄ$_{1}$(169)、ｄ$_{2}$(170）がある。ｄ$_{2}$(170)は内面全体に一連のミガキ調整を施す。小皿ａ$_{1}$(168)は楠葉産の例[注15]と極似する。

土師器　小皿と中皿がある。小皿はｂ$_{2}$(171・172)、ｂ$_{4}$(173)、ｂ$_{5}$(174）がある。中皿はｂ$_{2}$(175～178)、ｂ$_{3}$(179)、ｂ$_{4}$(180)がある。

4）ＳＥ04

出土量は極小量である。瓦器（椀）のＡ$_{3}$(181)と土師器、須恵器の小片を検出した。



第23図　ＳＥ03・04出土遺物実測図

5）ＳＥ05

瓦器（椀・小皿・羽釜・鉢）、土師器（羽釜・皿・盤）、須恵器（甕・鉢）、陶器（壺・甕）、輸入磁器の白磁（壺・碗）と青磁（碗）、(他に砥石、銭貨）などを検出した。

瓦器　ＳＥ02の遺物に比べると器表面が風化のため退色し、ミガキ調整や暗文が不鮮明である。椀にはＡ$_1$(182・183)、Ａ$_{2-2}$(184～189)、Ａ$_3$(190～192)、Ａ$_4$(193・194)とＡ$_5$(195～197)、Ｂ$_1$・Ｂ$_2$・Ｂ$_3$(198)、Ｂ$_4$(199～203)とＢ$_5$(204～210)とかなり時期的にも幅のあるものが出土している。更に椀Ａ$_5$の中では（197）のように丈高になるものも出てくる。椀Ａ$_1$(183)は見込みに放射状の強いナデの線を残し、その上に螺旋状の暗文を施す。椀Ａ$_1$～Ａ$_3$の量をみると椀Ｂ$_1$～Ｂ$_3$に比べて非常に多い（特にＡ$_3$)。ところが椀Ｂ$_4$・Ｂ$_5$は完形に近いものや、大きな破片が多くみられるのに対して、椀Ａ$_4$・Ａ$_5$は量的に非常に少ない。この状況をみるとＡ$_3$とＢ$_3$の段階ではＡ型式の椀の方が多く、Ａ$_4$とＢ$_4$以降の段階では、Ａ型式の椀に代わってＢ型式が多くなるようだ。椀Ａ$_{2-2}$(189)は炭素吸着が皆無で高台は二重高台になる。椀Ａ$_2$(184)はＳＥ02の例と同じく底裏面に「＋」印をもつ。ＳＥ05では「＋」印以外に「－」印のもの８例ある(底部242個のうち)。椀Ｂ$_5$(209)は完形で出土し、色調も退色していない。他に椀Ｂ$_{2-2}$の破片で口縁部の外端面に２ヵ所の籾痕をつけるものがある。

小皿にはａ$_1$・ａ$_2$(211・212)・ａ$_3$・ａ$_4$(215)、ｂ$_2$(213)・ｂ$_3$(214)、ｃ$_2$、ｄ$_1$がある。椀の底部の総数に対して小皿は約⅕弱の数である。但し、時期差のある椀に対して小皿の変化は少なくそれぞれの共伴関係が確実でないため参考程度の比にしかならない。

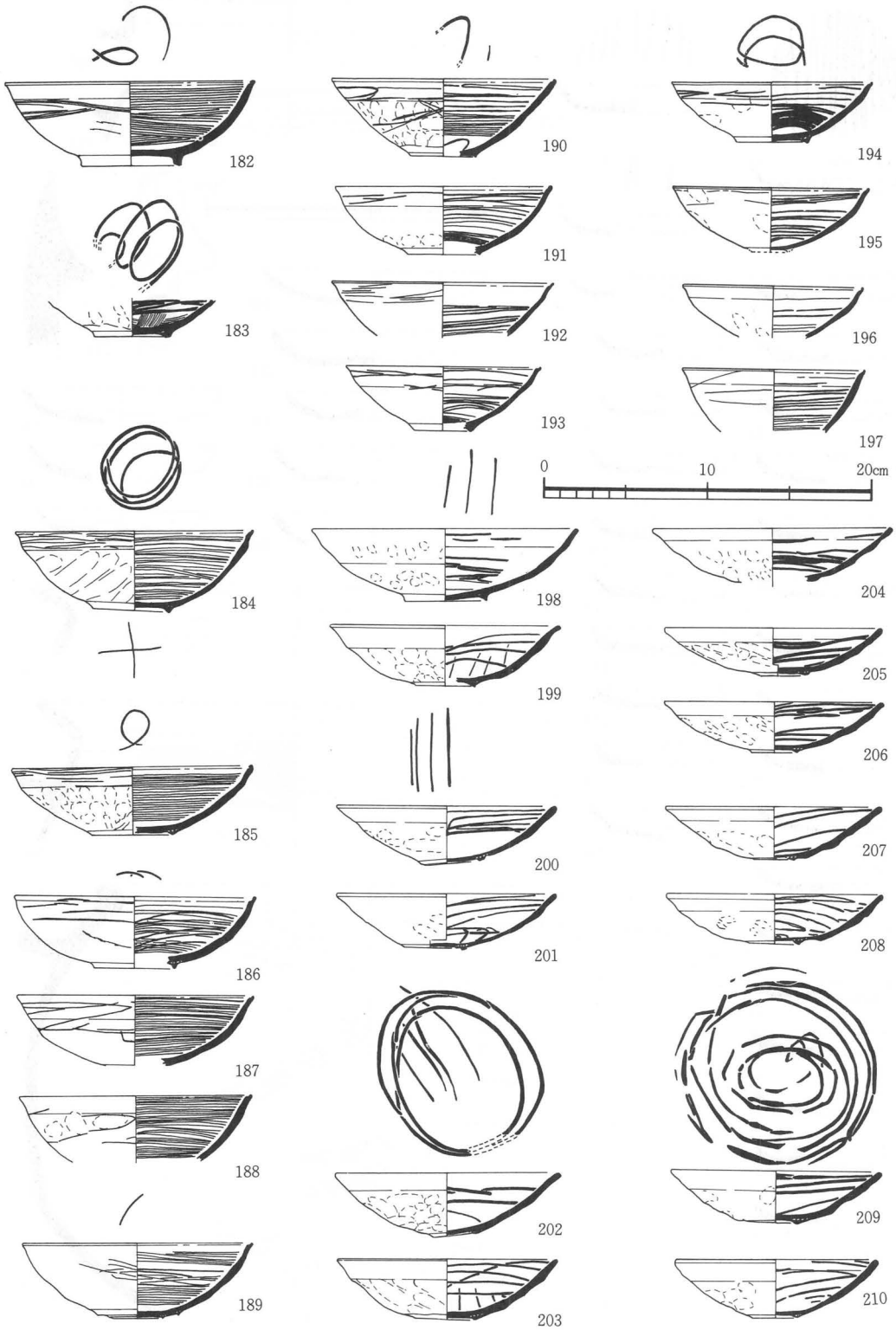
羽釜は口縁部（211・217）と脚部（218）があり、他に小片で盤と鉢の口縁部がある。

土師器　羽釜は大和型Ｂ（219・220)、河内型Ｃ（221）と口縁部の小片Ｂ・Ｃが同量ずつ出土している。小皿にはｂ$_1$・ｂ$_2$(222～231)、ｂ$_3$(232～239)、ｂ$_4$(240～245)、ｂ$_5$(246)、中皿にはｂ$_1$(247・248)、ｂ$_2$(249・250)、ｂ$_3$(251)、ｂ$_4$(252・253)、ｂ$_5$(254)がある。全体的に色調は橙褐色を呈すものが多い。口縁部を円周にあてはめると小皿ｂ$_1$は約１½、ｂ$_2$は31⅙、ｂ$_3$は５、ｂ$_4$は９、ｂ$_5$は５½個体になる。小皿と中皿の個数の比は約13：１になる。ＳＥ02の皿に比べると各型式とも若干小型になる。

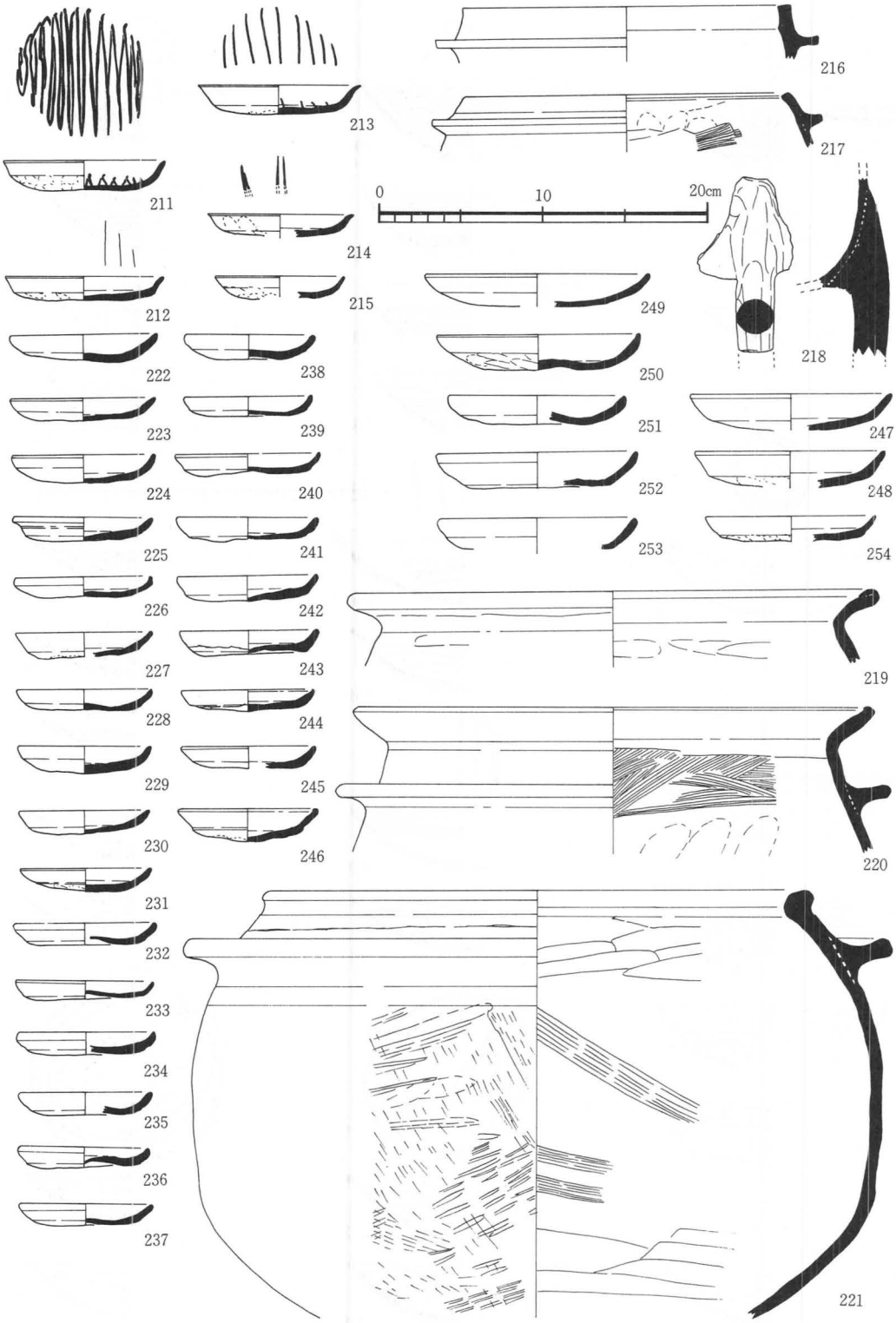
須恵器　甕は口縁端部を台形につくるＡ(255)と、Ｂ型式の中で口縁部内面に強いナデにより凹線状を呈すもの（256～259)、口縁部が内傾し、段状を呈するもの（260）がある。Ａ(255)は土師質で、Ｂ(256)は焼成が悪く瓦質化している。揑鉢はＡ(261～263)と土師質の小片がある。東播系で13世紀後半のものである。他にＢ型式の口縁部がある。

陶器　常滑窯の壺・甕がある。壺（268）は赤羽氏編年によると第２段階（12世紀中～後期）のもの、大型の甕（270）は赤羽編年の第３段階（13世紀中頃）のものである。ほぼ完形に近い。体部には押印文をもつ。底部（269）は同じく３段階（14世紀初頭まで）のものである。

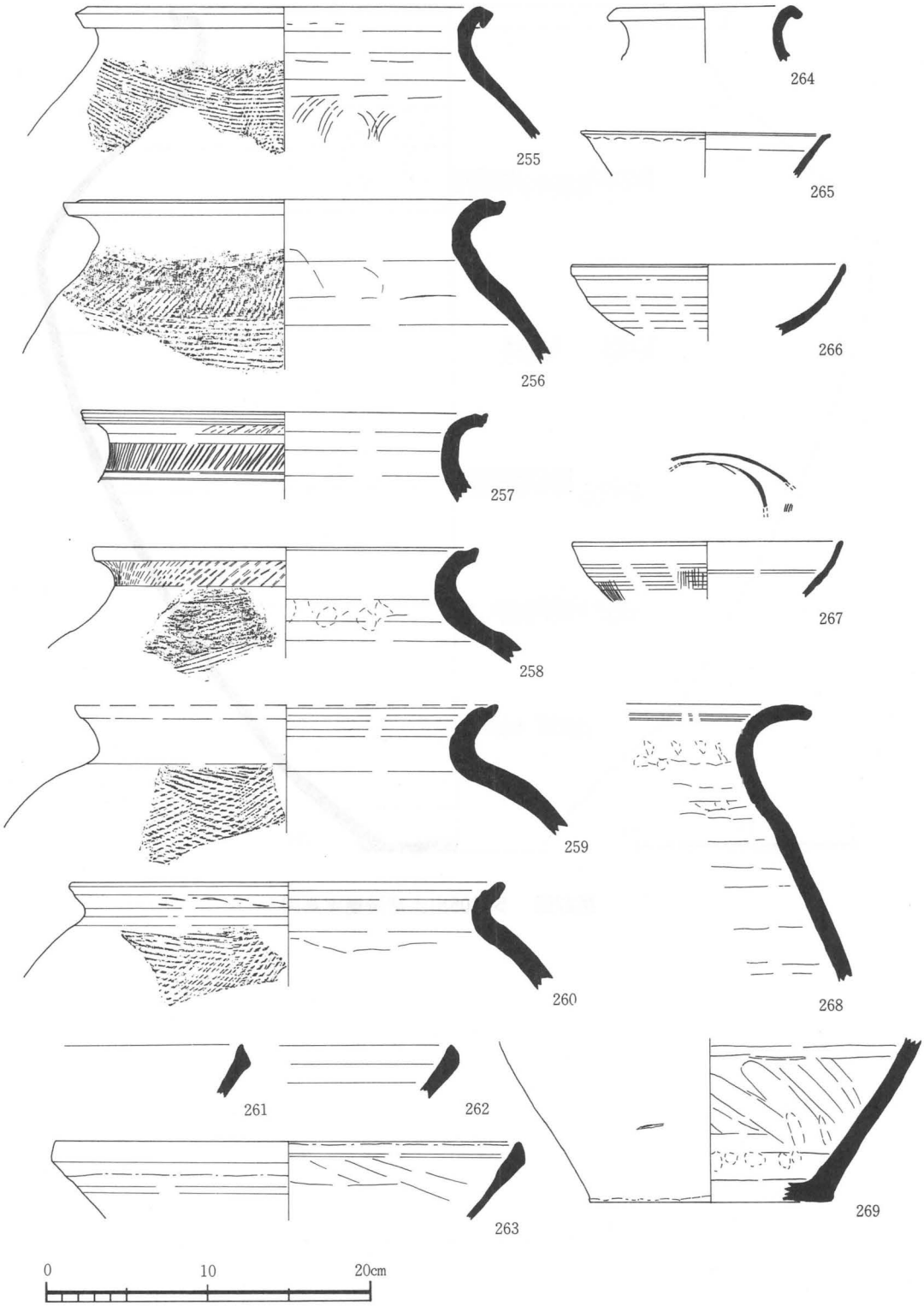
白磁・青磁　白磁の碗（266）は横田・森田氏の分類、編年によると11世紀末～12世紀の碗Ⅱ類、小片のⅣ類、Ⅴ類（265)、四耳壺の口頸部（264)がある。青磁は12世紀後半～13世紀の同安窯系の碗（267)、龍泉窯系の鍋蓮弁文をもつ碗がある。



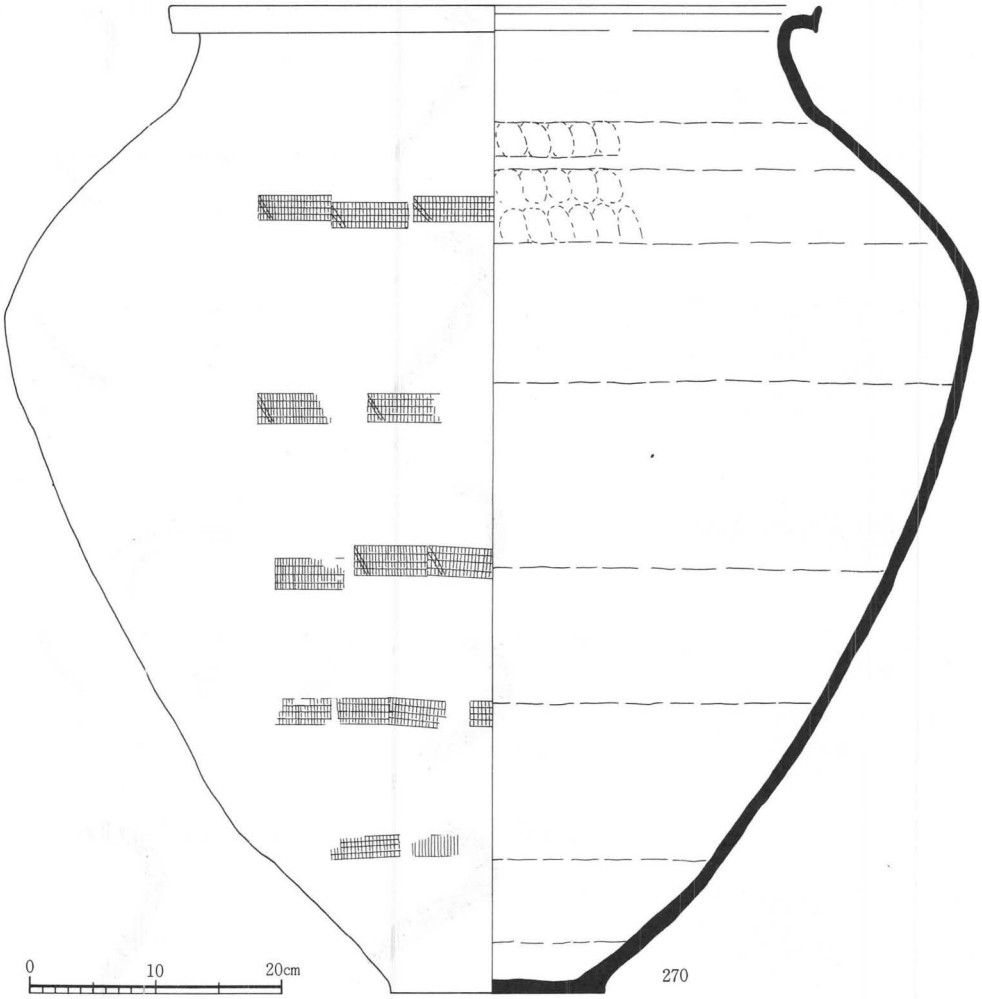
第24図　ＳＥ05出土遺物実測図



第25図　ＳＥ05出土遺物実測図



第26図　ＳＥ05出土遺物実測図



第27図　ＳＥ05出土常滑甕実測図

6）ＳＥ06

出土量は少ない。瓦器（椀・小皿）、土師器（皿）、須恵器（揑鉢）、輸入磁器の白磁（碗）と青磁（碗）を検出した。

瓦器　椀には完形に近いＡ$_4$(271・272）がある。小皿はａ$_3$(273)、ｃ$_3$(274）が伴う。

土師器　小皿はｂ$_1$(276・277)、ｂ$_3$(278・279)、ｂ$_4$(280)、中皿はｂ$_1$(281）がある。

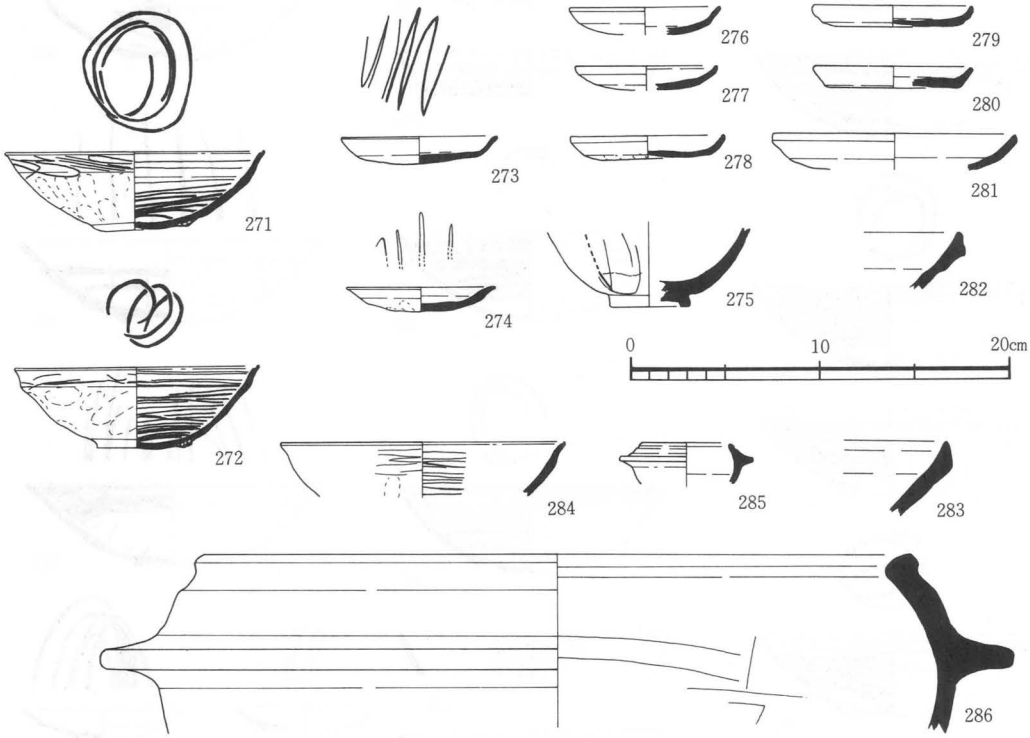
須恵器　揑鉢Ａ（282)の小片がみられる。

白磁・青磁　白磁碗の体部少片と龍泉窯系の碗Ⅰ－５－ｂ類（275）がある（13世紀中頃)。

7）ＳＥ07

出土量は少ない。瓦器（椀・皿・羽釜・盤)、土師器（皿ｂ、羽釜Ｃ)、須恵器（揑鉢Ａ)、輸入磁器の白磁（四耳壺）を検出した。

瓦器　椀のＡ$_2$(284)、口径4.8cmの小型の羽釜（285）があるがほとんど小片である。羽釜は炭素吸着が皆無である。他に土師器では羽釜Ｃ（286)、須恵器の揑鉢Ａ（283）がある。

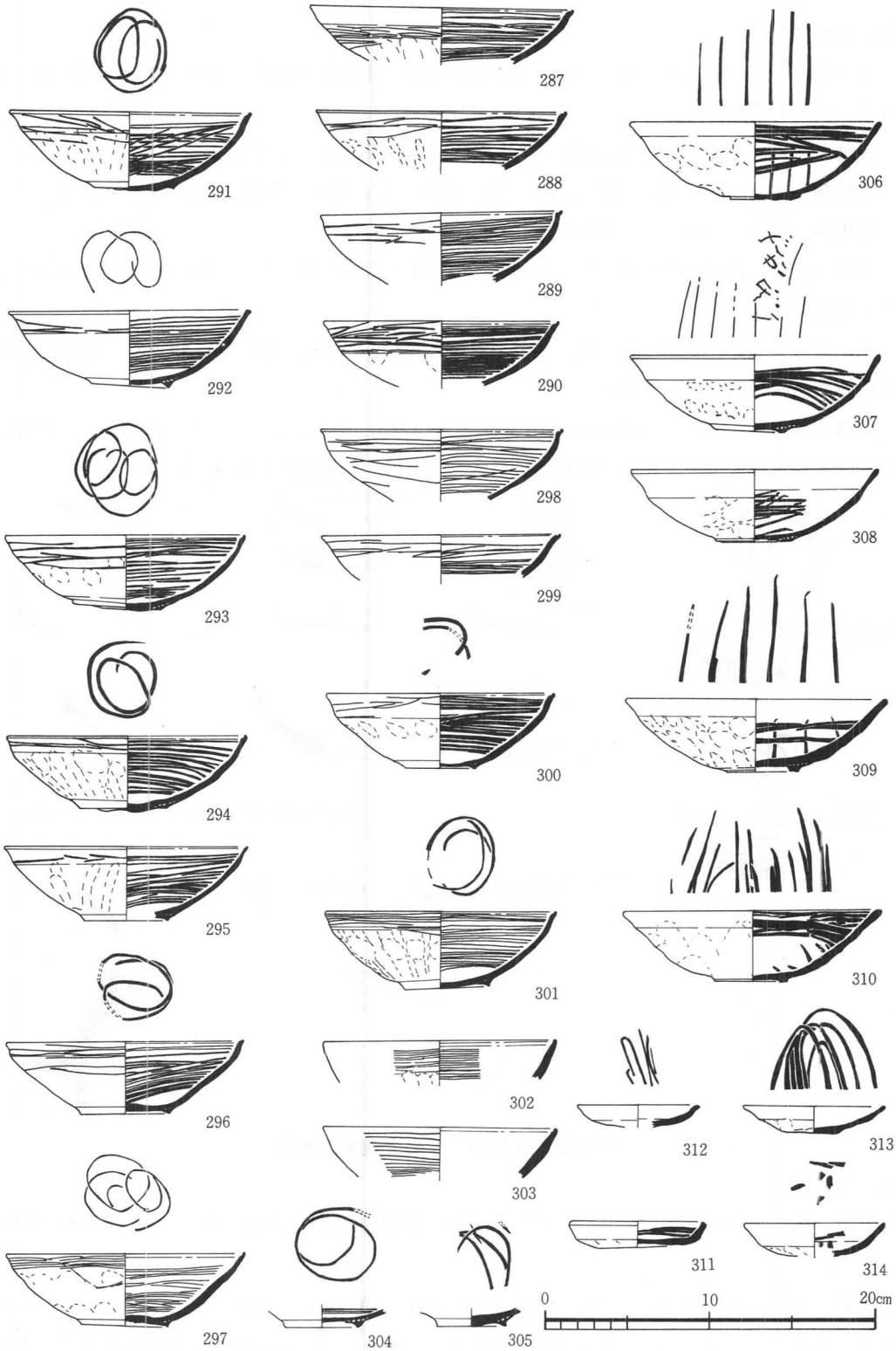


第28図　ＳＥ06・07出土遺物実測図

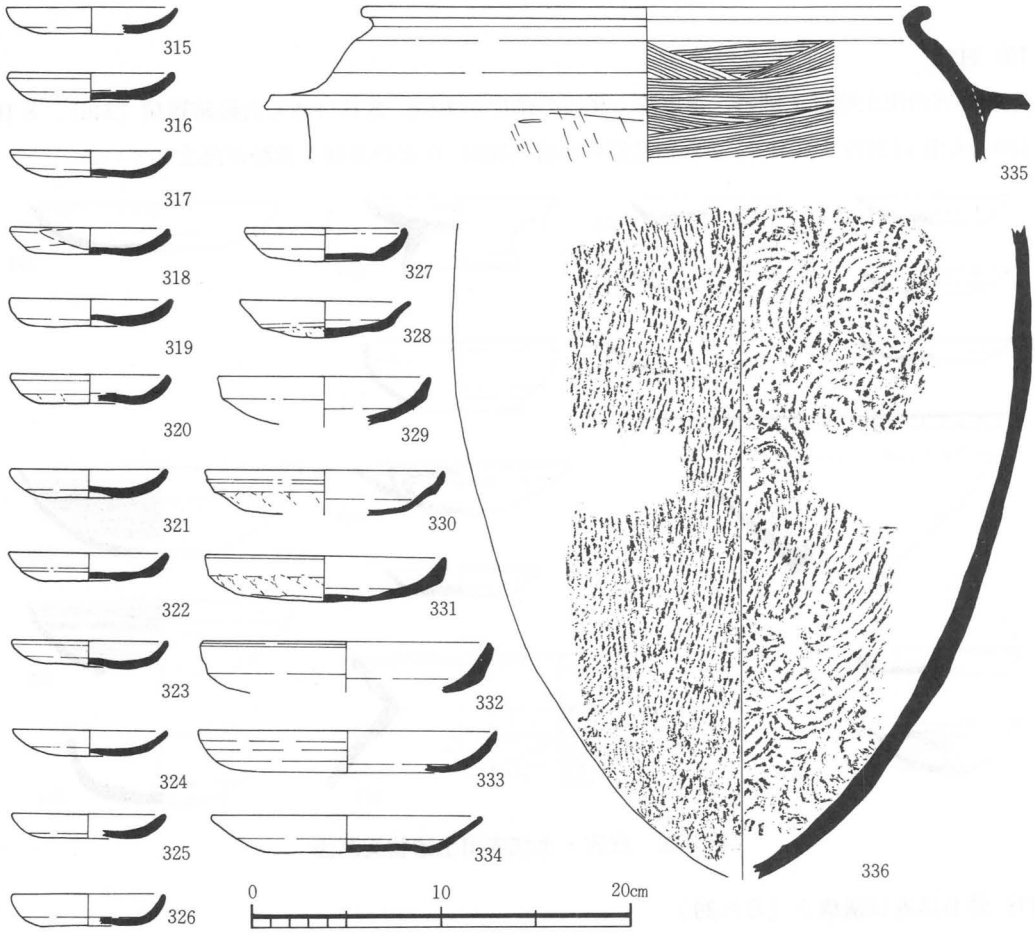
8）ＳＫ22

瓦器（椀・小皿・羽釜)、土師器（羽釜・皿)、須恵器（甕)、白磁（碗)、（他に砥石）を検出した。

瓦器　椀にはＡ$_{2-2}$(287～290）とＡ$_3$(291～301)、Ａ′$_2$(302・303)、Ｂ$_3$(306～310）がみられる。椀Ａ$_{2-2}$、Ａ′$_2$には完形になるものはない。椀Ａ$_3$・Ｂ$_3$は完形及び完形に近い椀でそれぞれまとまって出土している。椀Ａ$_3$の高台は低くく、丸底のものは底面より高い位置につく。



第29図　ＳＫ22出土遺物実測図



第30図　ＳＫ22出土遺物実測図

二重高台のものもある。椀Ａ$_3$(291・293・295・296・299・301) は炭素吸着が悪い。[16] 椀Ｂ$_3$の高台部は先端部を押えつけ、断面を逆台形につくる。椀Ｂ$_3$(307)の見込みの暗文は他の椀の線より細い。

小皿はａ$_1$(311)、ａ$_2$かａ$_3$の口縁部小片、ｂ$_2$の小片、ｂ$_3$(312)、小椀 (313、314)がある。椀のようなまとまりはない。小椀 (313)は内面の見込みから体部にかけて一連のミガキ調整を施す。炭素吸着は底部のみにつく。ａ$_1$(311)は炭素吸着は皆無である。羽釜の口縁部が1例ある。

土師器　羽釜はやや薄手の河内型Ｃ (355) と他に厚手のものもある。大和型Ｂの小片が多量にみられる。小皿はａの口縁部小片、ｂ$_2$(315～318)、ｂ$_3$(319～325)、ｂ$_4$(326・327)、ｂ$_5$の小片、ｃ (328)、中皿は (329～331)、ｂ$_2$(332)、ｂ$_3$(333)、ｂ$_4$(334) がある。

須恵器　甕 (336) はラグビーの球形をした体部で二次焼成をうけている。

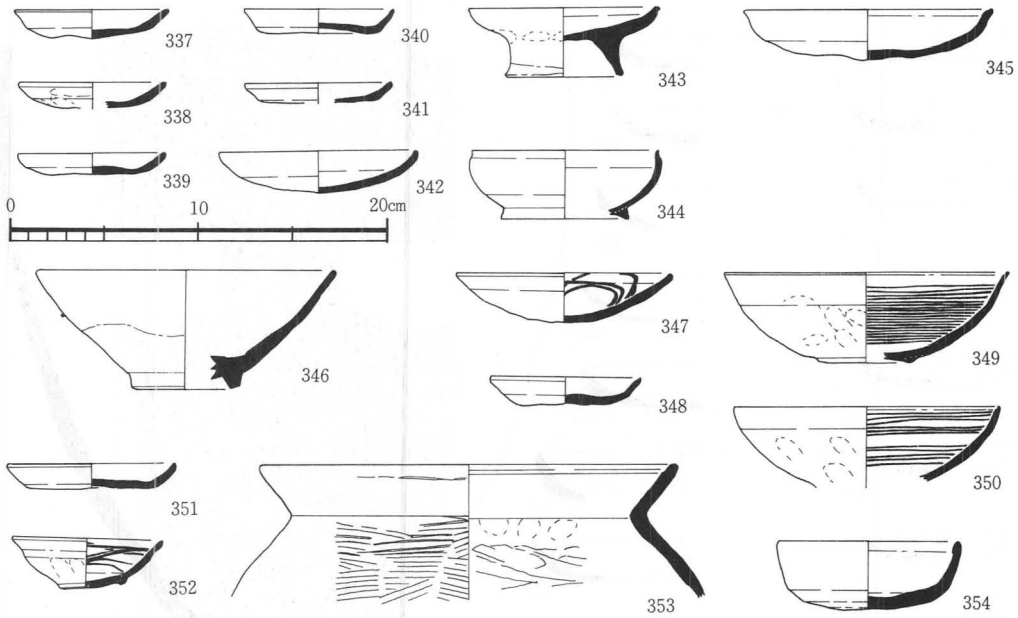
白磁　碗Ⅳ類の小片、その他体部の破片がみられる。

9）その他の土坑

各土坑の出土物は土師器、須恵器の小片が多い。ＳＫ40からは台付皿 (343)が出土している。

10) 柱穴

各柱穴の出土物は土師器、須恵器、瓦器の細片が多い。ＳＢ11から白磁碗Ⅷ類（346）、ＳＢ189からＢ$_6$(347)、ＳＢ387から和泉型の小椀（352）などの良好な資料が出土している。



第31図　柱穴・土坑内出土遺物実測図

11) 落ち込み状遺構２（ＳＫ30）

古墳時代から中世に至る土器が混在して出土している。(他に砥石、瓦製円板がある)

瓦器が出現する前の遺物として、古墳時代の須恵器の杯蓋（391)、奈良・平安時代の土師器の杯（368)、盤（367)、甑（369)、黒色土器（355・356）などを検出した。黒色土器（355)は、ほぼ完形に近く、外にふんばる高台に椀形の体部をもち、見込みは縦方向のミガキ調整を施す。

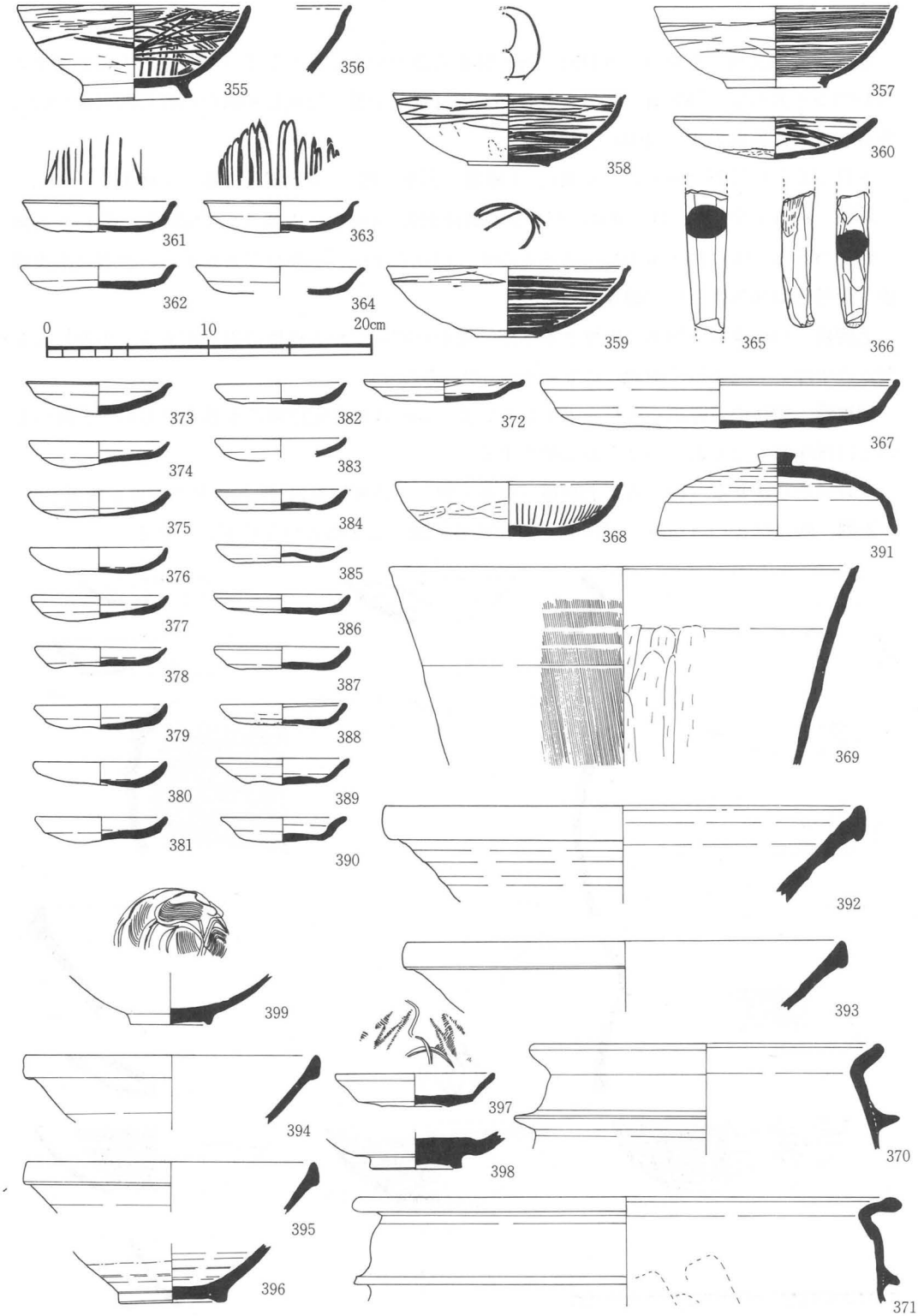
瓦器の出現以降の遺物は、瓦器（椀・小皿・羽釜・盤)、土師器（羽釜・皿)、須恵器(揑鉢)、輸入磁器の白磁（碗）と青磁（碗・皿）などがある。以下、主な遺物についてのみ記す。

瓦器　椀にはＡ$_{2-1}$(357）とＡ$_{2-2}$(358・359)とＢ$_6$(360）がある。小皿はａ$_2$(361・362)、ｂ$_2$(363・364）があり、（362・364）は風化のため調整が残らない。

土師器　羽釜の口縁部で大和型Ｂ（370・371）がある。他に（371)と同形態の口縁部や厚手の河内型Ｃの小片が多くみられる。皿はａ$_2$(361・362)、ｂ$_2$(363・364）などがある。

須恵器　揑鉢Ｂ（372・393）がある。東播系のものである。

白磁・青磁　小片ではあるがかなり多くみられる。白磁碗は11世紀末～12世紀初頭のⅣ類(394～396)・Ⅴ・Ⅸ類と皿・四耳壺、15～16世紀の体部を面とりした小碗などがある。青磁は12世紀中葉～13世紀初頭の龍泉窯系の鍋蓮弁文をもつ碗、内面にヘラの片彫りの刻花文と櫛描文をもつ碗（399)、同安窯系の皿（397)と碗、14世紀の青磁碗（398)、15世紀の雑器碗などがある。[注17]



第32図　落ち込み状遺構２（ＳＫ30）出土遺物実測図

12) 溝出土

溝からの出土物は少ない。ＳＤ52・56・58からはやや多く出土している。主なものを記すとＳＤ03から大和型の羽釜Ｂ（400）、ＳＤ06から11世紀中葉～12世紀初頭の白磁の四耳壺(401)、ＳＤ40から瓦器椀のＡ′$_2$（403）を検出した。

ＳＤ52からは瓦器（椀・皿・羽釜）、土師器（羽釜・皿）、須恵器（揑鉢）を検出した。

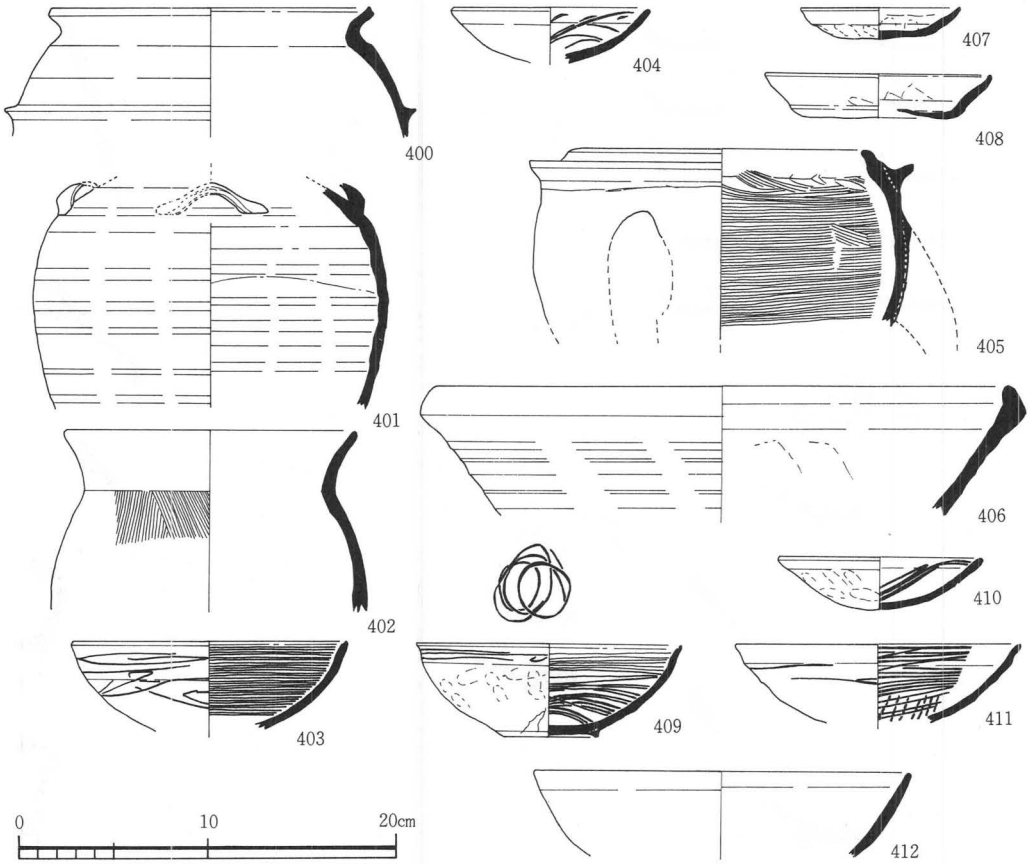
瓦器　椀Ａ$_4$の小片、Ｂ$_6$(404) がある。脚付羽釜（405）は内傾する口縁部に外上方を向く鍔をつける。他に鍔を水平につけるものや、口径が９cmの小型の羽釜がある。後者は炭素吸着は皆無で口縁部直下に沈線をもつ。

土師器　口縁端部を内側に肥厚させ体部に短かい鍔をもつ大和型の羽釜がある。小皿にはｂ型式の小片とｃ（407)、中皿にはｂ$_5$(408) がみられる。

須恵器　揑鉢の口縁部が何点か出土している。(406)は14世紀以降の東播系のもので、他のものも口縁端部が上方あるいは下方に肥厚する。

ＳＤ56からは瓦器（椀・皿)、土師器（羽釜・皿)、その他須恵器、陶器などの小片を検出した。

瓦器　椀にはＡ$_{2-2}$(409)、Ｂ$_6$(410) がある。皿にはｂ型式の小片がみられる。



第33図　溝内出土遺物実測図

土師器　羽釜は鍔部のみがみられる。皿はｂ$_2$・ｂ$_5$などの小片である。

ＳＤ58からは瓦器（椀・羽釜の脚部）、土師器（羽釜・皿）、須恵器（揑鉢）、輸入磁器の青磁を検出した。

瓦器　椀の中では一番新しくなるものが出土している。椀Ａ$_6$（413）は丈高で高台はほとんど痕跡程度につける。それに伴って高台を全くもたない椀Ｂ$_6$（414・415）が出土している。

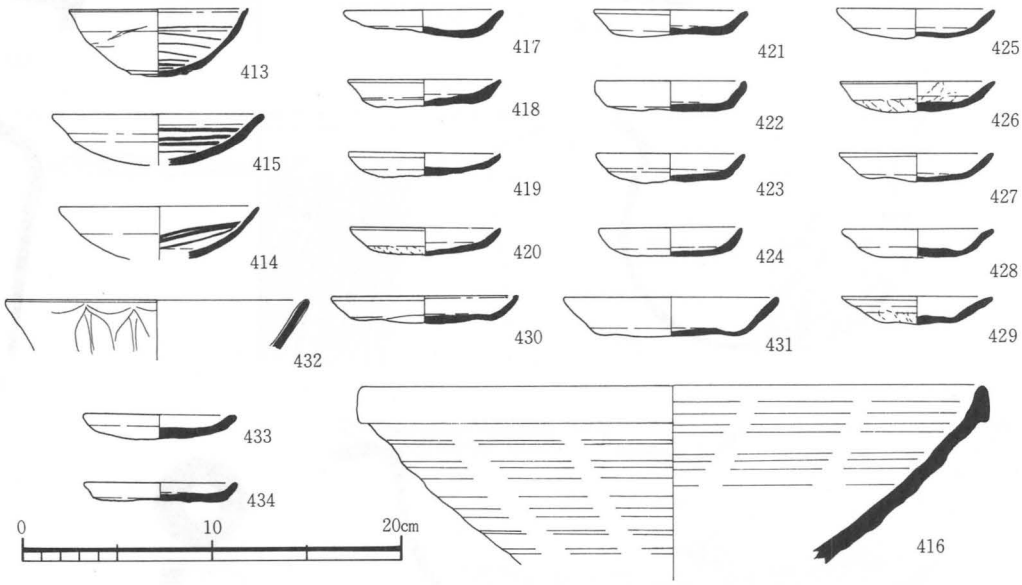
小皿は口縁部の小片でＳＥ05出土のａ$_4$（215）と同じ小型のものがみられる。

土師器　羽釜は口縁部が外側に肥厚する小片がある。小皿にはｂ$_1$の小片、ｂ$_2$（417～420）、ｂ$_4$（421～424）、ｃ（425～429）、中皿にはｂ$_4$（430）、ｃ（431）がみられる。ｃ型式のものが比較的まとまって出土しており、瓦器椀Ａ$_6$・Ｂ$_6$の段階に伴うものと考えられる。小皿の口径の平均はｂ型式が7.8cm、ｃ型式が８cm、中皿のｃ型式は11.1cmで他の遺構から出土した皿よりも小皿・中皿共に小型化している。

須恵器　揑鉢Ｂ・Ｃ・Ｄ（416）がみられる。（416）は東播系のものである。

青磁　12世紀中葉～13世紀初頭の龍泉窯系の鎬蓮弁文をもつ碗の小片がみられる。

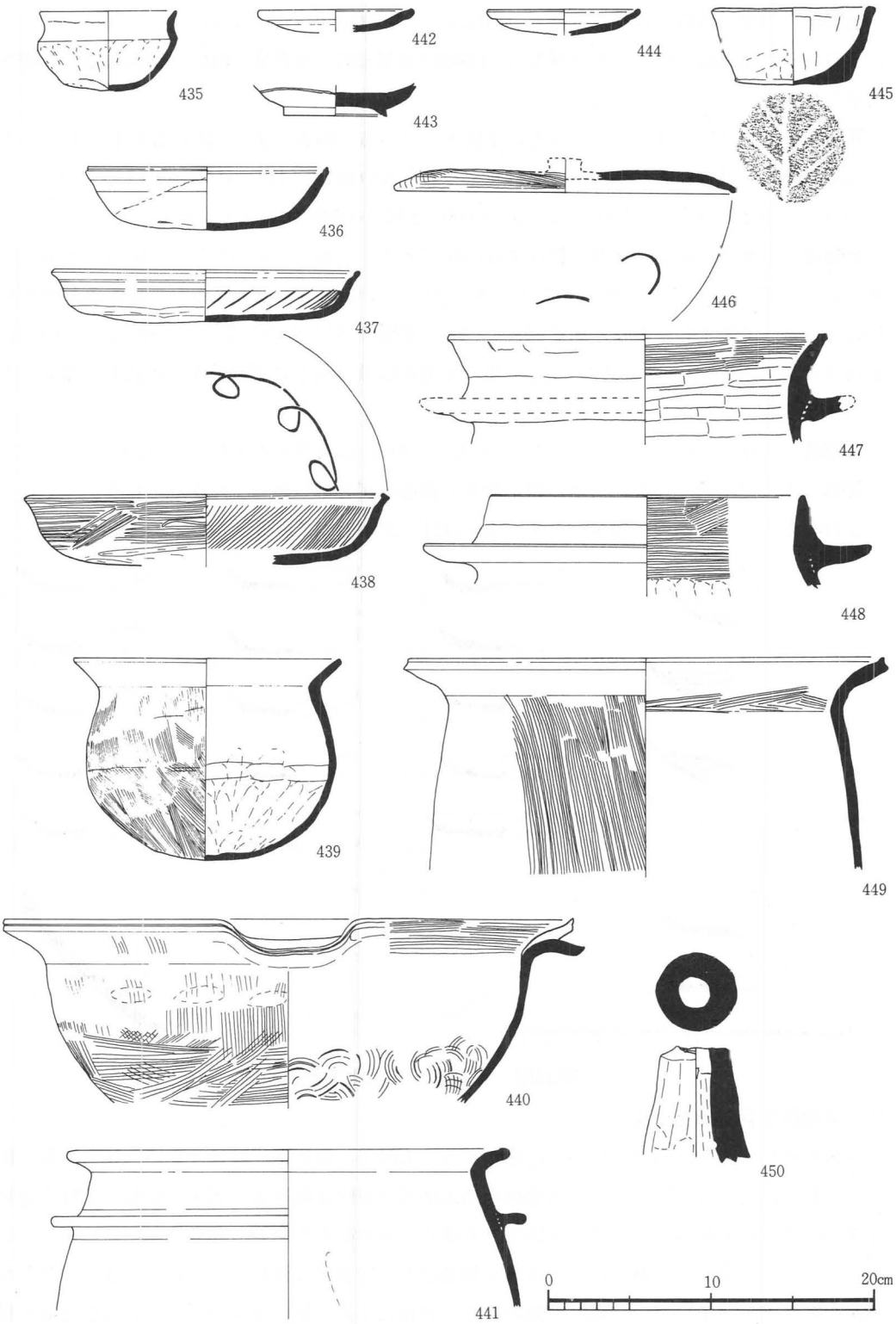
ＳＤ63からは土師器の小皿ｂ$_1$（433）、ｂ$_5$（434）が出土している。



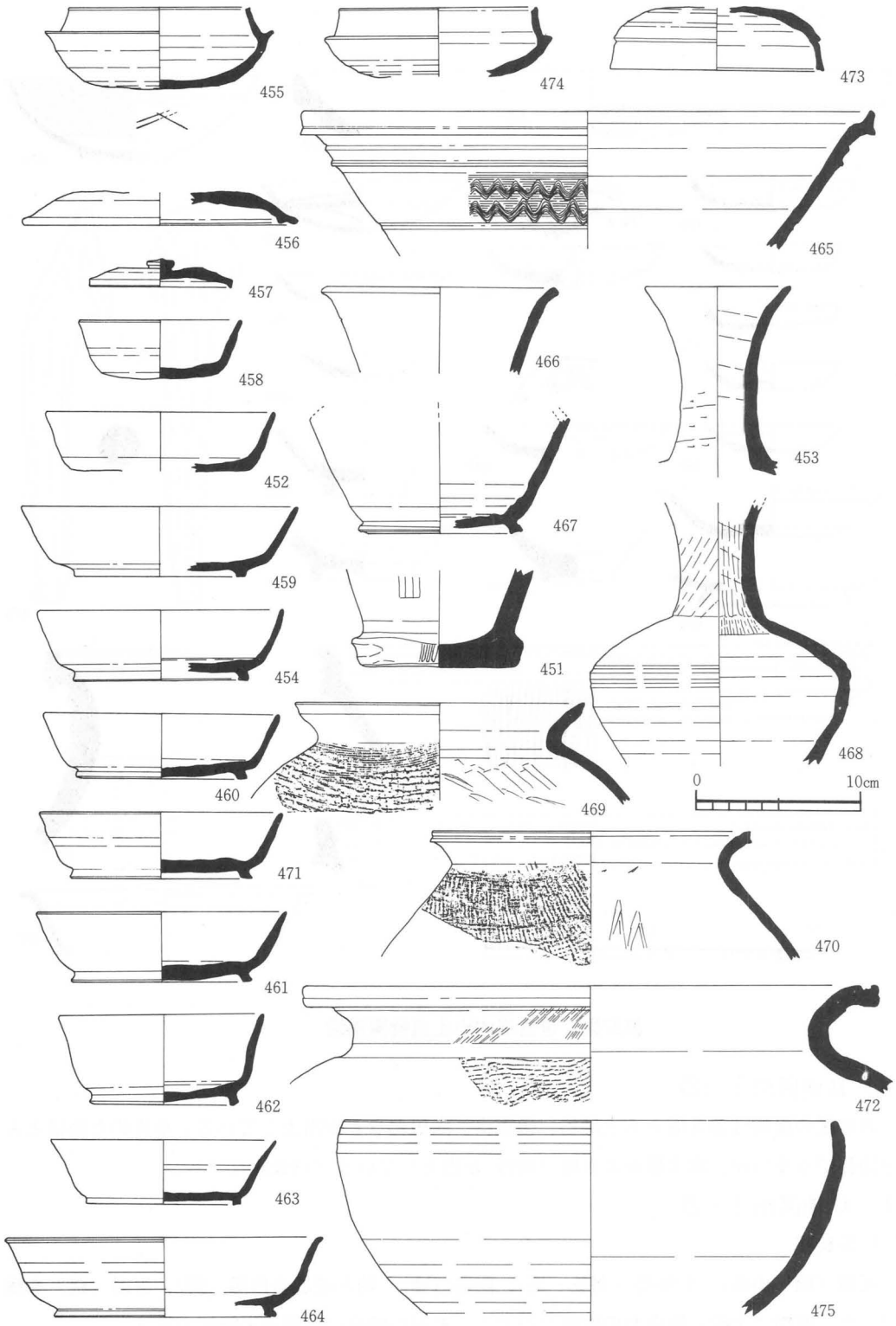
第34図　ＳＤ58・63出土遺物実測図

13）Ａ地区包含層出土土器

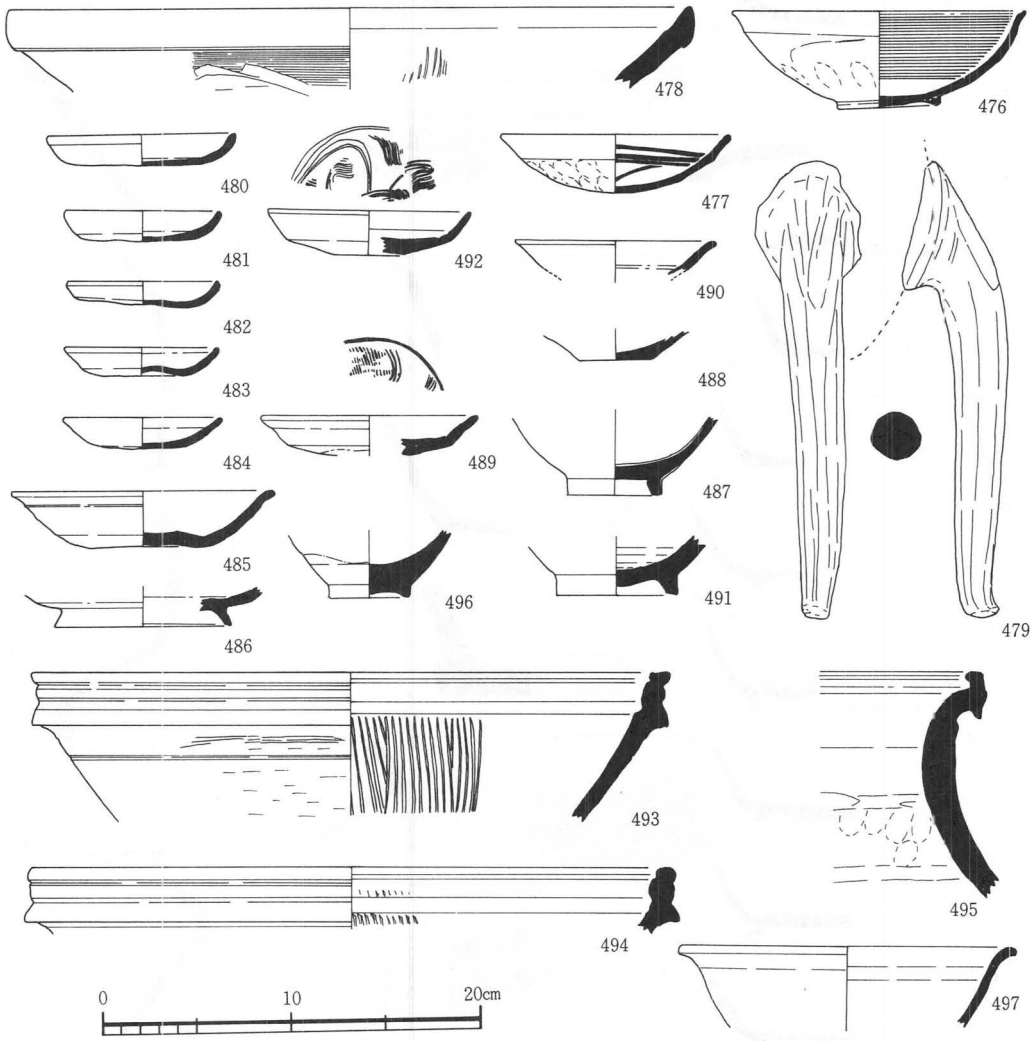
包含層の出土遺物は古墳時代から近世に至る。土師器、須恵器、緑釉、瓦器、輸入磁器の他に日本製陶磁器などを検出した。各遺物の出土地区と層位は観察表に記す。概ね、小片の遺物が多い中で、第６層のＸＸＶＦ15ａ地区からは７・８世紀の土師器（435～442）がかたまって出土しており、第６・５層からは土師器・須恵器などで良好な資料がみられる。ＸＸＶＦ20ｂ地区の斜面からはふいご口（450）を検出した。緑釉は小片で第５層にやや多く、白磁は第６層から、青磁は第５層から混じる。石溜攪乱層からは中世～近世の陶磁器を検出した。



第35図　包含層内出土遺物実測図



第36図　包含層内出土遺物実測図



第37図　包含層内出土遺物実測図

3）B地区出土土器

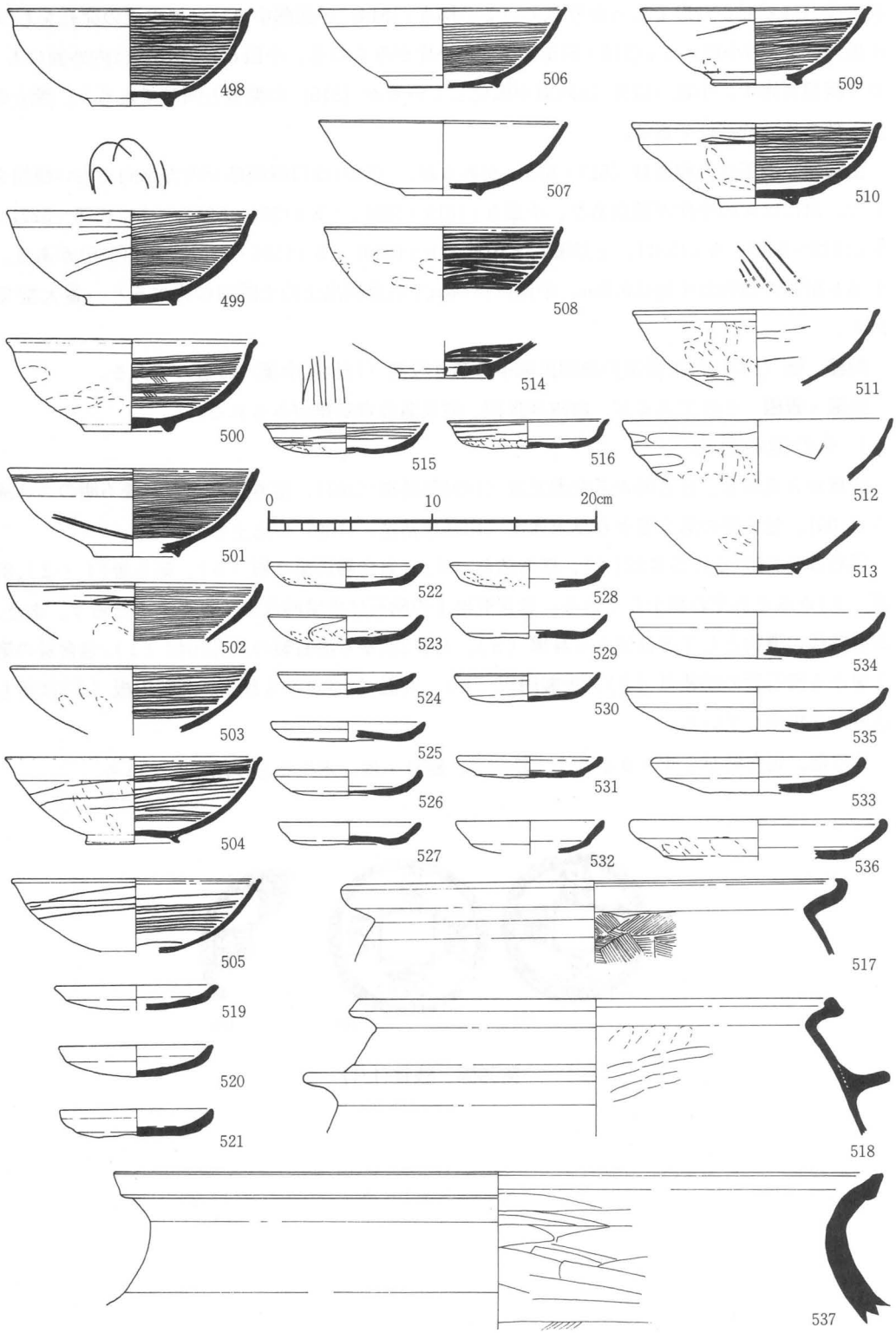
B地区の遺物は包含層から土師器、須恵器、陶磁器などが出土している。小片のためほとんど図化できないが、第3層から青磁（497）が出土している（15世紀）。

4）C地区出土土器

1）SK47

瓦器（椀・小皿）、土師器（羽釜・皿）、陶器（甕）、輸入磁器の白磁（碗）、青磁（碗）を検出した。遺物は全般に器表面の摩滅がひどく、瓦器の暗文や調整が不鮮明である。

瓦器　椀には本遺跡では一番古い形態のA$_1$（498～500）、B$_1$（510）がみられる。椀A$_1$・B$_1$



第38図　ＳＫ47出土遺物実測図

共に高台は断面が台形でしっかりしている。椀A$_1$(514) の底部中央には焼成後の穿孔をもつ。小皿にはa$_1$の小片、b$_1$(515・516)、b$_2$の小片がみられる。小皿b$_1$ (515) は内外面にもミガキ調整を施す。小皿 (516) は内面が風化しているが (515) の調整と同じであろう。椀との出土数の比は約⅕位である。

土師器　羽釜は大和型B (517・518) があるが、(517)は口縁端部が内方を向く古い様相をもつ。皿にはaの小片が数点あり、小皿b$_1$(519・520)、b$_2$(521～524)、b$_3$(525～527)、b$_4$(528～530)、b$_5$(531)、c(532) と中皿のb$_2$(533)、b$_3$(534・535)、b$_4$(536)がある。小皿b型式の口径の平均は9.2cm、中皿は15.4cmで各遺構出土の土師皿に比べると一番大型である。

陶器　甕 (537) は常滑窯の赤羽氏編年の第Ⅱ段階 (12世紀中葉) のものである。

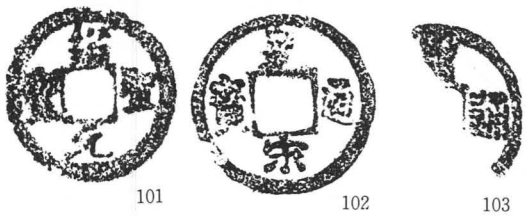
白磁・青磁　小片であるが、白磁碗Ⅳ類、龍泉窯の青磁碗がみられる。

5) その他の遺物

銭貨が3点ある。SE05から紀聖元宝 (1094年鋳造)(101)、落ち込みから判読不明の○○通○ (103)、包含層の第3層から皇宋通宝 (1039年鋳造) (102) が出土している。

砥石はSE02(3)、SK22(4)、落ち込み (5)、包含層の第2層 (6)、第5層(1・2)、斜面 (7)からそれぞれ出土している。包含層出土の砥石は古墳時代までさか上るだろう。また、古墳時代の遺物としてSD52から耳環 (3)、SB225から滑石製の双孔円板 (1)、包含層の第3層から滑石製の紡錘車 (2)、土製円板 (6)、丸玉 (4)がみられる。瓦製円板 (5)は落ち込みから出土している。

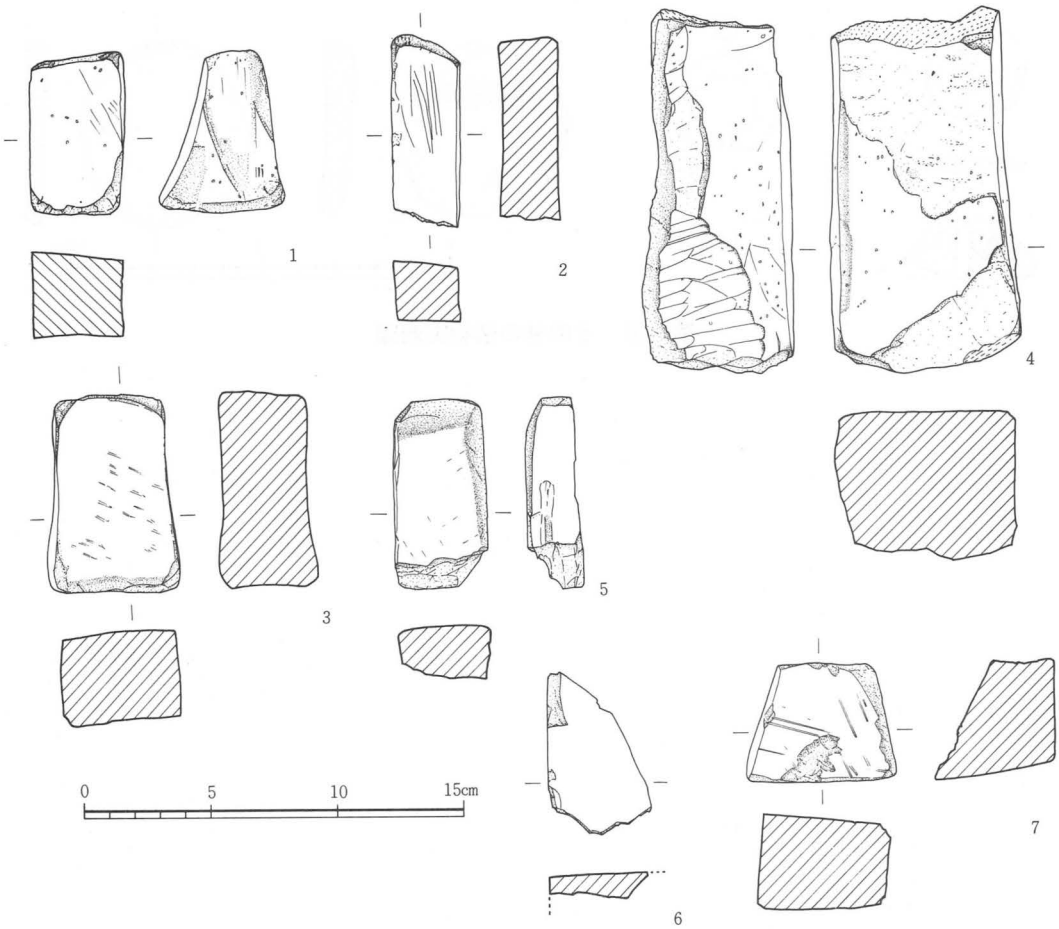
その他、包含層からサヌカイト片、鉄製品、獣骨・歯、木片などが出土している。



第39図　銭貨(1/1)

第５表　砥石観察表（第40図、図版七十）

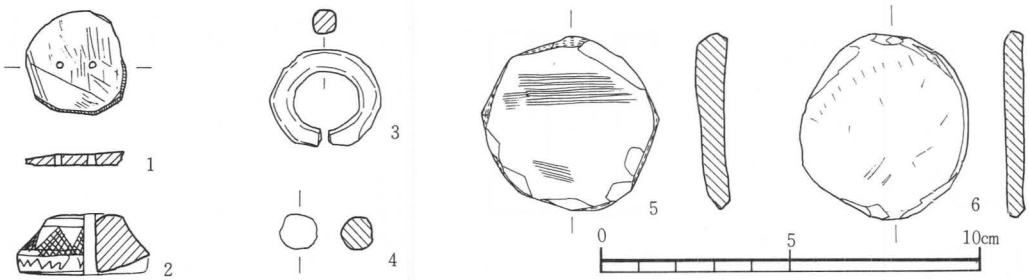
番号	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	材質	形態・使用痕	出土地
1	6.4	3.7	4.95（最大）		○四面共研砥面 ○擦過痕がみられる	ＸＸＶＦ５ａ 第５層
2	7.2	2.7	1.4	安山岩	○四面共研砥面 ○擦過痕がみられる	ＸＸＶＩＦ１ｔ 第５層
3	7.7	5.2（最大）	3.85（最大）		○四面共研砥面	ＳＥ02
4	14.0	7.4（最大）	6.0		○三面が研砥面 ○二面に削り痕が残る	ＳＫ22
5	7.5	3.7	2.2	泥岩	○三面が研砥面 ○裏面は割れ	ＳＫ30
6	3.9（現存値）	6.4	1.0	泥岩	○二面が研砥面 ○あとの二面は割れ	第２層
7	4.7	5.95	2.5×	砂岩	○上面をのぞく五面が研砥面 ○擦過痕がみられる	ＸＸＶＦ９ａ 斜面



第40図　砥石実測図

第6表　その他遺物観察表（第41図、図版七十）

種類	番号	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	材質	形態・使用痕	出土地
双孔円板	1	2.7×2.7 孔径1.5		0.35	○滑石	○周縁を面とり ○表裏面に研磨痕	SB225
紡錘車	2	上径 2.0 下径 3.4		高さ 1.6 孔径 0.6	○滑石	○截頭円錐形 ○鋸歯状、波状文の線刻	XXVIF10f 第3層
耳環	3	2.95×2.5		0.65×0.6	○銅製	○表面は錆	SD52
丸玉	4	1.0×0.9			○土製	○ほぼ球形をなす	第3層
円板	5	4.6×4.7		0.8	○瓦製	○周縁を研磨 ○表面に横方向のハケ目 ○微砂粒を含む	SK30
円板	6	5.8×4.5		0.5	○土製	○周縁を研磨し面とり ○表裏面に多数の擦過痕 ○砂粒を含む	XXVF14a 第6層



第41図　その他の遺物実測図

Ⅵ．ま　と　め

今回調査をおこなった神並遺跡は、新鉄道建設事業に伴う試掘調査によってはじめて発見された遺跡である。試掘調査の結果では、中世期に属する遺構・遺物が発見されており、それ以前の奈良、古墳、弥生、縄文時代の各遺物も少量発見されてはいたが、明確なものではなかった。そのため、発掘当初は中世期の遺構の調査を計画し実施したが、下層に縄文時代早期の遺構・遺物がかなりの範囲で認められることがわかり、とりあえず今年度は上層遺構の調査を実施し、下層の調査は次年度以降に実施することになった。今回の報告も、この上層遺構についてのみおこない、下層の遺構は第２次調査報告として刊行することにしている。

今回の調査で検出した遺構は、中世期の掘立柱建物、井戸及び土坑と古墳～奈良時代の土坑・溝・羽釜棺である。以下各時期の遺構・遺物について要点を列記してまとめにかえておきたい。

１）中世期の遺構について

今回の調査で柱穴と思われるピットは、総数で542ヵ所検出している。柱穴は、重複が著しく、内部から少量の土器片が出土しているのみで、時期を明確に決定することはできない。また柱穴内の埋土から３～４時期に区別できるが、遺構ごとのまとまりとして分けることはできなかった。ここでは、井戸・土坑内出土土器の時期にしたがって遺構ごとの時期決定をおこなった。柱穴は、調査地の北と南で多数検出できたが、これは中央部が整地のためかなり削平されているためと思われる。

掘立柱建物跡で規模を復原できたのは、北側の２棟であり、いずれも２間×３間、２間×４間程度の小規模なものである。また、調査地南側では柱穴が密集して検出されるところから、ここに少なくとも２～３棟の小規模な掘立柱建物を想定することができる。このことより、本調査区域では、少なくとも５～６棟の建物跡が考えられるが、井戸及び土坑の時期から１時期に存在した建物跡と断定することはできず、ここでは12世紀後半から14世紀初め頃までの集落跡と考えておきたい。

さて、掘立柱建物の配置を見ると、谷川（鬼虎川）に向かった地点、つまり谷川に近接した場所に小規模な柱穴で構成する建物が認められ、これらは建て替えによって柱穴も密集しているが、北側のより高い地点では、比較的規模の大きな柱穴で構成する掘立柱建物がある。主屋というべき建物群は、調査地の北側のより高い地点に広がっていたと思われる。

東大阪市域において掘立柱建物の検出例は多くない。また調査範囲の制約もあって集落全体を把握できた例もない。しかしながら、古墳時代以降の建物跡として瓜生堂遺跡[注18]や西岩田遺跡[注19]など平野部の遺跡で検出され、数棟単位の小規模な建物跡が検出されている。生駒山西麓部でも調査例は増加しつつある。最近では古墳時代、特に５世紀末から６世紀にかけての掘立柱建物が見つかり、この地域の開発がかなり古くからおこなわれていたことが知られている[注20]。しかしながら、これらの建物跡は西ノ辻・芝ヶ丘遺跡の例のように、倉庫と考えられる建物を含み、

２～３棟前後で構成されている。中世期の掘立柱建物は、最近西ノ辻・鬼虎川遺跡の上層で確認されているが、いずれも本遺跡の場合と同じく小規模な柱穴が多数検出されており、重複等が著しく１時期の集落単位を限定するところまではいたっていない。[注21] しかしながら、神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡で多数の柱穴群が認められることから、本遺跡周辺の扇状地上にはかなりの数の建物が存在していたことが予想され、中世村落の様相がわずかながらも想定できつつある。

２）羽釜棺について

今回の調査で２基の羽釜棺を検出した。上部を中世以降の整地によって削平されており、良好な遺存状況ではなかったものの、２基とも羽釜と他の土器をセットにし、小規模な墓壙内に横位に据えられていた。羽釜棺の時期は、羽釜等の時期から８世紀前後と考えられる。羽釜棺としては、東大阪市皿池遺跡[注22]・鬼虎川遺跡上層[注23]などがあり、周辺では柏原市太平寺古墳群[注24]などに類例がある。いずれの場合も傾斜面につくられており、一般的に用いられた墓制であったことがわかる。ただ皿池遺跡例では石組内に、太平寺古墳群では２個体の羽釜を合口にしており、構成はそれぞれ違っている。しかしながら使用された羽釜は、容器として日常使用していたものを棺に転用しており、器表面には煤などが付着している。羽釜棺の時期は、８世紀前後と考えられ、近接する法通寺の創建年代と一致する。このことから、法通寺に関連する墓制とも考えられ、今後周辺の調査例の増加によって解明しなければならない。

３）出土遺物について

今回の調査で出土した遺物には、中世期の瓦器・土師器皿が大半を占め、その他陶磁器類などの他、奈良・古墳・弥生・縄文時代の土器類が出土している。点数別では、瓦器9,249点、土師器57,288点、須恵器1,150点、輸入陶磁器301点、日本製陶磁器681点になる。この中で資料的にまとまって出土しているのは、井戸及び土坑内より出土している遺物である。特に瓦器椀は、遺構ごとに若干の時期差はあるものの、一括性の高い資料である。ここでは瓦器椀を取り上げ、各遺構の時期決定をおこない瓦器椀の特色を考えてみたい。

まず瓦器椀の型式は、出土遺物の項で記述しているように１～６に分類をおこない、それをＡ型（大和型）とＢ型（和泉型）に分類をおこなっている。基本的には井戸・土坑から出土した瓦器椀を基準にし、それに他の遺構内出土瓦器椀を補う形で作成している。

この中でＳＫ22出土の瓦器椀は、比較的まとまって出土しており遺構の性格上からも一時期に一括投棄されたものと想像される。ＳＫ22内からは$A_{2\text{-}2}$・A_3型が出土しているが、A_3型が圧倒的に多い。A_3型瓦器椀の特徴は、器高が低く外面にわずかにミガキ調整が認められるものの、体部内面のミガキ調整は粗く断面三角形の低い高台がつくというものである。これを大和地方の編年と対比すれば、川越編年第Ⅲ段階Ｂ型式とした瓦器椀と非常に類似する。[注25] 同じくＳＫ22内出土のＢ型瓦器椀は、$B_{2\text{-}2}$・B_3型が出土しているが、B_3型が圧倒的に多く出土している。B_3型瓦器椀の特徴は、器高が低く、外面のミガキ調整がなくなり、体部内面のミガキに太く粗くなる。見込みの暗文は、平行線になっている。これを和泉地方の編年と対比すれば、尾上編年のⅢ－１期とした瓦器椀と類似している。[注26]

さて、ＳＫ22出土の瓦器椀を基準として他の井戸内出土の瓦器椀との対比をおこなってみることにする。ＳＥ02内からA_{2-1}・A_{2-2}型とB_{2-1}・B_{2-2}型瓦器椀が出土しているが、A_{2-1}・B_{2-1}型が圧倒的に多く、A_{2-2}・B_{2-2}型は少量である。このことから、ＳＥ02はＳＫ22と一部重複する時期はあるものの、ＳＫ22に先行すると考えられる。ＳＥ05内からは、A_1・A_{2-2}・A_3・A_4・A_5型とB_1・B_2・B_3・B_4・B_5型が出土している。瓦器椀の型式から見るとかなりの時間幅が考えられるが、出土土器の大半はB_3・B_4型が占めている。Ａ型はA_3・A_4型が多く出土しているものの、比率的にはＢ型が多い。このことから、ＳＥ05は時間幅を考慮しなければならないが、ＳＫ22と重複しながら、ＳＫ22よりも遅くまで続くことがわかり、後出の予想がうかがわれる。

以上のように考えるならば、ＳＥ02出土の瓦器椀A_{2-1}型は、川越編年第Ⅲ段階Ａ型式にB_{2-1}型は尾上編年Ⅱ－３期に比定することができる。またＳＥ05出土のB_4型は、尾上編年Ⅲ－３期に該当し、A_4型は機械的に並べるならば川越編年の第Ⅲ段階Ｃ型式に比定できる。以上土坑・井戸内出土瓦器椀のおおまかな年代観を大和・和泉地方との比較によって考えられたので、これを基本として瓦器椀から見た各遺構ごとの年代や性格を考えてみよう。

さて第７表は、各遺構ごとに出土している瓦器椀を型式ごとに並べ大和・和泉地方との対応

第７表　遺構内出土瓦器椀型式分類表

	12C中	13C	13C中		14C	14C中
瓦器椀分類	1	2－1	2－2	3	4	5
川越編年	Ⅱ－A	Ⅲ－A	Ⅲ－B		Ⅲ－C	Ⅲ－D
尾上編年	Ⅱ－1	Ⅱ－3	Ⅲ－1	Ⅲ－2	Ⅲ－3	
ＳＫ47	■					
ＳＥ01			■	■	■	
ＳＥ02		■	■	—		
ＳＥ03		■	■	■		
ＳＥ04				—	—	
ＳＥ05	—		—	■	■	■
ＳＥ06					—	—
ＳＥ07		┈	┈			
ＳＫ22			—	■	■	

関係からおおよその時期を決定したものである。井戸・土坑という遺構の性格上、出土遺物が即遺構の年代とはなり得ないけれども、おおよその目安にはなる。

この表から、ＳＫ47は今回の調査の中心地からもはずれており、他の遺構の性格とも違っているので直接は結びつかない。しかしながら今回の瓦器椀の１時期古い段階の様相をよくあらわしている。ＳＥ02・03は、A_{2-1}・B_{2-1}の瓦器椀が多く、A_{2-2}・B_{2-2}の時期まで続き、A_3・B_3の時期に廃絶したことがわかる。ＳＥ01は、A_{2-2}・B_{2-2}の瓦器椀を含みA_3・B_3の時期まで続くことがわかる。ＳＥ05・ＳＫ22は、A_{2-2}・B_{2-2}の瓦器椀も認められるが、出土量は圧倒的にA_3・B_3の時期のものが多い。ＳＥ06・ＳＥ05は、A_4の時期まで続いて終る。これらの遺構内出土の瓦器を他地域編年と対応させて考えると三時期の画期が認められる。Ⅰ期はＳＥ02・03の開始の12世紀後半、Ⅱ期はＳＥ01・05・ＳＫ22の開始の13世紀前半、Ⅲ期はＳＥ05・ＳＫ22で瓦器椀の量が多くなり、ＳＥ06が開始される13世紀中頃～後半の時期であり、14世紀の初め頃には大半の遺構が埋没していることになる。

第８表　遺構内出土瓦器椀個体数

瓦器椀型式 遺構番号	Ａ　型(大和型)	Ｂ　型(和泉型)	計
ＳＥ01	150点(8.04個体)	54点(1.83個体)	204点(9.87個体)
ＳＥ02	433　(35.88)	106	539　(43.51)
ＳＥ03	72　(3.98)	32	104　(4.75)
ＳＥ05	540　(40.13)	243	783　(63.81)
ＳＥ06	5	2	7
ＳＫ22	107　(12.99)	34	141　(18.62)
合　計	1,307点(101.02個体)	471(39.54個体)	1,778点(140.56個体)

次に第８表を見ていただきたい。これは、遺構内で比較的に瓦器椀の出土量の多い土坑・井戸をぬき出し、その中でＡ型（Ａ′型も含む）、Ｂ型（Ｂ′型も含む）の口縁部破片の点数を数えたものである。各遺構ごとでＡ型の瓦器椀口縁部径の平均値・Ｂ型瓦器椀口縁部径の平均値をそれぞれ求め、完形椀１個の口縁円周を１として、それぞれの破片を加えておおよその個体数を求めたものがカッコ内の数字である。これをもとにして、遺構ごとにＢ型の全個体数１とした場合のＡ型の比率を求めるとＳＥ01でＡ型：Ｂ型＝4.4：1、ＳＥ02は4.7：1、ＳＥ03は5.2：1ＳＥ05は1.7：1、ＳＫ22は2.3：1の数字が得られた。これを先の遺構の年代観と照合すると、Ⅰ期のＳＥ02・03ではＢ型１に対し、4.7から5.2の比率で約５倍近い数値を示し、Ⅱ期のＳＥ01でも約４倍の比率を示している。Ⅲ期のＳＫ22・ＳＥ05では2.3と1.7倍とＢ型の比率が高くなっていることがわかる。特にＳＥ05の瓦器椀の年代幅が比較的長いためにこのような数字になっているが、遺構内でさらに細分できればB_3・B_4の時期では、明らかにＢ型の方が多くなっていると思われる。

このように神並遺跡においては、瓦器椀B_3の時期、13世紀中頃～後半にかけてＢ型の比率が

増加し、B_4・B_5の時期、14世紀頃には逆転する傾向が認められる。A型の瓦器椀を広義の大和型、B型は和泉型と考え、それがそのまま生産地を示すものと考えるならば、13世紀中頃を境にして大和地方からの瓦器椀の搬入が和泉地方からの搬入に入れ替ると考えられる。このことは、今後他の遺跡、特に平野部における状況なども考慮して考えていかなければならない課題であろう。

当時の飲食具として瓦器椀と共に、土師器の皿が多量に出土している。小皿は燈明皿としての用途もあるが、その痕跡として黒色を呈すものは少ない。瓦器椀と土師器の皿の出土点数をみると、13世紀中頃までは瓦器椀に比べると土師器皿の方が多く、SE02では約2倍位であるが13世紀後半には瓦器椀の方がやや多くなる。次に、瓦器椀で編年を試みた主な遺構から出土した土師器皿についてその口径の平均値をみていくと表9-①になる。また、京都市白河北殿北辺遺跡[注27]と高槻市上牧遺跡[注28]の土師器皿の大きさを時期別に表すと表9-②・③になる。この表から、それぞれ同時期の皿の大きさはほぼ同じ様相を示すことがわかる。土師器皿の供給地が定かでないが、神並遺跡でも各遺構内で大きさにバラつきがあるものの、13世紀後半には小型のものが増えているといえよう。

一般に、14世紀以降になると土師器皿はヘソ皿の形態のものがつくられ、15世紀には瓦器椀にかわって木製の椀が使われるなど、飲食具における形態・器種及びそのセット関係などの変化がみられる。神並遺跡でもそのきざしが13世紀後半から14世紀前半にかけてみられるようだ。しかし、今まで述べてきたように、遺構からは13世紀代を中心にした遺物が多く出土しており、14世紀以降の資料は少ない。土師器皿においては、SD58に次のヘソ皿に先行するものが若干みられるが、瓦器椀の終末期ははっきりさせることができない。今後、近接の遺跡で、神並遺跡と同時期及びそれに続く新しい時期の資料を検討し、飲食具の変遷を明らかにしていく必要がある。

第9表　各時期別土師器皿の口径表

① 神並遺跡				② 白河北殿北辺遺跡			③ 上枚遺跡		
	遺構	中・大皿	小皿		大皿	小皿		大皿	小皿
12世紀				12世紀			11世紀代		
								15～16 cm	9.5～10 cm
	SK47	14.7cm	9.0cm				12世紀代		
				中頃				14.5～15 cm	9～9.5 cm
13世紀	SE02	13.6cm	8.6cm	13世紀	14cm前後	9cm前後	13世紀代		
	SK22	13.4cm	8.3cm	中頃末	12cm前後	8cm前後		13.5～14 cm	8～8.5 cm
14世紀	SE05	12.0cm	8.15cm	14世紀			14世紀代		
	SD58	10.7cm	7.9cm		11～12cm	7～8cm		12cm以下	8cm以下

(注) それぞれの報告書の表現方法をそのまま使用して1つの表にまとめている。

また、SE05から宋銭の紀聖元宝（1094年鋳造）が出土している。13世紀に入って輸入銭により、神並遺跡でも貨幣経済の発展を促したことは、大和や和泉などの瓦器をはじめ、東播系

の須恵器、常滑焼の大型の壺・甕の搬入、また輸入陶磁器などの流通があったことから窺うことができる。飲食具と共に、調理具や貯蔵具などについても、14世紀以降の流通・変遷を明らかにしていきたい。

4）神並遺跡の性格と範囲

さて、遺構・遺物の検討から今回検出した掘立柱建物や井戸などは、12世紀後半頃から14世紀前半頃まで続いた集落跡であることが明らかとなった。しかしながら、今回調査できなかったけれども、下層で縄文時代の遺構が認められることから、縄文時代から室町時代頃まで続く複合遺跡であることが明らかとなった。中世以前の遺構には、調査地の北側で古墳時代の遺構が検出されており、台地の北側にさらに広がっていると思われる。また、隣接している法通寺の基壇下層から5世紀末頃の井戸が検出されている他、最近の調査で遺跡の西方で建物跡・溝などの遺構が検出されている。[注29] このように各時期を総合的にとらえるならば、遺跡の範囲は、西は西ノ辻遺跡と重複し、東は正興寺山の付近まで、北では法通寺跡まで認められることになり、広範囲にまたがることになる。ただ中世村落に限定すれば、今回の調査地付近が中心で、南北にもう少し広がる程度と考えられ、これが一単位の村落規模ではなかったかと思われる。

今回の集落は、中世村落と考えられるが、文献資料の上から1ヵ所だけ神並の名が見える資料がある。それは、石清水八幡宮が領有していた庭園の中に「神並庄」の名を見るものである。[注30] 保元三年（1158年）12月3日の官宣旨で、石清水八幡宮（宮寺）の庄園の領家・預所、下司、公文などが神領を掠めとるのを停止する記載がある。この中で宮寺領として河内国では今富庄　古市庄　若江庄　掃部別宮　神並庄　本御座園……など15所があげられている。神並庄の名は以後の文献には全くあらわれないので、庄園の規模や存続期間などは全く不明であるが、字名や時期がほぼ一致するなどの共通点から、遺跡を含めた周辺が庄園としてこの時期に開発されていたことがうかがわれる。今回の建物跡が、その集落であった可能性も考えられる。

〈備　考〉

※昭和57年2月11日に実施した現地説明会で配布した資料には、仮の遺構番号を付しているが、今回報告書作成にあたって正式な遺構番号に変更している。現説資料の土坑1はＳＫ22、土坑2はＳＥ02、土坑3はＳＥ05、土坑4はＳＤ54、井戸1はＳＥ01、井戸2はＳＥ03、井戸3はＳＥ07にそれぞれ変更した。

※Ａ地区の古墳時代～奈良時代の遺構面で検出したＳＤ71内からは、多量の製塩土器が出土しているが、この資料については別に発表済であるため、今回の報告書からは除外をしている。詳しくはそれを参照されたい。

才原金弘「東大阪市内出土の製塩土器」『財団法人東大阪市文化財協会紀要』Ⅰ
財団法人東大阪市文化財協会　1985年

文　献

注１　下村晴文、才原金弘、松岡良憲、山本芳彦『鬼虎川遺跡』一東大阪都市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う発掘調査概要（その２）一国道308号線関係遺跡調査会　1981年
下村晴文、才原金弘、松岡良憲、山本芳彦『鬼虎川遺跡』一東大阪都市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う第15次発掘調査概要（その２－２）一財団法人東大阪市文化財協会　1983年

注２　橋本久和「中世土器の地域色と流通一淀川流域を中心として一」(『考古学研究』第26巻４号 1980年)
橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』
(『高槻市文化財調査報告書』第13冊　高槻市教育委員会　1980年

注３　同上

注４　毛利光用子、金原正明他『布留遺跡、布留（西小路）地区　中世の遺構と出土瓦器』
1976・９～1977・３調査
(『考古学調査研究中間報告』６　埋蔵文化財天理教調査団　1982年)

注５　菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」
(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　1982・12

注６　宇野隆夫『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ一白河北殿北辺の調査一』京都大学埋蔵文化財研究センター　1981年

注７　注５と同文献

注８　大村敬通、水口富夫『魚住古窯跡群』(兵庫県文化財調査報告書第19冊)
財団法人兵庫県文化協会　1983・３

注９　赤羽一郎「常滑」一知多半島古窯址群一（『世界陶磁全集』３　日本中世　小学館　1977年)

注10　間壁忠彦「備前」　注９同書

注11　横田覧次郎・森田　勉「太宰府出土の輸入陶磁器について一型式分類と編年を中心として」
(『九州歴史資料館研究論集４』)　1978年

注12　宇治田和生『楠葉型瓦器に関する二、三の問題』一枚方市内出土の瓦器を中心に一
(『研究紀要第１集』財団法人枚方市文化財研究調査会1984年)

注13　鈴木秀典他『大阪平野区長原遺跡発掘調査報告書』Ⅱ（大阪市高速電気軌道等２号線延長工事に伴う発掘調査報告書』　1982・３　財団法人大阪市文化財協会　1982年

注14　橋本久和氏の御教示による

注15　注12と同文献

注16　瓦器椀・小皿には炭素吸着の皆無のものがあるが、このＳＫ22では割合多く見られた。これは二度焼成するという説を裏づける資料になるかもしれないが、はっきりした確証はない。

注17　上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」(『貿易陶磁研究』№２　日本陶磁研究会　1982・８

注18　芋本隆裕『瓜生堂上層遺跡・四池遺跡』東大阪市教育委員会　1979年

注19　中西靖人・村上年生『西岩田』（近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書）財団法人大阪文化財センター1983年

注20　財団法人東大阪市文化財協会『甦る河内の歴史』一国道308号線関係遺跡発掘調査中間報告展一1984年
下村晴文『芝ヶ丘遺跡発掘調査概報』一市立石切中学校舎増築工事に伴う第４次調査一財団法人東大阪市文化財協会　1985年

注21　注20と同文献

注22　注18と同文献

注23　下村晴文「鬼虎川遺跡出土の羽釜新資料」一第17次調査一『東大阪市文化財協会ニュース』
Vol.１、№１　1985年

注24　竹下　賢、北野　重『大平寺古墳群』柏原市教育委員会　1983年

注25　川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念集）1983年

注26　尾上　実「南河内の瓦器椀」（『古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集）1983年

注27　注６と同文献

注28　注２と同文献

注29　下村晴文『法通寺』一石切剣箭神社穂積殿建設工事に伴う調査一財団法人東大阪市文化財協会 1985年

注30　枚岡市史『中世の枚岡』第一巻1967年

観　察　表

凡　例

器種	器形	番号	法　量　(cm)	備　考
瓦器	椀 A_{2-1} ↓ 型式番号	○ ↓ 土器番号	○14.2⟶口径 ○ 5.2⟶器高 ○ 5.6⟶底径 ○36.6(器高指数)※ ○70%残⟶残存部の割合 (復)⟶復元値 (現)⟶現存値 (平)⟶平均値 ※ 径高指数＝器高÷口径×100	○精緻、黒色砂粒⟶胎土 ---------- ○暗灰色N/3⟶色調※ ○----------⟶その他 ※ 色調は『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所　色標監修による。

(挿図・図版は共通の番号)

A 地 区

墓　　壙 (第14図, 図版七十一)

器種	器形	番号	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備　考
土師器	片口鉢	1	○31.2 ○12.0(推)	○体部は丸底から上部で屈曲して、ほぼまっすぐに立つ。 ○口縁部は斜上方に開き、端部は面をもつ。 ○幅6.3cmの片口をもつ。	○口縁部内面をハケ目調整の後、体部上位にかけて内外面を横ナデ。 ○体部外面は風化が著しいがハケ目調整が残る。 ○体部外面はナデ。	○精緻、角閃石、長石を多量に含む。石英、くさり礫、雲母を少量含む。 ○赤褐色5YR⅚。 ○羽釜棺1の蓋。
	土釜	2	○25.1 ○14.5(現)	○底部を欠く。 ○体部はわずかに内傾しながら立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。 ○鍔は水平につき、端部はわずかに面をなす。	○口縁部から鍔部にかけて内外面共に横ナデ。 ○体部内外面は風化のため調整は不明。	○粗、2～3㎜の角閃石、長石を多く含む。石英、くさり礫を少し含む。 ○褐色2.5YR⅚。 ○羽釜棺1。
	皿	3	○22.3 ○21.8	○丸底気味の体部が、口縁部までつづく。 ○口縁部は内方に肥厚し、上端部は面をもつ。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面はヘラ削り調整の後、ヘラ磨きで仕上げる。 ○内面は横ナデの後、暗文を施す。 ○底部外面はヘラ磨き。	○精緻、石英、雲母の微砂粒を少し含む。 ○明赤褐色2.5YR⅝。 ○羽釜棺2の蓋。
	土釜	4	○25.2 ○36.8	○丸底から長胴のまっすぐ立ち上がる体部に口縁部は外反する。 ○鍔は水平につき、端部は丸く納める。	○口縁部はハケ目調整の後にナデ仕上げ。 ○鍔部はハケ目で調整の後に貼り付け横ナデ。 ○体部外面は底部から口縁部に向ってハケ目調整。 ○体部内面は指頭圧痕を残すが、その上を底部までナデ。	○やや粗、角閃石、雲母を多量に含む。 ○長石、石英の微砂粒を含む。 ○明赤褐色5YR⅚。 ○羽釜棺2。

ＳＥ01(第19図，図版三十一)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A_{2-2}	5	○15.0(復) ○ 3.3 ○不明 ○10%(残)	○底部を欠く。 ○ほぼまっすぐ外上方に伸びる体部から少し内弯して口縁部につづく。 ○口縁端部は内傾して沈線(幅は1.5㎜)。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え、口縁部から体部外位まで粗いミガキ。 ○体部内面はほぼ密なミガキ。	○精緻。 ○灰色N4/。 ○上層出土。
		6	○15.0(復) ○ 3.8(現) ○不明 ○25%(残)	○底部を欠く。 ○形態は(5)に似る。口縁部は外弯気味に開く。 ○口縁端部は内傾して沈線(幅は1.5㎜)。	○口縁部内外面、体部内面上位を横ナデ。 ○体部外面を指押え、口縁部から体部上位まで粗いミガキ（1㎜)。 ○内面をナデの上に粗いミガキ。	○精緻、黒色微砂粒、くさり礫を極少量含む。 ○灰色N5/～灰白色。 ○外面に重ね焼き痕。 ○下層出土。
		7	○15.2(復) ○ 3.8(現) ○不明 ○20%(残)	○底部を欠く。 ○内弯しながら伸びる体部から、口縁部が屈曲して外上方に開く。 ○口縁端部は少し内傾して沈線(1.5㎜)。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え、口縁部から体部上位まで粗いミガキ。 ○内面をナデの上にやや粗いミガキ（1㎜)。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○暗灰色N5/。 ○下層出土。
		8	○15.0(復) ○ 2.9(現) ○不明 ○小片	○底部を欠く。 ○ほんのわずかに内弯しながら体部から口縁部へ伸びる。 ○口縁端部は内傾して沈線（幅は2㎜)	○口縁部内外面を横ナデ（?)。 ○体部外面を乱方向のミガキ。 ○体部内面を細い幅のミガキ（0.5㎜)。	○精緻、黒色微砂粒、くさり礫を含む。 ○暗灰色N3/。 ○上層出土。
		9	○15.0(復) ○ 3.7(現) ○不明 ○小片	○底部を欠く。 ○ほぼまっすぐ外上方へ伸びる体部から少し内弯して口縁部につぐく。 ○口縁端部は丸く沈線をもつ（幅は1㎜)。	○口縁部内外面を横ナデ。外面に粗いミガキ。 ○体部外面の調整は不明。 ○体部円面はナデの後に粗いミガキ。	○精緻。 ○灰色N4/～灰白色。 ○上層出土。
	椀 A_2'	10	○14.0(復) ○ 5.0(現) ○不明 ○45%(残)	○底部を欠く。 ○ほぼまっすぐ外上方に伸びる体部から少し内弯して口縁部につづく。 ○口縁端部は浅い沈線。 （幅は1㎜)	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面に掌紋。口縁部下位～体部下位まで粗いミガキ(0.5㎜)。 ○体部内面ナデの上にやや細かいミガキ（0.5㎜)。 ○高台のナデつけの跡が少し残る。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰色N5/。
	椀 A_3	11	○13.9(復) ○ 4.0(現) ○不明 ○30%(残)	○底部を欠く。 ○内弯して立ち上がる体部から口縁部が少し屈曲して外上方に開く。 ○口縁端部は内傾して沈線(幅は1.5㎜)。	○口縁部内外面、体部内面上位を横ナデ。口縁部外面をミガキ(1.5㎜)。 ○体部外面に掌紋がみられる。 ○体部内面をナデの上に粗いミガキ。	○やや粗、白・黒色微砂粒と粗い白色砂粒を含む。 ○灰色N5/。 ○上層出土。
		12	○13.9(復) ○ 3.6(現) ○不明 ○40%(残)	○底部を欠く。 ○少し外弯気味に外上方に伸びる体部から強く屈曲して、口縁部が立ち上がる。口縁部はやや肉厚になる。 ○口縁端部はゆるく内傾して沈線（幅は1.5㎜)。	○口縁部内外面、体部内面上位を横ナデ、口縁部外面をミガキ(1㎜)。 ○体部外面を指押え。 ○内面をナデの上に粗いミガキ（1㎜)。	○精緻、白・黒色微砂粒を少量含む。 ○灰色N4/。 ○下層出土。
	椀 B_{2-2}	13	○14.4 ○ 4.3 ○不明 ○40%(残)	○底部を欠く。 ○ほぼまっすぐ外上方に伸びる体部から少し内弯して口縁部につづく。 ○口縁端部はそのまま丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○体部内面をナデの上に粗いミガキ（2㎜)。 ○体部下位に見込みの平行線(2㎜)の暗文がかかる。	○精緻、黒色微砂粒と少量のくさり礫を含む。 ○灰色N4/。
	椀 A_2	14	○不明 ○16.5(現) ○ 5.5 ○底部のみ	○口縁～体部を欠く。 ○丸底。底部は高台よりとび出る。 ○高台は断面三角形～台形。	○体部下位にミガキがみられる。 ○見込みの乱方向のナデの上に同心円文（1.5㎜）の暗文。 ○高台はナデつけ。 ○底部外面をナデ。	○精緻、白・黒色微砂粒とくさり礫を少量含む。 ○淡黄色2.5Y8/3。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	小皿 c_3	15	○ 8.4(復) ○ 1.5 ○40%(残)	○丸底からゆるく内弯して口縁部が外上方に伸びる。 ○口縁端部は少し尖り気味。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○見込みはナデの上に粗いジグザグ状の平行線（2㎜）の暗文。 ○底部外面を指押え。	○精緻、黒色微砂粒を極少量含む。 ○灰白色N6/。 ○炭素の吸着不揃い。
土師器	羽釜B	16	○20.4(復) ○ 7.8(現) ○不明 ○口縁部小片 鍔部30%(残)	○底部を欠く。 ○内傾する体部から口縁部がゆるやかに外反する。 ○口縁端部は内方に巻き込み、貼り付け状。 ○鍔はやや下方を向き、断面方形。	○口縁部内外面と鍔と周辺部を横ナデ。 ○体部内外面をナデ。	○精緻、黒色微砂粒と極少量の白色微砂粒、くさり礫を含む。 ○にぶい橙色7.5YR7/3。 ○外面に煤付着。 ○下層出土。
	羽釜C	17	○30.4(復) ○12.8(現) ○不明 ○口縁部のみ (残)	○内傾する体部からそのまま口縁部まで徐々に肉厚になりながらつづく。 ○口縁端部は内外に少し肥厚し、上端にやや丸い面をつくる。	○口縁部内外面と鍔と周辺部を横ナデ。 ○体部内面はハケ目の上をナデ。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○浅黄色2.5Y8/3。 ○鍔部の下に煤が多く残る。
須恵器	捏鉢A	18	○34.4(復) ○ 5.4(現) ○不明 ○口縁部10% (残)	○直線的に外上方に開く体部からそのまま口縁部までつづく。 ○口縁部は下端部が少し拡張し、外端面をつくる。断面は三角形。	○口縁部内外面、体部外面を横ナデ。 ○体部内面を横ナデの上に乱方向のナデ。	○粗、白色の微砂粒を多量に、粗い砂粒を少量含む。 ○青灰色5PB5/1。 ○下層出土。
土師器	小皿 b_1	19	○ 7.9(復) ○ 1.65 ○※	○丸底気味の底部から屈曲して口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面から見込みにかけて、（なかば以上入るものもある）横ナデ。(右廻りでナデを抜くものが多い。) ○見込みの中央部はナデ。 ○底部外面はナデ、指押えなど、(28) はヘラ削り状の痕跡を残す。	○精緻、角閃石を中心に、白色砂粒、くさり礫など微砂粒を含む。 ○なかには、白色の粗い砂粒を少量含むものもある。 ※ ○23・24・27はほぼ完形。 ○22・31は半分以上。 ○その他は20～40%残。
	小皿 b_2	20～24	○ 8.45(平) ○ 1.3(平)	○平底から口縁部までなだらかに内弯しながらつづく。 ○口縁端部は丸く納める。		
	小皿 b_4	25～30	○ 8.25(平) ○ 1.3(平)	○平底から屈曲して口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く納めるもの、やや尖り気味のもの、つまみ上げるものがある。		
	中皿 b_2	31	○13.0 ○ 2.2	○小皿の（b_2）形態と同じ。		
	中皿 b_3	32	○10.8(復) ○ 2.0	○中央部が上げ底気味の底部から、なだらかに内弯しながら口縁部につづく。 ○口縁端部は丸く納める。		

ＳＥ02（第20～22図，図版三十二～四十）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀	33	○14.2 ○ 5.2 ○ 5.6 ○36.6 （径高指数） ○70%（残）	○丸底から体部は内弯して外上方に立上がり、口縁部は少し屈曲して外弯気味に開く。（厚みは体部＜底部） ○口縁端部はゆるく内傾して沈線をもつ（幅は２㎜）。 ○高台は断面三角形で、底部の周縁に余分の粘土がドーナツ状を呈す。また、高台は底部よりとび出る。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面に掌紋。口縁部から体部中位まで粗いミガキ（幅1～1.5㎜）。 ○内面はほぼ密なミガキ（幅１～1.5㎜、圏線40条前後）。 ○底部外面にひび割れを残す。 ○見込みに同心円文（幅１～1.5㎜三重）の暗文。 ○高台はナデつけ	○精緻、黒色微砂粒を極少量含む。 ○暗灰色N3/。 ○外面の80%位は炭素の吸着がない。
		34	○14.6 ○ 5.2 ○ 4.4 ○35.6 （径高指数） ○60%（残）	○少し丸底。形態は(33)と同じ。口縁端部は厚い。内傾して太目の沈線（２㎜）。 （厚みは体部＝底部） ○高台は断面三角形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面に指押え。口縁部から体部中位まで粗いミガキ（１㎜）。 ○内面はナデの上にミガキ（0.5～1.5㎜28条）。 ○見込みに同心円文（0.5～1.5㎜１重）。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○外面本部に接合痕。 ○外面こ重ね焼き痕。
		35	○14.4 ○ 5.0 ○ 5.0 ○34.7 （径高指数） ○70%（残）	○平底。形態は(33)と同じ。 （厚みは体部＜底部） （沈線の幅は1.5㎜） ○高台は断面三角形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○口縁部外面に粗いミガキ（１㎜）。 ○体部外面に指押え。 ○内面は密なミガキ（0.5～２㎜40条） ○見込みに同心円文（0.5～１㎜２重以上）の暗文。 ○高台は底部に幅広くナデつけ。	○精緻、黒色の微砂粒を含む。 ○暗灰色N3/～灰白色N8/。
		36	○14.2 ○ 4.8 ○ 5.5 ○33.8 （径高指数） ○90%（残）	○平底。形態は(33)と同じ。 （厚みは体部≦底） （沈線の幅は1.5㎜） ○高台は断面三角形だがやや薄い。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面に指押え。口縁部から体部中位まで粗いミガキ（0.5㎜）。 ○内面はナデの上にほぼ密なミガキ（１㎜30条）。 ○見込みに連結輪状文（0.5㎜、輪の数は３～４個）の暗文。 ○高台は底部に幅広くナデつけ。	○精緻、黒色の微砂粒を少量含む。 ○灰色N5/。 ○内面コ縁部、外面底部こ重ね焼き痕。
		37	○14.6（復） ○ 5.0 ○ 5.0 ○32.0 （径高指数） ○35%（残）	○平底。形態は(33)と同じ。沈線は浅い （厚みは体部≧底部） （沈線の幅は２㎜） ○高台は断面三角形～台形で、大きくて厚く、底部周縁に余分の粘土がドーナツ状を呈す。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面に指押えと掌紋痕。口縁部から体部中位までミガキ（0.5～1.5㎜）。 ○内面はほぼ密にミガキ（0.5～２㎜、30条） ○見込みに同心円文（２㎜、３重以上）の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、白・黒色微砂粒、くさり礫少量含む。 ○暗灰色N3/。 ○外面コ縁部に重ね焼き痕。
	A_{2-1}	38	○15.8（復） ○ 3.9（現） ○15%（残）	○底部を欠く。形態は(33)と同じ。口縁端部はやや厚くつくる。 （沈線の幅は２㎜（38） 1.5㎜（39））	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面はナデの上に、口縁部から下位までミガキ（0.5～１㎜）。 ○内面はほぼ密なミガキ（0.5～1㎜）。	○精緻、黒色微砂粒を少量含む。 ○黒色N3/。 灰色N5/。
		39	○14.8（復） ○ 3.8（現） ○35%（残）			
		40	○14.0（復） ○ 4.3 ○不明 ○20%（残）	○底部を欠く。形態は(33)と同じ。 （沈線の幅は1.5㎜	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面はナデの上に口縁部から体部中位まで粗いミガキ（0.5～1.5㎜）。 ○内面はほぼ密なミガキ（0.5～２㎜、40条）。 ○見込みは板状工具による一定方向のナデの上を同心円文（２㎜）の暗文。	○精緻、黒色微砂粒を少量含む。 ○暗灰色～灰オリーブ色7.5Y5/2。 ○高台は焼成時に剥離か。
		41	14.2（復） ○ 5.1 ○ 4.6 ○35.9 （径高指数） ○25%（残）	○少し丸底。形態は(33)と同じ。 （厚みは体部＜底部） （沈線の幅は1.5㎜） ○高台は断面三角形で、(81)と同じく底部周縁にドーナツ状のものを残す。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面に指押え。口縁部から体部中位まで粗いミガキ（0.5㎜）。 ○内面はほぼ密にミガキ（１～２㎜、30条）。 ○見込みに同心円文（1.5㎜、３重以上）の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒を少量含む。 ○灰色N5/。 ○内面の一部（一破片に油膜か）が銀色。
		42	○14.4（後） ○ 4.75 ○ 4.7 ○33.0 （径高指数） ○30%（残）	○平底。形態は(33)と同じ。 （厚みは体部≦底部） （沈線の幅は２㎜） ○高台は断面逆台形～三角形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面はナデの上に、口縁部から体部中位まで粗いミガキ（0.5㎜）。 ○内面はほぼ密にミガキ（１㎜、30条）。 ○見込みに同心円文（1.5㎜、２重）。 ○高台の畳付はヘラ切り状。	○粗、黒色微砂粒の他に白色砂粒を含む。 ○灰色N4/～暗灰色N3/。 ○内外面の一部は銀色（油膜？）。
		43	○13.8（復） ○ 5.0 ○ 4.7 ○36.2 （径高指数） ○45%（残）	○少し丸底気味。形態は(33)と同じ。 （厚みは体部＜底部） （沈線の幅は２㎜） ○高台は断面三角形～逆台形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面はナデの上に粗いミガキ（１～２㎜）。分割か。 ○内面にほぼ密なミガキ（1.5～２㎜、30条）。 ○見込みに同心円文（1.5㎜、３重以上）の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色の微砂粒含む。 ○灰色N5/～N6/。 ○外面に重ね焼き痕。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A_{2-1}	44	○14.4(復) ○ 4.8 ○ 6.0 ○33.0 (径高指数) ○45%(残)	○やや径の大きい丸底。形態は(33)と同じ。 (厚みは体部>底部) (沈線の幅は1.5㎜) ○高台は断面三角形で、底部よりとび出る。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面は口縁部から下位まで間隔の粗いミガキ(1㎜)。分割。 ○内面は密にミガキ(1㎜、40条)。 ○見込みは板状工具のナデの上に同心円文(1㎜、3重以上)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒の他に白色砂粒を含む。 ○灰色N4/～暗灰色N3/。 ○外面に重ね焼き痕。
		45	○14.5(復) ○ 4.5(現) ○不明	○底部を欠く。形態は(33)と同じ。 (沈線の幅は1.5㎜)	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面は指押え。口縁部から体部中位まで粗いミガキ(0.5～15㎜)。 ○内面はほぼ密なミガキ(0.5～2㎜、27条)。 ○見込みの暗文は不明	○精緻、黒色微砂粒とくさり礫を少量含む。 ○灰色N4/。
	椀 A_{2-2}	46	○14.2(復) ○ 4.6 ○ 5.0 ○33.1 (径高指数) ○30%(残)	○丸底。形態は(33)と同じだがやや浅い。 (厚みは体≦底部) (沈線の幅は2㎜) ○高台は断面三角形だがやや厚い。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○口縁部外面に粗いミガキ(1㎜)。 ○内面ほぼ密に幅の広いミガキ(1.5～2㎜、26条)。 ○見込みに連結輪状(1.5㎜、2個以上)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒少量含む。 ○黒色N2/。 ○外面体部に重ね焼き痕。
		47	○15.0 ○ 4.8 ○ 4.0 ○32.0 (径高指数) ○40%(残)	○平底。形態は(46)と同じ。内面に口縁部の屈曲がみられる。沈線は浅い。 (厚みは体部<底部) (沈線の幅は1.5㎜) ○高台は断面三角形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○口縁部外面に粗いミガキ(1㎜)。 ○体部外面に指押え。 ○内面はやや粗いミガキ(1㎜、30条)。 ○見込みに同心円文(?)(1㎜)。の暗文がわずかにみられる。 ○高台はナデつけ。	○やや粗、黒色微砂粒の他に、白色の砂粒とくさり礫を極少量含む。 ○灰色N5/～暗灰色N3/。
		48	○15.0(復) ○ 4.2 ○ 5.4 ○28.0 (径高指数) ○25%(残)	○平底。形態はやや浅くなる。 (厚みは体部=底部) (沈線の幅は1.5㎜) ○高台は断面三角形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面は口縁部から中位まで粗いミガキ(1㎜)。 ○内面はやや粗いミガキ(1㎜、30条)。 ○見込みの暗文は欠損のため不明。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒の他にくさり礫を含む。 ○灰色N5/。
	椀 A_2'	49	○14.2(復) ○ 4.5 ○ 5.2 ○31.7 (径高指数) ○15%(残)	○丸底。形態は(46)と同じだが口縁端部は内傾しないで沈線のみをもつ。器壁は口縁部以外全体に厚い。 (厚みは体部<底部) (沈線の幅は1.5㎜) ○高台は断面三角形でやや外方を向く。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面は粗ナデの上に、口縁部から体部中位までミガキ(0.25㎜)。 ○内面は密なミガキ(0.25㎜、30条)。 ○見込みは同心円文(0.5㎜、2重以上)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒を極少量含む。 ○灰白色N7/～N8/。
		50	○14.4(復) ○ 5.6(現) ○不明 ○10%(残)	○体部から口縁部まで内弯しながら立上がるやや深手の椀。口縁外端部は面をもち、内端は内傾した段をつくらず、沈線のみもつ。 (沈線の幅は1.5㎜)	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面を粗いミガキ(0.25㎜)。 ○内面は粗いケズリ状のミガキ(0.25㎜)が交差する。	○粗、黒色微砂粒の他にくさり礫が極少量と、白色砂粒(0.5㎜)を含む。 ○灰色N5/～N4/。 ○内面のミガキは金色。 ○外面に接合痕。
		51	○15.4(復) ○ 5.0(現) ○不明 ○40%(残)	○底部を欠く。体部から口縁部まで内弯しながら立ち上がる。 ○口縁端部はわずかの幅が内傾する。 (沈線の幅は1㎜)	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面は口縁部から体部上位までミガキ(1㎜)。体部中～下位に火ぶくれ状のものが残る。 ○内面はほぼ密なミガキ(0.5㎜、40条)の上に、やや細い綾杉状の文様1対を6～7ヵ所施す。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○外面灰色N4/。 内面暗灰色N3/。 ○外面に重ね焼き痕。
	椀 A_2	52	○不明 ○ 1.0(現) ○ 5.1 ○底部のみ(残)	○少し丸底気味。 (厚みは体部=底部) ○高台は断面三角形。	○見込みはナデの上に連結輪状(0.5～1㎜)の暗文。 ○高台は幅広くナデつけ。 ○底部外面は粗ナデ。	○精緻、黒色微砂粒、くさり礫少量含む。 ○灰色N4/～5/。
		53	○不明 ○ 1.5(現) ○ 5.1 ○底部のみ	○丸底。 (厚みは体部<底部) ○高台は断面三角形で、底部周縁に余分の粘土がドーナツ状を呈す。	○体部内面のミガキ(0.5㎜)が少し残る。 ○見込みは一定方向のナデの上に、同心円文(1.5㎜、4重)の暗文。 ○高台はナデつけ。 ○底部外面は粗ナデ。	○精緻、黒色微砂粒を少量含む。 ○灰色N5/。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A₂	54	○不明 ○ 2.2(現) ○ 5.0 ○底部のみ	○丸底。 (厚みは体部<底部) ○高台は断面三角形、幅は均一でない。	○体部外面を指押え。 ○内面はほぼ密にミガキ(1㎜)。 ○見込みはナデの上に同心円文(1㎜、2重)の暗文。 ○高台は幅広くナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒の他に白色微砂粒、くさり礫を少量含む。 ○灰色N5/。
		55	○不明 ○ 3.5(現) ○ 5.0(後) ○底部のみ	○丸底。体部が大きく開く。 (厚みは体部>底部) ○高台は(53)と同じ。	○体部外面、底部外面まで粗ナデ。体部中位までミガキ(0.5㎜)。 ○体部内面はやや密にミガキ(1㎜)。 ○見込みはナデの上に同心円文(1㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒を少量含む。 ○灰色N5/～N4/。 ○外面に重ね焼き痕。
	椀 B₂₋₁	56	○15.6(復) ○ 5.2 ○ 4.0 ○33.3 (径高指数) ○45%(残)	○丸底から体部は内弯しながら、口縁端部までなだらかに開く。器壁は薄い。 (厚みは口縁部<体部>底部) ○高台は断面三角形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○体部内面はやや密にミガキ(0.5～2㎜、14条) ○見込みは斜格子(0.75㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○やや粗、黒色微砂粒を少量と白色砂粒を含む。 ○灰色N6/～N5/。 ○内外面に大きく重ね焼き痕。
		57	○14.7 ○ 4.9 ○ 3.6 ○33.0 (径高指数) ○25%(残)	○丸底から体部は内弯しながらそのまま口縁部まで開く。 (厚みは体部>底部) ○口縁端部は少し外を開き、丸く納める。 ○高台は断面三角形で、ベタッとして、やや小ぶりだがしっかりしている。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○体部内面はナデの上に、中位に粗く幅の広いミガキ(2㎜)。 ○体部中位～見込みは斜格子(0.5～1㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒を含む。他に極少量の白色微砂粒を含む。 ○暗灰色N3/。 ○内外面、重ね焼き痕。 ○内外面、油膜。
	椀 B₂₋₂	58	○15.0(復) ○ 4.45 ○ 4.9 ○29.7 (径高指数) ○30%(残)	○(57)と同じ形態で、口縁部がやや外反し、端部を丸く納める。 (厚みは体部=底部) ○高台は断面三角形。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を粗ナデ。 ○体部内面は口縁部からミガキ(2㎜、5条) ○見込みは平行線(1.5㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、白・黒色微砂粒、くさり礫を少量含む。 ○灰色N6/。
		59	○15.2(復) ○ 3.9(現) ○不明 ○30%(残)	○(56)と同じ形態だが、浅くなる。口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押えとナデ。 ○体部内面は粗ナデの上を粗く幅の広いミガキ(2㎜、11条)。 ○見込みは平行線(1㎜)の暗文。	○精緻、黒色微砂粒の他に、くさり礫、白色微砂粒を極少量含む。 ○灰色N4/。
		60	○14.4(復) ○ 4.2 ○ 4.6 ○29.2 (径高指数) ○25%(残)	○(59)と同じ形態。 (厚みは口縁部>体部>底部) ○高台の形は大きさが不均一。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○内面をナデの上に幅の広い不規則なミガキ(2～3㎜)。 ○体部上位～見込みは平行線(0.5～1㎜)の暗文。 ○高台は雑にナデつけ。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰色N4/。 ○外面に重ね焼き痕。 ○しっかりした焼成。
	椀 B₂₋₁	61	○不明 ○ 1.8(現) ○ 5.4 ○底部のみ	○丸底。 (厚みは体部>底部) ○高台は断面三角形。	○体部から底部外面を粗ナデ。 ○見込みは斜格子(1.75㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○やや粗、黒色微砂粒の他に、くさり礫、粗い白色砂粒を含む。 ○灰色N5/。
		62	○不明 ○ 2.0(現) ○底部のみ	○少し丸底気味。 (厚みは体部>底部) ○高台は断面三角形でやや外方を向く。	○体部から底部外面を粗ナデ。 ○見込みはナデの上に斜格子(1.5㎜)の暗文。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N4/。
	小皿 a₁	63	○ 9.8(復) ○ 1.6 ○10%(残)	○平底から屈曲して外上方へ開く口縁部。口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○口縁部内面は更に粗いミガキ(2㎜)。 ○見込みはナデの上に斜格子文(1㎜)の暗文。	○精緻、白・黒色の微砂粒を含む。 ○灰色N5/。 ○底部外面に重ね焼き痕。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	小皿 a_2	64	○10.4(復) ○ 1.65 ○50%(残)	○上げ底気味の底部から屈曲して外上方へ開く口縁部。 ○口縁端部は更に外方へ向き、丸く納める。	○口縁部内外面と、見込みの半ばまで横ナデ。見込みの中央部はナデ。 ○底部外面は指押え。 ○見込みはジグザグ状の密な平行線(0.5～1㎜)の暗文。	○(64) やや粗。 黒色微砂粒の他に白色砂粒含む。 ○灰白色N7/。
		65	○ 9.5 ○ 1.8 ○完形			○(65) 精緻。 ○暗灰色N3/。 暗文は銀色。
	小皿 a_3	66	○ 8.5(復) ○ 1.5 ○35%(残)	○形態は(65)と似るが、口縁部は少し外弯気味で、上端部に面をもつ。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○底部外面に指押えとナデ。 ○見込みはやや粗いジグザグ状の平行線(1～1.5㎜)の暗文。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N6/～N5/。
		67	○ 8.6(復) ○ 1.2 ○30%(残)	○底部から口縁部までなだらかに開く。 ○口縁端部は少し尖り気味。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○底部外面に指頭圧痕。 ○見込みはジグザグ状の平行線(1㎜)の暗文。	○精緻、黒色微砂粒を少量含む。 ○灰色N6/～灰白色N8/。 ○風化気味。
	小皿 b_3	68	○ 8.8(復) ○ 1.6 ○20%(残)	○丸底からゆるく内弯しながら口縁部へつづき、口縁部が外反する。 ○口縁端部は更に外方へ向き、少し尖り気味。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○底部外面は粗ナデ。縦ジワが残る。 ○見込みはナデの上を粗いジグザグ状の平行線(0.25～0.5㎜)の暗文。	○精緻、黒色微砂粒の他に少量の白色微砂粒含む。 ○灰色N5/～灰色N4/。
		69	○ 8.6(復) ○ 1.65 ○40%(残)	○(68)と同じ。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○底部外面をナデ(ヒビが残る)。 ○見込みは一定方向のナデの上に、粗いジグザグ状の平行線(2㎜)の暗文。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N7/。
		70	○ 8.4(復) ○ 1.4 ○30%(残)	○平底で他の形態は(69)と同じ。	○口縁部外面を横ナデ。 ○見込みはナデの上に平行線(1～1.5㎜)の暗文。	○精緻、黒色微砂粒を少量含む。 ○灰色N4/～N5/。
	小皿 c_2	71	○10.0(復) ○ 2.0 ○60%(残)	○丸底から口縁部まで内弯しながら開く。 ○口縁端部は少し外方を向き、丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○底部外面を粗ナデ。 ○見込みはナデの上にかなり密なジグザグ状の平行線(0.5～1㎜)の暗文。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N5/、暗文は銀色。 ○外面一部に油膜。
	小皿 d_2	72	○ 9.0(復) ○ 2.0 ○25%(残)	○やや丸底気味の底部から、なだらかに内弯して口縁部へつづく。端部は厚くなり丸く納める。 ○外面の口縁部下位に、強いナデによる凹線をつくる。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○口縁部内面は更にミガキ。 ○見込みは斜格子(1～1.5㎜)の暗文。一方向の線が強く他方の線はみえにくい。	○精、白・黒色微砂粒、くさり礫を含む。 ○灰白色10YR8/2～浅黄橙色5YR8/4。 ○炭素の吸着がない。
	羽釜	73	○16.8(復) ○ 4.0(現) ○口縁部10%(残)	○内傾する体部から口縁部につづき、口縁部外面にはナデにより、二つの段をもつ。 ○口縁端部は内方に拡張後、丸く納め、上端部に面をもつ。 ○鍔は短かく、断面方形。	○口縁部外面と鍔部周辺は横ナデ。 ○内面は横方向の細かいハケ目が少し残る。	○粗、白・黒色の粗い砂粒を含む。 ○灰色N4/。 ○内面は摩滅。 ○鍔の下に煤付着。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	三足	74	○10.5 (現存高) ○ 2.5 (脚柱の直径)	○脚柱状部のみ残存。体部との接合面で剝離。 ○体部との接合面には中央に浅い凹みがあり、体部との間にわずかなすき間があったようである。	○全体にナデ調整。 ○体部との接合部には中央に浅い凹みをもつ。	○やや粗、黒色微砂粒の他に日色の砂粒を含む。 ○黒色N3/～銀黒色。
須恵器	甕B	75	○28.0(後) ○12.9(現) ○不明 ○口縁部45% (残)	○丸い体部から外反して斜上方へ伸びる頸部。 ○口縁部は更に外下方へ伸び、外端部に面をつくる。	○口縁部内外面と頸部内面は横ナデ。 ○頸部外面は右上がりのハケ目(5条/cm)の後、横ナデ。 ○体部外面は平行叩き。 ○体部内面はナデ、指頭圧痕が少し残る。	○粗、黒色微砂粒と白色砂粒を含む。 ○暗灰色N3/～灰色N5/。 ○瓦質。
	揑鉢C	76	○29.4(復) ○12.2(現) ○不明 ○10%(残)	○直線的に外方に開く体部。 ○口縁部は上方へ拡張し、内傾する。端部は丸味をもつ。 ○口縁部すぐ下の器壁は薄くなる。 ○体部内外面はロクロナデにより凹凸が残る。	○内外面はロクロナデ。 ○内面は更に乱方向にナデ。	○粗、白・黒色微砂粒と粗い白色砂粒を多く含む。 ○灰白色N5/。口縁端面は灰色N5/。 ○体部内面下半部摩滅。 ○東播系の練鉢。
輸入磁器	褐磁四耳壺	77	○9.5(復) ○3.0(現) ○不明 ○口縁部25% (残)	○内傾する体部から外折する短かい口縁部。外折部は薄くなる。 ○口縁端部は外傾する。 ○頸部の下位に段をもつ。	○内外面はロクロナデ。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○素地-灰色7.5Y5/10。 ○釉-オリーブ灰2.5GY5/1～オリーブ黒色5Y3/1。 褐釉四耳壺。
	青磁碗	78	○不明 ○2.0(現) ○4.4 ○底部のみ	○肉厚の底部から内弯しながら体部へつづく。 ○高台は断面方形で、厚みは不均等。	○残存する体部外面から高台はヘラ削り。 ○見込みは片彫りの刻文。 ○内外面を施釉し、外面は高台の表面までかかる。	○精緻。 ○素地-灰白色N7/。釉-オリーブ灰10Y5/2。 刻文は暗オリーブ7.5Y4/3。
土師器	小皿 b_1	79～81	○8.6(平) ○1.6(平) ○※	○丸底気味の底部から屈曲して口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く納めるものが多い。つまみあげるものもある。	○口縁部内外面から、見込みの半ばまで横ナデし、右廻りでナデを抜くものが多い。 ○見込みの中央部はナデ。 ○底部外面はナデ、指押えなど。	○精緻、角内石を中心に白色砂粒、くさり礫など微砂粒を含む。 ○なかには白色の粗い砂粒を少量含むものもある。 ○概ね、灰白色 7.5YR8/3 (通常乳灰色と呼ぶ) ～にぶい橙色 7.5YR7/4 を中心にした色が多い。 ○(143・160)は深手※ ○(86・90・95・98・99・108・110・123 137・140) はほぼ完形。 ○(92・96・97・100 103・104・107・119・124・143)は半分以上。 ○その他は10～45%残。 ○(98・110)は内面に煤付着。
	小皿 b_2	82～101	○8.7(平) ○1.5(平)	○平底から口縁部までなだらかに内弯しながらつづく。 ○口縁端部はb_1～b_5まで同じ。 ○底部の中央が肉薄になるものもある。		
	小皿 b_3	102～112	○8.54(平) ○1.41(平)	○中央部が上げ底気味の底部から、なだらかに内弯しながら口縁部につづく。 ○底部についてはb_2～b_5まで同じ。		
	小皿 b_4	113～132	○8.4(平) ○1.1(平)	○平底から屈曲して口縁部が外上方へ伸びる。		
	小皿 b_5	133～143	○8.1(平) ○1.3(平)	○平底。底部と口縁部の境界は肉厚になり、屈曲後外上方へ立つ。		

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	中皿 b_1	144〜147	○13.7(平) ○ 2.3(平)	○小皿b_1の形態と同じ。	○小皿と同じ。	○小皿と同じ。
	中皿 b_3	148〜152	○13.0(平) ○ 1.7(平)	○小皿b_3の形態と同じ。		
	中皿 b_4	153〜157	○13.3(平) ○ 2.2(平)	○小皿 b_4の形態と同じ。		
	中皿 b_5	158〜160	○13.1(平) ○ 2.4(平)	○小皿b_5の形態と同じ。		

SE03（第23図，図版四十一・四十七）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A'_{2-1}	161	○15.2(復) ○ 3.4(現) ○不明 ○70%(残)	○底部を欠く。体部は内弯しながら開く。 ○口縁端部はわずかに内傾して沈線(1㎜)。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押え。口縁部から体部中位まで粗いミガキ(1㎜)。 ○内面は密なミガキ(1.5㎜)。	○精緻。 ○暗灰色N8/。
	椀 A_{2-1}	162	○14.5 ○ 3.8(現) ○不明 ○45%(残)	○底部を欠く。 ○内弯しながら口縁部までつづき、端部が少し外方に開き、内傾して沈線をもつ(1.5㎜)。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面は指押えの上に口縁部から体部下位まで粗いミガキ。 ○内面は粗いミガキ(内外1.5㎜)。	○微砂粒。 ○灰色N6/1。
	椀 A_{2-2}	163	○14.2 ○ 4.7 ○ 5.0 ○33.1 (径高指数) ○80%(残)	○やや丸底から内弯しながら開く体部に少し屈曲して口縁部が立ち上がる。(厚さは体部＜底部) ○口縁端部は内傾して浅い沈線（1㎜)。 ○高台は断面三角形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面は指押えの上に、口縁部から体部上位まで粗いミガキ。 ○体部内面はほぼ密にミガキ（2㎜20条)。 ○見込みは同心円文(2重)。	○白・黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N6/。 ○外面に粘土接合痕をもつ。
	椀	164	○不明 ○1.2（現) ○5.0 ○底部のみ	○少し丸底。 ○高台は断面三角形。	○見込みはナデの上に連結輪状の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻。黒色砂粒を含む。 ○灰色N6/。
	A	165	○不明 ○1.1(現) ○4.7 ○底部のみ	○平底。(厚さは体部＜底部) ○高台は断面三角形。	○見込みはナデの上に同心円文(2.5㎜、2.5重)。 ○高台は幅広くナデつけ。 ○底部外面はナデ。	○精緻、微砂粒を含む。 ○灰色N6/。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 B'_{2-1}	166	○14.5(復) ○ 4.4(現) ○不明 ○20%(残)	○体部から口縁部まで内弯しながら立ち上がる。底部にいくほど肉薄になる。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁内端、外面を横ナデ。 ○体部外面を指押えの上に、口縁部から体部下位まで粗いミガキ。 ○見込みには斜格子文（1㎜）の暗文。	○精緻、微砂粒を含む。 ○灰色5Y 5/1。
	椀 B'_{2-2}	167	○15.4(復) ○ 4.3(現) ○不明 ○15%(残)	○直線的に外方に開く体部から屈曲して口縁部が外反。端部が外方を向く。 ○口縁端部は肉厚になり、丸く納める。	○口縁部外面、内面は上位を横ナデ。下位に少しミガキ（1.5㎜）。 ○内面は暗文の上に幅の広いミガキ（2～3㎜）。 ○体部中位～見込みにかけて平行線（1㎜）。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N 4/。 ミガキは銀灰色。
	小皿 a'_1	168	○ 9.2 ○.2 6 ○50%(残)	○中央部が少し上げ底気味の底部から、外上方に口縁部が立ち上がる。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内端、外面を横ナデ。内面に横方向のミガキ。 ○見込みにジグザグ状平行線（1～1.5㎜）の暗文。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N 5/。
	小皿 d_1	169	○ 8.4 ○ 2.5 ○45%(残)	○丸底から屈曲して口縁部が外上方に立ち上がる。口縁端部はやや厚くなり、丸く納める。 ○底部は非常に厚い。	○口縁部内外面～見込みにかけて横ナデ。口縁部内面に粗いミガキ(2㎜)。 ○見込みに斜格子状（2～5㎜）の暗文。 ○底部外面はナデ。	○精緻、白色微砂粒を含む。 ○灰色N 5/。
	小皿 d_2	170	○ 9.2 ○ 2.2 ○15%(残)	○丸底から屈曲して口縁部が外上方に立ち上がる。口縁部が肉薄になる。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面～見込み半ばまで横ナデ（右廻り）。他はナデ。 ○内面は口縁部から見込みにかけて幅の広いミガキ（2～4㎜）。	○精緻。 ○灰白色N 4/。 ○炭素吸着にムラあり。
土師器	小皿 b_2	171・172	○ 9.05(平) ○ 1.35(平) ○30%(残)	○平底から口縁部まで内弯しながらつづく。 ○口縁端部は上方へつまみ上げ、丸く納める。	○口縁部内外面～見込みにかけて横ナデ（右廻り）。他はナデ。 ○(174)は底部がひび割れ状。	○精緻、白色微砂粒、角閃石、くさり礫を含む。 (173)はやや粗。 ○(171)にぶい浅黄橙色5YR 8/3。 ○(173) 灰白色7.5Y 8/1。 ○(174)にぶい黄橙色10YR 7/2。 ○(176・178)精緻。 ○(175・180・178)はやや粗。 ○(179)は粗。 ○(175・178・179)にぶい橙色7.5YR 7/3～7/4。 ○(177・180)にぶい黄橙色10YR 7/3。 ○(176)灰白色2.5Y 8/1。
	小皿 b_4	173	○ 8.6 ○ 1.25 ○25%(残)	○平底から屈曲して口縁部が外上方に伸びる。口縁端部はやや外方を向き薄くなるが丸く納める。		
	小皿 b_5	174	○ 7.0 ○ 1.0 ○20%(残)	○平底。底部がやや出張り気味で、稜を残して口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く納める。		
	中皿 b_2	175～178	○12.6(平) ○ 2.05(平) ○15～30%(残)	○小皿（b_2）と同じ。(体部が浅いものと、強く内弯してやや深いものがある。) ○口縁端部は丸く納めるもの、尖り気味のものがある。		
	中皿 b_3	179	○14.6×15.0 ○ 3.0 ○35%(残)	○中央部が上げ底気味の底部から内弯しながら口縁部が立ち上がる。 ○口縁端部は丸く納める。	○底部外面に指押えが残る。	

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	中皿 b_4	180	○12.0 ○ 1.8 ○20%(残)	○小皿（b_4）とほぼ同じ形態。 ○口縁端部は上方へつまみ上げ、尖り気味。		

SE04（第23図）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A_3	181	○13.9(復) ○ 4.5 ○ 4.6 ○32.7 （径高指数）	○丸底から内弯しながら伸びる体部に少し屈曲して口縁部が外反する。（厚さは体部≦底部） ○口縁端部は内傾して沈線（1㎜）。 ○高台は断面三角形。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押えの上に口縁部から体部上位まで粗いミガキ(1㎜)。 ○内面は粗いミガキ（1㎜）。 ○見込みの暗文は不明。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色砂粒を含む。 ○灰色N6/。

SE05（第24～27図,・図版四十二～四十七）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A_1	182	○15.2 ○ 5.1 ○ 6.0 ○33.5 （径高指数） ○30%(残)	○平底から体部は内弯して外上方に立ち上がり口縁部までつづく。(厚みは体部>底部) ○口縁端部は内傾して浅い沈線。(幅は1.5㎜)。 ○高台は断面方形でしっかりしている。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面の整形は不明。上位～中位にミガキ（0.5㎜）。 ○内面はほぼ密にミガキ(0.5㎜）を施す。 ○見込みに連結輪状(1㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、白・黒色微砂粒、くさり礫を極少量含む。 ○灰色N4/。 ○風化気味。
		183	○不明 ○ 2.2(現) ○ 4.6 ○底部のみ	○丸底から内弯する体部。（厚みは体部<底部） ○高台は断面台形。	○体部外面を指押え。 ○体部内面に幅広のミガキ（2㎜）。 ○見込みは十字方向のハケ目の上に同心円文（2㎜）の暗文。 ○高台は底部に幅広くナデつけ。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N7/。 ○見込みに丸く重った粘土付着。
	椀 A_{2-2}	184	○14.3 ○ 4.9 ○ 4.6 ○34.3 （径高指数） ○70%(残)	○平底から体部は内弯して外上方に伸び、口縁部が屈曲して立ち上がる。(厚みは体部<底部) ○口縁端部は内傾して沈線（幅は1㎜）。 ○高台は小さく、断面三角形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。やや密なミガキ（1㎜）。 ○体部外面を指押え。 ○内面をナデの上にやや粗いミガキ（1㎜、30条）。 ○見込みは重ね置きで付着した粘土の上を同心円文（2㎜）の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻。 ○灰色N6/。 底部外面に焼成後「＋」の印を入れる。 ○高台の畳付にワラ状の痕跡。
		185	○14.4(復) ○ 4.15 ○ 4.8 ○28.7 （径高指数） ○25%(残)	○形態は(182)に似る。口縁端部は内傾し沈線をもつ。上端面に沈線のつくところがある。（厚みは体部<底部）（沈線の幅は2㎜） ○高台は断面三角形。	○口縁部内外面を横ナデ。外面を粗いミガキ（0.5㎜）。 ○体部外面を指押え。 ○内面は密なミガキ(1～1.5㎜、30条)。 ○見込みは同心円文(1～1.5㎜、1重）の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒少量と極少量の白色微砂粒を含む。 ○灰色N7/。 ○内面はひどい風化。
		186	○14.4(復) ○ 4.3 ○ 4.7 ○30.0 （径高指数） ○25%(残)	○形態は(182)に似るが、やや偏平。口縁部は内面で屈曲がみられる。 ○高台は断面三角形でつまみ風。	○口縁端部の内外面を横ナデ。 ○外面をナデ。口縁部から体部上位まで粗いミガキ（1㎜）。 ○体部内面はナデの上に、下部は密に上部は粗くミガキ（1～2㎜、30条）。 ○見込みにわずかに暗文（1㎜）が残る。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒、くさり礫を少量含む。 ○灰白色N8/。 ○口縁部にわずかに重ね焼き痕。 ○歪みがひどい。
		187	○14.3(復) ○ 4.2(現) ○不明 ○20%(残)	○形態は(182)に似るが、口縁端部は更に外上方を向く。口縁部は肉薄になる。（沈線の幅は0.5㎜） ○高台、底部を欠く。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面は指押えの上を平滑にナデ。口縁部から体部中位まで粗いミガキ（1㎜）。 ○内面はほぼ密にミガキ(1.5㎜、45条)。	○精緻。 ○灰白色N7/。 ○全面風化。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀	188	○14.0(復) ○ 4.0(現) ○不明 ○30%(残)	○形態は(182)と同じ。全体に肉厚。 (沈線の幅は2.5㎜) ○高台・底部を欠く。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押えの上をナデ、口縁部から体部下位まで粗いミガキ(0.5㎜)。 ○内面はナデの上にほぼ密なミガキ(0.5㎜、40条)。	○精緻。 ○灰色N5/。 ○外面は炭素の吸着がムラ。
	A_{2-2}	189	○13.8(復) ○ 4.5 ○ 5.0(外側) 2.9(内側) ○32.6 (径高指数) ○20%(残)	○形態は(182)と同じ。 (厚みは体部≦底部) (沈線の幅は1.5㎜) ○高台は低い帯状のものを二重つける。内側の高台が接地する。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面をナデ(掌紋が残る)。中位をミガキ(1㎜)。 ○体部内面にやや粗いミガキ(1㎜、31条)。 ○見込みはナデの上に暗文(1㎜)。 ○高台はナデつけ。	○精緻、くさり礫を含む。 ○灰白色7.5Y8/1。 ○炭素の吸着は皆無。
	椀	190	○13.6(復) ○ 4.7 ○ 4.0 ○35.7 (径高指数) ○25%(残)	○丸底から体部はほぼ直線的に伸び、口縁部へつづく。 (厚さは体部=底部) ○口縁端部は内傾し沈線。 (幅は1㎜) ○高台は紐状で形は一定しない。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押え、口縁部～体部中位を粗いミガキ(1㎜)。 ○内面はナデの上にミガキ(1～1.5㎜、21条)。 ○見込みに同心円文(1.5㎜)の暗文。	○精緻、黒色微砂粒少量と白色微砂粒を極少量含む。 ○灰白色N8/。
	A_3	191	○13.1(復) ○ 4.2 ○ 4.3 ○32.1 (径高指数) ○30%(残)	○形態は(182)の小型化したもの。 (厚みは体部=底部) ○口縁端部は浅い沈線をもつ。 (幅は1㎜) ○高台は断面三角形。	○口縁部内外面を横ナデ。外面に粗いミガキ(1㎜)。 ○体部外面を指押えの上にナデ。 ○内面をナデの上に粗いミガキ(1㎜、20条)。 ○見込みの暗文は不明。 ○高台はナデつけ。	○精緻、白色砂粒を極少量含む。 ○灰色N6/。 ○炭素の吸着は外面がムラ。 ○体部外面に重ね焼き痕。
		192	○13.0(復) ○ 4.2(現) ○不明 ○10%(残)	○底部を欠く。 ○ほぼ直線的に斜上方に伸びる体部から口縁部が更に外反する。 ○口縁端部は肉薄になり内傾して沈線。 (1㎜)	○口縁部内面、外端部を横ナデ、口縁部外面にミガキ。 ○内面体部下位に粗いミガキ。	○精緻 ○灰白色N8/。
	椀	193	○11.8(復) ○ 3.9 ○ 3.6 ○33.1 (径高指数) ○25%(残)	○(190)と同じ体部に、口縁部は屈曲して外上方に立ち上がる。 (厚さは体部<底部) ○口縁端部は内傾し幅の狭い沈線。 (1.5㎜) ○高台は低くく断面三角形。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。口縁部から体部上位まで粗いミガキ(1㎜)。 ○内面ナデの上に、粗いミガキ(1㎜、18条) ○見込みの暗文は不明。 ○高台はナデつけ。	○やや粗、白色の砂粒を含む。 ○灰色N5/。
	A_4	194	○12.2(復) ○ 3.6 ○ 4.4 ○29.5 (径高指数) ○35%(残)	○形態は(182)の小型で、口縁部が屈曲して開く。口縁端部はわずかの幅で内傾し、沈線の痕跡がある。 (厚みは体部<底部) ○高台は断面三角形。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押えとナデ。口縁部から体部上位まで粗いミガキ(0.5㎜)。 ○内面はナデの上に、下部は密に、上部は粗いミガキ(1～2㎜)。 ○高台はナデつけ、内側はナデ。	○精緻、黒色微砂粒、くさり礫を少量、白色微砂粒を極少量含む。 ○灰色N5/。 ○外面体部に重ね焼き痕。
	椀	195	○12.0(復) ○ 3.8(現) ○不明 ○15%(残)	○やや丸底気味の底部から内弯して立ち上がり、口縁部までつづく。高台を欠く。 ○口縁端部は内傾して沈線。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面に指押えとほとんど痕跡程度のミガキがみられる。 ○体部内面に粗いミガキ。	○精緻 ○灰色N5/～灰白色N8/。
		196	○11.0(復) ○ 3.2(現) ○不明 ○10%(残)	○底部を欠く。 ○ほぼ直線的に斜上方に伸びる体部から口縁部が角度をかえて立ち上がる。 ○口縁端部は内傾して沈線。 (1.5㎜)	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部外面に非常に粗いミガキ。	○精緻。 ○灰白色7.5Y7/1。
	A_5	197	○11.2(復) ○ 3.8(現) ○不明 ○15%(残)	○底部を欠く。 ○ほぼ直線的にあまりひろがらずに立つ体部からそのまま口縁部につづく。 ○口縁端部は内傾して浅い沈線(2㎜)をもつ。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は痕跡程度のミガキ。	○精緻。 ○灰色N7/。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 B_3	198	○16.0 ○ 4.35 ○ 5.0 ○27.2 (径高指数) ○20%(残)	○丸底から体部は内弯し、口縁部までそのままつづく。口縁端部は丸く納める。 (厚さは体部<底部) ○高台は低くく断面三角形～台形。	○口縁部内外面、体部外面の上部を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○体部内面はナデの上に、粗いミガキ(1～1.5㎜)。 ○体部～見込みに平行線(1㎜)の暗文。 ○高台はしっかりとナデつけ。	○やや粗、白色の微砂粒を含む。 ○灰色N6/。
	椀 B_4	199	○13.8 ○ 3.7 ○ 3.5 ○26.8 (径高指数) ○40%(残)	○平底から体部は大きく内弯しながら開き、口縁部は少し外弯する。端部は丸く納める。 (厚さは口縁部<体部>底部) ○高台は歪んだ断面三角形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○内面はナデの上に粗いミガキ(0.5～1.5㎜、4条)。 ○体部中位～見込みは平行線(0.5㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○粗、くさり礫少量と白色の粗砂粒を含む。 ○浅黄橙色10YR8/3。 ○炭素吸着は皆無。
		200	○13.4 ○ 3.65 ○ 3.5 ○27.2 (径高指数) ○55%(残)	○丸底で(199)と同じ。口縁部に近づくほど肉厚。端部は丸く納める。 (厚さは体部>底部) ○高台は低くく断面逆台形。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○体部内面はナデの上に粗いミガキ。(1～2㎜、6条)。 ○体部～見込みは平行線(2㎜)の暗文。 ○高台は粘土紐を輪に貼り付け。	○精、黒色微砂粒を少量と白色微砂粒を極少量含む。 ○灰白色N6/。 ○重ね焼き痕。
		201	○13.5 ○ 3.35 ○ 3.8 ○24.8 (径高指数) ○55%(残)	○(199)と同じ形態。(厚さは口縁部>体部>底部) ○高台はベタッとした断面三角形で、最後に重なり合う。中心がずれる。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面、見込みはナデ。口縁部から見込みにかけて間隔を広くあけたミガキ(1.5㎜)。	○粗、白色微砂粒と粗い砂粒を含む。 ○灰白色N8/。 ○内外面の半分は炭素を洗い流した様。 ○口縁内、体部外面に重ね焼き痕。
		202	○13.4 ○ 4.0 ○ 3.0 ○29.9 (径高指数) ○80%(残)	○丸底から体部は大きく内弯しながら開き、口縁部は少し外弯する。 (厚さは体部≦底部) ○口縁端部は丸く納める。 ○高台は形状が一定しない。また一周しない。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部から底部外面を指押え。 ○体部内面は工具による不定方向のナデの上にミガキ(3㎜、3重)。 ○体部中位～見込みは平行線(1～2㎜)の暗文。 ○高台は粘土紐を輪に貼り付け。	○粗、白色微砂粒、粗い砂粒を含む。くさり礫極少量含む。 ○灰色N6/。 ○炭素吸着のない部分あり。
		203	○13.2 ○ 3.6 ○ 3.7 ○27.1 (径高指数) ○75%(残)	○形態は(202)と似る。 (厚さは体≦底部) ○高台は体部のカーブにつづき、断面はベタッとした三角形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面は指押えによる凹凸が著しい。掌紋か。 ○内面はナデの上に粗いミガキ(2～3㎜、5条)。 ○体部下位～見込みは平行線(1～～1.5㎜)の暗文で、半分の面に片寄る。 ○高台はナデつけ。	○粗、白色の粗砂粒を含む。 ○灰色N6/。 ○見込みに重ね置きの粘土付着。
	椀 B_5	204	○14.5(復) ○ 3.25(現) ○不明 ○25%(残)	○(202)を低くくした形態。口縁部は薄くなってから、また厚くなり丸く納める。 ○高台、底部を欠く。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○体部内面はナデの上に幅の広いミガキ(2～3㎜)を少し切れ切れに施す。	○粗、くさり礫、微砂粒と白色微砂粒、粗い砂粒を含む。 ○浅黄橙色10YR8/3。炭素吸着が悪く一部のみ灰色N5/。
		205	○12.2×13.1 ○ 2.5(3.3) ○ 2.8 ○22.8(指数) ○60%(残)	○(204)と同じ形態。 (厚さは口縁部>体部>底部) ○高台は低くく痕跡程度、一周しない。	○口縁部内端、外面を横ナデ。(205)は口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押えの凹凸が著しい。 ○体部内面の見込みはナデの上に間隔を広くあけたミガキ。 (205)は(2～3㎜、5条) (206)は(2～3㎜、やや粗く) (207)は(2㎜、4条) (208)は(2～3㎜、5条) ○高台は粘土紐を外側はナデつけ、内側はナデ。	○やや粗、白・黒色微砂粒、白色砂粒を含む。 ○灰色N4/。 ○炭素吸着にムラ。
		206	○13.2 ○ 3.1 ○ 2.5(2.7) ○23.5(指数) ○25%(残)			○粗、白色微砂粒、粗い砂粒を含む。 ○灰色N7/。
		207	○13.0 ○ 3.0 ○ 3.0 ○23.1(指数) ○45%(残)			○やや粗、くさり礫と白色微砂粒、砂粒を含む。 ○灰色N5/。 ○口縁部は炭素吸着なし。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 B_5	208	○13.0 ○ 3.2 ○ 3.0 ○24.6(指数) ○55%(残)	○(205～207)と同じ。	○(205～207)と同じ。	○やや粗、くさり礫白色微砂粒と粗い白色砂粒を含む。 ○灰色N5/。 ○炭素吸着にムラ。
		209	○12.6 ○ 3.2 ○ 3.0 ○25.4 (径高指数) ○完形	○(204)と同じ形態、口縁部にいくに従い肉厚になる。 (厚さは体部＞底部) ○高台は体部と一緒になってしまうところあり、一周しない。断面三角形。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押えの凹凸が著しい。 ○体部内面の見込みはナデ。口縁部から見込みにかけてミガキ(2～3㎜)を切れ切れに施す。 ○高台は粘土紐を外側はナデつけ、内側はナデ。	○やや粗、黒色微砂粒少量と白色微砂粒、粗砂粒を含む。 ○灰色N5/。 ○外面に重ね焼き痕。
		210	○12.0(復) ○ 4.5 ○ 2.8 ○36.9(指数) ○45%(残)	○(204)を小型化した形態。口縁部にいくに従い肉厚。 (厚さは体部＞底部) ○高台は丸味をもつ。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押えの凹凸が著しい。 ○体部内面はナデの上に粗いミガキ(0.5～1㎜)を切れ切れに施す。	○やや粗、黒色微砂粒少量と粗い白色砂粒を含む。 ○灰色N5/。
	小皿 a_2	211	○ 9.8 ○ 1.8 ○完形	○平底からゆるやかに屈曲して外上方に立ち上がる口縁部。 ○口縁端部は丸味をもつ。	○口縁部内外面を横ナデ(右廻り)。 ○見込みはナデの上にジグザグ状の密な平行線(1.5㎜)の暗文。 ○底部外面は指押え。	○精、白・黒色微砂粒を極少量含む。 ○灰色N5/～6/。 ○外半分は風化。
		212	○ 9.6 ○ 1.5 ○25%(残)	○(211)と同じ形態だが少し浅い。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○見込みはナデの上に間隔の粗い平行線(0.3㎜)の暗文。 ○底部外面は指押え。	○精緻、黒色微砂粒、くさり礫を少量含む。 ○灰色N6/。
	小皿 b_2	213	○ 9.8(復) ○ 1.8 ○50%(残)	○平底から屈曲して外上方に立ち上がる口縁部。口縁端部は更に外方を向く。 ○口縁端部は少し尖り気味。	○口縁部内外面、見込みの上部を横ナデ。 ○見込みは(212)と同じだが幅の広い暗文(1.5㎜)。 ○底部外面は指押え。	○精緻、黒色微砂粒、くさり礫を少量含む。 ○灰色N7/。
	小皿 b_3	214	○ 8.8(復) ○ 1.4 ○30%(残)	○(213)と同じ形態だが少し浅い。	○口縁部内外面、見込みの上部を横ナデ。 ○見込みはナデの上に間隔の粗いジグザグ状平行線(1～1.5㎜)の暗文。 ○底部外面は指押え。	○精緻、黒色微砂粒、くさり礫を少量含む。 ○灰白色7.5Y 7/1。
	小皿 a_4	215	○ 7.8 ○ 1.35 ○60%(残)	○わずかに上げ底風の底部から外上方に伸びる口縁部。 ○口縁端部は丸く終わる。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○見込みは風化のため不明。 ○底部外面は口縁部近くまで指押え。	○精緻、黒色微砂粒、くさり礫を少量含む。 ○灰色N5/～灰白色(風化部分)。
	羽釜	216	○20.0(復) ○ 3.4(現) ○口縁部10% (残)	○わずかに内傾する体部から口縁部がほぼまっすぐに立つ。 ○口縁端部は内側に少し肥厚し、上端部は面をもつ。 ○鍔は幅が狭く断面方形。	○口縁部、鍔部の内外面を横ナデ。	○粗、粗い砂粒を多く含む。 ○灰色N6/。 ○鍔部下面以下は煤けている。
		217	○19.6(復) ○ 3.4(現) ○口縁部10% (残)	○体部から口縁部まで、内方に少し内弯しながら立つ。 ○口縁端部は内傾し、面をもつ。 ○鍔は幅が厚く短かい。	○口縁部外面～鍔部の下まで横ナデ。 ○口縁部内外面を強い指ナデ、指押え。 ○体部内面は板状工具によるナデ。	○粗、黒色微砂粒、白色砂粒を含む。 ○灰色N6/。 ○やや軟質。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	羽釜	218	○不明 ○10.5(現) ○ 2.1 (脚柱径)	○体部はゆるく内弯して底部につづき、脚部は断面円形の棒状。	○体部内面は横方向のハケ目(?)。 ○脚部はナデ。	○粗、白色の粗い砂粒を含む。 ○灰白色7.5Y 8/。 ○体部内面は摩滅。
土師器	羽釜B	219	○31.0(復) ○ 4.3(現) ○不明 ○口縁部10% (残)	○内傾する体部から外折する口縁部。 ○口縁端部は内方に巻き込み、丸く納める。	○口縁部内外面、体部外面を横ナデ。 ○体部内面を横方向へ、ヘラによるナデ。	○粗、角閃石、白色微砂粒と白色の粗い砂粒、極少量のくさり礫を含む。 ○灰白色(7.5YR 8/2)。
		220	○31.0(復) ○ 8.6(現) ○不明 ○口縁部15% (残)	○内傾する体部から外折する口縁部。 ○口縁端部は上方にわずか肥厚する。 ○鍔は水平につき端部は丸味をもつ。	○口縁部内外面～鍔部の下まで横ナデ。 ○体部内面の上部は斜方向のハケ目、下部は指押え。	○粗、角閃石、白色の微砂粒、砂粒を多く含む。 ○にぶい橙色7.5YR 7/4。 ○鍔部下面、内面外折部に煤付着。
	羽釜C	221	○32.6(復) ○25.8(現) ○不明 ○口縁～体部 80%(残)	○楕円形の体部に内傾する口縁部がつづく。 ○口縁端部は外方に肥厚し、丸く納める。 ○鍔はわずかに上方を向き端部は丸い。 ○底部を欠く。	○口縁部外面～鍔の下まで横ナデ。 ○口縁部内面はヘラによるナデ。 ○体部外面は叩き目の上をヘラ削り。 ○体部内面は板状工具によるナデ。 ○体部に穿孔をもつ。	○粗、角閃石、白色の微砂粒砂粒を多く含む。 ○赤橙褐色～乳褐色。 ○体部内面の下部は剥離。
	小皿 b_2	222 ～ 231	○ 8.3(平) ○ 1.5(平) ○※	○平底から口縁部までなだらかに内弯しながらつづく。 ○口縁端部は丸く納めるかつまみ上げる。	○口縁部内外面から見込みにかけて横ナデ。(右廻りでナデを抜くものが多い。 ○見込みの中央部はナデ。 ○底部外面はナデ、指押えなど。	○精緻なものとやや粗い胎土のものがある。角閃石、くさり礫を中心に、白色微砂粒を含むものがみられる。 ○にぶい黄橙色10YR 7/3、浅黄橙免7.5YR 8/3のものが多い。 ○※ ○222、230、237、241～244はほぼ完形。 ○223、228、229、231～233、240、245、250は半分以上。 ○その他は20～45%(残)。
	小皿 b_3	232 ～ 239	○ 8.05(平) ○ 1.3(平)	○中央部が上げ底気味の底部から、なだらかに内弯しながら口縁部につづく。 ○口縁端部は (b_2) と同じ。		
	小皿 b_4	240 ～ 245	○ 8.3(平) ○ 1.4(平)	○平底から屈曲して口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く納めるもの、やや尖り気味のもの、つまみあげるものがある。		
	小皿 b_5	246	○ 8.2(復) ○ 2.0	○やや丸底気味で、出張り気味の底部から、口縁部が屈曲し外上方に外反する。 ○口縁端部は内方に肥厚する。		
	中皿 b_1	247 ・ 248	○11.8(平) ○ 2.2(平)	○丸底気味の底部から屈曲して、口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く納める。		
	中皿 b_2	249 ・ 250	○12.8(平) ○ 2.1(平)	○小皿 (b_2) 形態と同じ。		

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	中皿 b_3	251	○10.6(復) ○ 1.75	○小皿（b_3）形態と同じ。	○小皿と同じ。	○小皿と同じ。
	中皿 b_4	252・253	○11.4 ○ 1.85	○小皿（b_4）形態と同じ。		
	中皿 b_5	254	○10.2 ○ 1.5	○平底。小皿（b_5）形態と同じ。		
須恵器	甕 A	255	○24.0(復) ○ 8.2(現) ○不明 ○口頸部15% (残)	○なだらかに内傾して伸びる体部から、ゆるやかに屈曲して、やや外反気味に上方へ短く立ち上がる頸部。 ○口縁部は外反し、端部は外傾し、面をつくる。	○口縁部内外面、頸部外面を横ナデ。 ○体部外面は平行叩き目。 ○体部内面に同心円文の叩きの上から頸部内面にかけて横ナデ。横ナデによる稜線を残す。	○粗、白色砂粒と極少量のくさり礫を含む。 ○橙色2.5YR7/8。
	甕 B	256	○27.0(復) ○ 8.4(現) ○不明 ○口頸部15% (残)	○内傾する体部に大きく外弯しながら頸部から口縁部につづく。 ○口縁部の先端は段をもち肉薄になり、外端面をつくる。 ○体部下半～底部を欠く。	○口縁部～頸部内外面を横ナデ。 ○体部外面は上部を斜め方向の叩き、下部を横方向の叩き目。 ○体部内面はナデ、粘土の継ぎ目が残る。	○やや粗、角閃石、くさり礫、白色の微砂粒に、角閃石は粗い砂粒も含む。 ○黒色（外面～口縁内面）。その他は黒褐色7.5YR5/2。
		257	○25.0(復) ○ 5.5(現) ○不明 ○口頸部10% (残)	○短かく立つ頸部から水平近く外反する口縁部。 ○口縁端部は上方に肥厚。外端面をもつ。 ○体部～底部を欠く。	○口縁部内外面と頸部内面をロクロナデ。 ○口縁部の下部は叩き目の上からロクロナデ。 ○頸部の下に沈線を二条もつ。	○粗、角閃石と白色の微砂粒、粗い砂粒を含む。 ○紫灰色5P5/1。
		258	○23.6(復) ○ 6.2(現) ○不明 ○口頸部15% (残)	○肩部が強く張り出す体部から口縁部が外反する。 ○口縁先端部は段状を呈し、肉薄。	○口縁～頸部の内外面（頸部外面は平行叩き目の上）を横ナデ。 ○体部外面は叩き目の上をナデ。 ○体部内面は指押えとロクロナデ。	○やや粗、白色砂粒を含む。 ○灰色N6/。
		259	○26.0(復) ○ 7.5(現) ○不明 ○口頸部10% (残)	○肩部で丸く張り出す体部から口縁部が外反する。 ○口縁端部を欠くが（　）と同じ形態になると考えられる。	○口縁部（頸部）の内外面をロクロナデ。 ○体部外面は叩き目（交差して斜格子状）。 ○体部内面をナデ。	○粗、白・黒色の微砂粒～粗い砂粒を含む。 ○灰白色N7/。
		260	○26.6(復) ○ 5.8(現) ○不明 ○口頸部12.5% (残)	○内傾する体部から短かく外反する口縁部。 ○口縁先端部は段状を呈し肉薄。	○口縁部外面の下部に叩き目を施した上に、内外面を横ナデ。 ○体部外面は叩き目（交差して斜格子状）。 ○体部内面はナデ。	○粗、白・黒色の微砂粒～粗い砂粒を含む。 ○灰色N5/～N6/。
	揑鉢 A	261	○35.2(復) ○ 3.3(現) ○不明 ○小片	○直線的に外上方に開く体部。 ○口縁端部は断面三角形。	○外面口縁部～体部にかけてロクロナデ。 ○内面はナデ。	○粗、白色砂、微砂粒、黒色砂粒を含む。 ○暗青灰色5PB5/1。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	揑鉢A	262	○35.4(復) ○ 3.3(現) ○不明 ○小片	○直線的に外上方に開く体部。 ○口縁外端部は丸味をもつ。	○内外面をロクロナデ。	○粗、白色砂、微砂粒を含む。 ○青灰色5PB6/1。
		263	○28.6(復) ○ 4.8(現) ○不明 ○口縁部10%(残)	○直線的に外上方に開く体部。 ○口縁部は断面三角形を呈し、端部は尖り気味。	○内外面をロクロナデ。 ○体部内面はロクロナデの上にナデ。	○やや粗、黒色微砂粒、くさり礫を極少量白色微砂粒～粗砂粒を含む。 ○紫灰白5RP3/1。
輸入磁器	白磁四耳壺	264	○10.7(復) ○ 3.15(現) ○不明 ○口縁部20%(残)	○短かく立つ頸部から口縁部が外反し、端部は外下方に屈曲する。 ○体底部を欠く。	○全面をロクロナデ。 ○内外面に施釉。白釉の厚みは0.5㎜)。	○精良。 ○素地、灰白色10YR8/1。 ○釉、灰白色7.5Y7/2。
	白磁碗	265	○15.2(復) ○ 2.8(現) ○不明 ○小片	○体部はほぼ直線的に外上方に開き、口縁端部は屈曲後、水平近くに伸びる。 ○底部を欠く。	○全面をロクロナデ。 ○内外面に施釉。 ○内面はやや荒く、外面は細かく、貫入。	○精良。 ○素地、白灰色。 ○釉、白灰色。
		266	○16.7(復) ○ 3.4(現) ○不明 ○10%(残)	○体部から口縁部までなだらかに内弯しながらつづく。 ○口縁部は外側に折り返し小さい玉縁をもつ。	○内面をカンナ削り。 ○外面をロクロナデ。	○精良、黒色微砂粒少量を含む。 ○素地、灰白色7.5Y8/1。 ○釉、灰白色10Y8/1。
	青磁碗	267	○16.5(復) ○ 3.7(現) ○不明 ○小片	○体部から口縁部まで内弯しながら口縁部へつづく。 ○口縁端部は丸く納める。 ○底部を欠く。	○全面をロクロナデ。 ○体部外面はロクロナデによる凹凸の上に櫛目文。 ○内面に片彫りによる文様。	○精良、黒色微砂粒を含む。 ○素地、灰白色7.5Y8/1。 ○釉、灰白色10Y8/1～8/2。
陶器	常滑焼	268	○不明 ○16.7(現) ○不明 ○小片	○内傾する体部から強く内弯しながら口縁部へつづく。 ○口縁端部は段状を呈し、肉薄になる。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面をナデ、自然灰釉。 ○体部内面を指押えとナデ。	○粗 ○暗褐色7.5YR3/4が主な色。
		269	○不明 ○10.0(現) ○15.0 ○底部のみ	○平底からほぼ直線的に体部が開く。	○内面を指押えとナデ。 ○外面は部分的に灰釉。	○粗、粗い砂粒を含む。 ○にぶい褐色7.5Y6/1。
		270	○51.4 ○78.2 ○17.0 ○77.8(腹径) ○60%(残)	○平底から腰部までなだらかにひろがり、肩部は内傾する。 ○頸部は屈曲し、下位は内傾、上位はほぼ直立する。口縁部は水平近くに外反する。 ○口縁端部は上・下に肥厚する。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○内面頸部はナデ。 ○肩部はていねいに指押え。 ○腰部から底部までナデ仕上げ。 ○外面全面に自然釉。 ○肩部から底部まで押印文。	○粗 ○灰色N7/。 ～ 黒褐色3/2

ＳＥ06・7（第28図，図版四十七・四十八）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A4	271	○13.6 ○ 4.2 ○ 5.0 ○30.9 ○70%(残)	○丸底からほぼまっすぐひろがる体部に口縁部が屈折して立ち上がる。(厚さは体部＞底部) ○口縁端部は内傾して沈線(幅1㎜)。 ○高台は断面三角形～逆台形、底部と同じぐらいの出っぱり。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押えの上に、口縁部から体部上位までミガキ(1㎜)。 ○体部内面はナデの上に粗いミガキ(0.5～1.5㎜、17条) ○見込みはナデの上に同心円文(1.5㎜、3重)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒を極少量含む。 ○灰白色N7/。 ヘラミガキは灰色N6/。
		272	○12.8○ ○ 4.3 ○ 2.5 ○33.6 (径高指数) ○完形	○(271)と同じ。	○口縁部内端、外面を横ナデ、外面はその上に粗いミガキ(1㎜)。 ○体部外面は底部まで指押え。 ○体部内面はナデの上にやや粗いミガキ(1～1.5㎜、25条) ○見込みはナデの上に同心円文(0.5～3㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、白色微砂粒を少量含む。 ○暗灰色N3/。 ○炭素吸着にムラあり。
	小皿 a3	273	○ 8.1 ○ 1.45 ○80%(残)	○平底から口縁部が屈曲して外上方へ伸びる。(厚さは体部＜底部) ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面～見込みにかけて横ナデ。 ○見込みはナデの上にジグザグ状の平行線(1～1.5㎜)。 ○底部外面は指押え。	○精緻、黒色微砂粒を極少量含む。 ○灰色N6/。
	小皿 c3	274	7.8 ○ 1.35 ○45%(残)	○丸味をもつやや不安定な底部から、口縁部が外反する。(厚さは体部＜底部) ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○見込みはナデの上にジグザグ状の平行線(0.5㎜)の暗文。 ○底部外面は指押え。	○精緻、黒色微砂粒を少量含む。 ○灰白色N7/。 ○内面は炭素吸着にムラ。
輸入磁器	青磁碗	275	○不明 ○ 4.0(現) ○ 4.2	○厚い平底から内弯しながら立ち上がる体部。 ○高台は断面方形。幅は不均一。	○高台まで施釉。 ○底部外面、畳付部はヘラ削り。 ○体部にヘラによる蓮弁文。	○精良。 ○素地、灰白色N8/。 釉、オリーブ色。
土師器	小皿 b1	276・277	○ 7.9(平) ○ 1.35(平) ○30%(残)	○丸底気味の底部から屈曲して口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部はつまみ上げ風。	○口縁部内外面～見込み半ばにかけて横ナデ(右廻り) ○見込みはナデ。 ○外面底部は指押えかナデ。	○精緻、角閃石、白色微砂粒、くさり礫を含む。 ○(278～280)浅黄橙色7.5YR8/3～8/4。 ○(276)灰白色7.5YR8/1。 ○(277)浅黄色2.5Y8/3。 ○(281)灰白色2.5Y8/2。
	小皿 b3	278・279	○ 8.2(平) ○ 1.15(平) ○65%(残)	○中央部が少し上げ底気味の底部からなだらかに内弯しながら口縁部につづく。 ○口縁端部は丸く納める。		
	小皿 b4	280	○ 8.6 ○ 1.0 ○45%(残)	○平底から屈曲して口縁部が外上方へ伸びる。底部が肉厚。 ○口縁端部は丸く納める。		
	中皿 b1	281	○12.6 ○ 1.8 ○15%(残)	○小皿(b1)と同じ形態。		
須恵器	捏鉢	282・283	○計測不能 ○小片	○直線的に開く体部から口縁部につづく。 ○口縁端部は下方に少し肥厚する(282)。 ○口縁端部は断面三角形(283)。	○口縁部内外面～体部外面は横ナデ。 ○体部は斜めにナデ。 ○口縁外端面に自然釉。	○やや粗、白・黒色の砂粒を含む。 ○明青灰色5PB7/1。 ○口縁端面は暗青灰色5PB4/1。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A_{2-2}	284	○15.0(復) ○ 3.0(現) ○不明	○底部を欠く。 ○(271)と同じ形態でやや大きい。	○口縁部を横ナデ。 ○体部内外面を粗いミガキ。	○精良、白色微砂粒。 ○灰色N5/。
土師器	羽釜	285	○ 4.6(現) ○ 2.2(現) ○不明	○底部を欠く。 ○肩部に水平方向の鍔が付き口縁部は内方に向く。 ○口縁端部はやや肥厚する。	○(285)口縁～体部の内外面を横ナデ。 ○(286)口縁～鍔部下まで横ナデ。体部外面を削り、内面をヘラ状工具でナデ。	○精良、微砂粒。 ○灰白色2.5Y8/2。
		286	○37.6(復) ○ 9.0(現) ○不明			○粗、白色砂粒。 ○橙色5YR6/6。

ＳＫ22（第29・30図，図版四十九～五十四・六十九の１）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A_{2-2}	287	○15.9(復) ○ 3.3(現) ○不明 ○25%(残)	○底部を欠く。体部は内弯しながら立ち上がり少し屈曲後、口縁部が外反する。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え、掌紋が残る。 ○中位にやや密なミガキ（1㎜）。 ○内面はナデの上にやや粗いミガキ（1.5㎜、28条）。	○精緻。 ○灰色N5/。
		288	○15.0(復) ○ 3.6(現) ○不明 ○20%(残)	○底部を欠く。体部は(287)と同じ形態。(沈線の幅は1㎜)	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。口縁部から体部中位まで粗いミガキ（1㎜）。 ○内面はナデの上にやや粗いミガキ。（1㎜、15＋α条）	○精緻。 ○灰色N5/。
		289	○14.5(復) ○ 4.2(現) ○不明 ○15%(残)	○底部を欠く、体部は(287)と同じ形態。(沈線の幅は1㎜) ○口縁部はやや肉薄になる。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。口縁部から体部中位まで粗いミガキ（1㎜）。 ○体部内面ナデの上にほぼ密なミガキ（0.5～1㎜）。	○精緻、黒色微砂粒、くさり礫を含む。 ○灰色N4/。
		290	○14.2(復) ○ 3.9(現) ○不明 ○30%(残)	○底部を欠く。体部から口縁部まで内弯しながらそのままつづく。 ○口縁端部は内傾し沈線をもつ（2㎜）。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押え、口縁部から体部中位までやや密なミガキ(0.5㎜)。 ○内面はナデの上にほぼ密なミガキ（0.5～1.5㎜、30条）。	○精緻、白色微砂粒、くさり礫を含む。 ○灰色N5/。 ○外面に重ね焼き痕。
	椀 A_3	291	○14.5 ○ 4.8 ○ 4.85 ○33.1 （径高指数） ○完形	○やや丸底の底部から体部は内弯しながら立ち上り、少し屈曲後口縁部が外反。 （厚さは体部＜底部） ○口縁端部は内傾し沈線(幅は1㎜)。 ○高台は断面三角形。 ○底部は高台よりとび出る。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押え、掌紋がみられ、口縁部から体部上位まで粗いミガキ（1㎜）。 ○体部内面は縦方向にナデの上にやや粗いミガキ（1㎜、21条）。 ○見込みに一定方向のナデの上に、同心円文（1～1.5㎜、3重）。 ○高台はナデつけ。	○精緻、くさり礫を少し含む。 ○灰白色2.5Y8/2。 ○炭素吸着なし。
		292	○14.5 ○ 4.5 ○ 4.7 ○31.0 （径高指数） ○70%(残)	○丸底から体部はゆるやかに内弯し、口縁部までそのままつづく。 （厚さは体部＝底部） ○口縁部は上端面をつくり沈線をつける。(ところによっては2重になる。)	○口縁部内外面を横ナデ。外面に粗いミガキ（1㎜）。 ○体部外面はナデ。 ○体部内面はナデの上にミガキ（1㎜、18条）。 ○見込みはナデの上に同心円文(0.5㎜)。 ○高台はナデつけ。 ○底部はナデによる凹凸が残る。	○精緻、白・黒色微砂粒、くさり礫を含む。 ○炭素吸着の見込みのみ暗灰色N3/。 ○その他は灰白色2.5Y8/1。
		293	○14.4 ○ 4.6 ○ 5.4 ○33.2 （径高指数） ○95%(残)	○(291)と同じ形態。 （厚さは体部＜底部） （沈線の幅は1㎜） ○高台は低い断面三角形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面は指押え、口縁部から粗いミガキ（1㎜）。 ○内面はナデの上に粗いミガキ(0.5～1㎜、20条)。 ○見込みに同心円文（1㎜、4.5重）。 ○高台はナデつけ。	○精緻。 ○灰白色10YR8/2。 ○炭素吸着が外面は黒斑状になる。 ○外面体部中位に叩き目。 ○体部外面はザラッとしている。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀	294	○14.3 ○ 4.6 ○ 5.3 ○32.2(指数) ○完形	○(291)と同じ形態。 (厚さは体部<底部) (沈線の幅は1.5㎜)	○口縁部内端、外面を横ナデ。外面に粗いミガキ(1㎜)。 ○体部外面を指押え(右廻り)、掌紋が残る。 ○内面は粗いミガキ(1.5㎜、19条)。	○精緻。 ○灰黒色。
		295	○14.7 ○ 4.5 ○ 5.0 ○30.6 (径高指数) ○45%(残)	○(291)と同じ形態。 ((厚さは口縁部<体部<底部) (沈線の幅は1㎜)	○口縁部内端、外面を横ナデ。外面に粗いミガキ。 ○体部外面に指押え、掌紋。 ○体部内面はナデの上に粗いミガキ(1㎜、20条)。 ○高台はナデつけ。	○やや粗、黒色砂粒、くさり礫を含む。 ○灰色N5/。 ○炭素吸着にムラがある。
		296	○14.3(復) ○ 4.35 ○ 5.5 ○30.4 (径高指数) ○40%(残)	○(291)と同じ形態。平底。 (厚さは体部≦底部) (沈線の幅は1～1.5㎜)	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面は指押えの上にナデ、口縁部外面から体部中位まで粗いミガキ(1㎜)。 ○内面はやや粗いミガキ(2㎜、20条)。 ○見込みは同心円文(1.5㎜、2.5重)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、白色微砂粒、くさり礫を含む。 ○灰白色2.5Y8/2。 ○炭素吸着にムラあり。 ○体部外面はザラっとしている。
		297	○14.3 ○ 4.35 ○ 5.25 ○30.4 (径高指数) ○80%(残)	○平底で(291)と同じ形態。 (厚さは口縁部<体部<底部) (沈線の幅は1～1.5㎜)	○口縁部内外面を横ナデ。外面を細かくミガキ。 ○体部外面を指押え。 ○体部内面はやや粗いミガキ(0.5㎜、24条)。 ○見込みは同心円文(0.5～1㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。 ○底部はナデによる凹凸が残る。	○精緻。 ○灰色N6/。 ○外面に重ね焼き痕
		298	○14.7(復) ○ 4.3(現) ○不明 ○35%(残)	○底部を欠く。体部は(291)と同じ形態。 (沈線の幅は2㎜)	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面をナデの上に、口縁部から体部下位まで粗いミガキ(0.5㎜)。 ○内面は粗いミガキ(0.5～1㎜、18＋α条)。	○精緻、くさり礫を少量含む。 ○灰色N5/。 ○外面に火ぶくれをもつ。
	A_3	299	○14.35(復) ○ 2.6(現) ○不明 ○20%(残)	○体部の下部～底部を欠く。 ○体部から口縁部まで少し内弯しながら外上方に伸びる。 ○口縁部は内傾し、沈線をもつ(1.5㎜)。	○口縁部内外面～内面体部上位まで横ナデ。 ○体部外面を指押え、口縁部から体部上位にかけ粗いミガキ(1㎜)。 ○体部内面はナデの上に粗いミガキ(1～1.5㎜)。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰白色10YR8/1。 ○炭素の吸着がない。
		300	○13.8 ○ 4.5 ○ 4.2 ○32.6 (径高指数) ○60%(残)	○やや丸底で形態は(291)と同じ。口縁部にいくに従い肉厚。 (厚さは本部>底部) (沈線の幅は1.5㎜) ○高台は断面三角形。	○口縁部内外面を横ナデ。外面を粗いミガキ(1㎜)。 ○体部外面は指押え。 ○内面はナデの上にやや粗いミガキ(1㎜24条)。 ○見込みはナデの上に同心円文(2～3㎜)の暗文。 ○高台は雑なナデつけ。 ○底部はナデによる凹凸が残る。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰色N5/。 ○体部外面はザラッとしている。
		301	○13.8 ○ 4.6 ○ 5.1 ○33.3 (径高指数) ○80%(残)	○(291)の形態と同じ。 (厚さは体部≒底部) (沈線の幅は1㎜) ○底部は高台と同じ高さ。	○口縁部内外面を横ナデ、外面をやや密なミガキ。 ○体部外面は指押え、掌紋が残る。 ○内面はナデの上にやや粗いミガキ(1～1.5㎜、23条)。 ○見込みはナデの上に同心円文(1～2.5㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰色N5/～灰白色N8/。 ○炭素吸着が一部分は不充分。
	椀	302	○14.0(復) ○ 2.5(現) ○不明 ○10%(残)	○体部下半～底部が欠損。 ○体部から口縁部まで外上方にまっすぐ開く。 ○口縁端部に沈線(2㎜)。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○外面体部は指押え。口縁部下位から体部上位まで細かくミガキ。(0.5㎜)。 ○内面は細い幅のミガキ(0.5㎜)。	○精緻。 ○灰色N5/。
	A_2'	303	○14.0(復) ○ 3.1(現) ○不明 ○10%(残)	○体部下半～底部が欠損。 ○体部から口縁部まで外上方にまっすぐ開く。 ○口縁端部に沈線(1㎜)。	○内外面共風化のため技法は不明。 ○外面にミガキが残る。	○精緻。 ○灰白色N7/。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A	304	○不明 ○ 1.1(現) ○ 4.3 ○底部のみ	○平底。(厚さは体部>底部) ○高台は断面三角形。	○体部下位はナデの上に密なミガキ(1㎜)。 ○見込みは同心円文(1.5㎜)の前文。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○黒褐色10YR3/2。
		305	○不明 ○ 0.9(現) ○ 4.2 ○底部のみ	○丸底。(厚さは体部<底部) ○高台は断面三角形。高台は底部と同じ高さ。	○底部～体部下位外面に指押え。 ○見込みは同心円文(1～3㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N6/。
	椀 B_3	306	○15 (復) ○ 4.7 ○ 4.2 ○31.4 (径高指数) ○完形	○丸底気味の底部から体部は内弯しながら伸び、口縁部までつづく。(厚さは体部=底部) ○口縁端部は丸く納める。 ○高台は中心がずれ片寄った位置に断面台形を呈す。	○口縁部内外面から体部内面下半部にかけて横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○内面は見込みへの暗文に交差して幅の広いミガキ(2～3㎜、12条)。 ○体部上面から見込みへ平行線(1～1.5㎜)の暗文。 ○高台は幅広くナデつけ。	○粗、粗い砂粒を含む。 ○灰黒色。 ○内外面の半分ぐらいに重ね焼き痕。 ○外面に叩き目か?
		307	○14.9 ○ 4.6 ○ 4.0 ○30.8 (径高指数) ○90%(残)	○形態は(306)に似るが、口縁部が少し屈曲する。(厚さは体部<底部) ○口縁端部はやや肉厚になり、丸く納める。 ○高台は断面逆台形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○内面はナデの上に粗いミガキ(1～2㎜、10条)。 ○見込みは平行線(1㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、白色微砂粒を含む。 ○炭素吸着は内外面の中央部のみ。 ○灰白色7.5Y8/1。
		308	○14.8(復) ○ 4.4 ○ 4.65 ○29.7 (径高指数) ○20%(残)	○(307)と同じ形態。(厚さは口縁部<体部>底部) ○高台は偏平な台形。	○口縁内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○体部内面はナデ、見込みへの暗文と交差するミガキ(2㎜、6条)。 ○体部上位～見込みに平行線(1.5㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、白・黒色微砂粒、くさり礫を含む。 ○灰色N4/。
		309	○15.8 ○ 4.5 ○ 4.25 ○28.5 (径高指数) ○80%(残)	○(306)と同じ形態であるが肉厚。(厚さは口縁部<体部>底部) ○高台は断面台形。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○体部内面はナデ、見込みの暗文と交差するミガキ(2～3㎜、5条)。 ○体部中位から見込みに平行線(1.5～4㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○黒色～灰白色。
		310	○15.4 ○ 4.3 ○ 4.3 ○28.0 (径高指数) ○80%(残)	○(306)の形態に似るが、口縁部がやや開き気味。(厚さは口縁部≧体部>底部) ○高台は低くく断面逆台形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面を板状工具によるナデ、指押え。 ○内面は雑な幅の広いミガキ(1～6㎜)。 ○体部中位～見込みに平行線(1～3㎜)の暗文。	○精緻、微砂粒を含む。 ○灰黒色。
	小皿 a_1	311	○ 9.0 ○ 1.6 ○完形	○少し上げ底気味の底部から口縁部が少し屈曲して口縁部が外上方に立つ。 ○口縁端部は外傾する。	○口縁部内外面を横ナデ。内面は横方向にミガキ。	○やや粗。 ○にぶい橙色7.5YR6/4 ○炭素吸着がない。
	小皿 b_3	312	○ 7.2(復) ○ 1.4(現) ○20%(残)	○やや丸底から屈曲して口縁部が外上方へ立ち上がる。 ○口縁端部はわずかに外方を向く。	○口縁部内外面～見込みにかけて横ナデ。 ○見込みはナデの上に平行線(1～1.5㎜)の暗文。 ○底部外面はナデ。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰色N6/。
	小椀	313	○ 8.5 ○ 1.7(現) ○55%(残)	○(301)を小型化した形態。高台はつかない。(厚さは口縁部>体部>底部) ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部～底部外面を指押え。 ○内面はナデの上に全面にわたって幅の広いミガキ(1～3㎜)。	○やや粗、白・黒色砂粒を含む。 ○炭素吸着は底部のみ、灰白色10YR7/1他は浅黄橙色7.5YR8/3。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	小椀	314	○ 8.4(復) ○ 2.0(現) ○15%(残)	○丸底から、口縁部が少し屈曲して外方にひらく。(厚さは体部≦底部) ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ、内面に横方向のミガキが少し残る。 ○底部外面を指押え。 ○見込みは切れ切れの暗文(2㎜)。	○やや粗、白色砂粒、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰白色10YR8/1。
土師器	小皿 b_2	315〜318	○ 8.5(平) ○ 1.4(平) ○※	○平底から口縁部まで内弯しながらつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面〜見込み半ばまで横ナデ。(右廻りにナデを抜く) ○外面底部はナデ、指押え。	○精緻、白色微砂粒、角閃石、くさり礫を含む。 ○(320・323・324)はやや粗。 ○(329・332)は精緻。 ○(330・333・334)はやや精。 ○(331)は粗。 ○灰白色10YR8/2。浅黄橙色7.5YR8/4のものが多い。 ○※ ○(316・318・319・322・323・327・328・331)はほぼ完形。 ○(317・334)は半分以上残。 ○その他は20〜45%(残)。
	小皿 b_3	319〜325	○ 8.2(平) ○ 1.4(平)	○上げ底から内弯しながら口縁部までつづく。底部中央は肉薄になる。 ○底部と口縁部との境に稜をもつものもある。(317・323) ○口縁端部は丸く納めるもの、尖り気味のものがある。		
	小皿 b_4	326・327	○ 8.2(平) ○ 1.7(平)	○平底から口縁部が屈曲し、外上方へ伸びる。 ○口縁端部はつまみあげ風。		
	小皿 b_5	328	○ 8.9 ○ 1.9	○丸底気味から、口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く納める。		
	中皿 b_1	329〜331	○12.0(平) ○ 2.4(平)	○丸底気味の底部から口縁部が上方に立つ。 ○口縁端部はやや尖り気味。		
	中皿 b_2	332	○15.0(復) ○ 2.4	○平底から口縁部までなだらかにつづく。 ○口縁端部はやや尖り気味。		
	中皿 b_3	333	○15.7(復) ○ 2.2	○小皿の(b_3)形態と同じ。 ○口縁端部はやや尖り気味。		
	中皿 b_4	334	○14.0 ○ 2.0	○小皿の(b_4)形態と同じ。 ○口縁端部は丸く納める。		
	羽釜C	335	○29.2(復) ○ 8.0(現) ○不明 ○口縁部20%(残)	○体部から口縁部にかけて強く内弯し、口縁部は短く外折する。端部は丸い。 ○鍔は水平につき、端部は内傾する。	○口縁部内外面〜鍔部周辺部まで横ナデ。 ○体部内面は横方向にハケ目。鍔部以下の体部はヘラ削り。	○粗、白・黒色砂粒、くさり礫を含む。 ○橙色2.5YR7/6。 ○鍔部の下面〜体部に煤付着。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	甕	336	○不明 ○34.5(現) ○30.3(復径) ○体部40%(残)	○少し尖底気味の底部から体部にかけてラグビーボール状の形態をなす。	○体部外面は平行叩き目を斜格子状に施す。 ○体部内面は同心円文の叩き目の上に工具による粗いナデ。	○精、白色微砂粒を含む。 ○黄灰色2.5Y 5/1。

SK37(第31図，図版六十)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 b_2	337〜339	○ 7.9(平) ○ 1.3(平) ○※	○少し丸底気味のものからなだらかに内弯しながらつづく。	○口縁部内外面から見込みにかけて横ナデ。 見込みの中央部はナデ。 ○外底面は指押え、ナデ。	○精緻なものが多い。(339)は粗。 ○浅黄橙色10YR 8/3〜8/4。 ○※ ○(339)は完形。その他は20〜40%(残)。
	小皿 b_4	340・341	○ 7.8(平) ○ 1.05(平)	○平底から口縁部が屈曲し外上方に立つ。 ○口縁端部は丸く納める。(b_2も同じ)		
	杯	342	○10.3(復) ○ 2.3 ○25%(残)	○丸底からなだらかに内弯しながら口縁部までつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○内面はナデ、外面は指押え。 ○見込みの暗文は風化の為不明。	○粗、白色微砂粒、砂粒を含む。 ○灰色N 4/。

SK40(第31図，図版六十)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	台付小皿	343	○ 9.9(復) ○ 3.7 ○6.0(脚径) ○体部25%(残) ○脚部100%(残)	○「ハ」の字形の脚部に、底部からほぼ斜めに開く口縁部。 ○口縁端部は丸く納める。 ○脚端部は外上方を向き、幅は不均一。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○外面は指押え。 ○脚部はナデ。	○精緻、黒色微砂粒、くさり礫を含む。 ○灰白色2.5Y 8/2。

SK46(第31図)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小椀	344	○ 9.8(復) ○ 3.7 ○ 6.7 ○25%(残)	○内弯する体部に口縁部が内方へ立つ。 ○口縁端部は尖り気味。 ○高台は断面三角形で外方に張り出す。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部内外面はナデで平滑。 ○高台は幅広くナデつけ。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○橙色 5YR 6/8。

ＳＫ67（第31図，図版六十）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	中皿 b_1	345	○13.0 ○ 2.7 ○45%(残)	○少し丸底気味の底部から、内弯しながら口縁部へつづく。 ○口縁部は少し外方を向き、端部は内傾する。	○口縁部内外面～見込みにかけて横ナデ。 ○見込みの中央部はナデ。 ○外底面は指押え。	○やや粗、白・黒色砂粒、微砂粒、くさり礫を含む。 ○橙色5YR⁶⁄₈。

各柱穴

ＳＢ11（第31図，図版五十九）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
磁器	青磁碗	346	○15.6 ○ 6.2 ○ 5.8 ○70%(残)	○外面は丸底で厚みのある底部から、外上方に少し内弯しながら立ち、口縁部につづく。 ○口縁端部は丸く納める。 ○高台は内側が接地する断面逆台形。	○内面全面、口縁部外面をロクロナデ。 ○外面体部～高台までロクロ削り。 ○内面～体部外面の中位まで施釉。見込みの周辺部は釉をかきとる。	○精緻。 ○素地、黄灰色5Y⁶⁄₄、釉、オリーブ黄7.5Y⁶⁄₃。 ○貫入がみられる。

ＳＢ189（第31図，図版五十九）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 B_6	347	○11.2 ○ 2.6 ○完形	○丸底から口縁部まで内弯しながらそのままつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○体部内面は一定方向のナデの上に見込みから渦巻状（2～2.5㎜）の暗文。	○粗、白色砂粒を含む。 ○灰色N⁵⁄₁。 ○炭素吸着にムラがある。

ＳＢ207（第31図，図版六十）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 b_4	348	○ 7.9 ○ 1.5 ○完形	○平底から屈曲して口縁部が外反する。ナデで底部の器厚が非常に薄くなるところがある。 ○口縁端部は尖り気味。	○口縁部内外面を横ナデ～見込みにかけて横ナデ。(左廻り) ○見込みはナデ。 ○底部外面は板状工具によるナデか。	○精緻、角閃石、白色微砂粒、くさり礫を少量含む。 ○

ＳＢ327（第31図，図版六十）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A_2	349	○15.0 ○ 4.8 ○ 4.4 ○32.0 （径高指数） ○40%(残)	○少し丸底気味の底部に内弯する体部から口縁部が外上方を向く。 （厚さは口縁部＜体部＞底部） ○口縁端部はほんのわずか内傾し、沈線（1㎜）をよつ。 ○高台は断面逆台形。つぶれ気味。	○内外面共風化のため技法は不鮮明。 ○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はやや密なミガキ（1㎜？条）。 ○見込みの暗文は不明。 ○高台はナデつけ。	○精緻、白・黒色微砂粒、くさり礫を含む。 ○灰色N⁵⁄₁。
器	椀 A_3	350	○14.0 ○ 4.0(現) ○不明 ○25%(残)	○底部を欠く。 ○内弯する体部からそのまま口縁部までつづく。 ○口縁部は少し内傾して沈線をもつ。	○内外面共風化のため技法は不鮮明。 ○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○内面はかなり粗い。	○精緻、白・黒色微砂粒、くさり礫を含む。 ○灰色N⁵⁄₁。

ＳＢ332（第31図，図版六十）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 b_4	351	○ 8.8 ○ 1.3 ○60％(残)	○平底から屈曲して口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は少し尖り気味。	○口縁部内外面～見込みにかけて横ナデ。 ○見込み部はナデ。 ○底部外面。	○精緻、角閃石、くさり礫の微砂粒少量含む。 ○灰黄褐色10YR6/2。

ＳＢ387（第31図，図版五十九）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	小椀B	352	○ 7.9 ○ 2.6 ○ 3.5 ○70％(残)	○丸底から内弯しながら体部が立ち上がり口縁端部は丸く納める。 ○高台は断面台形。底部の方が接地する。	○口縁部内外面～体部内面まで横ナデ。体部に渦巻状のミガキ（1～2㎜)。 ○体部外面を指押え。 ○見込みはナデ。 ○高台はナデつけ。	○やや粗、白色砂粒、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰白色2.5Y 7/1。 ○炭素の吸着がない。

ＳＢ468（第31図）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	甕	353	○21.9 ○ 7.2 ○不明	○内傾する体部から「く」の字形に口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面に叩き目。 ○体部内面は指押えとナデ。	○やや粗、白色砂粒、角閃石含む。 ○にぶい橙色7.5YR 6/3。

ＳＢ496（第31図）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	杯	354	○ 9.3 ○ 3.5 ○40％(残)	○やや丸底の底部から少し内弯しながら立ち、口縁部は少し尖り気味になる。	○口縁部内外面～見込みにかけて横ナデ。 ○見込みは仕上げナデ。 ○底部外面は回転ヘラ削り。	○やや粗、白・黒色砂粒を含む。 ○灰白色N 7/。

落ち込み状遺構 2（第32図，図版五十五～五十八）

器種	器形	番号	法・量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
黒色土器	椀	355	○14.25 ○ 5.9 ○ 6.9 ○41.4 （径高指数） ○完形	○平底からゆるく内弯して、体部から口縁部まで直線的に開く。(厚さは体部＞底部) ○口縁端部は丸い。 ○高台は高く外にふんばり出す。	○口縁部内端、外面を横ナデ。 ○体部外面はヘラ削りの上に、口縁部から粗いミガキ。 ○内面は上位を横方向に短かくハケ目、下位は不定方向のハケ目の上に横方向か斜方向にミガキ。 ○見込みはハケ目の上に縦方向のミガキ。	○粗、微砂粒から粗い角閃石、白色砂粒、くさり礫を含む。 ○内面～外面口縁部は黒色。 ○他の部分は橙色7.5YR 7/6。
		356	○計測不能 ○小片	○ほぼ直線的に広がる体部。 ○口縁部は少し外反して立ち、端部の沈線は深く、ていねいに施す。部分的に端部の厚みがちがう。	○口縁部内外面～体部内面にかけて横ナデ。 ○体部内外面を密にミガキ(1.3㎜)。	○緻密、白色微砂粒を含む。 ○黒色N 2/。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A_{2-1}	357	○14.3 ○ 4.4 ○ 5.0 ○30.8 (径高指数) ○30%(残)	○平底から直線的に広がる体部に口縁部が少し屈曲して立つ。(厚さは体部<底部) ○口縁端部は内傾して沈線(1.2㎜)。 ○高台は低くく断面三角形。一周しない。	○口縁部内外面～体部内面上位にかけて横ナデ。 ○体部外面を指押え。口縁部から体部中位にかけて粗いミガキ。 ○内面はやや粗いミガキ(1㎜、24条)。 ○見込みにはナデの上に連結輪状(1㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻。 ○灰色N4/。 ○重ね焼き痕がみられる。
	椀 A_{2-2}	358	○14.9(復) ○ 4.35 ○ 3.85 ○29.2 (径高指数) ○20%(残)	○(357)と同じ。	○口縁部内外面を横ナデ。外面を粗いミガキ(0.5㎜)。 ○体部外面～底部。 ○体部内面はやや粗いミガキ(1.5㎜、22条)。 ○見込みに幅の広い同心円文(3㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N5/。
		359	○14.8(復) ○ 5.0 ○ 6.0 ○33.8 (径高指数) ○20%(残)	○平底から体部は内弯して広がり、口縁部までつづく。 ○口縁部は内傾して浅い沈線(0.5㎜)。 ○高台は断面三角形。	○口縁内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え、中位まで粗いミガキ。 ○体部内面はほぼ密にミガキ(0.5㎜、35条)。 ○高台はナデつけ。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N5/。
	椀 B_6	360	○15.4 ○ 2.55 ○16.6 ○30%(残)	○丸底からゆるく内弯して開く体部。 ○口縁部は肉厚になり、端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は粗ナデ。 ○体部内面はナデの上に粗いミガキ。	○粗、白色砂粒、微砂粒、角閃石を含む。 ○灰白色N8/。
	小皿 a_2	361	○ 9.25 ○ 1.9 ○50%(残)	○平底から屈曲して口縁部が外上方に立ち上がる。 ○口縁端部は丸味をもつ。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○見込みはナデの上に平行線(0.5～2㎜)の暗文。 ○底部外面は粗ナデ。	○精緻。 ○灰色N5/。
		362	○ 9.5 ○ 1.95 (?)	○平底から屈曲して口縁部が外上方を向き立ち上がる。 ○口縁端部は外方を向き少し尖り気味。	○内外面風化のため技法は不明。 ○見込みの暗文は不明。 ○底部外面は指押え。	○精緻、白色微砂粒を含む。 ○灰色N5/。
	小皿 b_2	363	○ 9.6(復) ○ 1.95 ○50%(残)	○中央部が少し上り底気味の底部から屈曲して口縁部が外反する。 ○口縁端部は更に外側を向き、端部は丸く納める。	○口縁部内外面～見込みにかけて横ナデ。 ○見込みはナデの上にジグザグ状の平行線(1.5㎜)の暗文。 ○底部外面は粗ナデ。	○精緻。 ○灰白色N4/。 ○口縁部の一部は炭素吸着がない。
		364	○10.2(復) ○ 1.7 ○30%(残)	○(361)の形態をやや大きくしたもの。	○口縁部内外面～見込みの周縁にかけて横ナデ。 ○見込みの暗文は風化のため不明。(ジグザグ状?) ○底部外面はナデ。	○精緻、白色微砂粒を含む。 ○灰色N6/。
	羽釜	365	○—— ○2.5×2.0 (脚径)	○断面多角形の脚部。	○風化の為不鮮明であるがケズリによる面とりをしている。	○やや粗、白色砂粒を含む。 ○暗灰色N3/。
		366	○—— ○ 8.3(現) ○1.8× 2 (脚径)	○断面多角形の脚部。 ○先端部が少し外方を向く。	○縦方向のヘラ削りの上をナデ。	○やや粗、白色砂粒、角閃石を含む。 ○暗灰色N3/。 内側は炭素吸着なし。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	皿	367	○21.8 ○ 3.0 ○17.2	○平底から屈曲して口縁部が斜上方へ伸びる。 ○口縁端部は内側に少し肥厚し、丸く納める。	○口縁部内外面を指押え。 ○見込みは摩滅しており、成形は不鮮明。ヘラ削りと中心部に向けてのハケ状のものがみられる。 ○外底面はヘラ削りが残るが平滑。	○やや粗、白色微砂粒、砂粒、くさり礫を含む。 ○橙色5YR7/8。
	杯	368	○13.8 ○ 3.3 ○ 7.6	○平底から内弯しながらそのまま口縁部につづく。 ○口縁端部に浅い沈線をつけ、丸く納める。	○口縁部内外面から見込みにかけて横ナデ。 ○内面体部から見込みにかけて放射状の暗文。 ○外面体部中位にヘラ削り。 ○外底面には指押え。	○精緻、白色微砂粒、砂粒、角閃石を含む。 ○橙色5YR6/8。
	甑	369	○28.8(復) ○ 7.2(現) ○不明 ○25%(残)	○外傾する体部からそのまま口縁部までつづく。 ○口縁端部は内傾する。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は縦方向のハケ目。かなり摩滅している。 ○体部内面は指押え、ナデの上にヘラ削り。	○やや粗、白色砂粒、角閃石、くさり礫を含む。 ○浅黄橙色7.5YR8/4。 ○口縁内面は二次焼成のためか黒色。
	羽釜B	370	○21.1(復) ○ 6.4(現) ○口縁部30%(残)	○内傾する体部から「く」の字状に外折する口縁部。 ○口縁端部は上方に少し肥厚し丸く納める。 ○鍔は短かく断面三角形を呈す。	○口縁部内外面～鍔部まで横ナデ。 ○体部は風化のため不明。	○やや粗、白色砂粒を含む。 ○淡橙色5YR8/4。
		371	○32.7(復) ○ 6.4(現) ○15%(残)	○体部はほぼまっすぐ立ち、肩部は内傾して、口縁部が水平近く外反する。 ○口縁端部は内側に巻き込み、貼り付け状にする。 ○鍔は短かくやや下方を向き、斜傾した外端面をもつ。	○口縁部内外面～体部外面は横ナデ。 ○体部内面はナデ。 ○鍔をナデつけ。	○やや粗、白色砂粒、角閃石などを含む。 ○灰白色10YR7/1。
	小皿a	372	○ 9.8 ○ 1.4 ○※	○平底、口縁部を外反させ端部は水平に拡張してから内上方に肥厚。 ○端部は丸く納める。	○口縁部内外面から見込みにかけて横ナデ。 ○底部外面はナデ。	○やや粗。 ○淡黄色2.5Y8/3。
	小皿b_1	373	○ 9.0(復) ○ 2.0 ○25%(残)	○丸底から屈曲した口縁部が短かく外弯する。 ○端部は丸く納める。	○口縁部内外面から見込みにかけて横ナデ。 ○見込みの中央部はナデ。 ○底部外面は指押え、ナデ。	○精緻なものと粗い胎土のものがある。角閃石とくさり礫の微砂粒を中心に白色微砂粒と白色砂粒を含むものがある。 ○浅黄橙色10YR8/3のものが多い。 ○※ ○374・375・378～382・384・386・387・390はほぼ完形。 ○377・385・389は半分以上。 ○その他は20～45%(残)。
	小皿b_2	374～383	○8.15(平) ○ 1.5(平)	○平底(やや丸底)から口縁部までなだらかに内弯しながらつづく。 ○口縁端部は丸く納める。		
	小皿b_3	384・385	○ 8.0(平) ○ 1.15(平)	○中央部が上げ底気味の底部から、なだらかに内弯しながら口縁部につづく。 ○口縁端部は肉薄になる。		
	小皿b_4	386・387	○ 8.2(平) ○ 1.25(平)	○平底から口縁部が屈曲し外上方に立つ。 ○口縁端部は丸く納める。		

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 b_5	388	○ 7.7 ○ 1.3	○平底、底部がやや出張り気味で、屈曲後、口縁部が外上方へ立つ。 ○口縁端部は丸く納める。		
	小皿 c	389・390	○ 7.95(平) ○ 1.55(平)	○平底から屈曲して口縁部が外弯して立ち上がる。 ○口縁端部は丸く納める。		
須恵器	杯蓋	391	○14.5 ○ 5.1	○やや丸味のある天井部の中央につまみがつく。 ○口縁部は外上方を向き端部は尖り気味。 ○口縁部と天井部の境には凹みをつくる。	○天井部は回転ヘラ削り。 ○つまみはナデ。 ○口縁部外面～内面にかけて横ナデ。	○やや粗、白・黒色の砂粒を含む。 ○灰色N 6/～N 4/。(灰かぶり部)
	揑鉢 B	392	○29.0(復) ○ 6.9(現) ○不明 ○小片	○直線的に開く体部から、そのまま口縁部へつづく。 ○口縁部の下端部は肥厚。	○内外面をロクロナデ。 ○体部内面は更に斜めにナデ。	○やや粗、白・黒色の微砂粒、砂粒を含む。 ○明青灰色5PB 7/1。
		393	○27.0(復) ○ 4.4(現) ○不明 ○10%(残)	○斜め上方に開く体部からそのまま口縁部へつづく。 ○口縁部の下端部が肥厚する。	○内外面をロクロナデ。	○やや粗、白・黒色の微砂粒、砂粒を含む。 ○灰色N 7/。 口縁部外面は灰色N 6/。
輸入磁器	白磁碗	394	○17.8(復) ○ 4.15(現) ○不明 ○少片	○内弯しながら外上方に立ち上がる体部から口縁部につづく。 ○口縁部は玉縁状を呈す。 ○底部を欠く。	○口縁部内外面をロクロナデ。 ○体部外面をロクロ削り。 ○体部上位まで施釉。	○精良。 ○素地、灰白色7.5Y 8/1。釉、灰白色7.5Y 8/2。
		395	○17.6(復) ○ 3.2(現) ○不明 ○少片			○精良。 ○素地、灰白色N 8/1。釉、灰白色10Y 8/1。
		396	○不明 ○ 3.3(現) ○ 6.4 ○底部のみ(残)	○平底から体部はほぼ直線的に立ち上がる。 ○高台は低くく、断面短形。	○内面、体部外面の中位までロクロナデ。 ○体部下位と底部はロクロ削り。 ○高台は削り出し。内側を斜めに外側をまっすぐ削る。 ○内面と体部の中位まで施釉。	○精良、黒色微砂粒を含む。 ○素地、浅黄橙色10YR 8/3。釉、灰白色2.5Y 8/1。 ○見込みに目砂。
	青磁皿	397	○ 9.8 ○ 2.0 ○ 4.0 ○40%(残)	○やや上げ底風の底部に稜を残し、体部が低く斜めに伸び、「く」の字形に口縁部が屈曲する。口縁部は徐々に肉厚。 ○見込みは口縁部の屈曲部まで平坦。	○口縁部内外面～見込みをロクロナデ。 ○体部～底部をロクロ削り。 ○見込みに片彫り。	○微砂粒を含む。 ○素地、灰白色2.5Y 8/2。釉、灰白色10Y 7/1。
	青磁碗	398	○不明 ○ 2.35(現) ○ 5.7 ○底部	○厚い平底から、見込みと体部の間に凹みをつくってから立ち上がる体部。 ○高台は低い。	○見込みはロクロナデ。 ○体部から底部外面をロクロ削り。 ○高台は削り出し。 ○底部外面の中ほどまで施釉(畳付部はかきとる)。	○精良、黒色微砂粒を含む。 ○素地、灰白色N 8/。釉、緑灰色7.5GY 8/1。 ○(元 14C)。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	青磁碗	399	○不明 ○ 3.1(現) ○ 5.0 ○底部のみ	○平底からやや内弯しながら大きく開く体部。 ○見込みと体部との境に段をもつ。 ○高台は低くく、断面は逆台形。	○体部内外面～見込みにかけてロクロナデ。 ○底部外面をロクロ削り。 ○高台は削り出し。	○精良、黒色砂粒を含む。 ○素地、白灰色。釉、灰白色2.5GY 8/1。 ○全面に貫入。

ＳＤ03（第33図，図版六十一の２）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	羽釜B	400	○16.7(復) ○ 6.9(現) ○不明 ○口縁部10%(残)	○体部から肩部にかけて内傾し、口縁部が外折する。 ○口縁部は上方に少し肥厚し、尖り気味。 ○鍔は短かく、断面三角形を呈す。	○口縁部内外面～鍔部まで横ナデ。 ○体部内面はナデで平滑に仕上げ。	○やや粗、白色微砂粒、砂粒を含む。 ○浅黄橙色7.5YR 8/4。 ○断面は黒色。

ＳＤ16（第33図，図版六十一の１）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	白磁四耳壺	401	○不明 ○15.0(現) ○18.5(腹径) ○体部25%(残)	○わずかに内弯気味の体部から内傾する。肩部につづく。 ○肩部に耳がつく。	○内外面をロクロナデ。	○微砂粒を含む。 ○素地、灰白色５Y 8/1。 ○釉、明オリーブ灰2.5GY 8/1。

ＳＤ40（第33図，図版六十一の２）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	甕	402	○15.3(復) ○ 9.6(現) ○不明 ○25%(残)	○内弯する体部から内面に「く」の字形に外反する口縁部。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面はハケ目（９条/cm)。 ○体部内面をナデ。	○精緻、白色微砂粒、角閃石を含む。 ○褐色7.5YR 4/3。 ○体部外面は二次焼成をうけ風化。
瓦器	椀A2	403	○14.35(復) ○ 4.7(現) ○不明 ○30%(残)	○底部を欠く。 ○体部から口縁部まで内弯しながら立ち上がる。全体にやや厚手。 ○口縁端部は幅の狭い沈線の痕跡がみられる。(沈線の幅は0.5㎜)	○口縁部内端、外面～体部の上位まで横ナデ。 ○体部外面の中位から下は指押え。口縁部から体部下位まで粗いミガキ（１～1.5㎜)。 ○内面は密にミガキ(0.5㎜、50条)。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N 5/。

ＳＤ52（第33図，図版六十・六十一の２）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀B6	404	○10.3(復) ○ 2.9(現) ○40%(残)	○丸底からなだらかに内弯しながら口縁部までつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面はナデ。 ○内面はナデの上に渦巻状のミガキ（１～２㎜、４重)。	○やや粗、白色微砂粒～砂粒、角閃石とくさり礫の微砂粒を含む。 ○暗灰色N 3/。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	羽釜	405	○15.1(復) ○ 9.3(現) ○不明 ○30%(残)	○内弯する体部から口縁部が少し内傾して立つ。 ○口縁端部は丸味をもつ。 ○短かい鍔をや上向きにつける。 ○体部に脚部をつけた痕跡がある。	○口縁部内外面～鍔部まで横ナデ。 ○体部外面はナデ。 ○体部内面は横方向に粗いハケ目。	○粗、白・黒色微砂粒、白色の粗砂粒、くさり礫を含む。 ○灰色N5/。
須恵器	捏針B	406	○30.1(復) ○ 6.9(現) ○不明 ○10%(残)	○体部から口縁部まで直線的に開く。 ○口縁端部は内上方に丸く肥厚し、内傾する外端面をもつ。	○口縁部内外面～体部外面をロクロナデ。 ○体部内面はナデ。	○やや粗、白・黒色の微砂粒と白色の砂粒を含む。 ○灰色N5/。 ○外面口縁端部は黒緑色の自然釉。 ○口縁端部に重ね焼きの粘土付着。
土師器	小皿c	407	○ 8.3 ○ 1.7 ○完形	○丸底から口縁部が斜めに外上方に大きく開く。 ○口縁端部はやや肉薄になり尖り気味。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○見込みは指押えとナデ。 ○外面は指押え。	○やや粗、(404)と同じ。 ○浅黄橙色7.5YR8/4。
	中皿b_5	408	○11.8(復) ○ 2.3 ○15%(残)	○中央部が上げ底になる底部は出張り気味で、屈曲後口縁部が外上方に開く。 ○口縁端部はつまみ上げ、丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○底部内外面はナデか。	○精、微砂粒含む。 ○浅黄橙色7.5YR8/3～8/4。

SD56 (第33図, 図版六十)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀A_{2-2}	409	○14.0 ○ 4.9 ○ 5.2 ○35.0 ○75%(残)	○やや丸底から内弯しながら開く体部に、少し屈曲して口縁部が立ち上がる。(厚さは体部<底部) ○口縁端部は内傾して沈線(幅は1㎜)。 ○高台は断面逆台形。	○口縁部内端、外面を横ナデ。外面を粗いミガキ(1㎜)。 ○体部外面を指押え。 ○体部内面はやや粗いミガキ(0.5～1.5㎜)。 ○見込みはナデの上に同心円文(0.5～1㎜、4重)。 ○高台は雑にナデつけ。	○精微。 ○灰色N4/。 ○内外面に重ね焼き痕。
	椀B_6	410	○10.7 ○ 2.8 ○完形	○丸底からそのまま内弯しながら口縁部につづく。器厚はほぼ均一。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○内面は不鮮明だが渦巻状(2～3㎜)の暗文。	○精、粗い白色砂粒、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N5/。 ○炭素吸着にムラあり。

SD57 (第33図)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀B_{2-1}	411	○15.0(復) ○ 4.15(現) ○不明 ○15%(残)	○内弯しながら立ち上がる体部に少し屈曲して口縁部が開く。 ○口縁部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え、上位に粗いミガキ(1～3㎜)。 ○内面をナデの上にやや密なミガキ(1～2㎜、13条)。 ○見込みはナデの上に斜格子状(1～2㎜)の暗文。	○やや粗、白色砂粒、微砂粒を含む。 ○灰色N5/。
	椀B	412	○19.8(復) ○ 4.8(現) ○不明 ○25%(残)	○ほぼ直線的に体部から口縁部へと開く。 ○口縁端部は丸く納める。	○内外面共風化の為、技法は不明。	○精緻、白色微砂粒を含む。 ○にぶい黄橙色10YR7/4。

ＳＤ58（第34図，図版六十）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A_6	413	○ 9.35 ○ 3.6 ○ 2.9 ○38.5 （径高指数） ○25%(残)	○丸底から内弯しながら体部が高く外上方に伸びる。 ○口縁端部は内傾して浅い沈線(0.5㎜)。 ○高台は低い断面三角形で、底部より出ない。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部内面～見込みまで一定方向のナデの上に渦巻状（1～1.5㎜）の暗文。 ○高台はナデつけ。	○やや粗、白色微砂粒～砂粒、黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N7/。 ○体部内面は炭素吸着が少なく、灰白色5Y8/1。
	椀 B_6	414	○10.5(復) ○ 2.75 ○40%(残)	○丸底からゆるく内弯しながら立ち上がる体部から、口縁部までそのままつづく。口縁部が少し肉薄になる。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面～体部内面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○面はナデの上に渦巻状(1.5～2㎜、3重）の暗文。	○やや粗、白色微砂粒、粗い砂粒を含む。 ○灰白色N4/。 ○内面には炭素の吸着がない。
		415	○11.0 ○ 2.65 ○	○丸底からゆるく内弯しながら立ち上がる体部から、口縁部が少し屈曲して開く。器厚はやや厚く均一。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○内面はナデの上に渦巻状（1～2㎜、4重）の暗文を切れ切れに施す。	○やや粗、白・黒色微砂粒を含む。 ○暗灰色N3/。 ○炭素吸着は口縁部のみ、その他は灰白色7.5Y8/1。
須恵器	揑鉢	416	○32.6(復) ○ 9.4(現) ○不明 ○20%(残)	○体部は少し内弯しながら斜め上方に伸び口縁部につづく。 ○口縁端部は上下に肥厚し、外端面をもつ。	○内外面をロクロナデ。内面はその上に斜方向のナデ。 ○口縁外端面は自然釉。	○やや粗、白色微砂粒～砂粒を含む。 ○灰白色N8/。 ○口縁外端面は灰オリーブ7.5Y5/2～黒色。
土師器	小皿 b_2	417～420	○ 8.05(平) ○ 1.4(平) ○※	○平底から口縁部までなだらかに内弯しながらつづく。 ○口縁端部は丸くなるが尖り気味。	○口縁部内外面から見込み半ばまで横ナデ(右廻りでナデを抜く)。 ○見込みの中央部はナデ。 ○底部外面は指押えとナデ。	○(417・418・423・426～428)は精。 ○(419～422・425)はやや精。 ○(424・429)は粗。 ○浅黄橙色10YR8/3淡黄色2.5Y8/4の(はだ色系)ものが多い。 ○(429)は灰白色2.5Y8/2。 ○※ ○418～420・426はほぼ完形。 ○417・421～423・425・427は半分以上。 ○その他は20～45%(残)。
	小皿 b_4	421～424	○ 7.7(平) ○ 1.5(平)	○平底から屈曲して口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く納めるものとつまみ上げ風のものがある。		
	小皿 c	425～429	○ 8.05(平) ○ 1.5(平)	○平底あるいは少し丸底から口縁部が、外弯気味に大きくひらく。 ○口縁端部は丸く納める。		
	中皿 b_4	430	○ 9.8(復) ○ 1.4	○小皿(b_4)形態と同じ。 ○口縁端部は少しつまみあげる。		○粗、白色砂粒、くさり礫、角閃石、微砂粒を含む。 ○浅黄橙色7.5YR8/4。 ○※ ○20～45%(残)。
	中皿 c	431	○11.6(復) ○ 2.1	○小皿(c)形態と同じ。 ○口縁部は肉厚で、端部は丸く納める。		
輸入磁器	青磁碗	432	○15.8(復) ○ 2.6(現) ○不明	○体部～口縁部まで斜上方に直線的に伸びる。 ○口縁端部は丸く納める。	○体部外面に鎬蓮弁の文様をつける。	○精緻。

ＳＤ63（第34図，図版六十）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 b_1	433	○ 7.9 ○ 1.3 ○完形	○丸底から口縁部までなだらかに内弯しながらつづく。底部は肉厚。 ○口縁部は丸く納める。	○口縁部内外面から、見込みの半ばまで横ナデ。 ○見込みの中央部はナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○精緻、微砂粒を含む。 ○浅黄橙色10YR8/3。
	小皿 b_5	434	○ 7.9 ○ 0.9 ○完形	○平底から屈曲して、口縁部が短かく外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く納める。		○精緻、白色微砂粒を含む。 ○灰色N7/。

包　含　層（第35～37図，図版六十三～六十七）

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小型丸底壺	435	○ 8.3 ○ 4.9 ○ほぼ完形	○丸底に内弯しながらひろがる体部から屈曲して口縁部は外反する。 ○口縁端部は丸く終わる。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部内外面は指押えとナデ。 ○底部外面はナデ。	○やや粗、白色砂粒、角閃石、くさり礫を少量含む。 ○橙色2.5YR6/8。 ○XXVF15a 6層出土(以下同じ)。
	杯	436	○14.7 ○ 3.9 ○30%(残)	○少し丸気味の底部から、体部は斜上方に立ち上がり、口縁部につづく。 ○口縁端部は尖り気味で内外面に沈線をもつ。	○口縁部を横ナデ。 ○体部は風化のため整形不明。	○粗、白色砂粒、角閃石、くさり礫を含む。 ○にぶい橙色7.5YR7/4～褐灰色7.5Y5/1。 ○XXVF15a 6層。
	皿	437	○18.6 ○ 3.3 ○70%(残)	○平底から内弯しながら立ち上がる体部に口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面の上部は横ナデの上を指押え。下部は横方向にヘラ削り。 ○体部内面はミガキの上に暗文。 ○底部内外面を不定方向のナデ。	○やや粗、白色砂粒、白・黒色微砂粒、くさり礫を含む。 ○橙色2.5YR6/8。 ○XXVF 5 a 6層。
	杯	438	○21.55(復) ○ 4.3(現) ○25%(残)	○平底から少し内弯しながら外上方に立つ体部に口縁部が少し外反してひらく。 ○口縁端部は内上方に肥厚し内傾する面をもつ。	○口縁部内外面と内面体部を横ナデ。 ○体部外面は横方向への細い幅のミガキの上に、斜めのミガキ。 ○底部外面をヘラ削り。 ○体部内面に暗文、見込みに螺旋状の暗文。	○精、白色微砂粒、角閃石、くさり礫の微砂粒を含む。 ○橙色5YR7/6～浅黄色2.5YR8/4。 ○XXVF14a 6層。
	丸底壺	439	○16.2 ○12.6 ○15.4(腹径) ○70%(残)	○丸底に大きく内弯しながら立ち上がる体部から「く」の字状に口縁部が外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は縦方向の細かいハケ目。 ○内面は指ナデが残る。	○やや粗、白色砂粒、角閃石、くさり礫の砂粒を含む。 ○浅黄橙色 5 YR8/4。 ○二次焼成をうける。 ○XXVF15a 6層。
	片口鉢	440	○34.8(復) ○11.3(現) ○不明 ○30%(残)	○内弯しながら外上方に立ち上がる体部に口縁部が外反する。 ○口縁端部は上方に肥厚し、外面に沈線をもつ。 ○片口をつくる。	○口縁部は外面を縦方向のハケ目の上に横ナデ。内面は横方向に粗いハケ目。 ○体部外面上位を縦方向にハケ目、下位は横、斜め方向にハケ目。 ○体部内面は同心円の叩き目。	○粗、白色砂粒、角閃石、くさり礫微砂粒を含む。 ○橙色 5 YR7/6。 外面下半分は浅黄橙色10YR8/3。 ○XXVF15a 6層。
	羽釜B	441	○26.7(復) ○ 9.7(現) ○口縁部10%(残)	○内傾する体部から口縁部が外折する。内部に稜をもつ。 ○口縁端部は上方に少し肥厚。 ○鍔はほぼ水平につき端部は丸味をもつ。	○口縁部内外、鍔部まで横ナデ。 ○体部内外面をナデ。 ○体部内面は指押え痕。	○やや粗、白・黒色砂粒含む。 ○浅黄橙色10YR8/4。 ○XXVF14a 6層

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿a	442	○ 9.5 ○ 1.4	○平底から内弯しながら口縁部までひろがる。 ○口縁部は更に外方を向き、端部は丸く納める。	○口縁部内外面から内底面周縁部を横ナデ。 ○外底面に指押え痕がみられる。 ○内面に化粧土。	○やや粗、白色砂粒、角閃石、くさり礫微砂粒を含む。 ○浅黄橙色7.5YR8/3～橙色。 ○XXVF15a 6層。
緑釉	碗	443	○不明 ○ 1.9(現) ○ 6.4 ○底部のみ	○平底からゆるく内弯して体部が立上る。 ○高台は内側が内傾し、端部が段状になる。	○体部外面をロクロ削り。 ○体部内面・底部と高台内外面をロクロナデ。 ○体部下位にヘラによる刻線をもつ。	○精。 ○素地、明青灰色5B 7/1。 ○釉、暗緑色。 ○XXVE14t 6層。
土師器	小皿a	444	○ 9.3 ○ 1.6	○(442)に似る。	○(442)と同じ。	○精、角閃石、くさり礫微砂粒を少量含む。 ○灰白色10YR8/2～褐色5YR7/6。 ○XXV1E 4 t 5層。
	鉢	445	○ 9.4(復) ○ 4.7 ○ 6.6 ○60%(残)	○平底から体部がほぼまっすぐに外上方に立つ。 ○口縁端部は面をもつ箇所もある。	○手捏ね。 ○体部外面指押え。 ○体部内面はヘラ状工具によるナデ。 ○底裏面に木葉痕。	○粗、白色砂粒、角閃石、くさり礫を含む。 ○橙色5YR6/6～にぶい橙色。 ○XXVE17t 5層。
	蓋	446	○20.7(復) ○ 1.3(復) ○25%(残)	○扁平な天井部からわずかに内弯してひろがりながら口縁部につづく。 ○口縁部は丸く納める。	○内面～口縁部外面を横ナデ。 ○外面の天井部を4分割の井桁状に、周縁は6分割(?)にヘラミガキ。 ○内面は風化の為不明瞭だが、螺旋状の暗文の一部がみられる。	○精、白色微砂粒、角閃石微砂粒を少し含む。 ○橙色5YR6/6～灰白色7.5YR8/2。 ○XXVF19t 5層。
	羽釜A	447	○23.0(復) ○ 6.7(現) ○不明 ○口縁部10%(残)	○体部から外開きに立ち上がる口縁部。 ○口縁端部は尖り気味で上端面と外端面をつくる。 ○鍔は水平につく。(途中で折損)	○口縁部外面から鍔部まで横ナデ。 ○口縁部内面はハケ目。 ○鍔部内面は横方向のヘラ成形。	○粗、白・黒色微砂粒、砂粒を含む。 ○にぶい黄褐色10YR 5/4。 ○XXVF 1 t 5層。
		448	○19.1 ○ 6.4(現) ○不明 ○口縁部	○体部からほぼまっすぐに立ち上がる口縁部。 ○口縁端部は丸味をもつ。 ○鍔は水平につき、端部を丸く納める。	○口縁部外面から鍔部まで横ナデ。 ○内面を横方向にハケ目、下部は指押え。	○やや粗、白・黒色微砂粒、黒色砂粒を含む。 ○にぶい橙色7.5YR 6/4。 ○鍔部以下に煤付着。 ○XXVF20a 5層。
	甕	449	○29 (復) ○13.0(現) ○不明 ○35%(残)	○ほぼまっすぐ立つ体部から口縁部が外上方に開く。 ○口縁端部は上方に少し肥厚し、端面をつくる。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○口縁部内面下位は横方向のハケ目。 ○体部外面は縦方向のハケ目。 ○体部内面は横方向へナデ。	○粗、白・黒色砂粒、くさり礫を含む。 ○浅黄橙色7.5YR8/6。 ○XXV1E 3 t 5層。
	ふいご	450	○4.9×4.7(径) ○ 2 (孔径) ○ 6.6(現)	○断面円形ですそひろがりになる。 ○途中で折れる。 ○中心に貫孔。	○外面を指押え。 ○孔はナデ状。 ○先端部は火をうけ赤銅色。	○粗、白色砂粒、くさり礫、角閃石を含む。 ○灰白色7.5Y 8/1～橙色7.5YR7/6。 ○XXF20b 斜面。
須恵器	鉢	451	○不明 ○ 5.8(現) ○ 9.3 ○体底部60%(残)	○厚い円板状の底部から外上方へ直線的に伸びる体部。	○体部外面、底部側面をナデと叩き。 ○体部下位から底部にかけて横ナデ。 ○体部内面をナデ。 ○内底面は剝離。 ○外底面はナデか。	○精、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N 8/。 ○軟質。 ○XXVE15t 7層。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯	452	○13.8(復) ○ 3.6 ○10.8	○平底から屈曲後、体部は少し外方を向き立上がる。 ○口縁端部は丸味をもつ。	○底部内面から体部口縁部内外面を横ナデ。 ○底部外面をヘラ削り。 ○底部内面に仕上げナデ。	○精、黒色の微砂粒を含む。 ○灰白色7.5Y 8/1～灰色7.5Y 5/1。 ○XXVF14 a 6層。
	長頸壺	453	○ 8.7 ○11.5(現) ○不明 ○口頸部のみ	○まっすぐ立つ頸部から大きく外弯しながら口縁部につづく。 ○口縁部はやや肉薄になり、端部は丸く納める。	○口縁部～頸部にかけて横ナデ。 ○頸部外面の下位は削り。 ○口縁部内面に粘土の巻き上げ痕。	○精、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N 8/。 ○口縁部内面、頸部外面下位に灰かぶり。 ○XXVF14 a 6層。
	杯	454	○11.9(復) ○ 4.2(現) ○10.5 ○10%(残)	○平らな底から斜上方にひろがる体部に受部は短かく外方に伸びる。 ○たち上がりは少し内傾する。 ○口縁端部は内傾する面をもつ。	○口縁部内外面、体部内面、外面は受部の下まで横ナデ。 ○底部外面をヘラ削り。	○やや粒、白色砂粒を少量含む。 ○灰色N 6/～5/。 ○XXVF19 a 5層。
		455	○11.0 ○ 4.9(現) ○40%(残)	○平らな底から内弯してひらく体部に、受部は外上方へ伸びる。 ○たち上がりは内傾し、端部は面をもつ。	○口縁部内外面、体部内面、外面は受部の下まで横ナデ。 ○底部外面をヘラ削り。 ○内底面はロクロナデの上に、不定方向のナデと仕上げナデ。	○やや粗、白色砂粒、くさり礫と黒色の微砂粒を少量含む。 ○灰白色N 8/～ 2.5 Y 8/1。 ○底外面にヘラ記号。 ○XXVF20a 5 層。
	蓋	456	○18.4(復) ○ 2.1(現) ○10%(残)	○平らな天井部からゆるやかなカーブを描き口縁部がひらく。 ○口縁内部は丸く、内面のかえりも丸味をもつ。	○天井部、口縁部外面をヘラ削り。 ○天井部、口縁部内面、口縁端部はナデ。	○粗、白色粗砂粒を多く含む。 ○灰白色N 8/。 ○自然釉が緑色。 ○XXVE20 t 5層。
		457	○ 8.6(復) ○ 1.7 ○10%(残)	○中心が落ちくぼんだ天井部から口縁端部が短かく屈曲し、先端部は鈍い稜をもつ。 ○天井部に宝珠つまみ。	○天井部外面をヘラ削り。内面を不定方向のナデ。 ○口縁部内外面は横ナデ。	○やや粗、白色砂粒を少し含む。 ○灰色N 5/。 ○外面に灰かぶり。 ○XXVE14 t 5層。
	杯	458	○ 9.8(復) ○ 3.6 ○7.0 ○20%(残)	○平底から屈曲後、体部は少し外方を向き立ち上がる。 ○口縁端部は丸味をもつ。	○底部内面から、体部、口縁部内外面を横ナデ。 ○底部外面をヘラ削り。	○粗、白色砂粒を含む。 ○青灰色 5 B 5/。 ○XXV1E1 a 5層。
		459	○16.8(復) ○ 4.3 ○10.3 ○15%(残)	○平底から体部はゆるく屈曲して外上方へひらく。 ○口縁端部は丸く納める。 ○高台は断面方形。	○口縁部～体部外面を横ナデ。 ○内底面は横ナデの上を不定方向のナデ。 ○外底面は不定方向のナデ。 ○高台はナデ。	○精、白色微砂粒を含む。 ○灰色N 6/～灰白色N 7/。 ○XXV1E2 t 5層。
		460	○14.2(復) ○ 3.9 ○10.3 ○15%(残)	○平底から体部は斜上方に少しひろがり屈曲後、外傾しながら口縁部につづく。 ○口縁端部は丸く納める。 ○高台は断面が菱形で外方へふんばる。	○口縁部から内底面まで横ナデ。 ○外底面は不定方向のナデ。 ○高台はナデ。	○やや粗、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N 8/～10Y 7/1。 ○XXV1E1 a 5層。
		461	○15.1(復) ○ 4.3 ○11.0 ○45%(残)	○厚い平底から屈曲後、口縁部が外上方に開く。 ○口縁端部は薄くなる。 ○高台は断面が菱形で外方へふんばる。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○内底面はナデ。 ○外底面をヘラ削り。 ○高台は貼り付け後ナデ、外底面に貼り付ける際の爪痕。	○粗、白色砂粒、くさり礫、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰色N 8/。 ○XXVE15 t 5 層

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯	462	○12.4 ○ 8.7 ○ 5.4 ○80%(残)	○やや丸底の底部から体部が屈曲後、わずかに外弯しながら立ち上り、口縁部へつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部～体部内外面を横ナデ。 ○内底部は不定方向のナデ。 ○外底面は風化のため不明。 ○高台はナデ。	○やや粗、白・黒色の砂、微砂粒を含む。 ○灰色7.5Y 5/1～5/1。底部外面は灰白色10Y 8/1。 ○なま焼けで軟質。 ○XXV1E1 t 5層。
		463	○13.7 ○ 3.9 ○ 9.4 ○10%(残)	○平底から屈曲後、体部が外上方に大きくひらく。 ○口縁端部は丸味をもつ。 ○高台は断面方形。	○(459)と同じ。	○精、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N 8/。 ○XXVE14～16 t 断面。
		464	○18.9(復) ○ 4.8 ○13.4 ○20%(残)	○平底から体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部が外上方にひらく。 ○口縁端部は更に外方を向き、先端が尖り気味。 ○高台は外側へふんばり出る。	○(459)と同じ。 ○外底部はヘラ削り(?)。	○やや粗、白・黒色砂、微砂粒、くさり礫を含む。 ○灰色N 7/～8/。 ○XXVE14 t 5層。
	壺	465	○34.5(復) ○ 8.8(現) ○不明 ○10%(残)	○外傾して立ち上がり、口縁部は水平近く屈曲する。 ○口縁端部は上・下に肥厚。 ○頸部に2条の凸帯、波状文、凹線をもつ。	○口縁部内外面～頸部内面を横ナデ。 ○頸部にカキ目。	○やや粗、白色砂粒を含む。 ○灰色N 6/。 ○XXVF19 t 5層。
		466	○13.8 ○ 5.3(現) ○口縁部のみ	○斜上方にひらく口縁部。 ○端部は更に外方を向き面をもつ。	○内外面を横ナデ。	○精。 ○灰色N 7/、断面は灰白色10YR 7/。 ○XXVF15 a 5層。
		467	○不明 ○ 7.0(現) ○ 8.7 ○底部40%(残)	○平底から屈曲後、体部は斜上方に立ち上がる。 ○高台は外向にふんばり、内側が接地する。	○体部内外面～高台裏面まで横ナデ。 ○底部外面、高台内側はナデ。 ○高台は貼り付け。	○やや粗、白色砂粒、くさり礫を少し含む。 ○灰色7.5Y 6/。 ○XXVF15 a 5層。
		468	○不明 ○14.2(現) ○不明 ○40%(残)	○体部から強く屈曲後、頸部は少し外弯しながら広がる口縁部につづく。 ○体部中位に2本の沈線。	○頸部外面は横ナデの上に不定方面のナデ、右上がりのしぼり目が残る。内面は粘土の巻き上げ痕、しぼり目が残る。 ○体部外面の上位と内面を横ナデ、外面の下位をヘラ削り。	○やや粗、白色砂微砂粒を少し含む。 ○灰色N 6/～灰白色N 7/。 ○口頸部、体部下位内外面に灰かぶり。 ○XXV1E t 5層。
	甕	469	○17.4(復) ○ 6.3(現) ○不明 ○口縁部25%(残)	○内傾する体部から「く」の字形に口縁部が外反。 ○口縁端部は先端を尖り気味。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面はかき目の上に格子状の叩き目。 ○体部内面はナデとヘラによる成形。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N 7/。 ○XXV1F1 t 5層。
		470	○19.2(復) ○ 7.8(現) ○不明 ○口縁部20%(残)	○内傾する体部からなだらかに外反する口縁部。 ○口縁端部は凹線文をもつ。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を平行叩き。 ○体部内面を横方向のナデの上に山形のナデ。	○やや粗、白色砂微砂粒、黒色微砂粒を少し含む。 ○灰白色N 7/。 ○XXVF17 a 5層。
	杯	471	○14.6(復) ○ 4.0 ○10.8 ○50%(残)	○厚い平底から屈曲後、口縁部が外上方にひらく。 ○口縁端部は薄くなる。 ○高台は断面が菱形で外方へふんばる。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○内底部はナデ。 ○外底面をヘラ削り。 ○高台は貼り付け後ナデ。	○やや粗、白・黒色微砂粒、くさり礫を少量含む。 ○灰色N 6/。 ○XXVE20 t 3層。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	甕	472	○34.5(復) ○ 5.9(現) ○不明 ○口頸～肩部15%(残)	○内傾する体部から、短く立つ頸部に口縁部が外反する。 ○口縁部は内端に沈線をもつ。	○口縁部内外面、頸部内面を横ナデ。 ○頸部外面は叩きの上を横ナデ。 ○体部外面は叩き。 ○体部内面は不定方向のナデ。	○粗、白色砂、微砂粒、黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N7/、断面は灰白色7.5Y7/1。 ○表土。
	蓋	473	○13.0(復) ○ 3.8 ○30%(残)	○わずかに丸味をもつ天井部から稜を残して、口縁部がわずかに外方を向く。 ○口縁端部はやや凹面をなす。	○口縁部内外面、体部内面、外面は受部の下まで横ナデ。 ○底部外面をヘラ削り。	○やや粗、白色砂粒と黒色微砂粒を含む。 ○(外)灰白色N8/～9/、(内)暗青灰色5B4/1。 ○XXF19b斜面。
	杯	474	○14.7(復) ○ 4.3 ○10.4 ○40%(残)	○平底から体部は斜上方に少しひろがり、屈曲後わずかに内弯しながら口縁部へつづく。 ○口縁部は丸く納める。 ○高台は外側が接地し、内側へ少し内傾しつき出る。	○口縁部から内底面まで横ナデ。 ○外底面はヘラ削り。 ○高台はナデ。	○やや粗、白色砂粒を少しと、微砂粒を含む。 ○灰白色～灰色N5/6。 ○外面に灰かぶり。 ○XXVE14s～t断面。
	鉢	475	○30.0 ○11.8(現) ○10%(残)	○少し内弯しながら外上方に伸びる体部から、口縁部が内側を向いて立つ。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部～体部中位の内外面を横ナデ。 ○体部外面下位は削り。 ○体部内面は不定方向の強いナデ。	○やや粗、白色砂、微砂粒を含む。 ○灰白色7.5Y7/1。 ○体部外面下位に灰かぶり。 ○XXVF11c石溜攪乱。
瓦器	椀 A_1	476	○15.4 ○ 5.2 ○ 5.2 ○33.8 (径高指数) ○完形	○やや丸底気味の底部から少し内弯しながら体部が立ち上がり、口縁部が外反。(厚さは体部≦底部) ○口縁端部は内傾し、沈線(幅は2㎜)。 ○高台は断面逆台形。	○全面共風化のため技法は不明。 ○体部外面に指押えが残る。 ○内面はほぼ密にミガキ。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N8/。風化のため色は薄い。 ○XXV11F4a断面。
	椀 B_6	477	○12.0(復) ○ 3.1 ○25.8 (径高指数) ○70%(残)	○丸底から内弯しながら口縁部までつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部上端と外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え。 ○体部内面はナデの上に渦巻状(2～3㎜、4重)の暗文。	○粗、白色微砂粒、粗砂粒を含む。 ○灰色N5/～銀灰色。 ○床土。
	鉢	478	○35.8(復) ○ 4.3(現) ○不明 ○小片	○直線的に開く体部から口縁部につづく。 ○口縁外端面はやや丸味をもつ。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面はかき目の上をヘラ成形。 ○体部内面はナデ、おもし目をもつ。	○精緻、白色微砂粒を含む。 ○灰色N4/。 ○XXVF11c石溜攪乱。
	羽釜の脚	479	○24.2(現) ○26×25(径)	○断面円形の柱状をなし、先端部にいくに従い肉薄になり、外方を向く。	○本体との接合面に横ハケ目が残る。 ○全面に強いナデ。	○精緻。 ○灰色N5/。 ○XXVF11c石溜攪乱。
土師器	中皿	480	○10.0 ○ 1.65	○平底からなだらかに内弯しながら口縁部がひらく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部内面をナデ。	○やや粗、白色砂粒を極小量、角閃石、くさり礫を含む。 ○灰白色10YR8/2。 ○XXVF18a3層。
	小皿 b_2	481	○ 8.2 ○ 1.5	○平底からゆるく内弯しながら口縁部へつづく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○底部内外面ナデ。	○精緻、各微砂粒を含む。 ○浅黄橙色10YR8/4。 ○XXVF17a斜面出土。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 b_2	482	○ 8.0 ○ 1.4 ○完形	○平底から内弯しながら口縁部がひらく。 ○口縁端部はやや尖り気味。 ○底部は凹凸あり。	○(481)と同じであるが、全体に丁寧な仕上げ。器表面は平滑。	○精。(481)と同じ。 ○にぶい黄橙色10YR 7/4。 ○XXVF17a～b斜面。
	小皿 c	483	○8.15×8.8 ○ 1.5 ○完形	○上げ底から大きく内弯して口縁部がひらく。 ○口縁端はつまみあげる。	○(481)と同じ。	○精。(481)と同じ。 ○浅黄橙色10YR 8/4。 ○XXVF17a斜面出土。
		484	○ 8.3 ○ 1.6	○小さな底からなだらかに口縁部がひらく。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部～外面底部半ばを横ナデ。 ○内面は風化の為不明。 ○底面はうず巻状のナデ。	○精。(481)と同じ。 ○橙色7.5YR 7/6。 ○表土。
	杯	485	○13.7(復) ○ 3.0 ○30%(残)	○わずかに上げ底気味の底部から口縁部が斜上方に伸びる。 ○口縁端部は丸く納める。	○内面全面から口縁部にかけてロクロナデ。 ○底部は糸切り。	○やや粗、白色砂粒、角閃石、くさり礫を含む。 ○にぶい橙色7.5YR 7/4。 ○XXV13a 4層。
緑釉	椀	486	○不明 ○ 2.0(現) ○ 9.2(底径) ○底部10%(残)	○段状の高台。	○内面はナデ。 ○外面はヘラ削り高台。 ○内面～底裏面をナデ。 ○畳付部以外は施釉。	○精、白・黒色微砂粒少量含む。 ○灰色N 7/。 ○XXV1E7t 2層。
輪入磁器	碗	487	○不明 ○ 4.0(現) ○ 5.0 ○底部50%(残)	○平底。 ○体部は内弯して立ち上がり、口縁部につづく。 ○高台は断面方形。	○内面、体部外面をロクロナデ。 ○底部外面はロクロ削り。 ○高台は削り出し。 ○高台の中位まで施釉。 ○全面に貫入。	○精良、黒色微砂粒を含む。 ○素地、浅黄色2.5Y 8/3。 ○釉、明オリーブ灰色5GY 7/1。 ○XXV1F5a 5層。
	白磁皿	488	○不明 ○ 1.6(現) ○ 3.8 ○底部のみ	○口縁部を欠くが(490)と同じ形になると考えられる。器壁はやや薄くなる。 ○平底。 ○体部内面に段をもつ。	○内面と体部外面をロクロナデ。 ○底部はヘラ削り。 ○体部～見込みに施釉。	○精良。 ○素地、白色。 ○釉、灰白色10Y 8/1。 ○XXVF16a 4層。
	青磁皿	489	○11.2(復) ○ 2.1 ○ 4.0 ○25%(残)	○底部は上げ底。 ○体部は底部より鋭く屈曲して、直線的に外上方に伸び、更に屈曲して口縁部となる。 ○口縁部はやや外方を向くが直線的に立ち上がり、端部は丸く納める。 ○見込みと体部内面の鏡に段をもつ。	○内面と口縁部外面はロクロナデ。 ○体部～底部外面はロクロ削り。 ○見込みにはヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文。 ○底部には施釉しない。	○精良、黒・白・赤色微砂粒含む。 ○素地、灰白色N 8/。 ○釉、オリーブ、灰色2.5GY 6/1。 ○XXVE20t 3層。
	白磁皿	490	○10.6(復) ○ 2.0(現) ○不明 ○小片	○ほぼ直線的に開く体部から口縁部につづく。 ○口縁部は丸く納める。 ○底部は平底と考えられる。 ○体部内面に段をもつ。	○口縁部内外面をロクロナデ。 ○体部は施釉。	○精良。 ○素地、白色。 ○釉、灰白色10Y 8/1。 ○XXVE14t 2層。
	白磁碗	491	○不明 ○ 3.0(現) ○ 6.4 ○体底部	○中心部に向ってやや深くなる底部から内弯して立ち上がる体部。 ○高台は高く幅広で外側が接地。	○体部内外面～底部をロクロ削り。 ○高台は削り出し。内側を斜めに外側をまっすぐ削る。 ○体部～見込みまで施釉。	○精良、黒色微砂粒を含む。 ○素地、灰白色7.5Y 8/1。 ○釉、明緑灰色。 ○XXVF17b断面。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	青磁皿	492	○10.7(復) ○ 2.35 ○ 3.9 ○20%(残)	○(489)と同じ。	○(489)と同じ。	○精良。 ○素地、灰白色。 ○釉、淡緑灰色。 ○XXVF11c石溜攪乱。
陶磁器	備前摺鉢	493	○33.6(復) ○ 7.5(現) ○不明 ○口縁部10%(残)	○直線的に開く体部から口縁部が外折する。 ○口縁部は上方に長く拡張し、凹線を2条施す。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部内面はヘラによるおろし目。 ○体部外面はヘラ削り。	○精、粗い白色砂粒を含む。 ○暗紫灰色5RP3/1。 ○XXVF10d攪乱。
		494	○33.6(復) ○ 3.5(現) ○不明 ○口縁部10%(残)	○口縁部のみ残存。(493)と同じ体部か。 ○口縁部は上方に長く肥厚し、凹線を2条施す。下端部にも尖り気味に肥厚。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部内面におろし目。	○やや粗、白・黒色砂粒を含む。 ○極暗赤褐色10R 3/2～3/3、赤色10R 4/6。 ○XXVF12d攪乱。
	常滑甕	495	○不明 ○11.9(現) ○不明 ○小片	○わずかに外弯する頸部から、口縁部が短かく外反する。 ○口縁部は上下に肥厚。	○口縁部～頸部内外面を横ナデ。 ○内面の下位は指押えも残る。	○精良、白・黒色の微砂粒を含む。 ○暗赤褐色10R 3/3～暗赤灰色10R 4/1。 ○XXVF10d攪乱。
	唐津碗	496	○不明 ○ 3.3(現) ○ 4.3 ○底部のみ	○厚みのある平底から内弯して立ち上がる体部。 ○高台は低くく断面台形。	○体部内面、外面をロクロナデ。 ○底部はロクロ削り。	○精良、微砂粒を多く含む。 ○素地、灰白色10YR 8/1。 ○釉、暗黄緑色(外)淡黄色2.5Y 8/3(内) ○XXVE19～20t断面。

B 地 区

包含層(第37図)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	青磁碗	497	○17.45 ○ 4.4(現) ○不明	○わずかに内弯しながら立つ体部から口縁部が短かく外折する。 ○口縁端部は丸く納める。	○内外面をロクロナデ。	○精良、微砂粒を含む。 ○素地、灰白色N 8/。 ○釉、緑灰色。 ○(15世紀雑器)

C 地 区

SK47(第38図, 図版六十八・六十九の2)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A_1	498	○14.75 ○ 5.9 ○ 4.9 ○40.0(径高指数) ○80%(残)	○平底から内弯して立ち上がる体部から少し屈曲後、わずかに外弯する口縁部。(厚さは体部=底部) ○口縁端部は内傾して沈線(幅は2㎜)。 ○高台は厚く断面は逆台形。	○全面風化のため技法は不鮮明。 ○体部内面にかすかにミガキ(1㎜)が残る。	○精緻。 ○灰色N 5/。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A1	499	○15.05 ○ 5.75 ○ 5.05 ○38.3 (径高指数) ○70%(残)	○丸底で体部からの形態は(498)と同じ。(厚さは体部≦底部) ○口縁端部の沈線は浅い(幅は1㎜)。 ○高台は断面逆台形。	○風化のため技法は不鮮明。 ○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は口縁部から粗いミガキ(1.5㎜)。 ○内面は密にミガキ(1㎜、40条)。 ○見込みは同心円文(1㎜)の暗文。 ○高台はナデつけ。	○精緻。 ○灰色N4/。 ○外面に重ね焼き痕。
		500	○15.0 ○ 5.6 ○ 5.2 ○37.3 (径高指数) ○完形	○丸底で形態は(498)と同じ。器壁は厚く、特に底部は肉厚。 ○口縁端部はわずかに内傾し、沈線(幅は1㎜)。 ○高台は断面逆台形。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押えが残る。 ○体部内面はハケ目が部分的に残る。その上にミガキ(1㎜)。 ○見込みの暗文は風化のため不明。 ○高台はナデつけ。	○精緻。 ○灰色N4/。
	椀 A2	501	○15.1(復) ○ 5.3 ○ 5.0 ○35.1 (径高指数) ○20%(残)	○丸底から体部は内弯してそのまま口縁部につづく。(厚さは体部<底部) ○口縁体部は内傾して浅い沈線。 ○高台は断面三角形。	○風化のため技法は不鮮明。 ○口縁部内外面は横ナデ。外面にミガキ。 ○体部外面は下位に少しミガキが残る(1.5㎜)。 ○内面はほぼ密にミガキ。(0.5㎜)。 ○見込みの暗文は不明。	○精緻、白・黒色微砂粒を含む。 ○暗灰色N3/。
		502	○15.3(復) ○ 3.5(現) ○不明 ○25%(残)	○形態は(501)に似る。 ○口縁端部は尖り気味で、浅い沈線(幅は1.5㎜)。	○風化のため技法は不鮮明。 ○体部外面は指押えの上に、口縁部から上位まで粗いミガキ(1㎜)。 ○内面はほぼ密なミガキ(1㎜)。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰白色N5/。
		503	○14.75(復) ○ 4.1(現) ○不明 ○20%(残)	○底部を欠く。形態は(501)と同じ。口縁端部が尖り気味。(沈線の幅は1㎜)。	○風化のため技法は不鮮明。 ○体部外面に指押えが残る。 ○内面は密なミガキ(1㎜、?条)。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N4/。
		504	○15.5 ○ 5.3 ○ 5.7 ○34.2 (径高指数) ○70%(残)	○平底で形態は(498)と同じ。(厚さは体部<底部)(沈線の幅は1.5㎜) ○高台は先端部が外方を向く。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押えの上に間隔の広いミガキ(1㎜)。 ○内面は、上・下部をやや密に、中位は粗いミガキ(1㎜、20条)。 ○見込みの暗文は風化のため不明。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N4/。
		505	○15.0 ○ 4.5(現) ○不明 ○30%(残)	○底部を欠くが形態は(501)と同じ。器壁が全体に薄く口縁部にいくほど肉厚。 ○口縁端部は丸味をもち、沈線を施す(1～2㎜)。	○風化のため技法は不鮮明。 ○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は中位まで粗いミガキ。 ○体部内面を粗いミガキ(0.5㎜)。	○精緻。 ○灰色N5/。
		506	○15.0(復) ○ 4.8 ○ 6.5 ○32.0 (径高指数) ○20%(残)	○丸底。形態は(501)と同じ。(厚さは体部>底部) (沈線の幅は1㎜) ○高台は断面三角形。	○風化のため技法は不鮮明。 ○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面に指押えがかすかに残る。 ○体部内面はミガキ(1㎜)。 ○見込みの暗文は不明。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N5/。
		507	○15.0 ○ 4.5 ○ 4.6 ○30.0 (径高指数) ○20%(残)	○平底。形態は(501)に似る。(厚さは体部>底部) (沈線の幅は0.5㎜) ○高台は断面三角形。	○風化のため技法は不明。	○精緻。 ○灰色N4/。
		508	○14.4(復) ○ 4.2(現) ○不明 ○25%(残)	○形態は(501)に似る。 ○口縁部は肉厚になり、端部に浅い沈線(1㎜)。	○風化のため技法は不鮮明。 ○体部外面は指押え、粗いミガキ。 ○内面は細いミガキ。	○精緻、黒色微砂粒を含む。 ○灰色N4/。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A2	509	○13.1 ○ 4.65 ○ 4.9 ○35.5 (径高指数) ○20%(残)	○やや丸底気味の底部から、体部はほぼ直線的に外上方に伸び、口縁部が少し屈曲して外反する。 ○口縁上端部は外傾する面をもち、内面に細い沈線(0.5㎜)。 ○高台は逆台形。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面を指押え、継ぎ目が残る。 ○体部内面は密にミガキ(0.5㎜、30条)。 ○高台はナデつけ。	○精緻。 ○暗灰色N3/。
	椀 B1	510	○15.0 ○ 5.1 ○ 4.6 ○34.0 (径高指数) ○60%(残)	○平底から丸く内弯する体部が伸び、口縁部は少し屈曲後、内弯する。(厚さは体部≧底部) ○口縁端部は丸く納める。 ○高台は逆台形。(摩滅気味)	○口縁部内外面を横ナデ。特に外面は強くナデ、粗いミガキ(0.5㎜)。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は風化しているが、ミガキは密のようである。 ○見込みの暗文は風化のため不明。	○精緻。 ○灰色N5/。
	椀 B2	511	○14.9(復) ○ 4.6(現) ○不明 ○10%(残)	○内弯する体部から口縁部が少し屈曲後、外反する。 ○口縁端部は丸く納める。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はかすかに暗文が残る程度(1～1.5㎜)。 ○見込みに平行線文(1～1.5㎜)の暗文。	○精緻。 ○灰色N5/。
		512	○16.3(復) ○ 3.8(高) ○不明 ○20%(残)	○内弯しながら伸びる体部の上部が肉厚になり、屈曲して口縁部が開く。 ○口縁端部は少し尖り気味。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデ。	○精緻。 ○オリーブ黒色5Y 3/1。
	椀	513	○不明 ○ 3.2(現) ○ 5.0 ○底部40%(残)	○平底から大きく内弯しながらひらく体部。 ○高台は断面三角形。	○内外面、摩滅のため整形は不明。	○精緻。 ○灰白色N8/。
		514	○不明 ○ 2.3(現) ○ 5.45 ○底部のみ	○丸底。 ○底部の中心よりややずれたところに焼成後穿孔。 ○高台は断面逆台形。	○風化のため、技法は不鮮明。 ○内面は幅の広いミガキ(2㎜)。 ○見込みは一定方向のナデが残る。	○精緻 ○灰色N4/。
	小皿 b1	515	○10.0 ○ 1.8 ○40%(残)	○中央部が少し上り底気味の底部から屈曲して外上方に立ち上がる口縁部。 ○口縁端部は少し尖り気味。	○口縁部内外面の横ナデの上に粗いミガキ。 ○見込みは間隔の広い平行線(1㎜)の暗文。 ○底部は指押えと指ナデ。	○精緻。 ○灰白色7.5Y 8/1～暗灰色N3/。
		516	○ 9.8 ○ 1.7 ○60%(残)	○(515)と同じ形態。	○全体に風化している。 ○口縁内外面を横ナデ。 ○見込みはナデ。暗文は不明。 ○外面底部は指押え。	○精緻。 ○暗灰色N3/。
土師器	羽釜 B	517	○30.0(復) ○ 4.6(高) ○不明 ○口縁部のみ	○内傾する体部から外折する口縁部。 ○口縁端部は内方に巻き込み風にし、内端部が肥厚。 ○口縁部と体部の内面の境界に鋭い稜をもつ。	○口縁部内外面から肩部外面にかけて横ナデ。 ○体部内面は板状工具によるナデ。	○やや粗、白・黒色の砂粒を含む。 ○外面に少し煤が残る。
		518	○29.0(復) ○ 8.0(高) ○不明 ○口縁部20% (残)	○内傾する体部から外折する口縁部。 ○口縁端部は内上方に拡張し、丸味をもつ。 ○鍔はほぼ水平につき、端部は丸い。	○口縁部内外面、鍔部は横ナデ。 ○体部内面は摩滅気味であるが、指ナデが残る。	○粗、白・黒色の砂粒を含む。 ○灰白色7.5YR8/2。 ○鍔部下面に煤が残る。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の消化	備考
土師器	小皿 b_1	519・520	○ 9.55(平) ○ 1.7(平) ○※	○丸底気味の底部から屈曲して口縁部が外上方へ伸びる。	○口縁部外面～見込みにかけて横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押えなど。	○(519～522・525・527・530・532) は精緻。 ○(523・524・526～528・531) はやや粗。 ○浅黄橙色7.5YR8/4が多い。 ○※ ○(520)はほぼ完形。 ○(530)は半分以上残。 ○その他は15～45%残。
	小皿 b_2	521～524	○ 9.0(平) ○ 1.5(平)	○平底から口縁部までなだらかに内弯しながらつづく。		
	小皿 b_3	525～527	○ 8.9(平) ○ 1.3(平)	○中央部が上げ底気味の底部から内弯しながら口縁部につづく。		
	小皿 b_4	528～530	○ 9.2(平) ○ 1.5(平)	○平底から屈曲して口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く納めるもの、やや尖り気味のものがある。(他の皿も同じ)		
	小皿 b_5	531	○ 8.5(復) ○ 1.3	○平底。底部がやや出張り気味で、屈曲後、口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は肉厚で丸く納める。		
	小皿 c	532	○ 9.0(復) ○ 2.0	○丸底気味の底部から口縁部が外反。 ○口縁端部はやや尖り気味。		
	中皿 b_2	533	○12.8(復) ○ 2.1	○小皿(b_2)形態と同じ。		
	中皿 b_3	534・535	○15.6(平) ○ 2.7(平)	○小皿(b_3)形態と同じ。		
	中皿 b_4	536	○15.2(復) ○ 2.4	○小皿(b_4)形態と同じ。		
陶磁器	常滑甕	537	○46.7(復) ○ 9.2(高) ○不明 ○小片	○内傾する肩部から外弯して外上方に開く口縁部。 ○口縁端部は外傾する面をもつ。	○口縁部内外面～体部外面までロクロナデ。 ○内面は指ナデ。	○粗、白色砂粒を含む。 ○褐色2.5Y 3/1～灰白色N 7/。 ○肩部外面に灰釉。

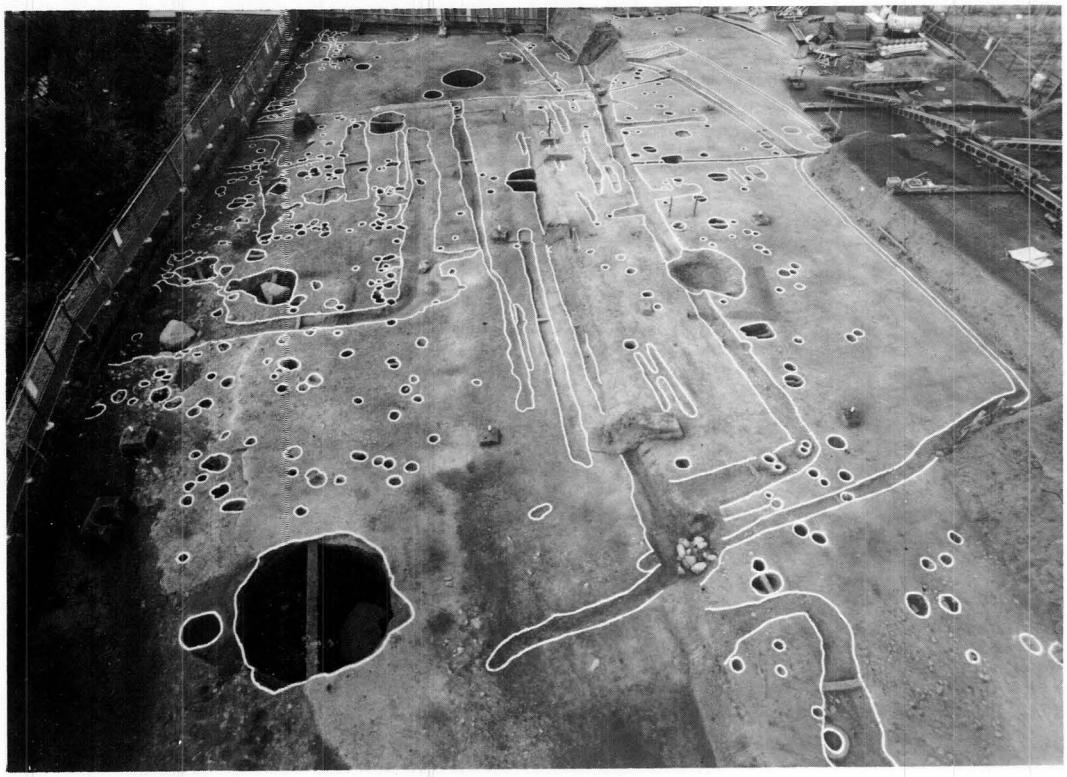
図　　版

図版一　調査地航空写真

（昭和55年撮影）

図版二　A地区遺構

1．A地区遺構全景（航空写真）



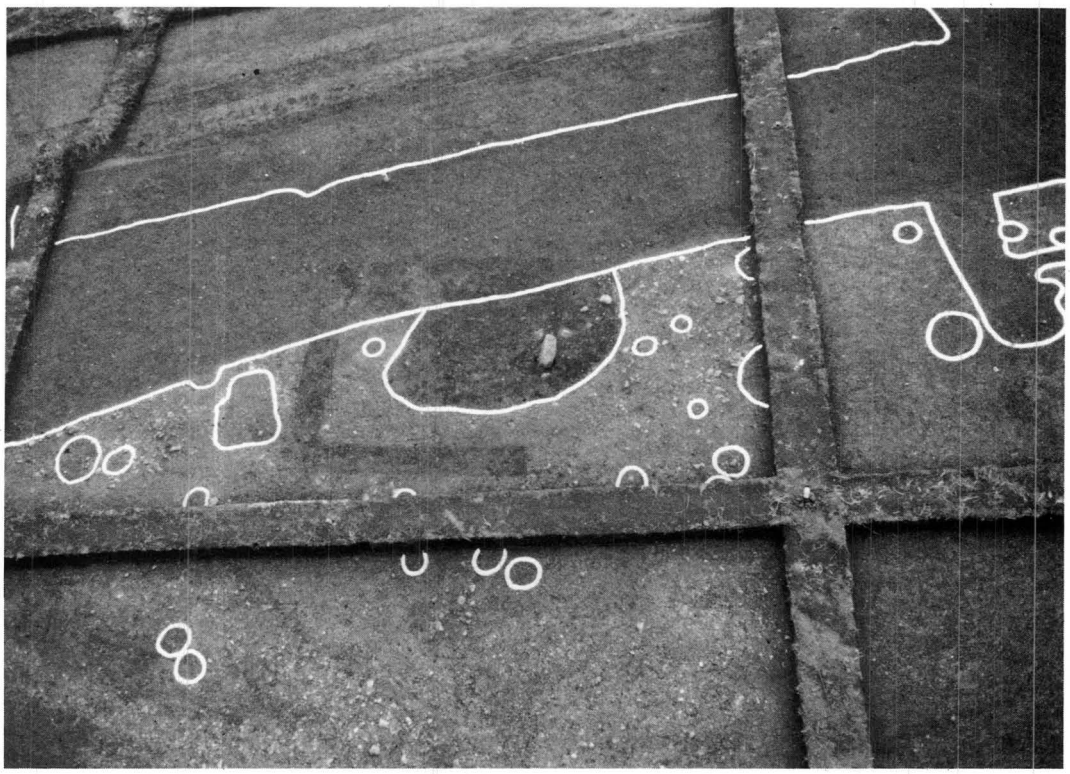
2．A地区遺構全景

図版三　A地区発掘前の状況

1．A地区全景（東から）

2．人力掘削風景

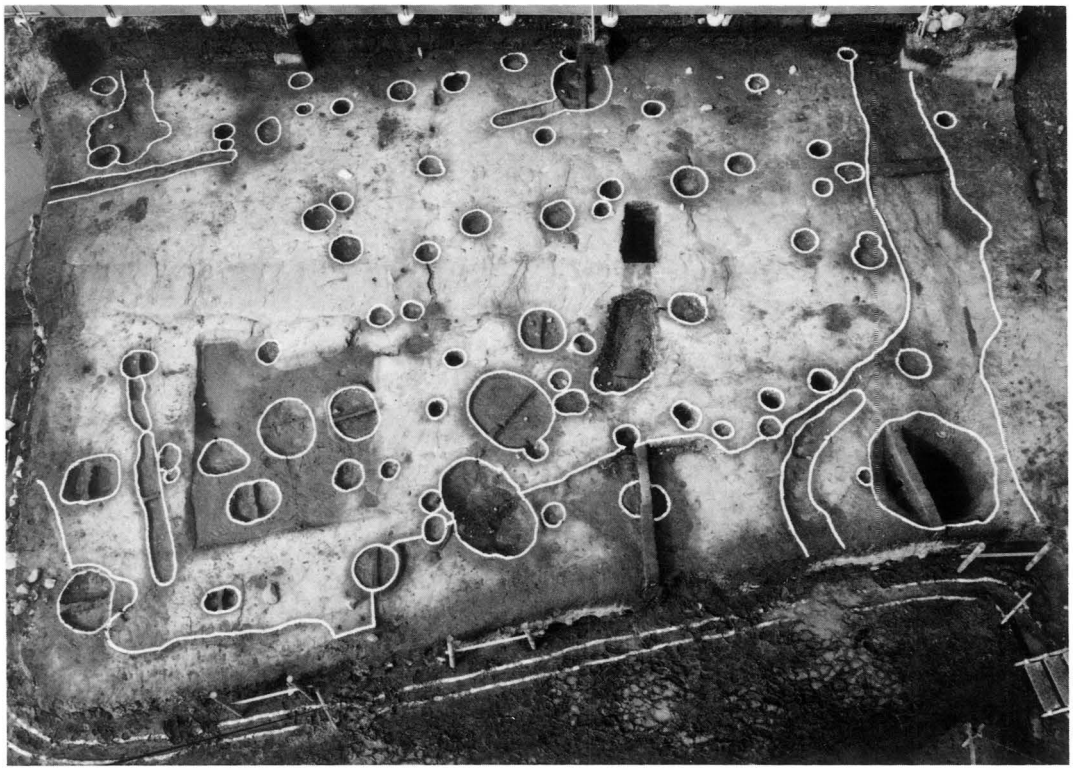
図版四　A地区遺構



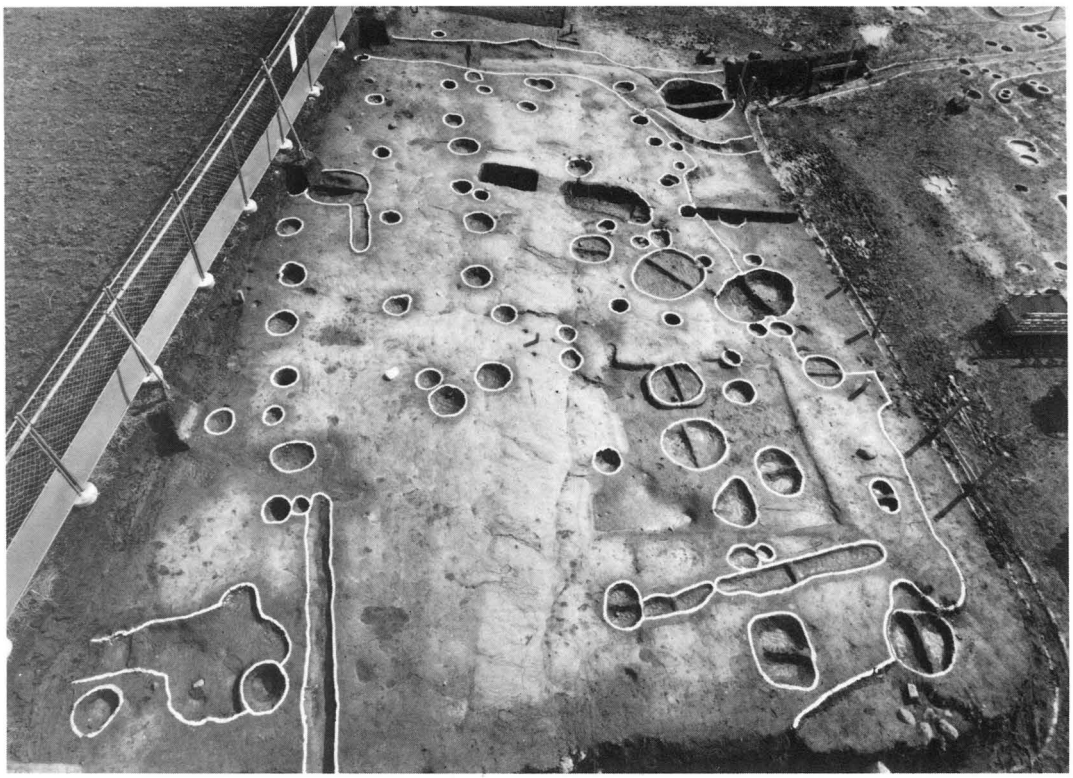
1．ＳＫ22・落ち込み状遺構１検出状況

2．ＳＥ05・落ち込み状遺構２

図版五　A地区遺構

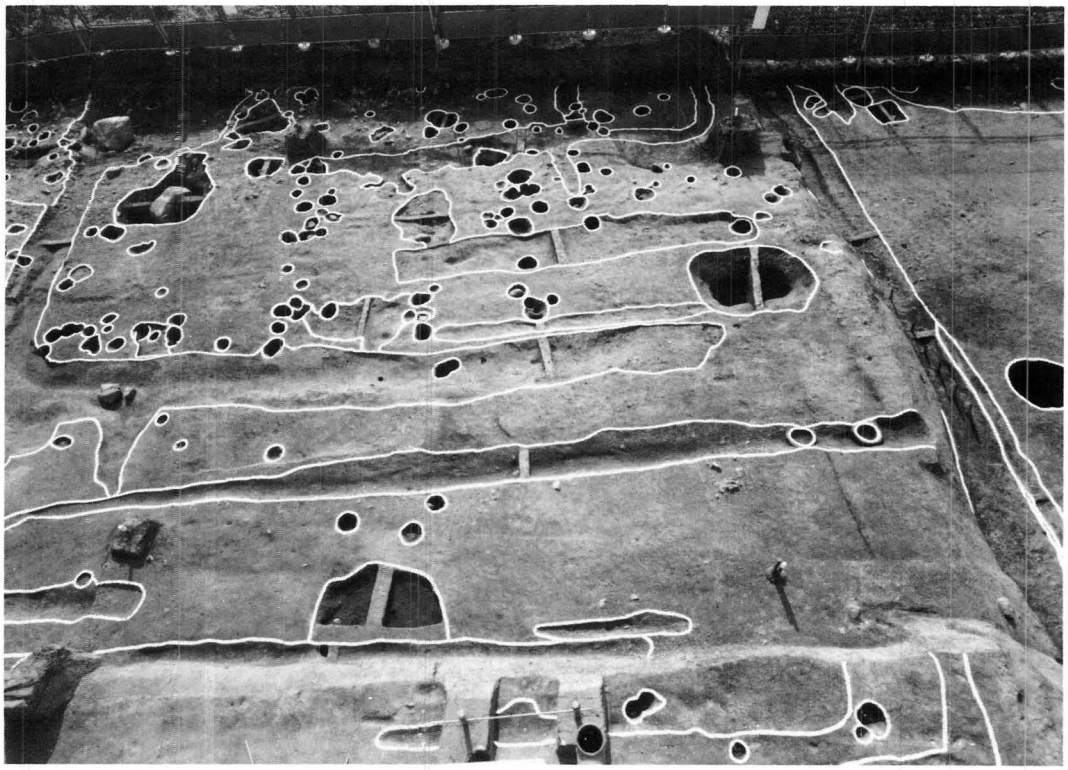


1．建物1・2全景（南から）

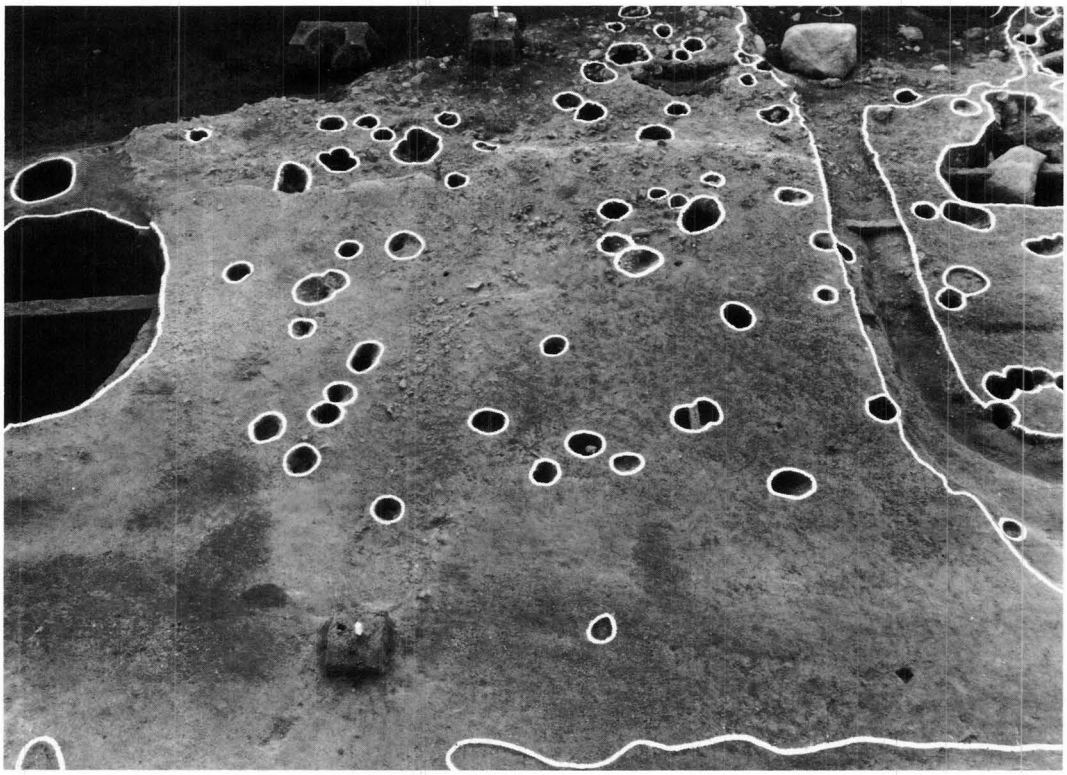


2．建物1・2全景（西から）

図版六　A地区遺構

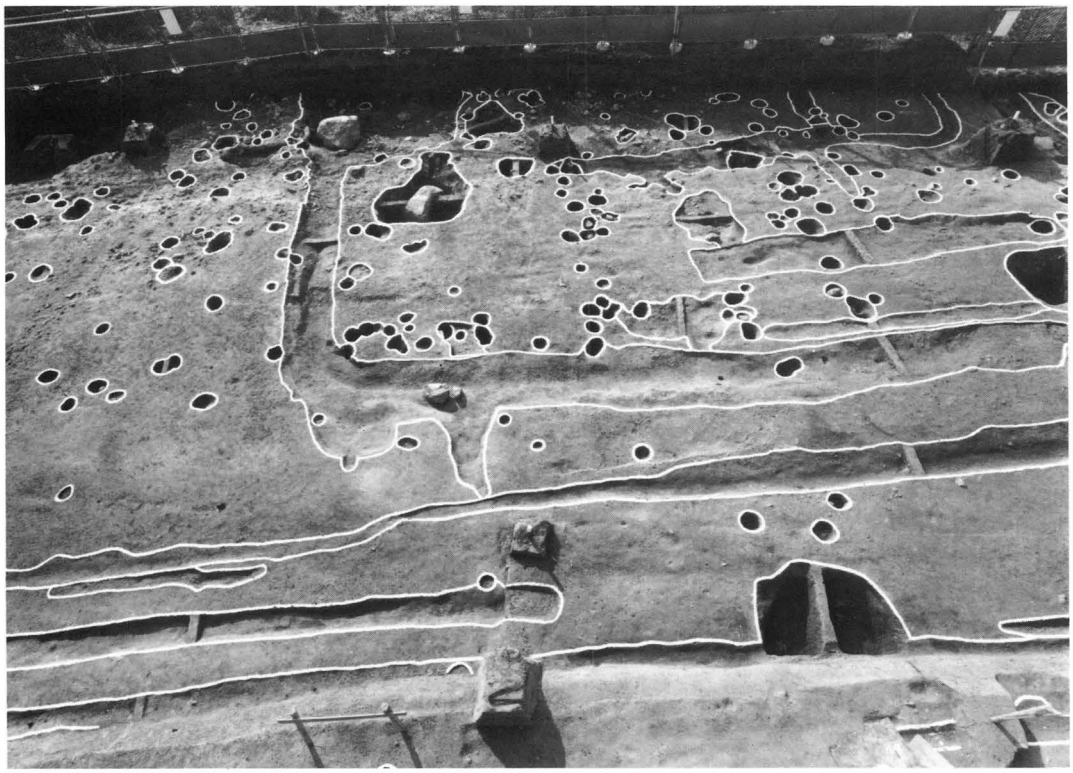


1．柱穴群1（北から）

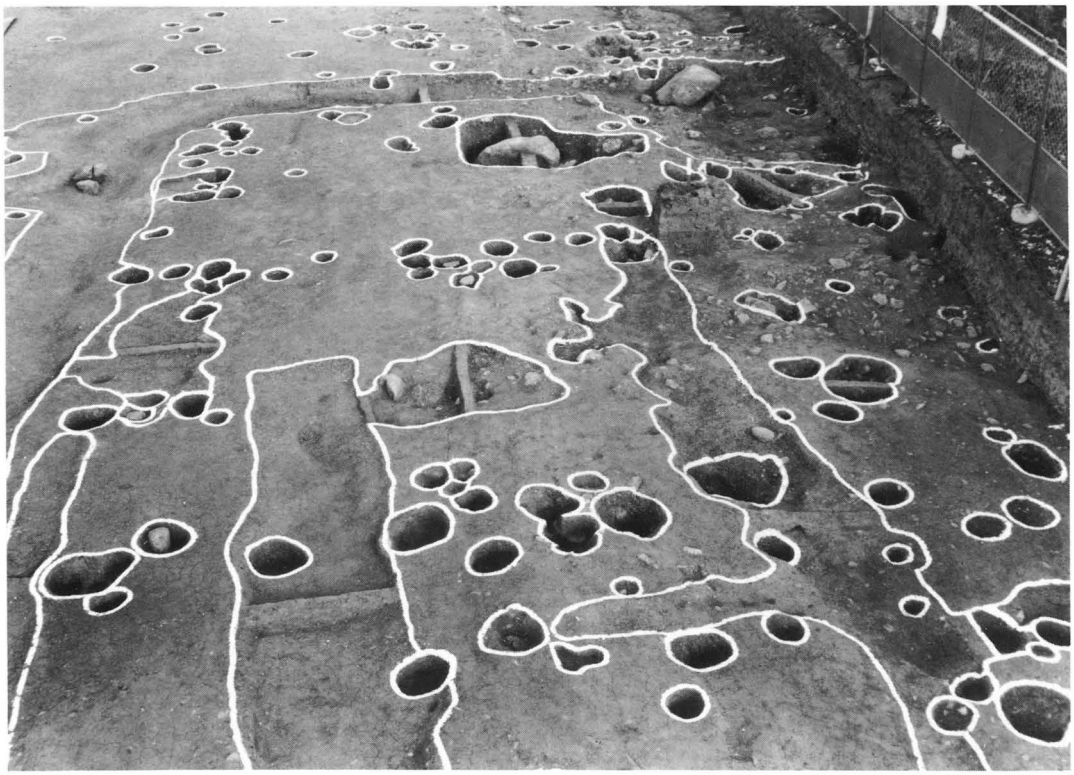


2．柱穴群1（北から）

図版七　A地区遺構

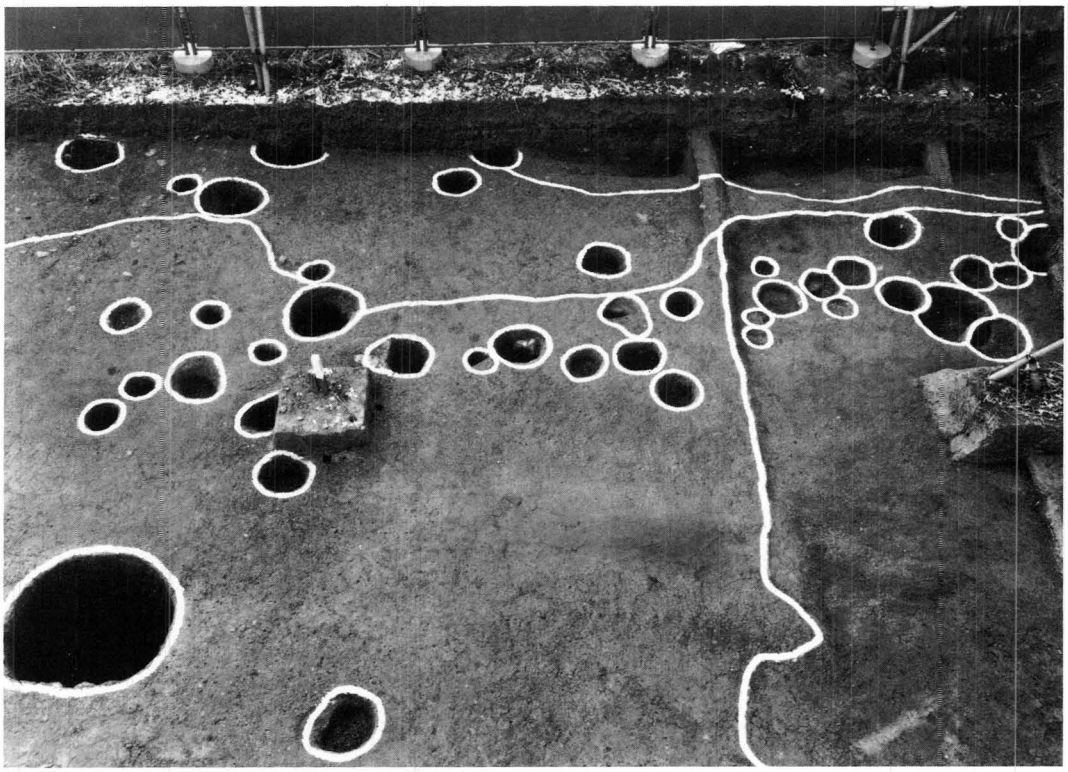


1．柱穴群1・SD52（北から）



2．柱穴群1（東から）

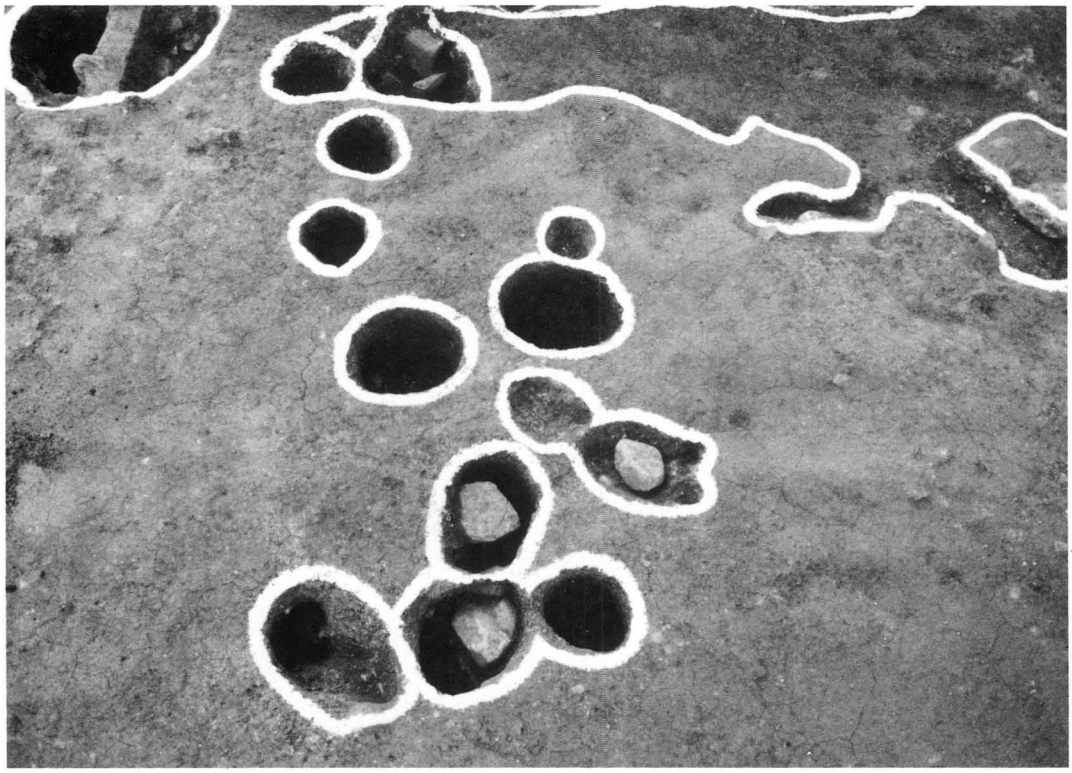
図版八　A地区遺構



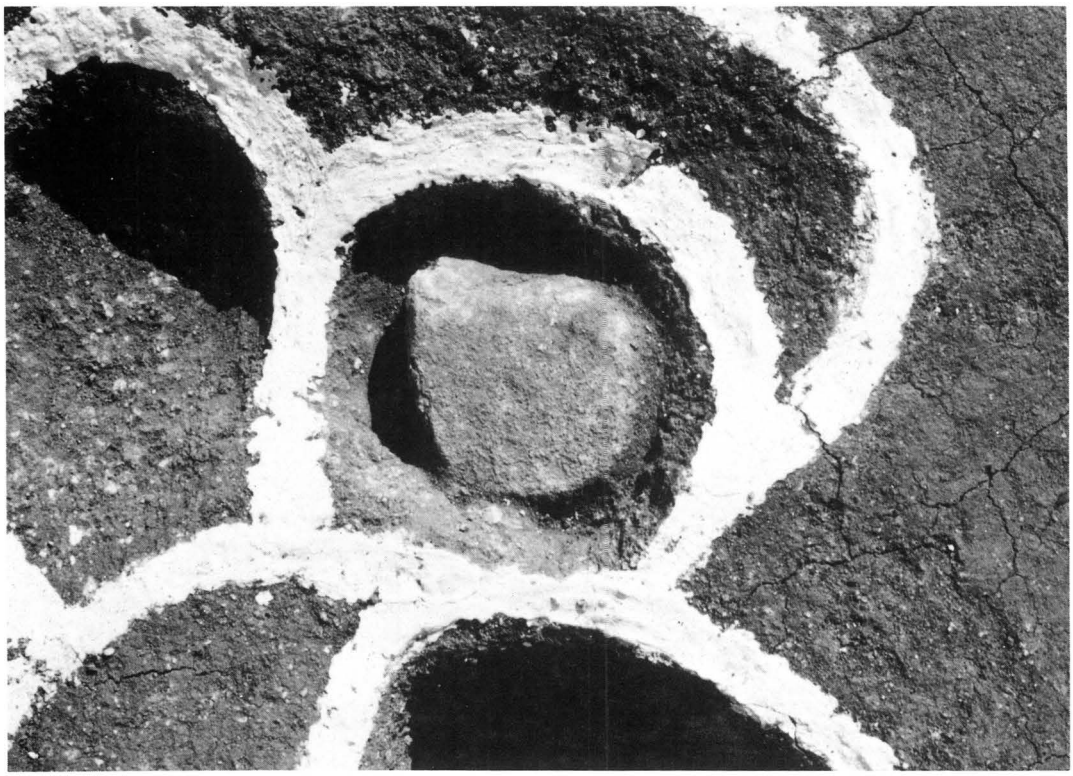
1．柱穴群２（北から）

2．柱穴群２（北から）

図版九　A地区遺構

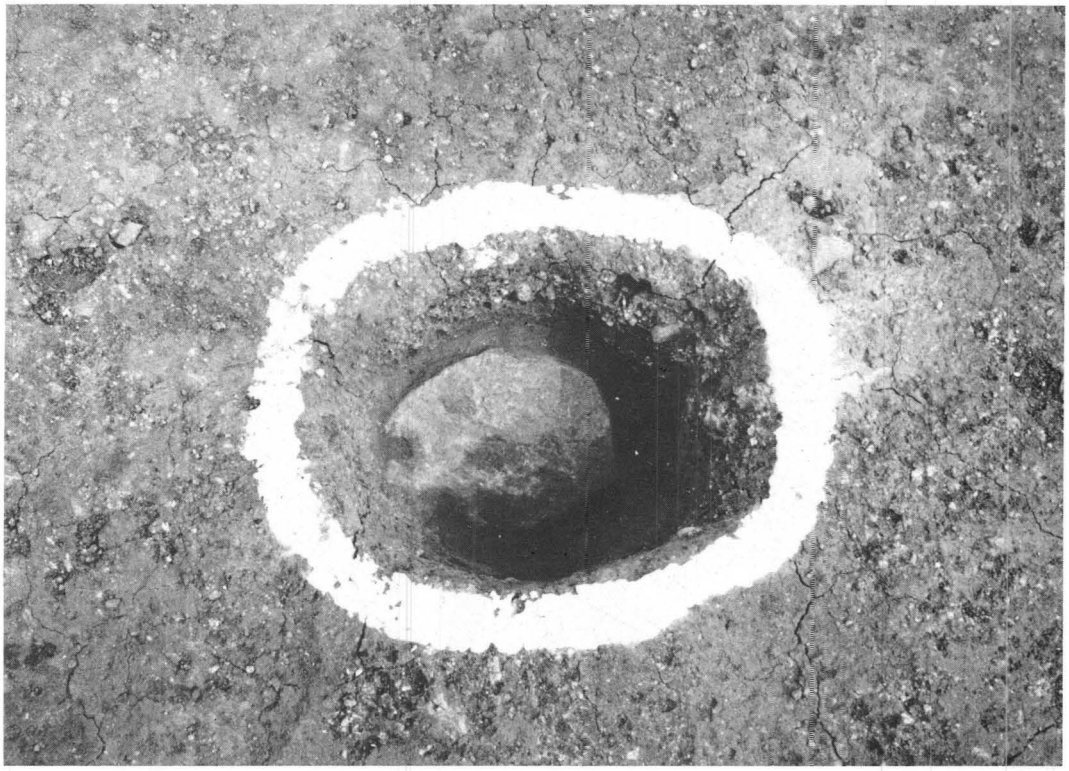


ＳＢ199～208、359、360（東から）

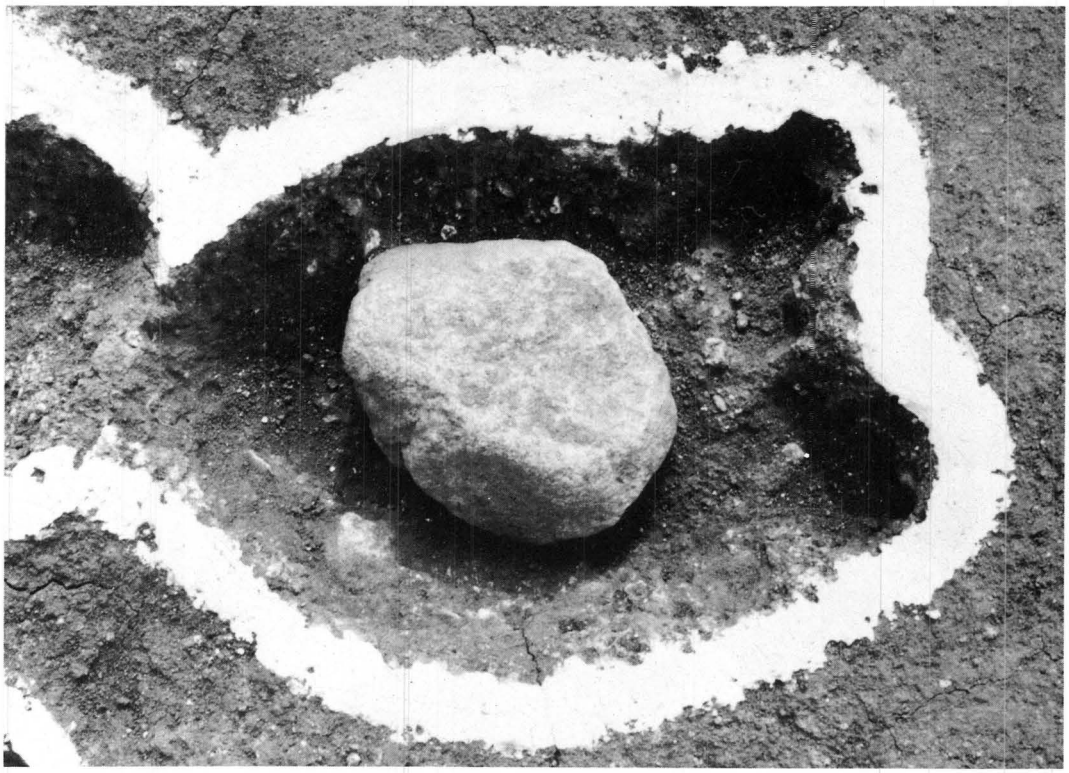


2．ＳＢ347全景

図版一〇　A地区遺構

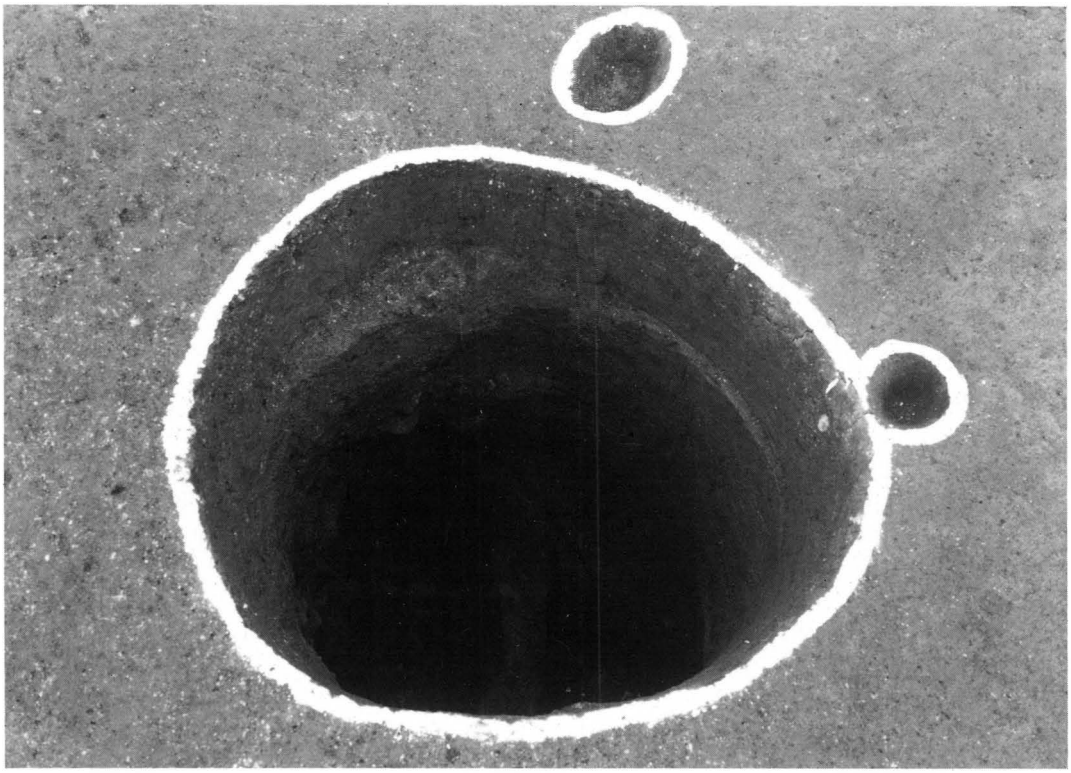


1．SB132　全景



2．SB204　全景

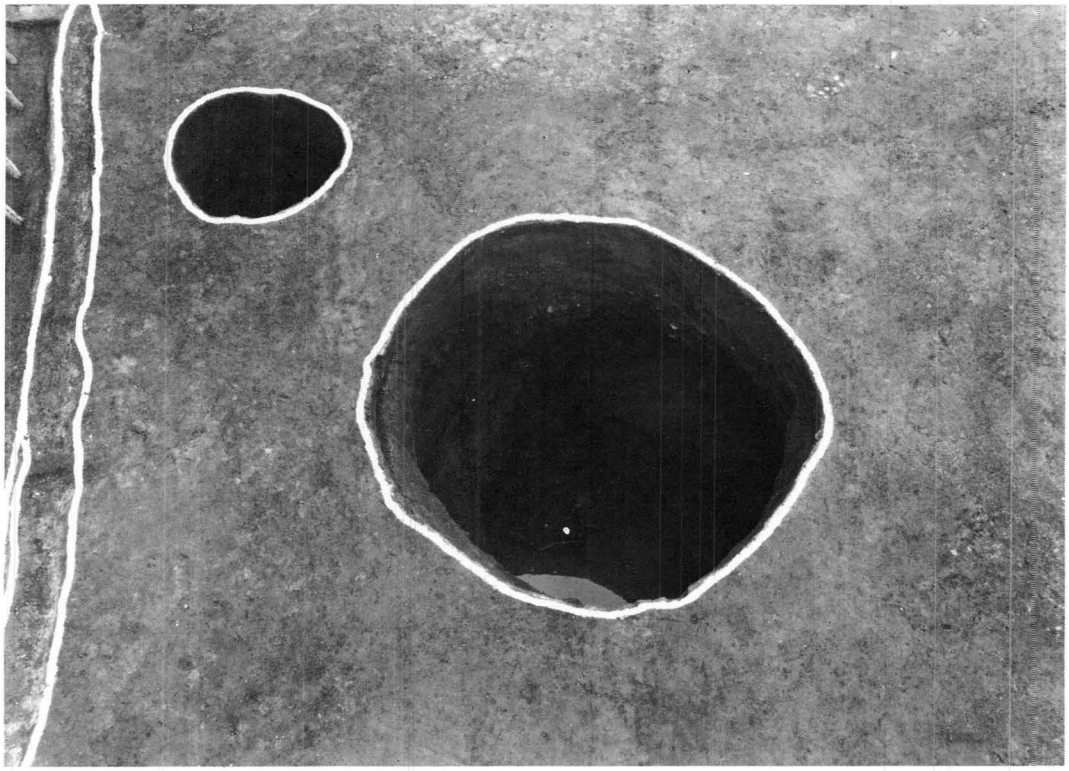
図版十一　A地区遺構



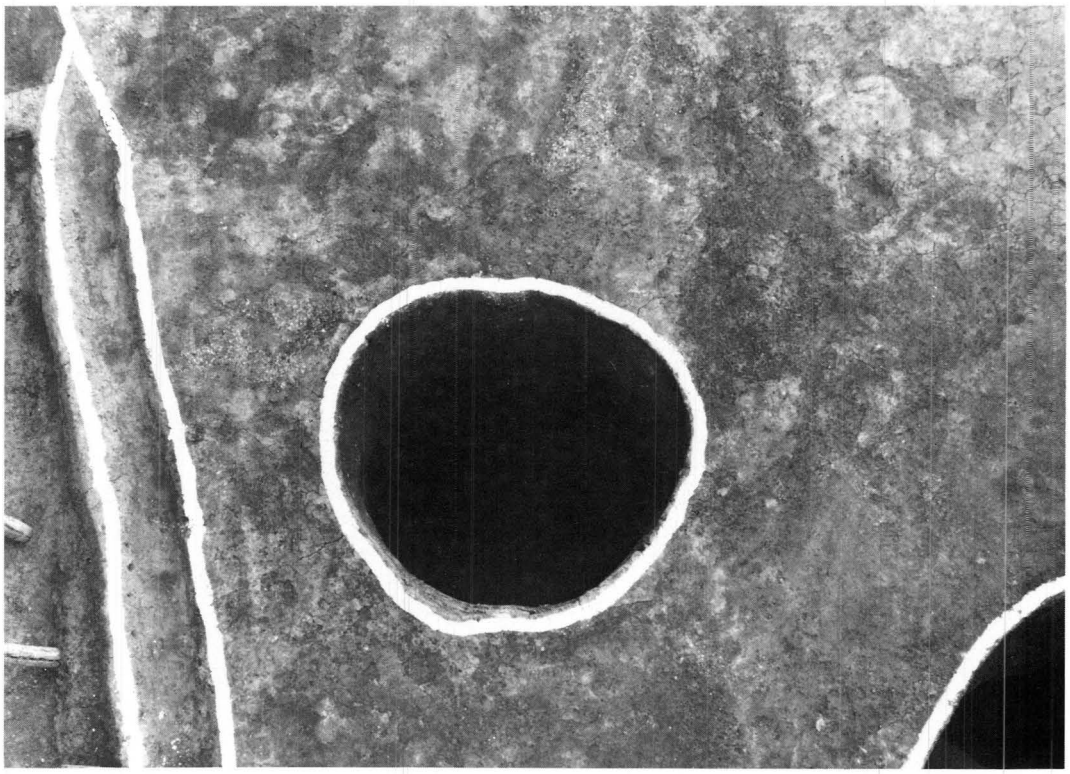
1．SE01　全景

2．SE01内土器出土状況

図版十二　A地区遺構

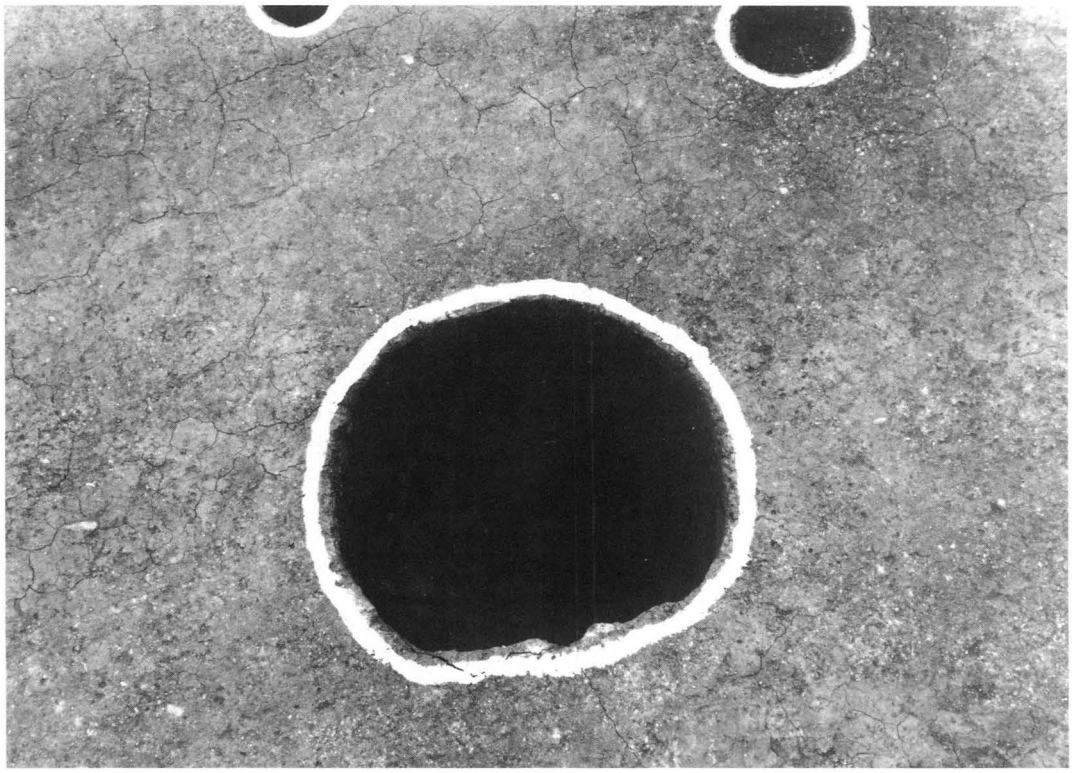


1．SE02　全景

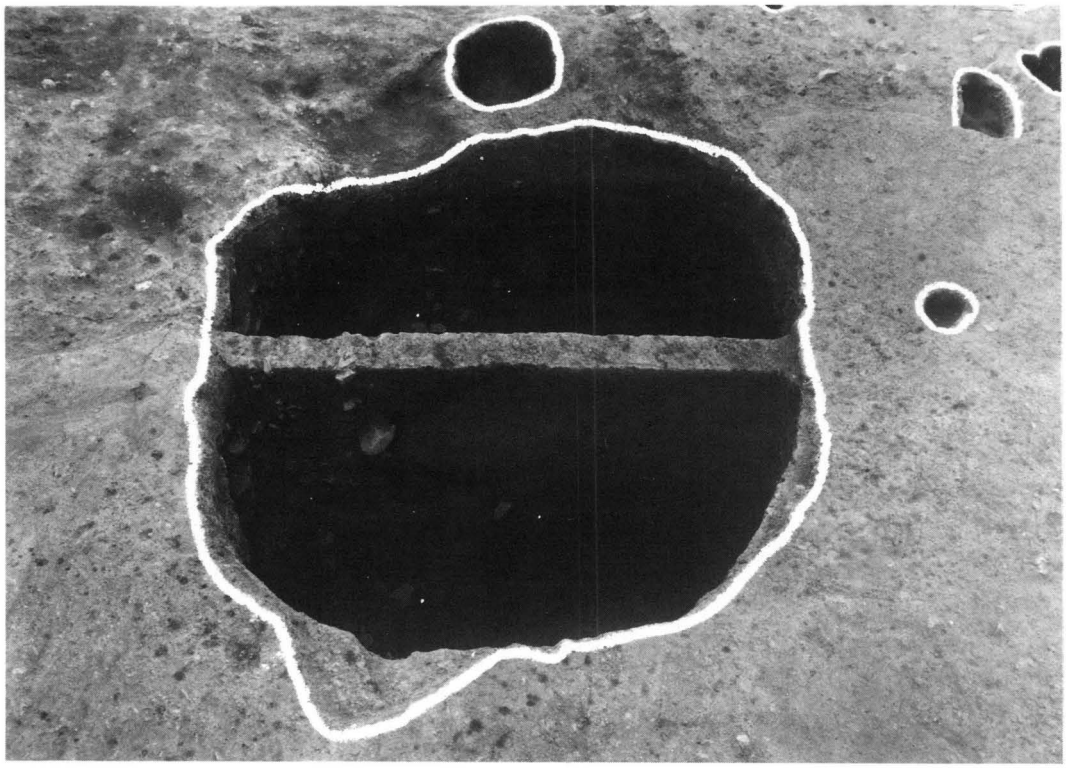


2．SE03　全景

図版十三　A地区遺構



1．SE04　全景



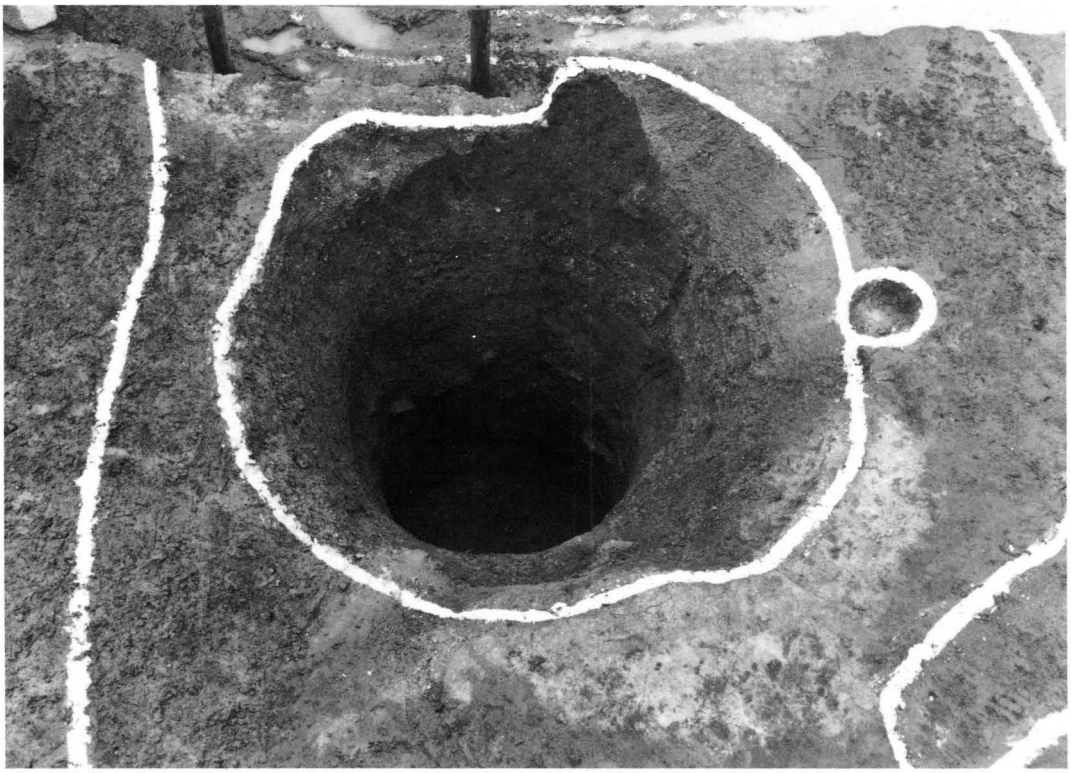
2．SE05　全景

図版十四　A地区遺構

1．ＳＥ05内土器出土状況

2．ＳＥ05内断面

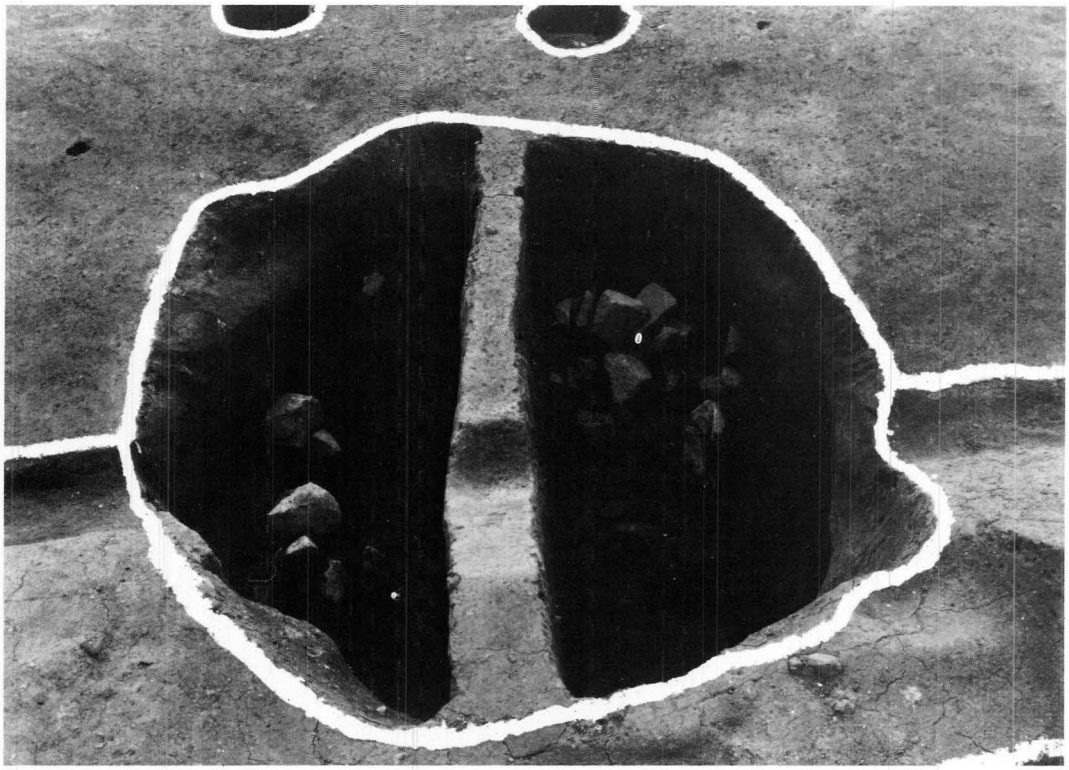
図版十五　A地区遺構



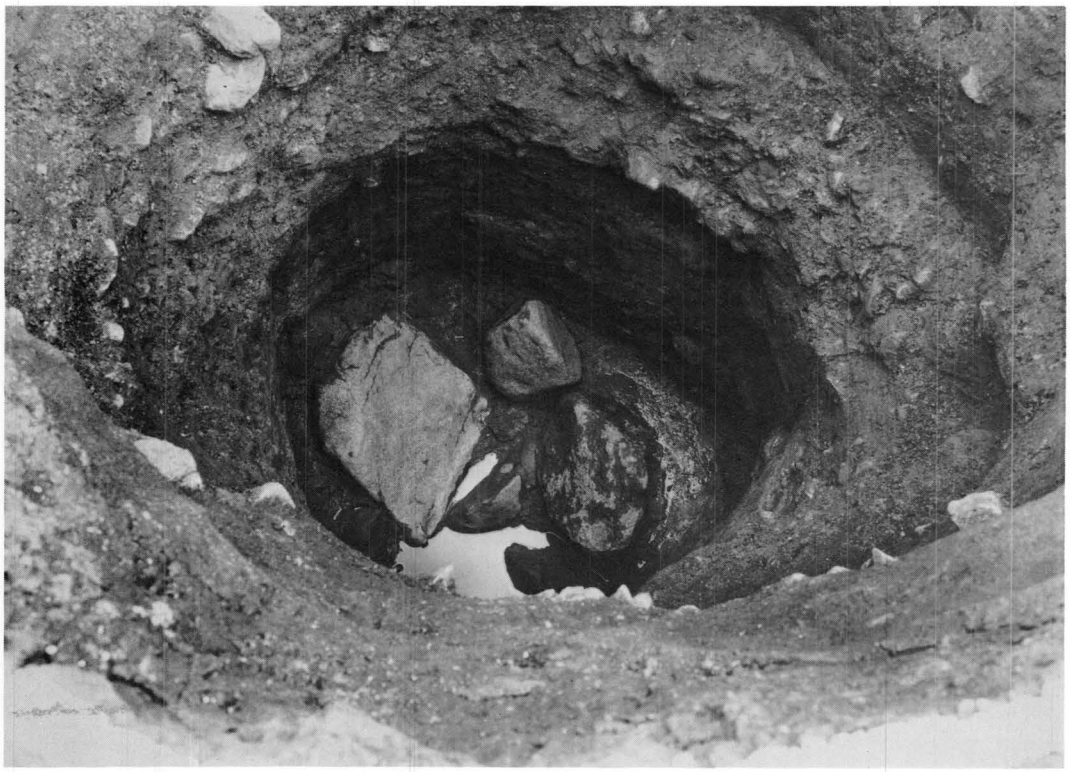
1．SE06　全景

2．SE06内遺物出土状況

図版十六　A地区遺構



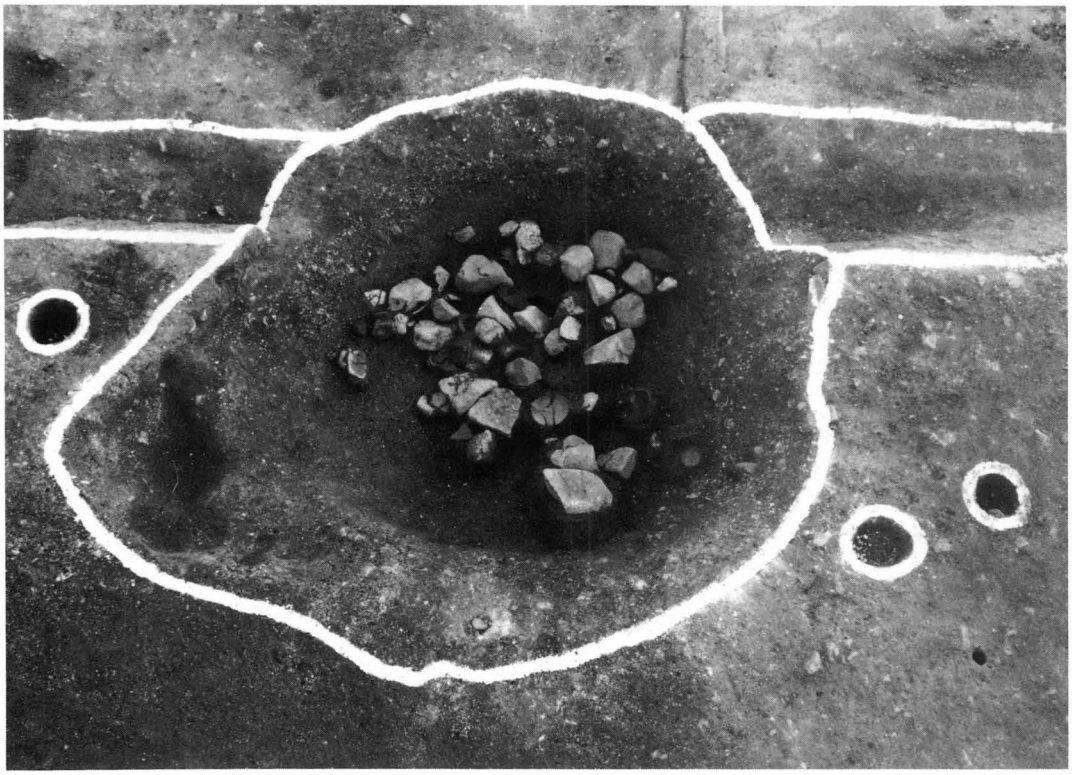
1．SE07　全景



2．SE07礫検出状況

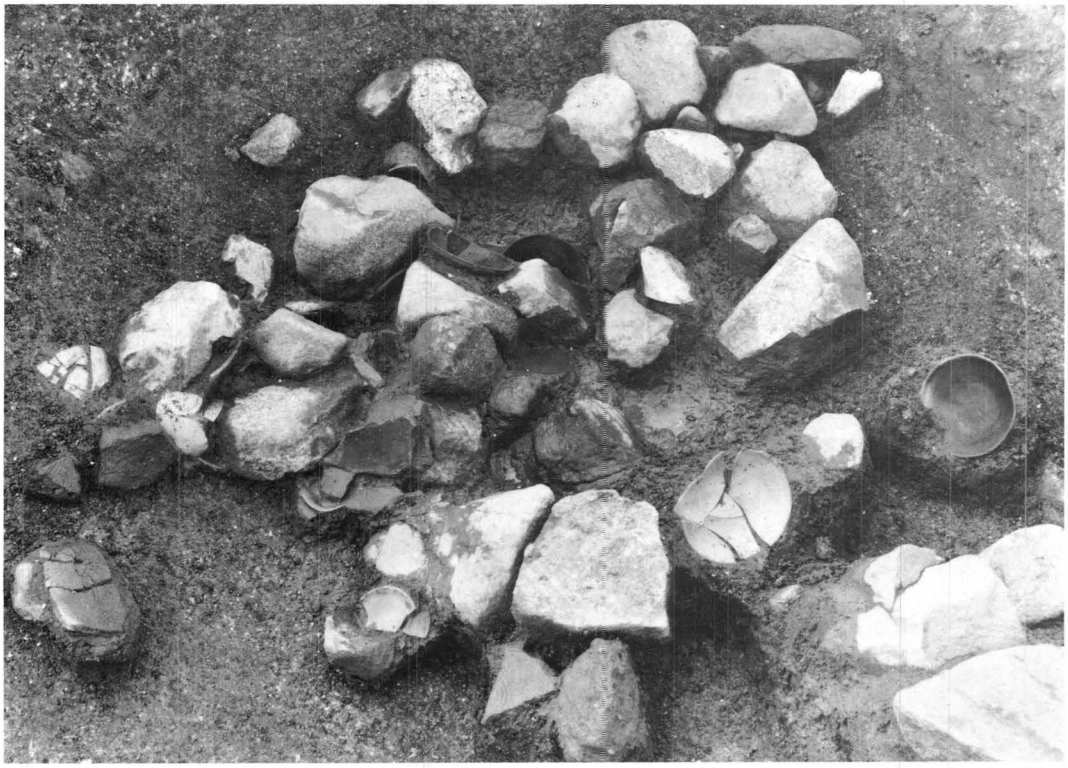
図版十七　A地区遺構

1．ＳＫ22上層　礫・土器検出状況

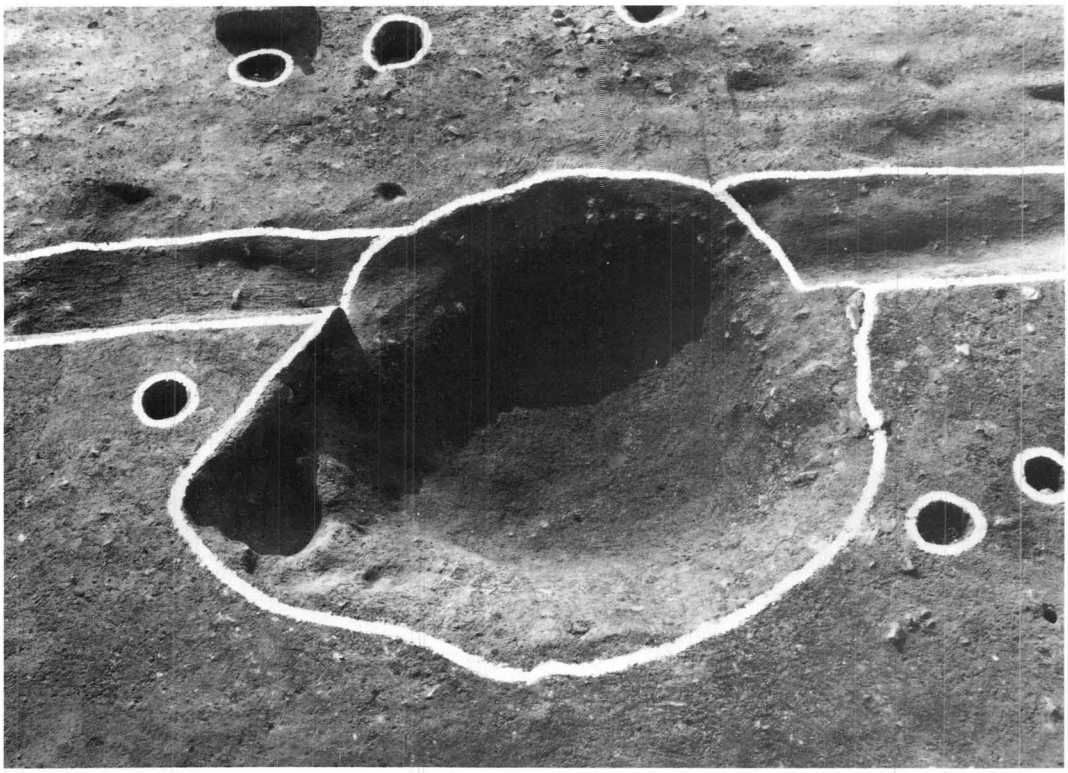


2．ＳＫ22下層　礫・土器検出状況

図版十八　A地区遺構



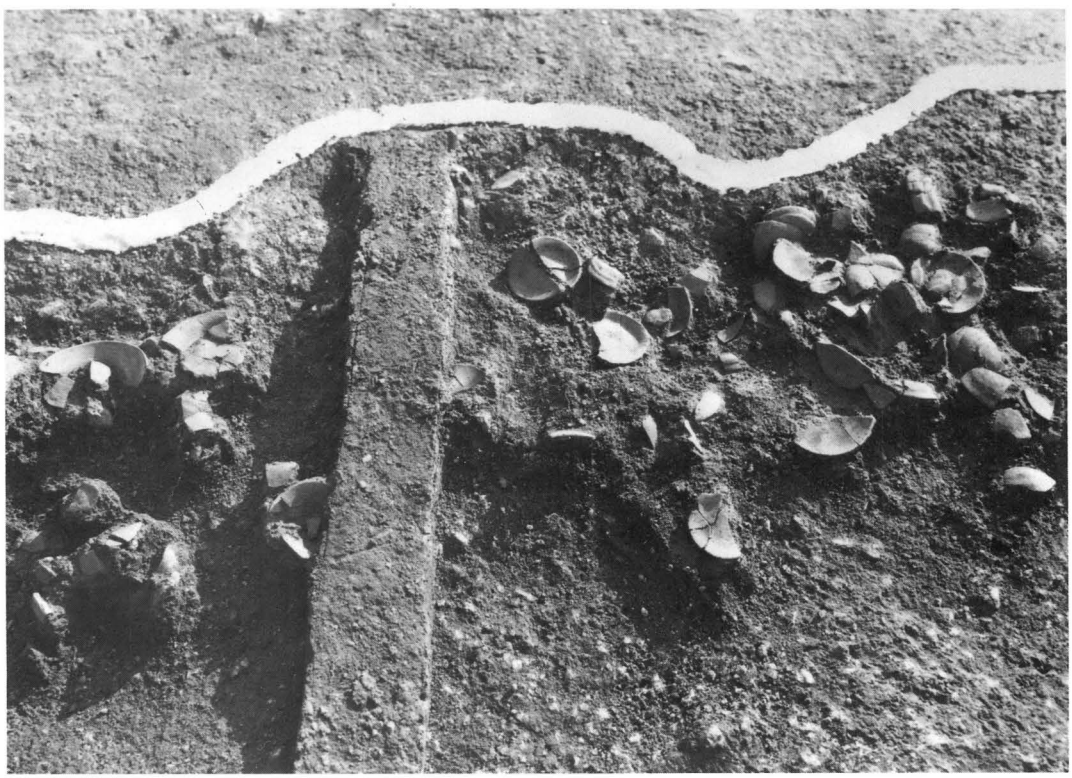
1．ＳＫ22下層　礫・土器検出状況



2．ＳＫ22　完掘状況

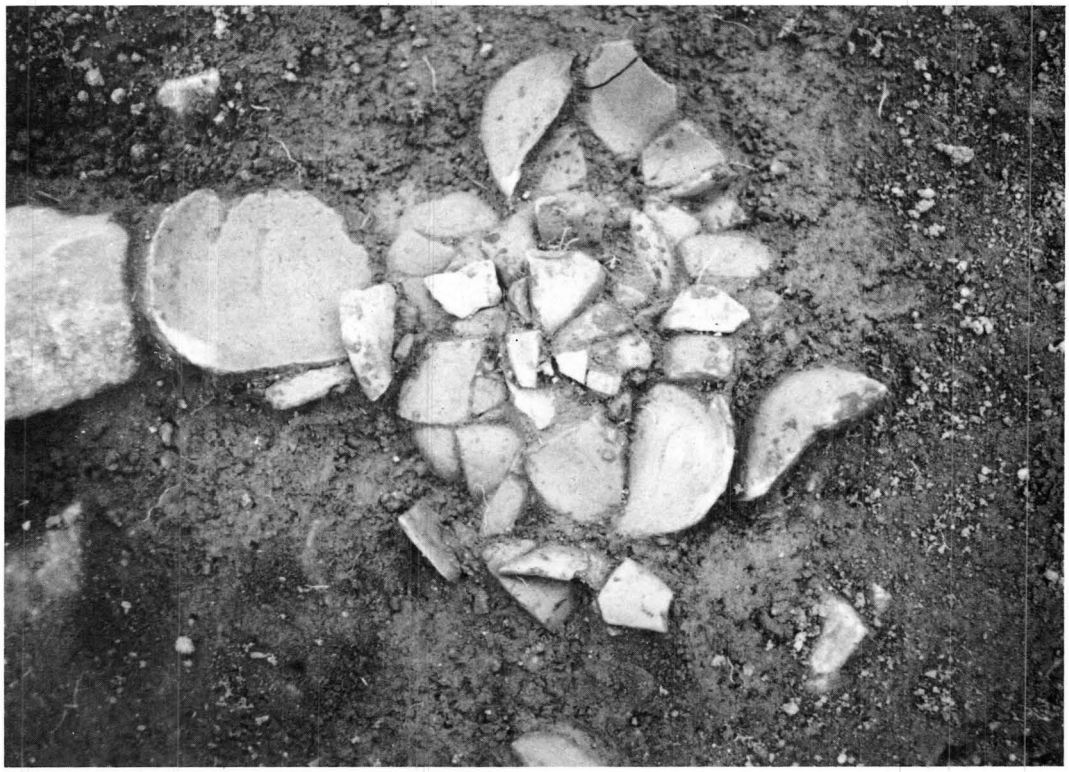
図版十九　A地区遺構

1．SD58　土器出土状況

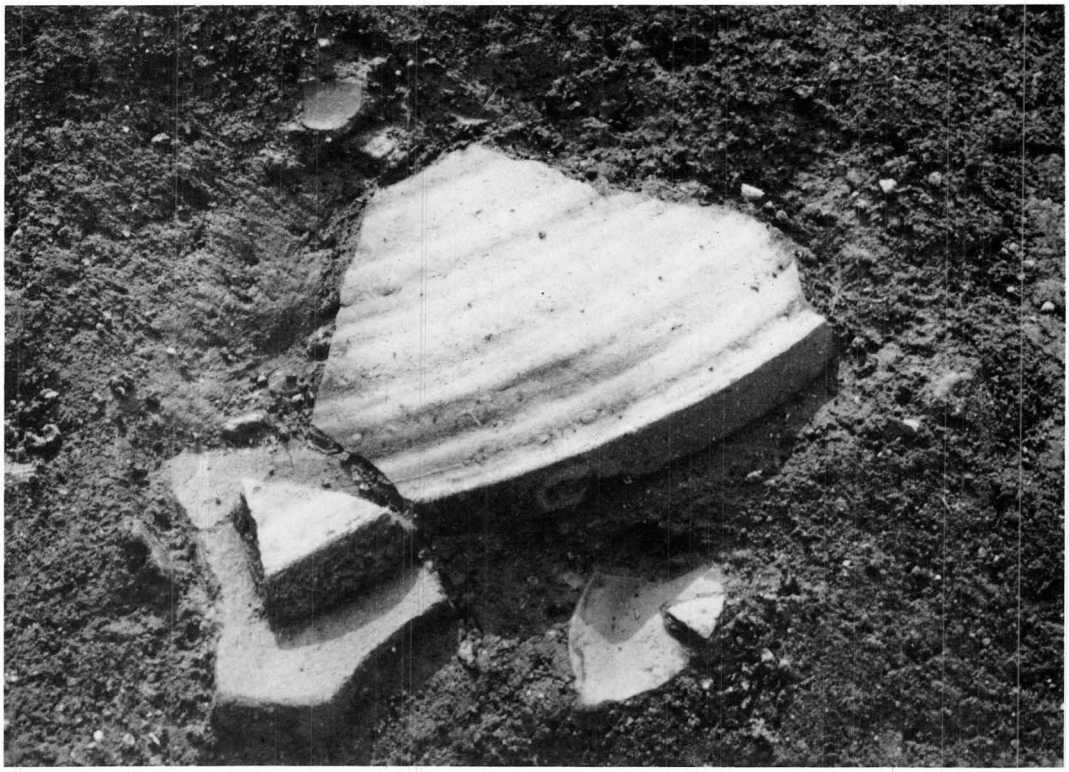


2．SD58　土器出土状況

図版二十　A地区遺構



1．落ち込み状遺構２内土器出土状況



2．落ち込み状遺構２内土器出土状況

図版二十一　A地区遺構

1．包含層内土器出土状況

2．包含層内土器出土状況

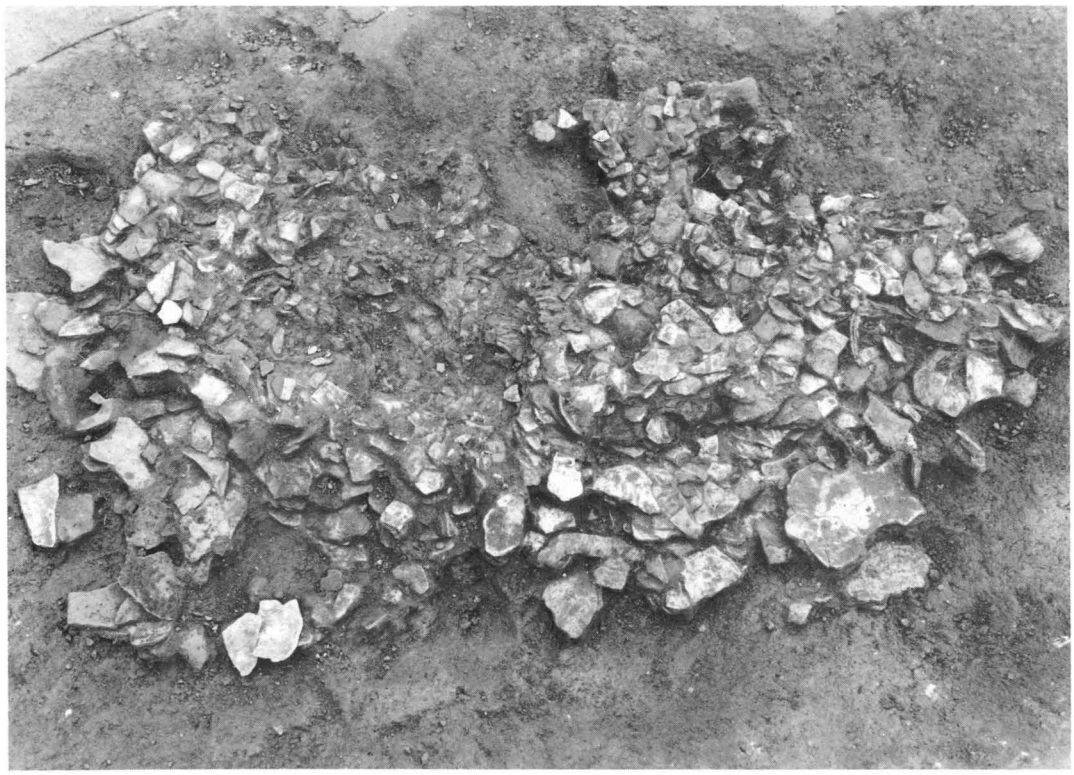
図版二二　A地区遺構

1．古墳～奈良時代　溝・土坑（東から）

2．古墳～奈良時代　溝・土坑（北から）

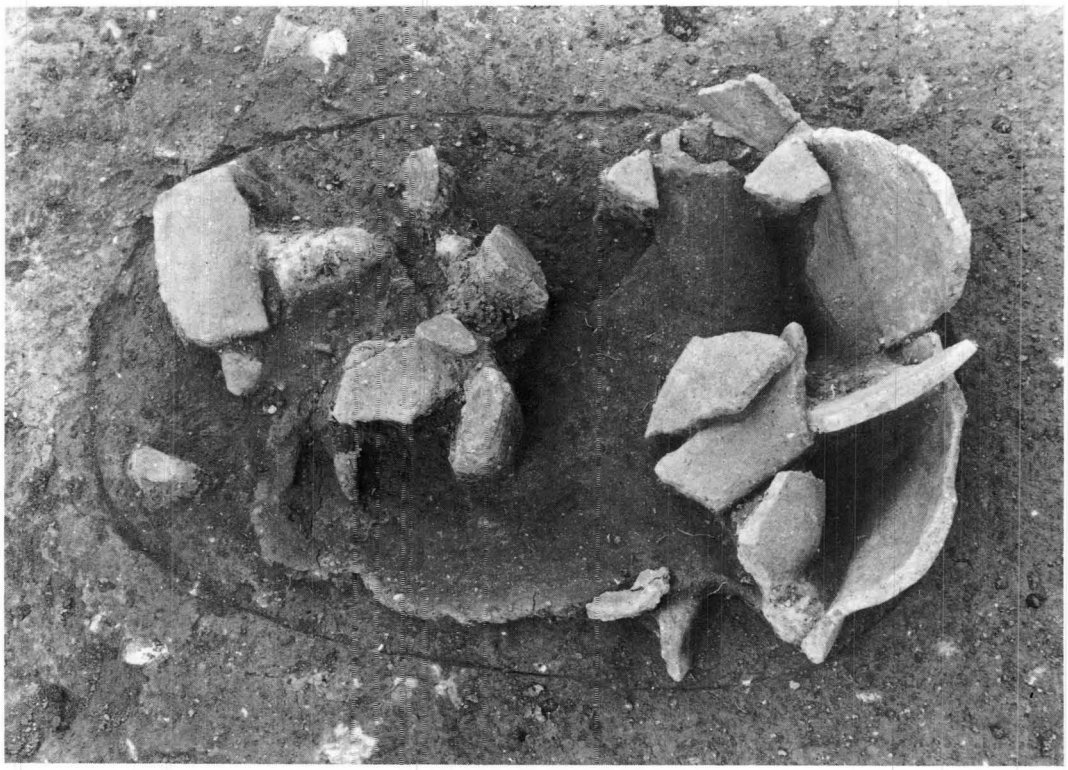
図版二十三　A地区遺構

1．ＳＤ70・71内製塩土器出土状況



2．ＳＤ70・71内製塩土器出土状況

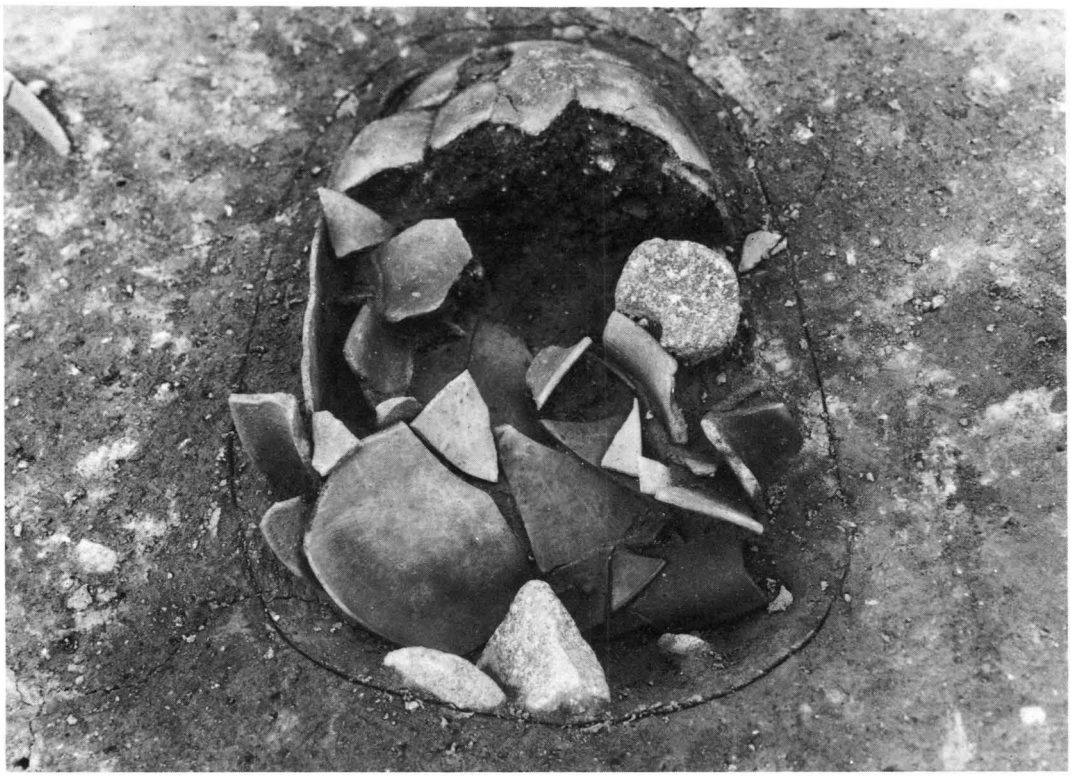
図版二十四　A地区遺構



1．羽釜棺１　検出状況

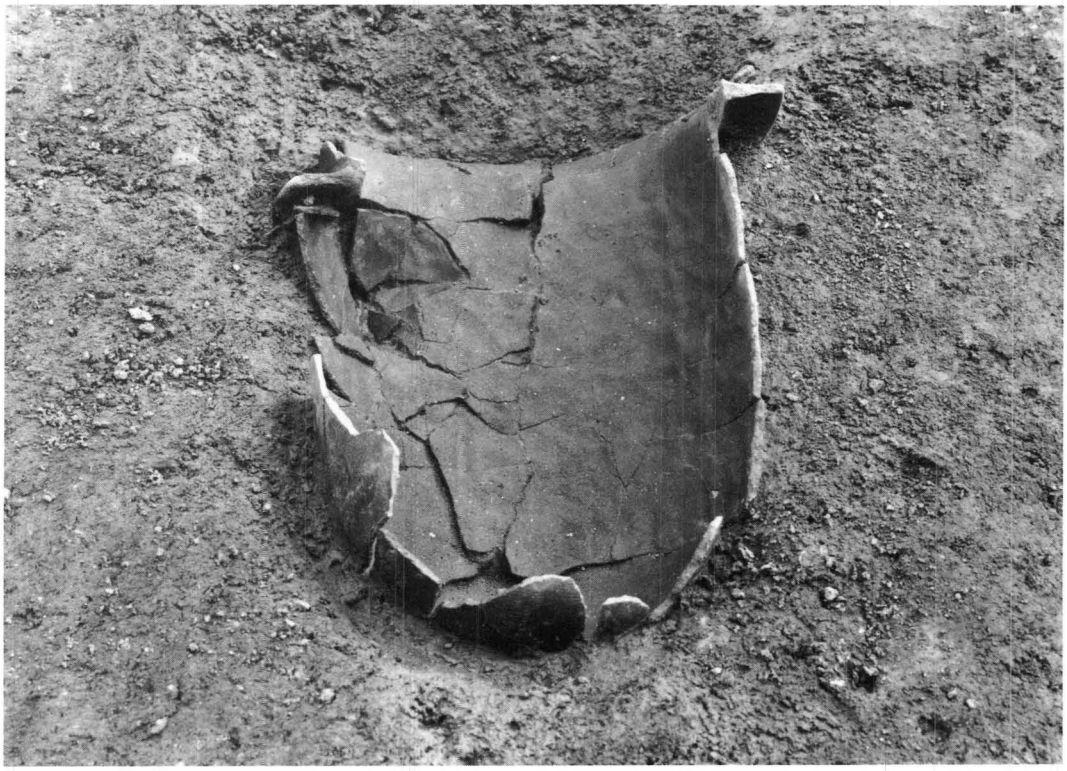
2．羽釜棺１　検出状況（北から）

1．羽釜棺２　検出状況

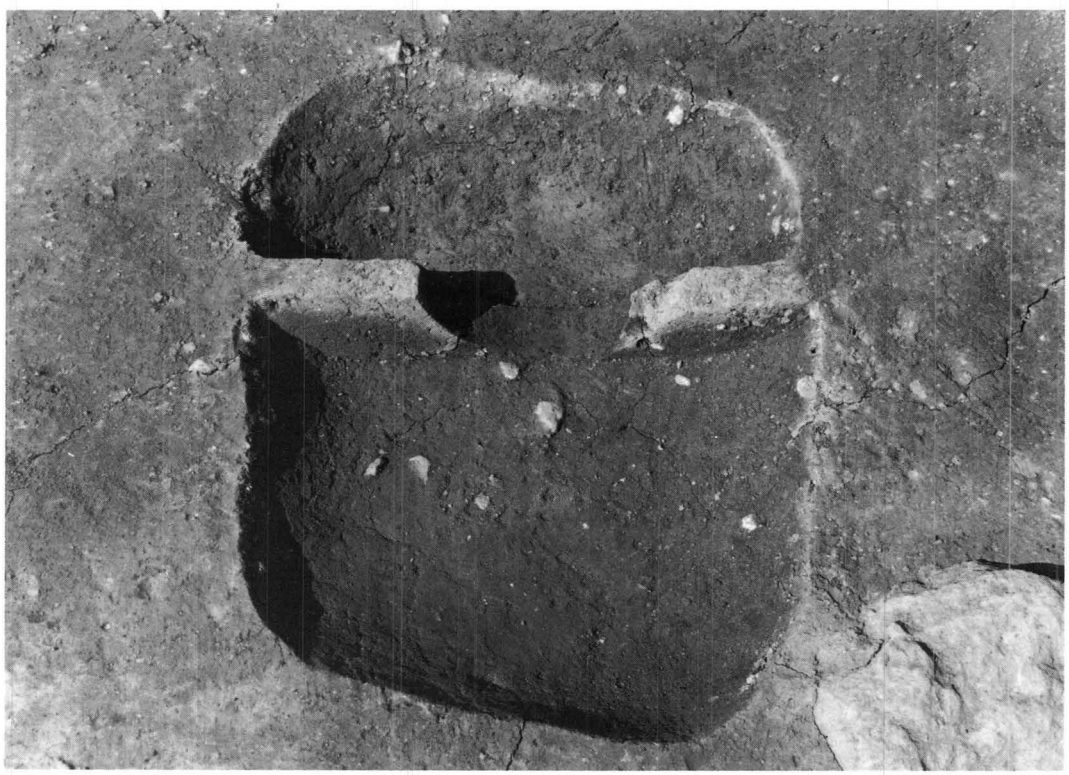


2．羽釜棺２　検出状況（北から）

図版二十六　A地区遺構



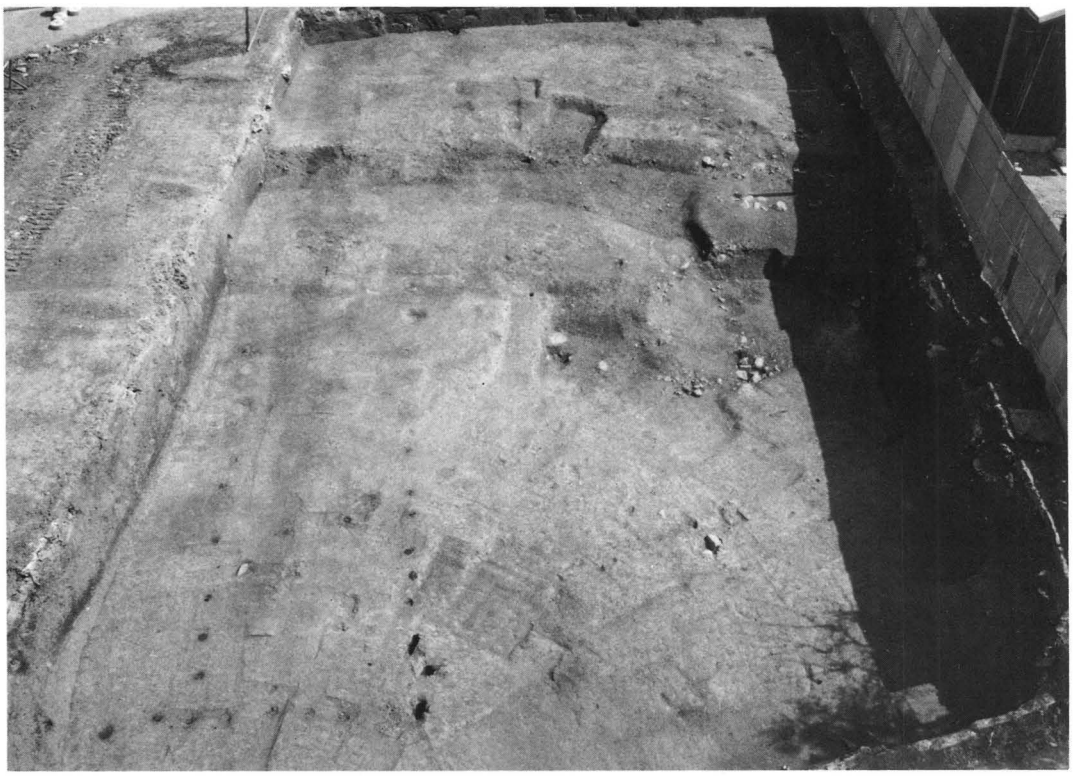
1．羽釜棺２



2．羽釜棺２　墓壙

図版二十七　A地区遺構

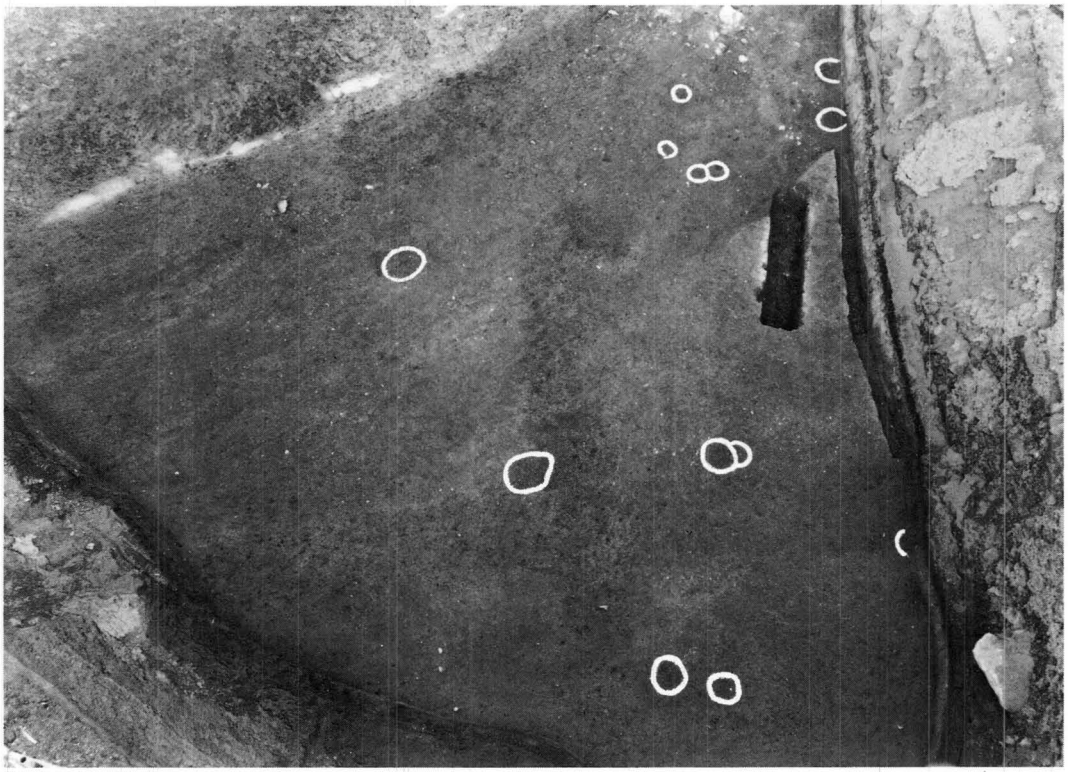
1．発掘前の状況



2．掘削完了後の状況

図版二十八　B地区遺構

1．柱穴検出状況



2．柱穴検出状況

図版二十九　C地区遺構

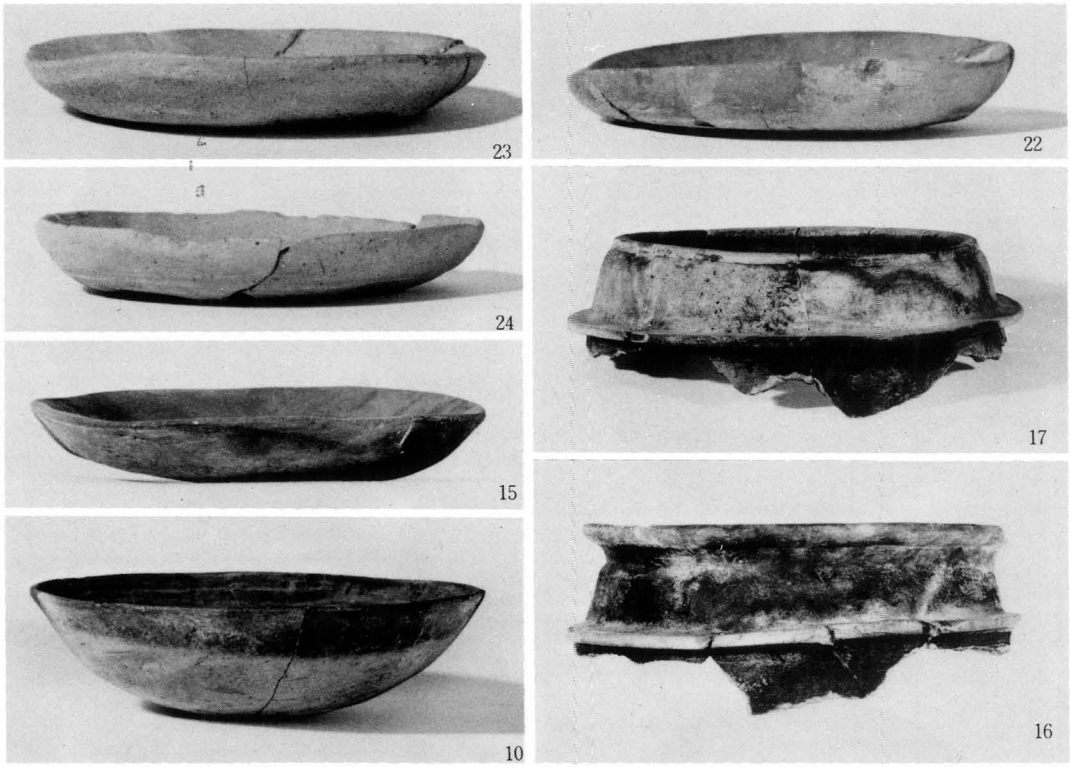
1．発掘前の状況

2．遺構全景

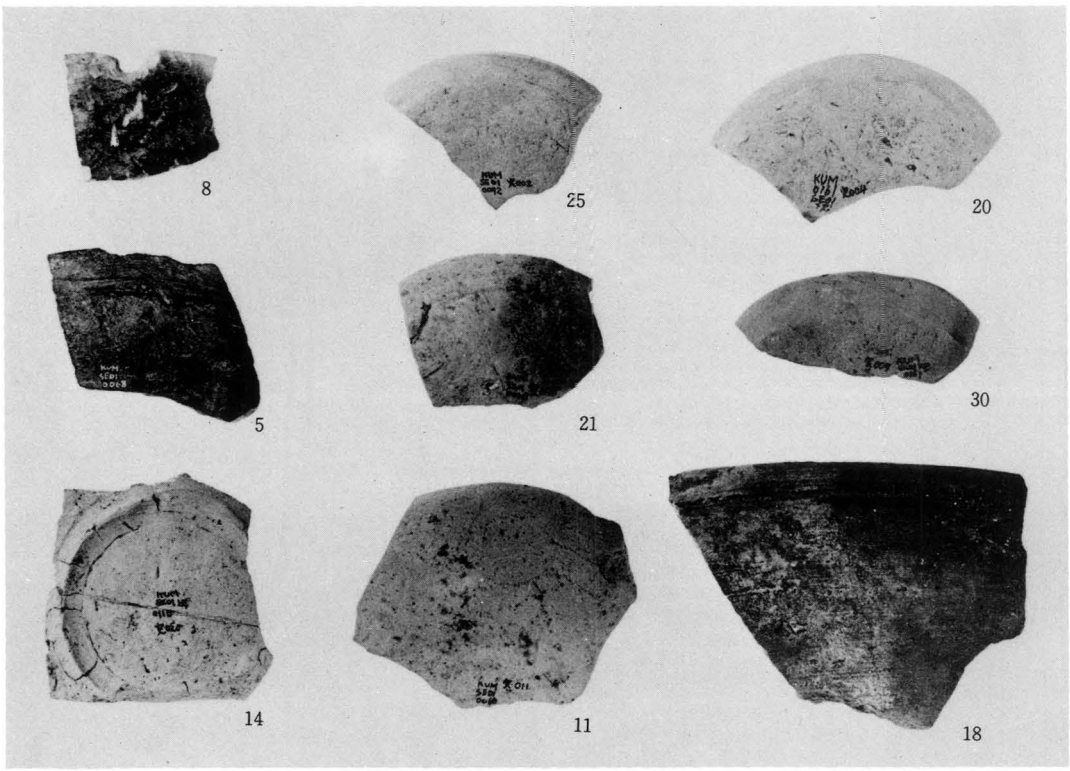
図版三十　C地区遺構

1．SK47

2．SK47　土器出土状況

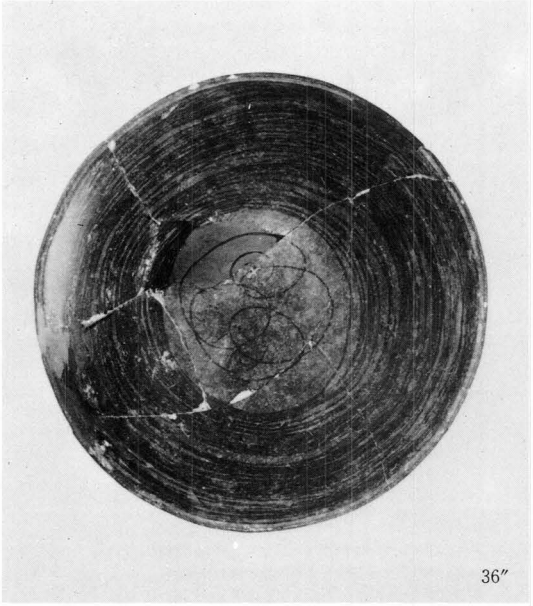


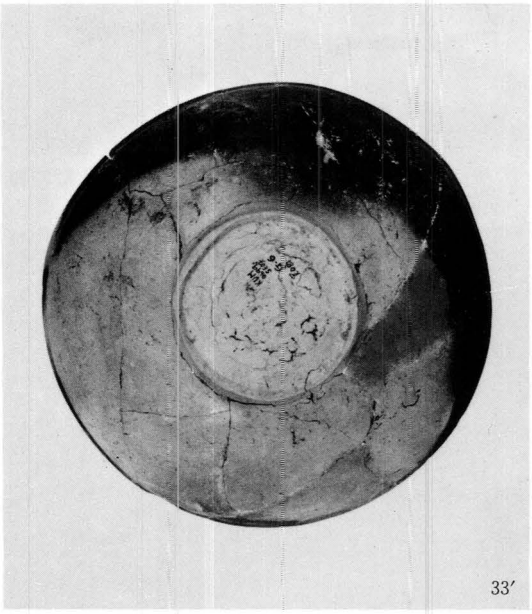
1．SE01　瓦器椀、羽釜、土師器皿

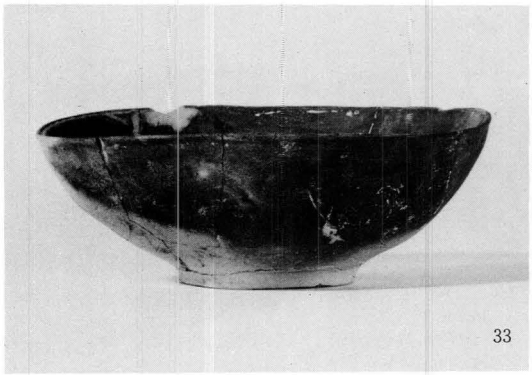


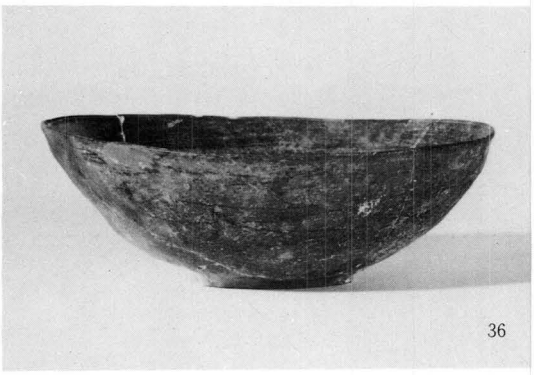
2．SE01　瓦器椀、土師器皿、揑鉢

図版三十二　A地区遺物



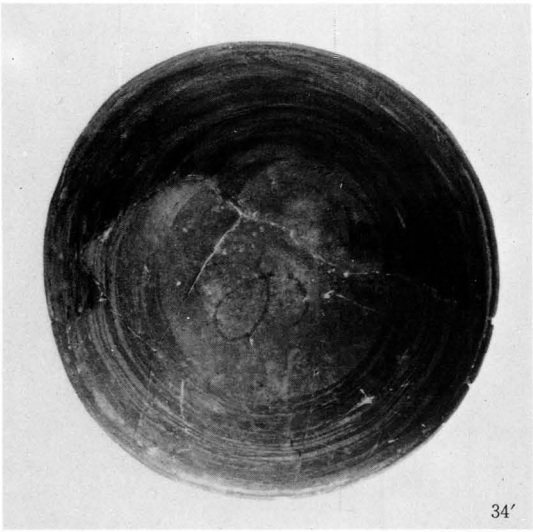


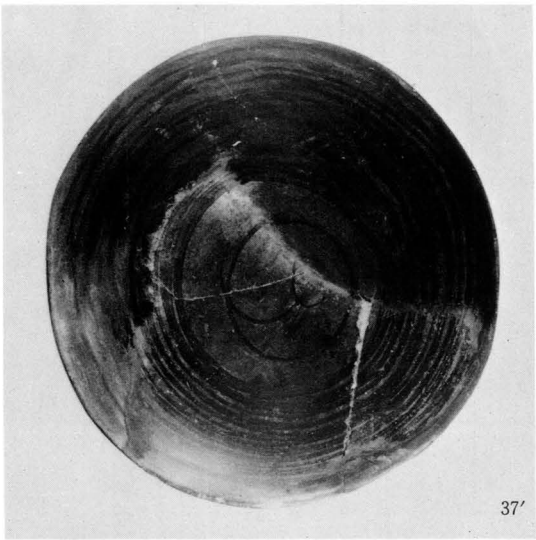


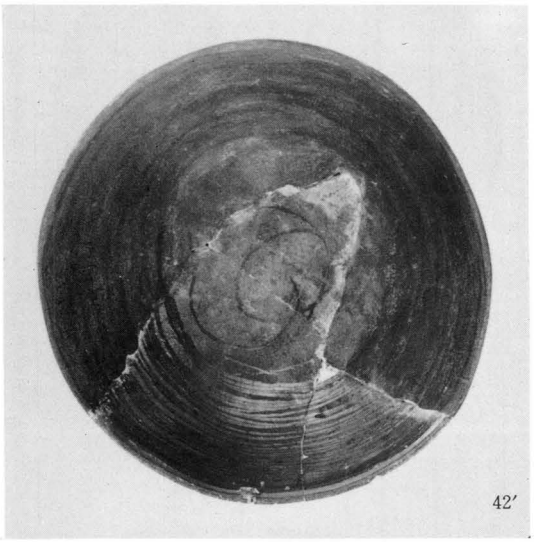


ＳＥ02　瓦器椀

図版三十三　A地区遺物

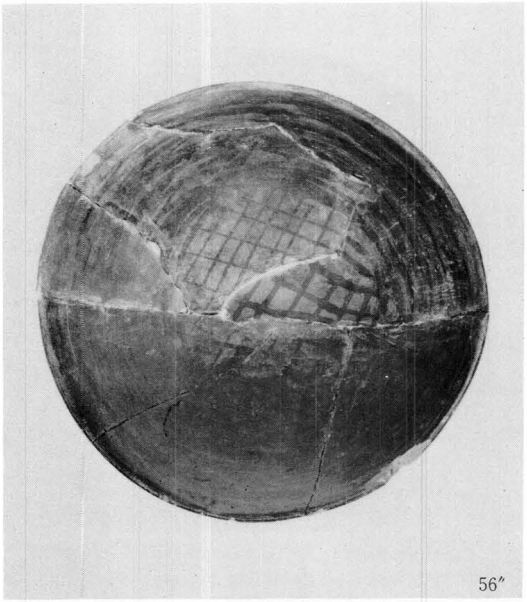


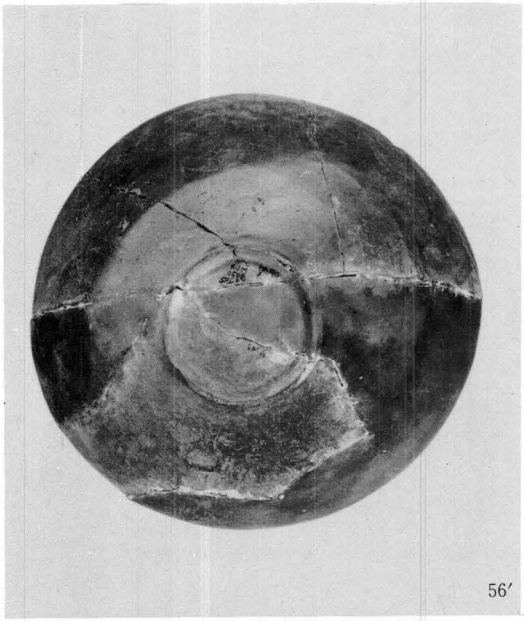


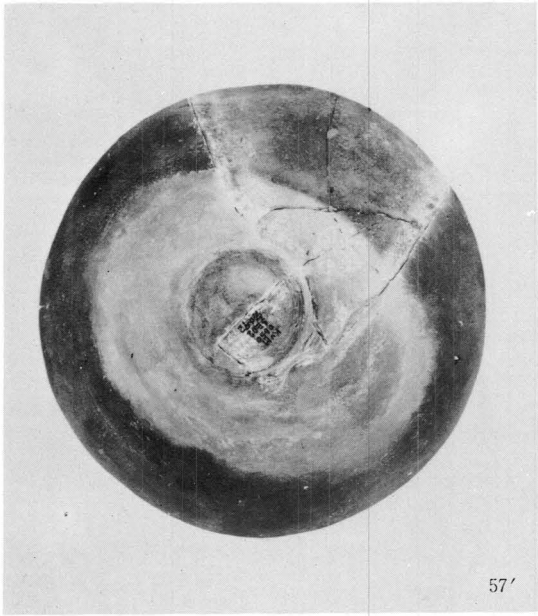


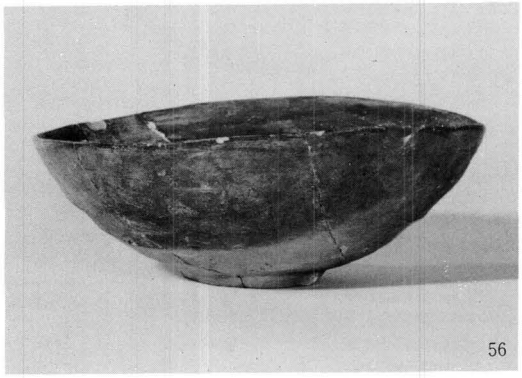
ＳＥ02　瓦器椀

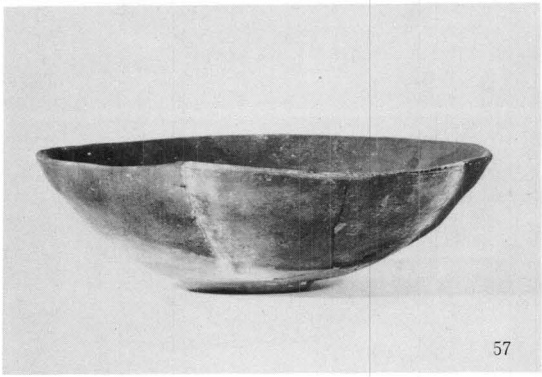
図版三十四　A地区遺物



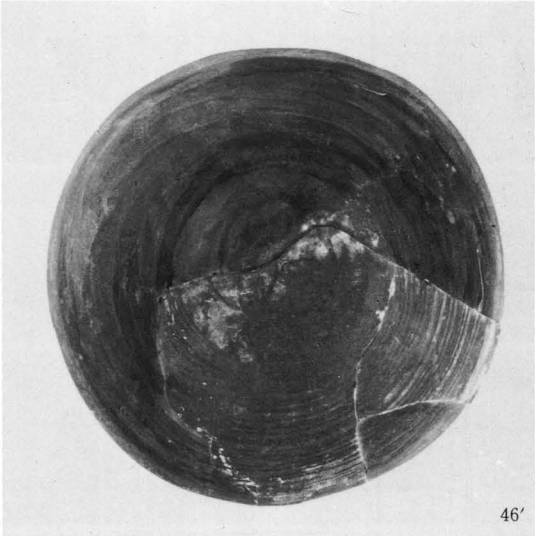


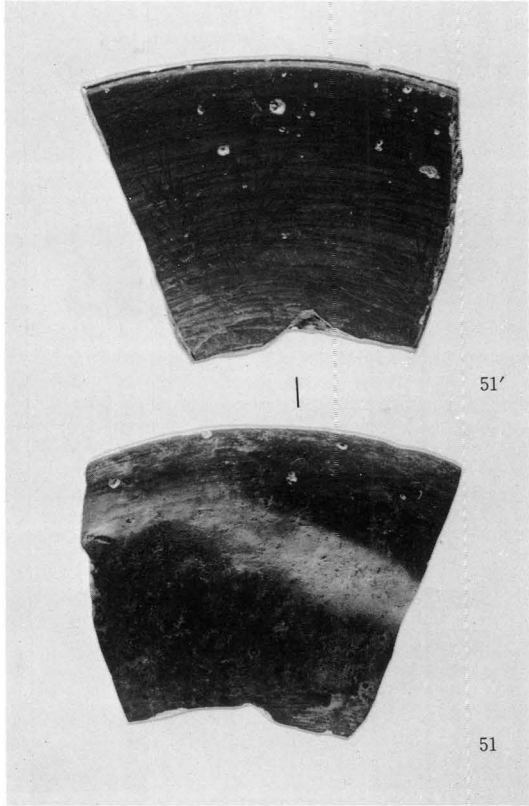


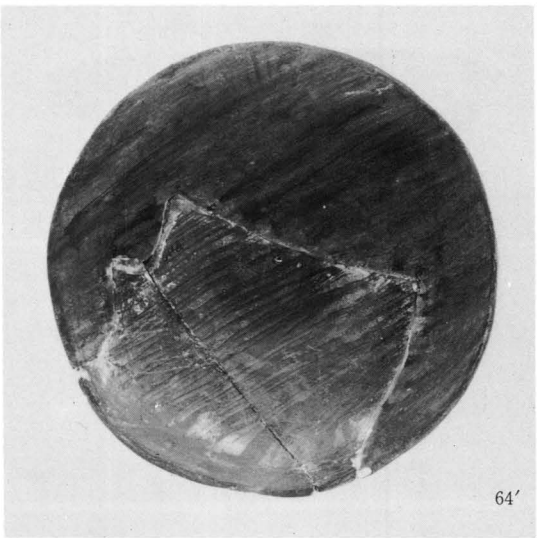


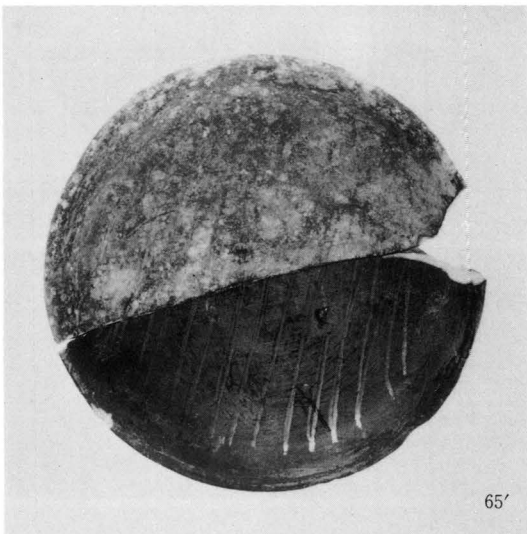


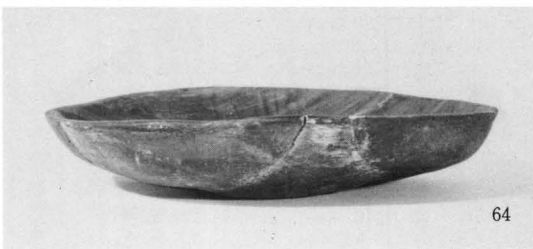
ＳＥ02　瓦器椀

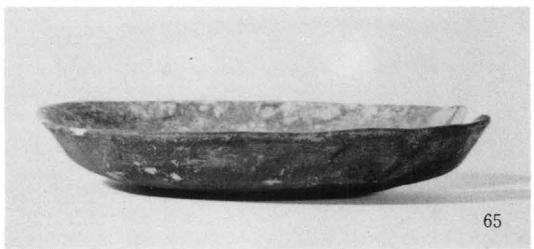






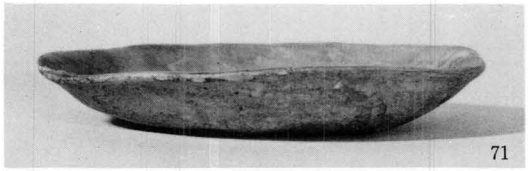


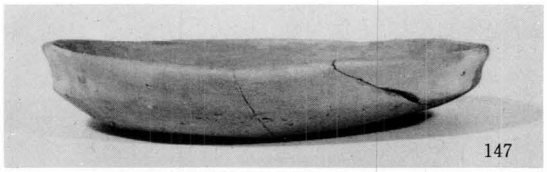


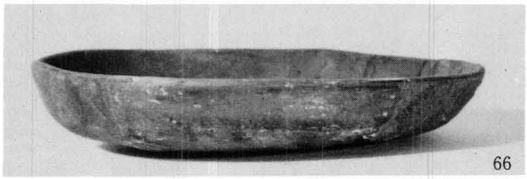


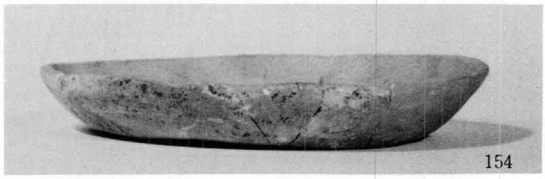
ＳＥ02　瓦器椀・小皿

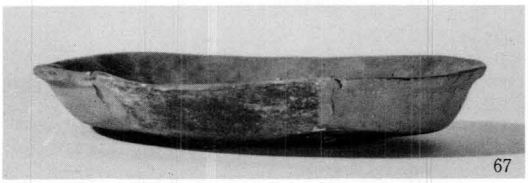
図版三十六　A地区遺物

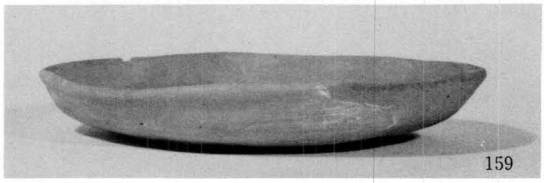


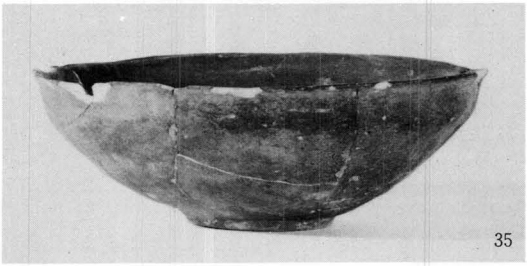


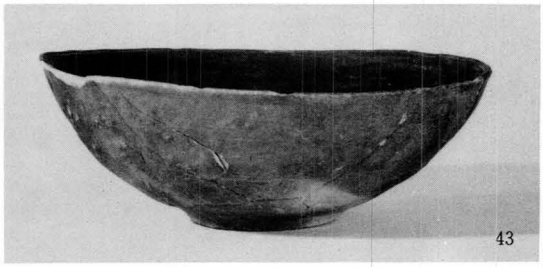


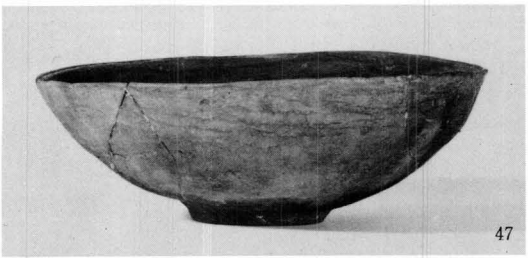


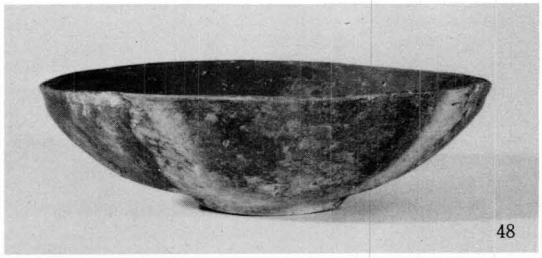


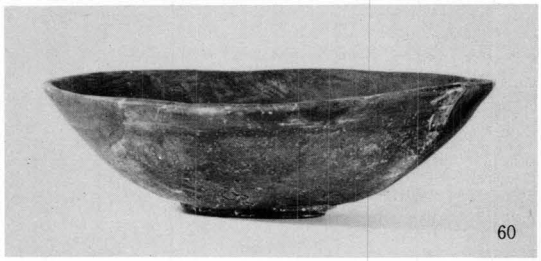


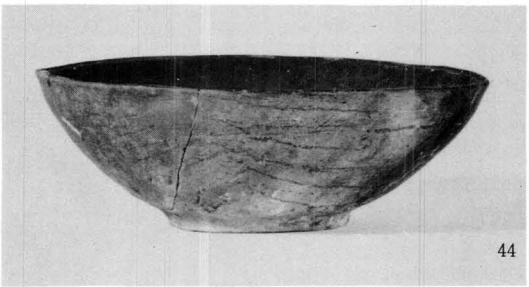


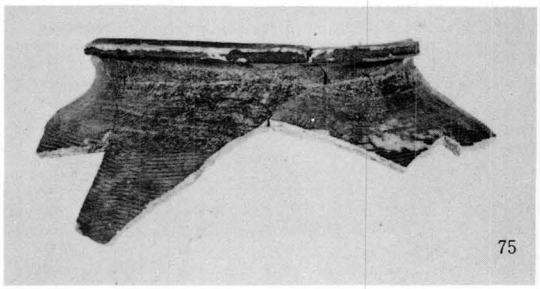






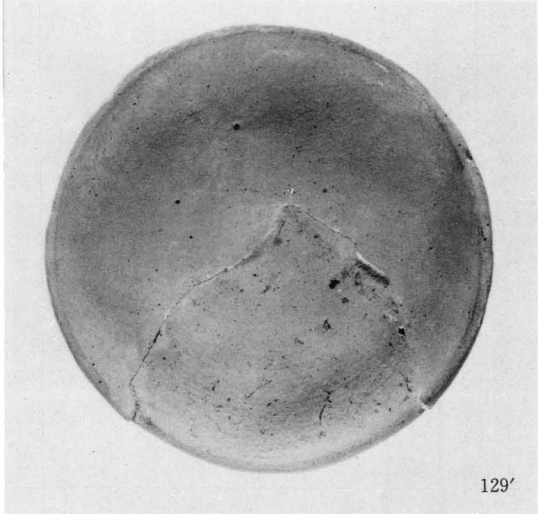


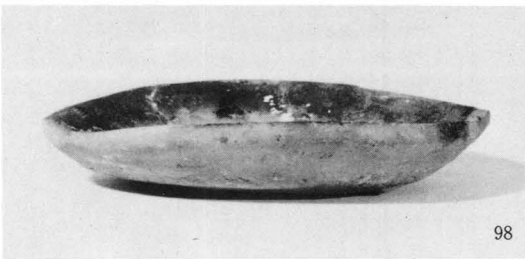


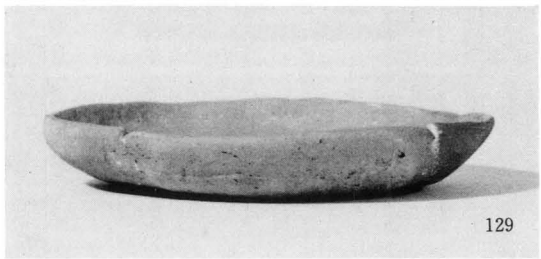


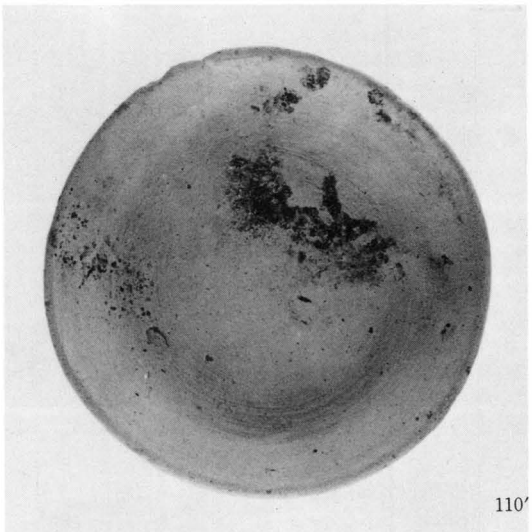
ＳＥ02　瓦器椀・小皿、須恵器甕、土師器中皿

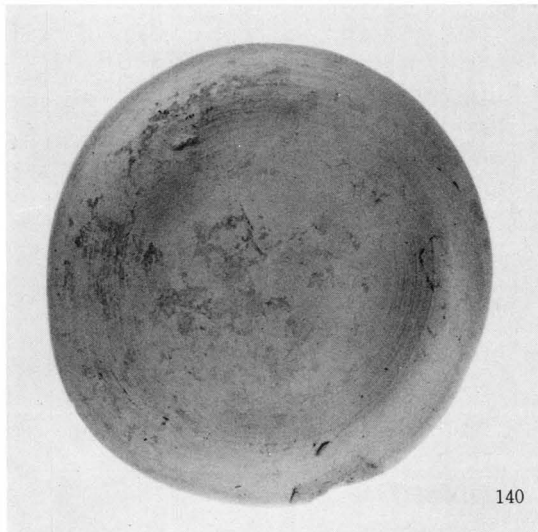
図版三十七　A地区遺物

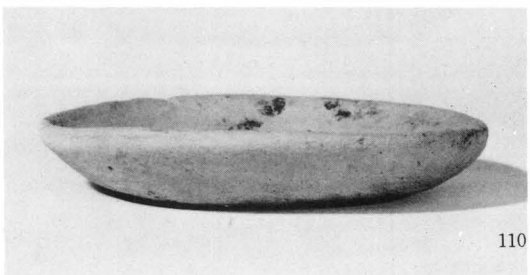


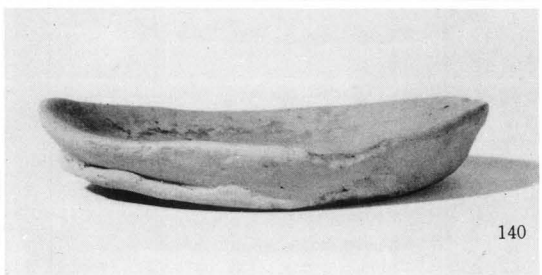






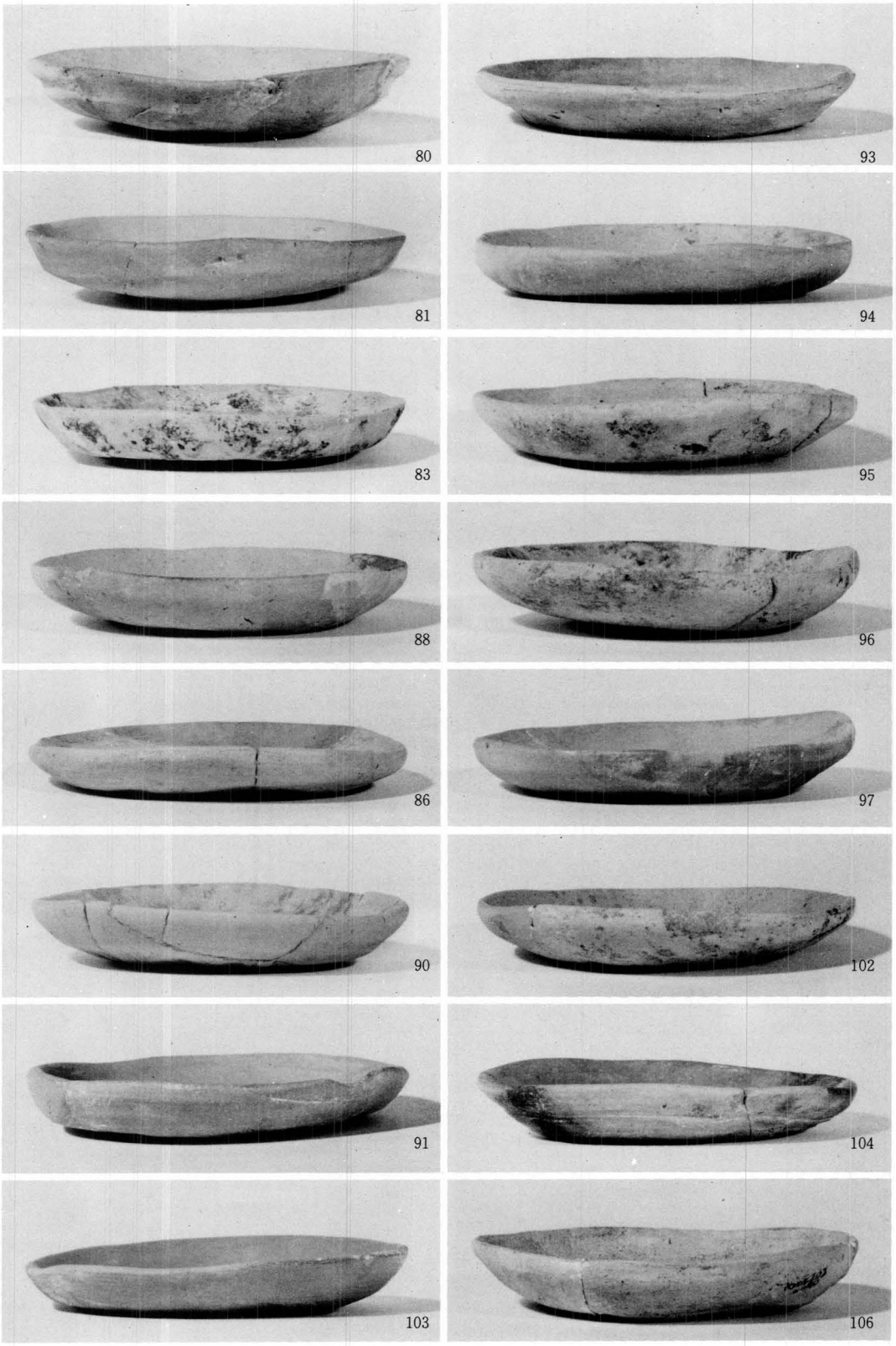






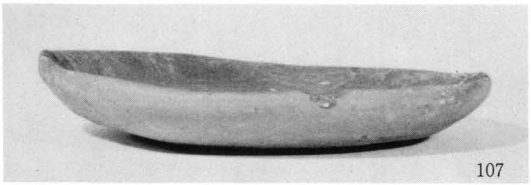
ＳＥ02　土師器小皿

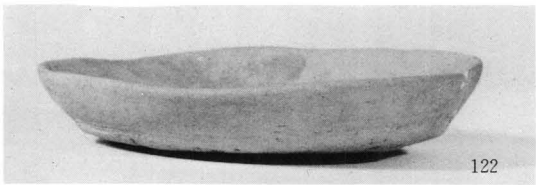
図版三十八　A地区遺物

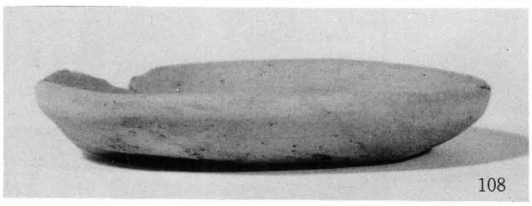


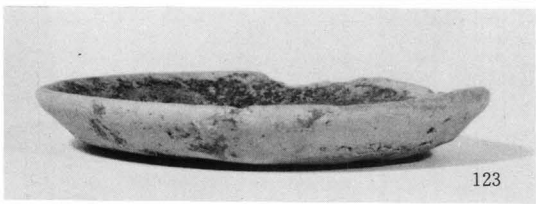
ＳＥ02　土師器小皿

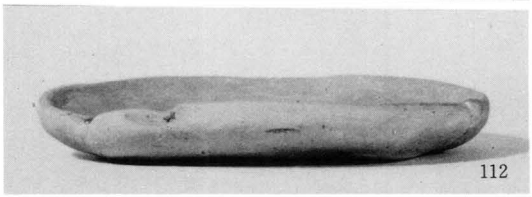
図版三十九　A地区遺物

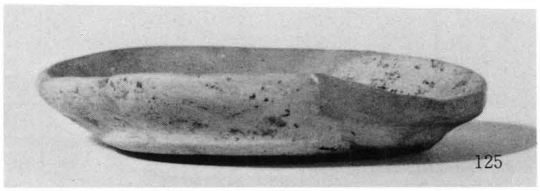

107

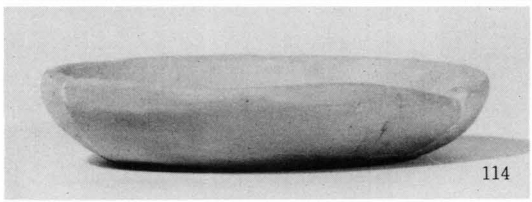

122

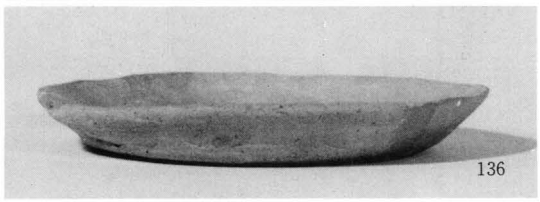

108

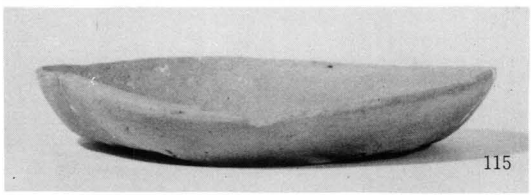

123

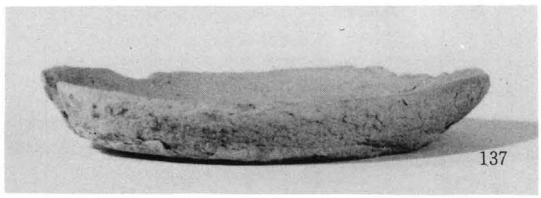

112

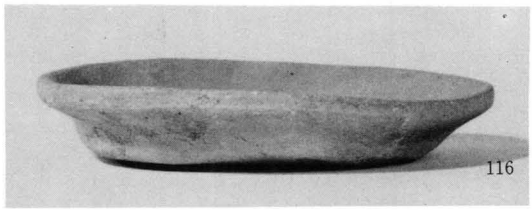

125

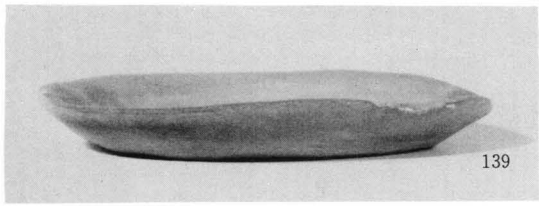

114

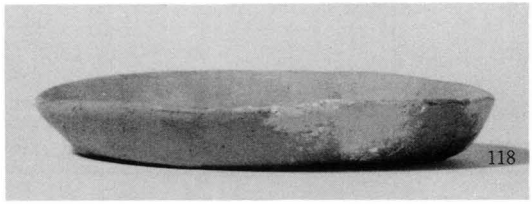

136

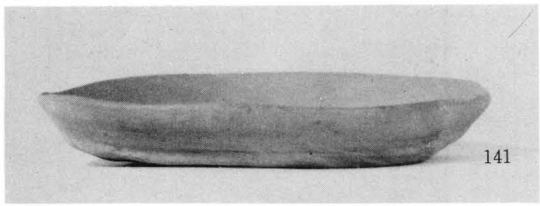

115

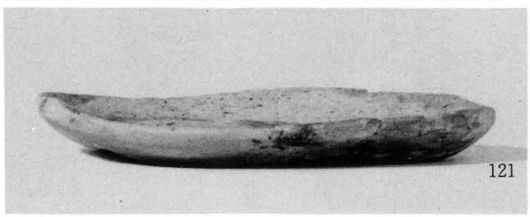

137

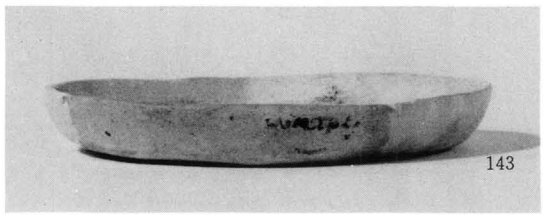

116


139


118

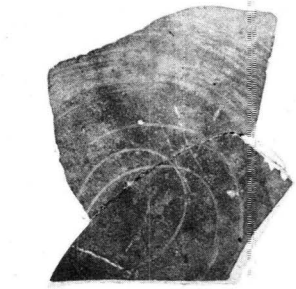

141


121

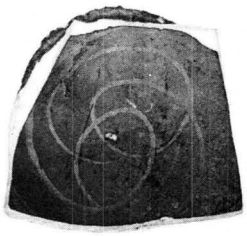

143

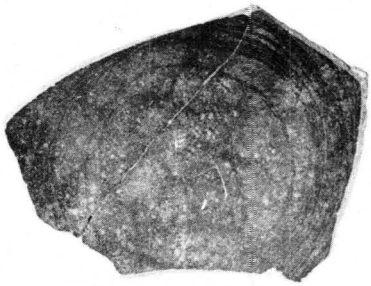
ＳＥ02　土師器小皿

図版四十　A地区遺物

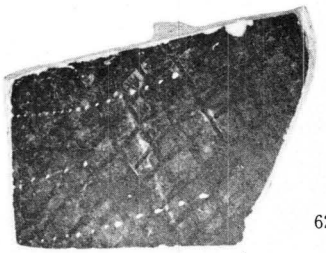

55

52


53

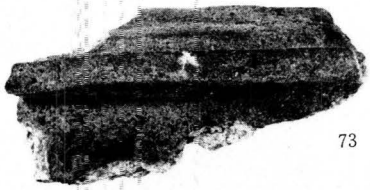

54

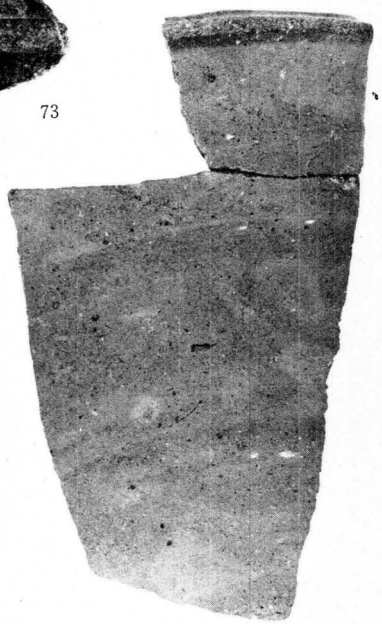
61

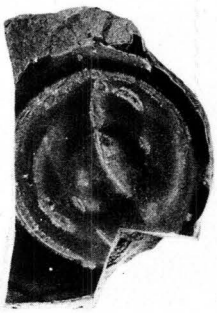

62

1．ＳＥ02　瓦器椀

77

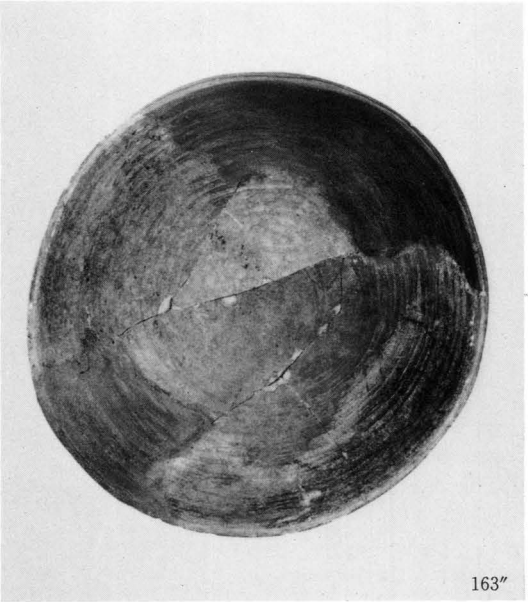

73

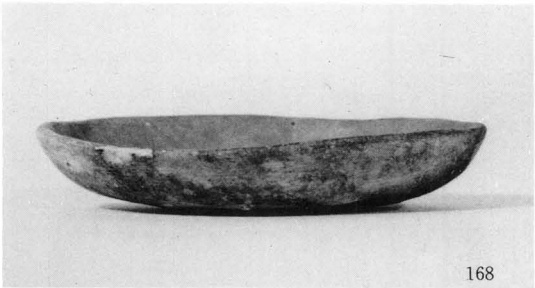

76

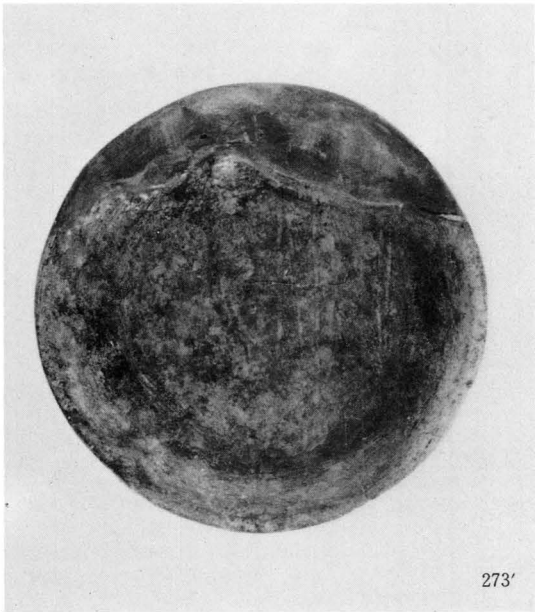

78

74

2．ＳＥ02　瓦器羽釜三足、須恵君捏鉢、輸入磁器

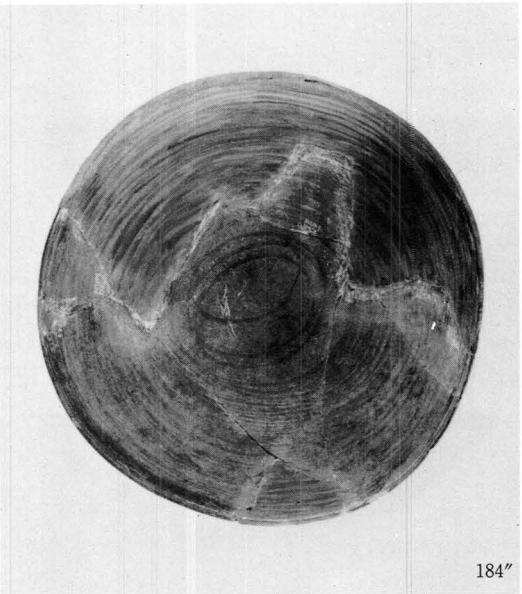


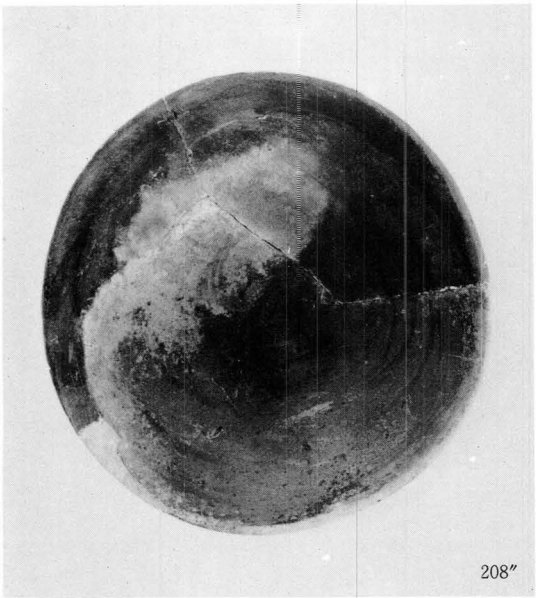


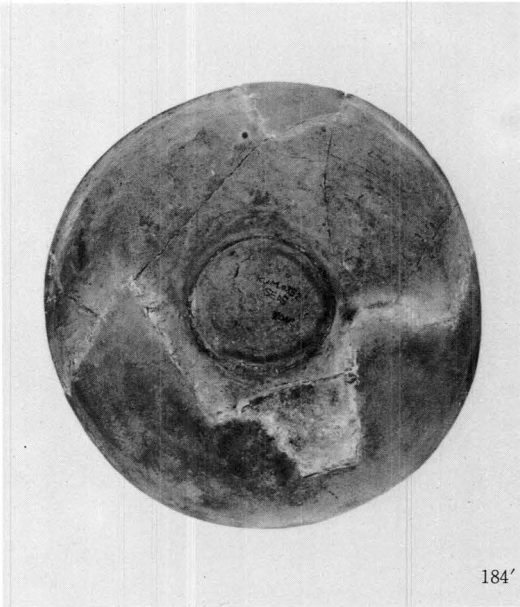


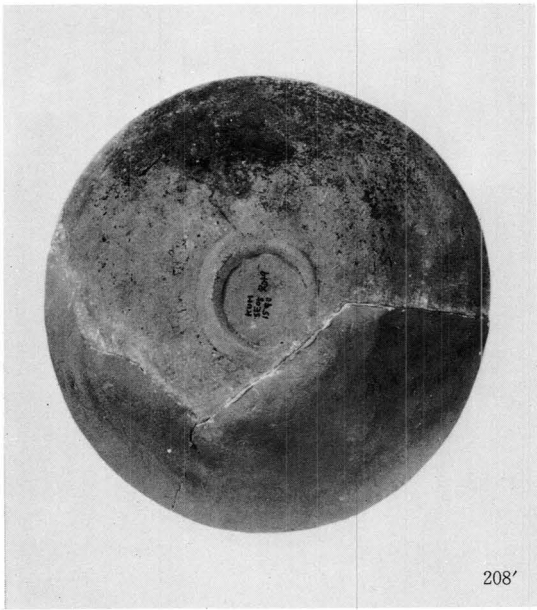
ＳＥ03　瓦器椀(163)・小皿(168・169)　ＳＥ06瓦器小皿(273)

図版四十二　A地区遺物

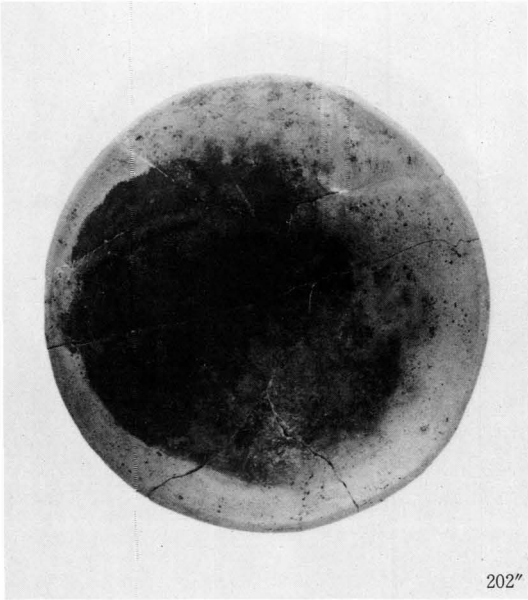




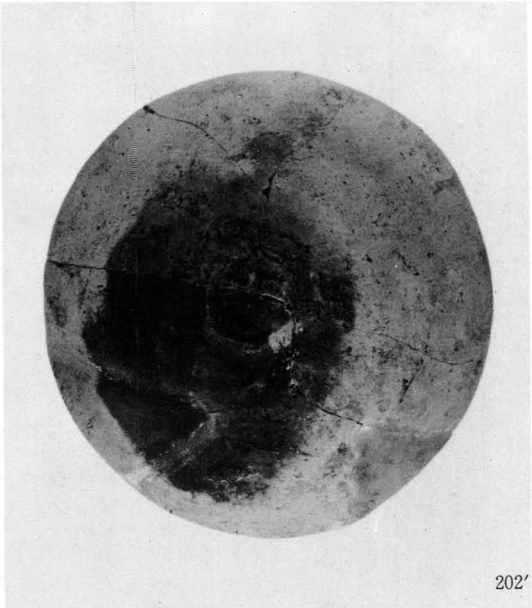


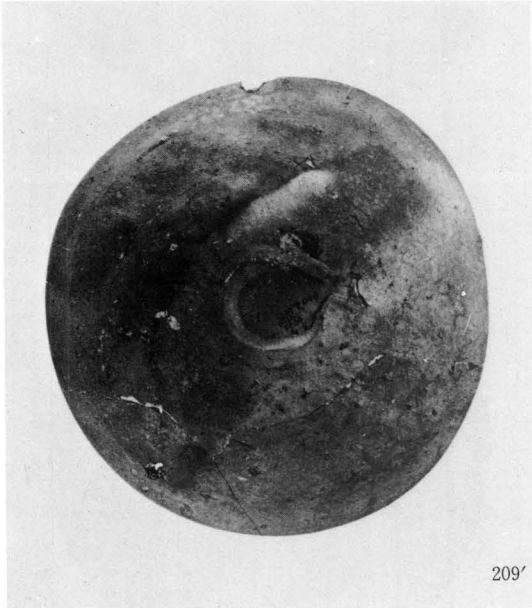


ＳＥ05　瓦器椀

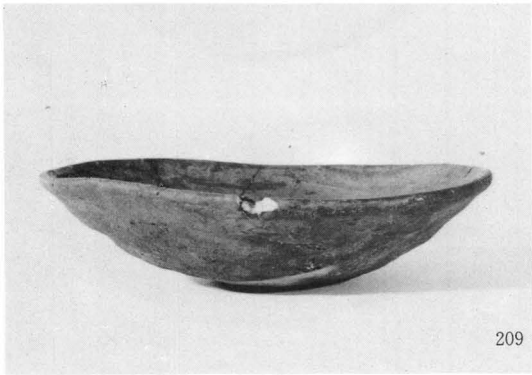

202″

209″


202′

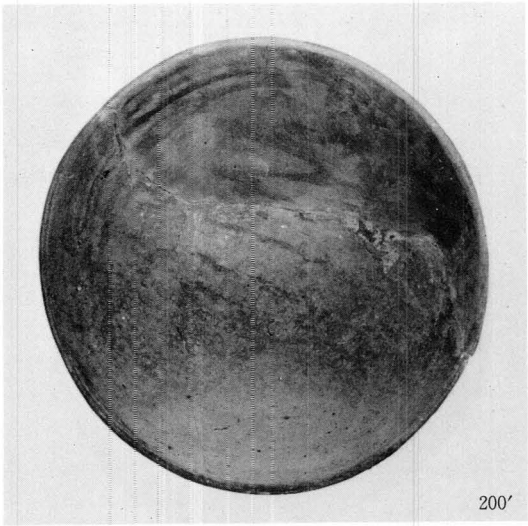

209′

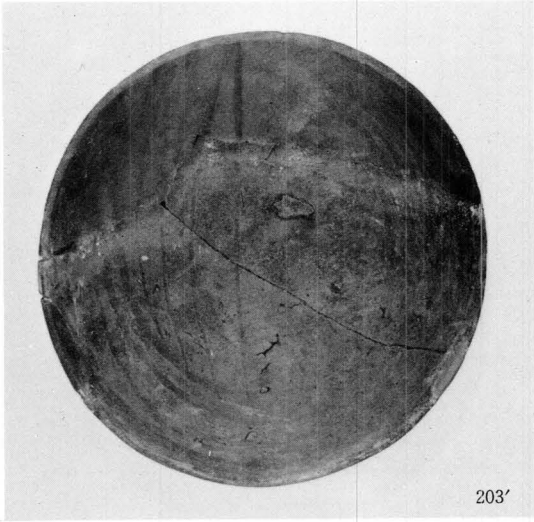
202

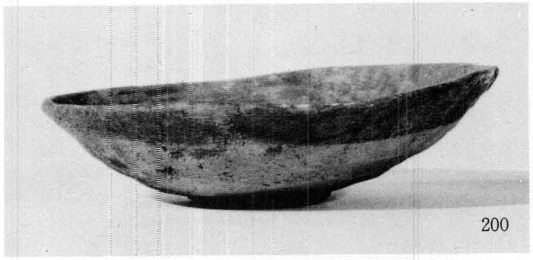

209

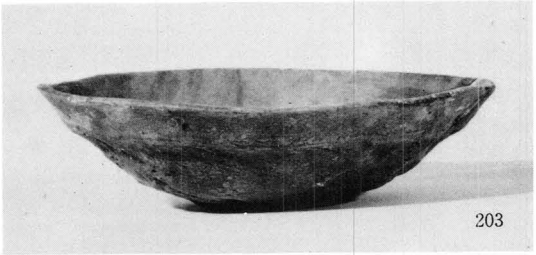
ＳＥ05　瓦器椀

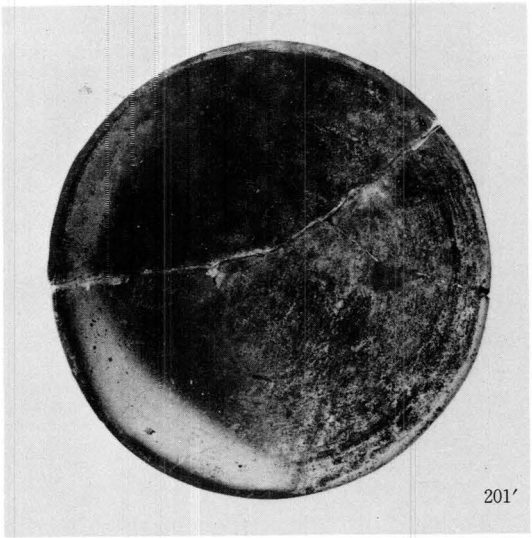
図版四十四　A地区遺物

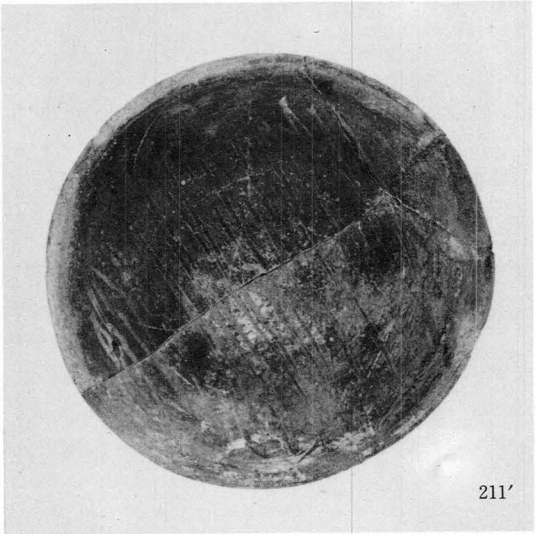


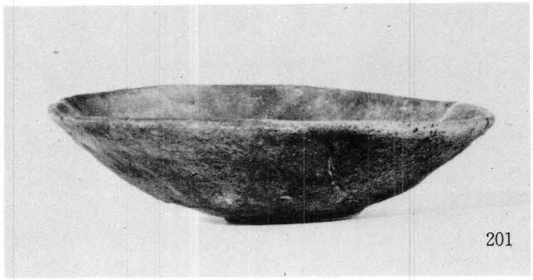


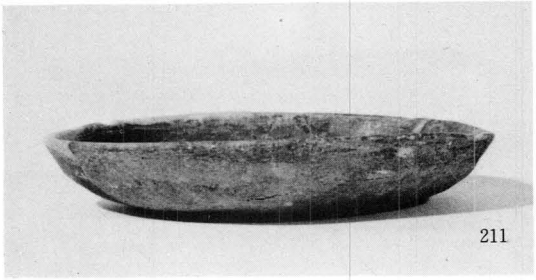






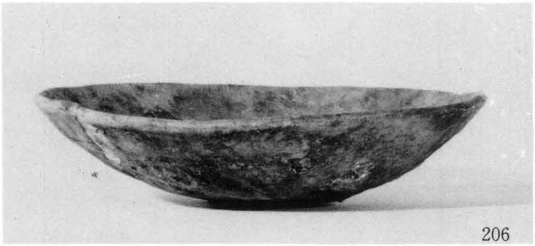




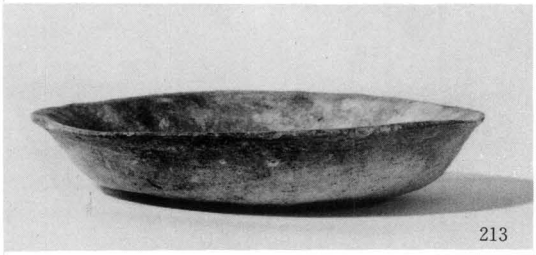


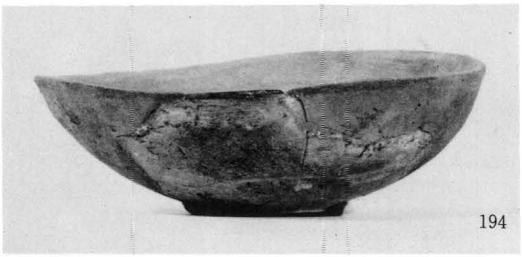
ＳＥ05　瓦器椀、瓦器小皿

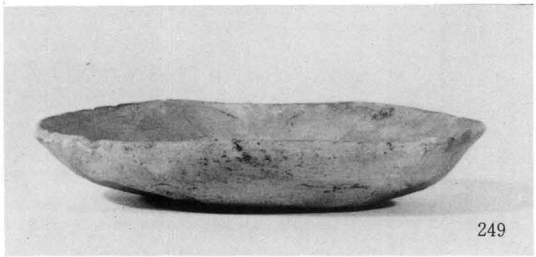
182

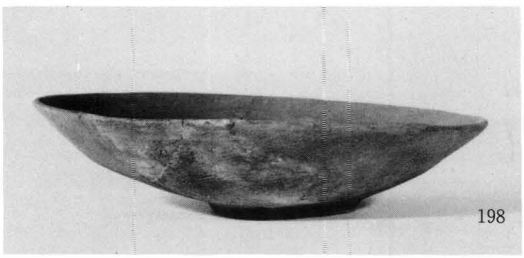

206

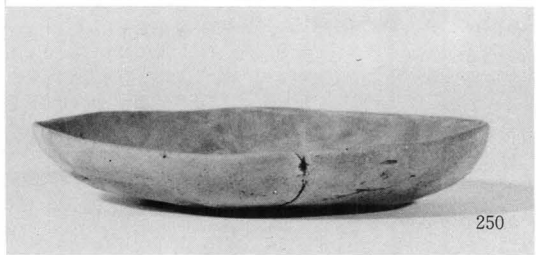
191


213


194


249


198

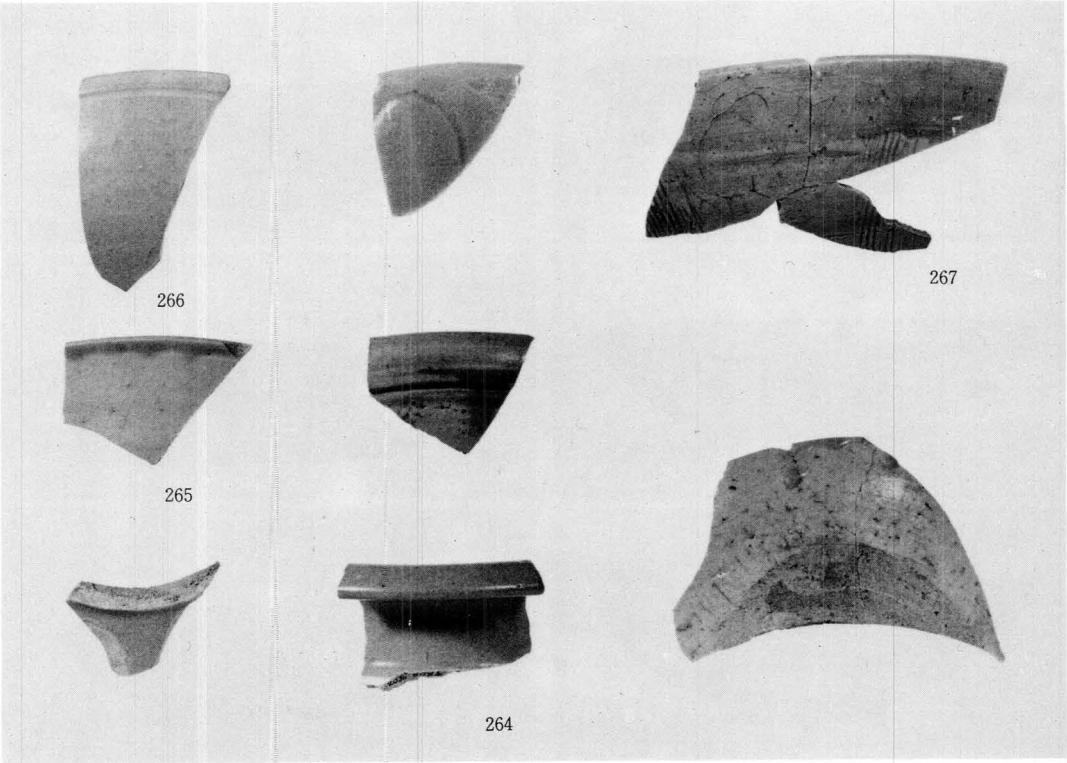

250

270

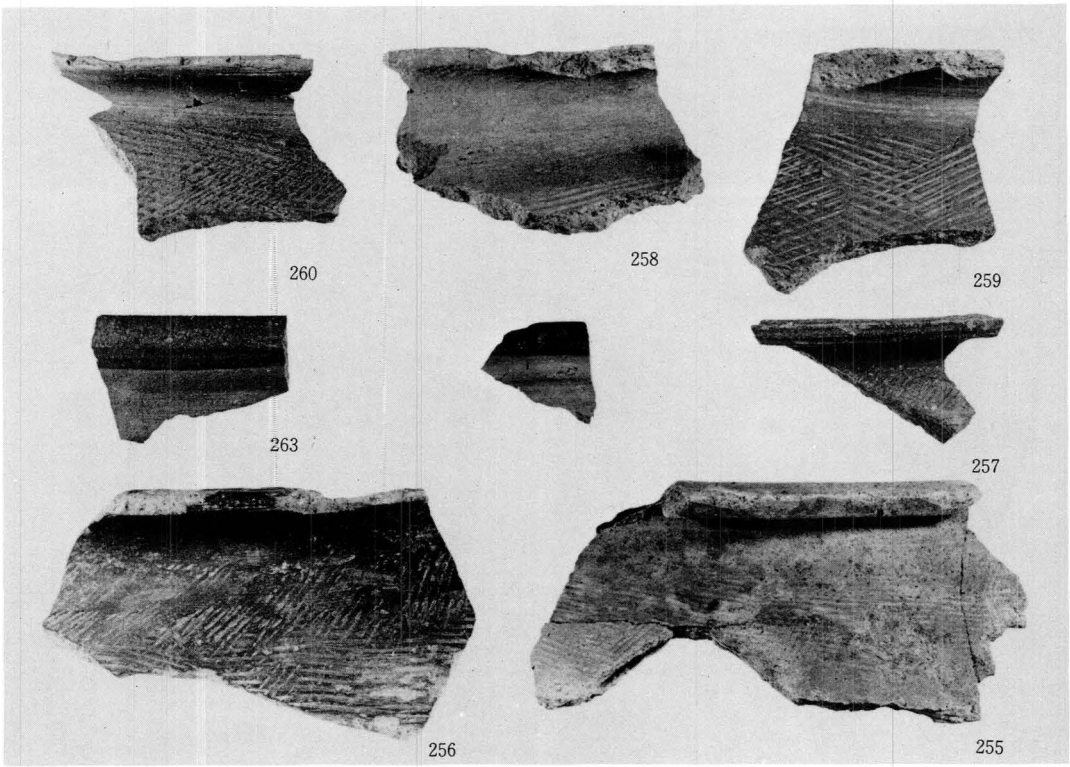
221

ＳＥ05　瓦器椀、土師器中皿・羽釜、陶器

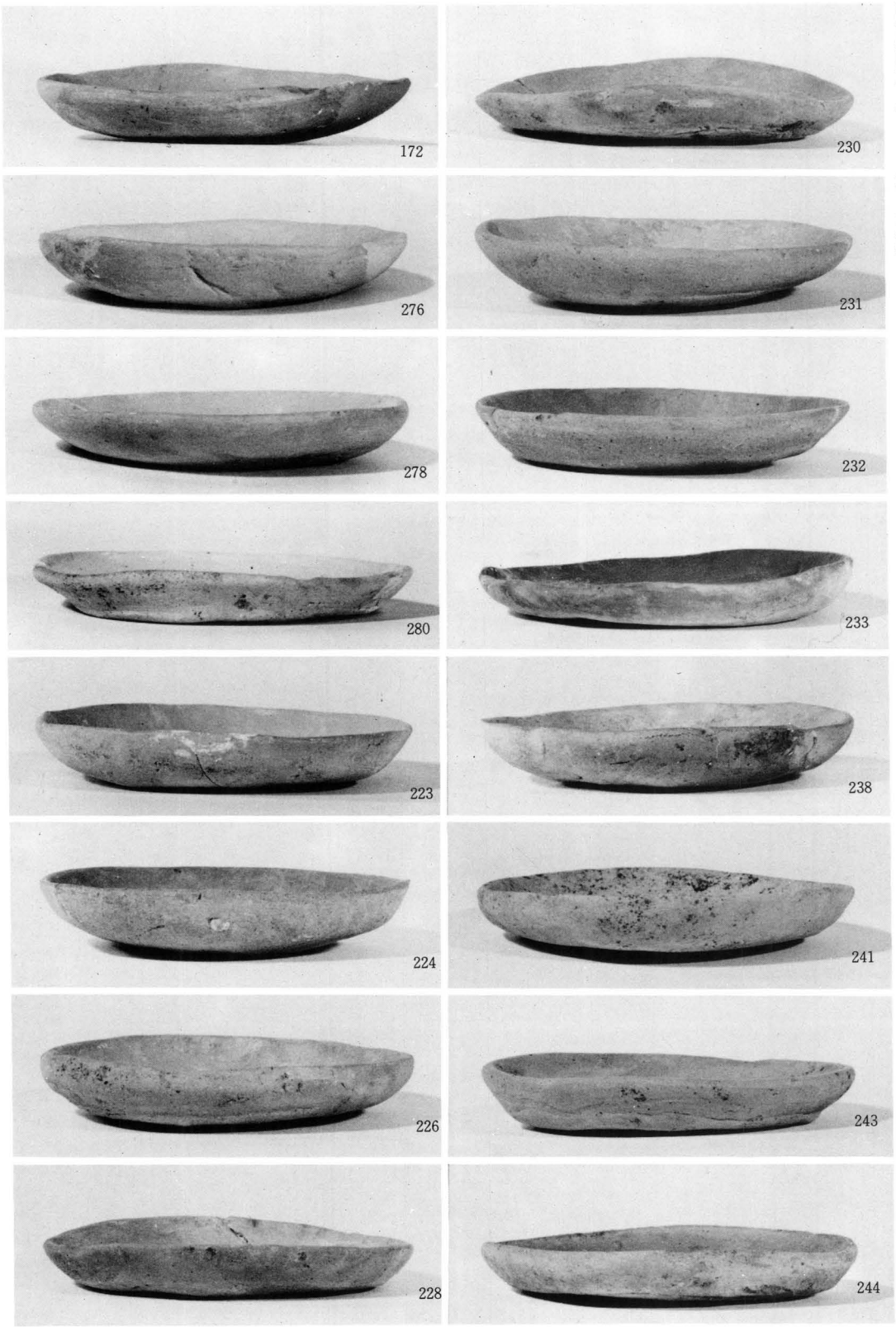
図版四十六　A地区遺物



1．SE05　輸入磁器

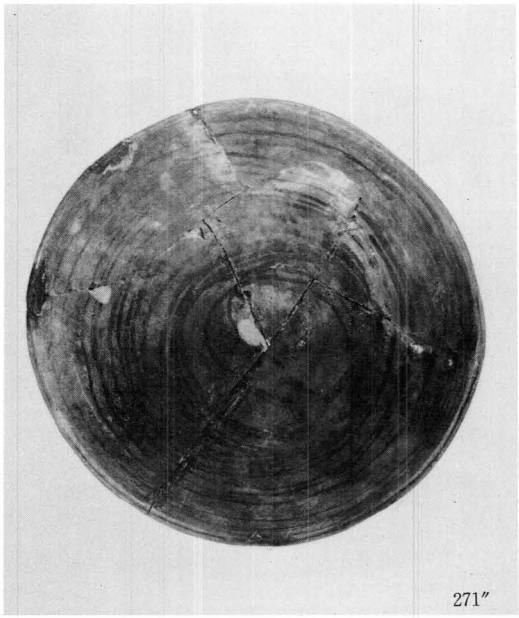


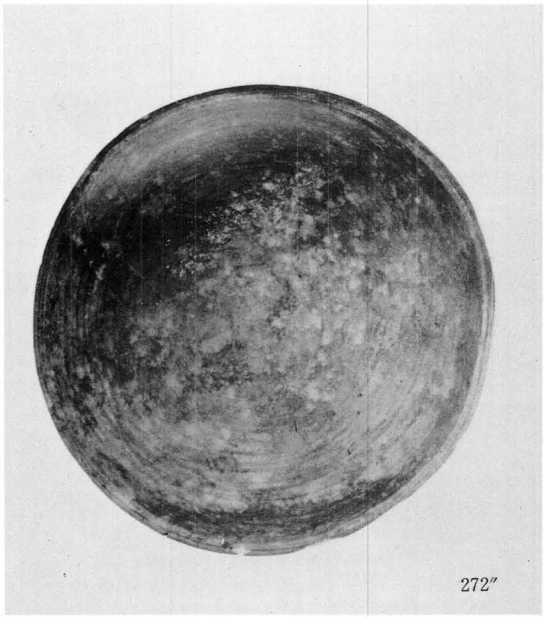
2．SE05　須恵器甕・揑鉢

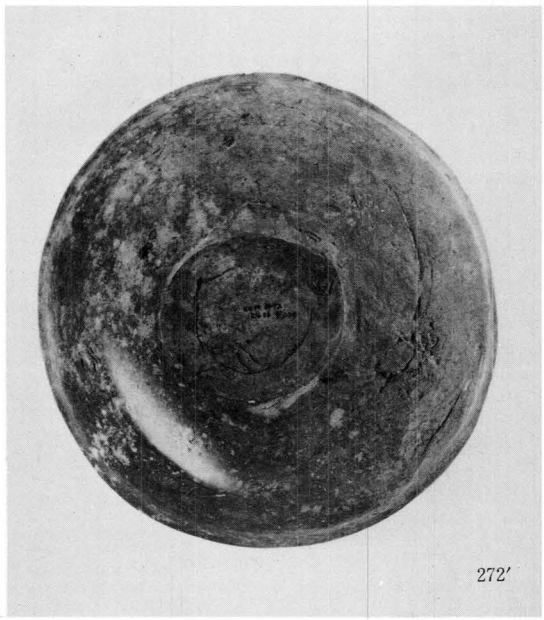


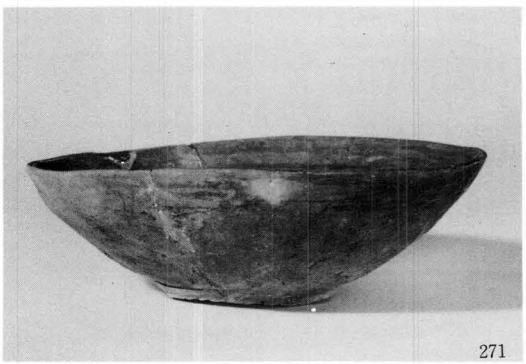
ＳＥ03　土師器小皿(172)・ＳＥ05　土師器小皿(223、224、226、228、230～233、238、241、243、244)
ＳＥ06　土師器小皿(276、278、280)

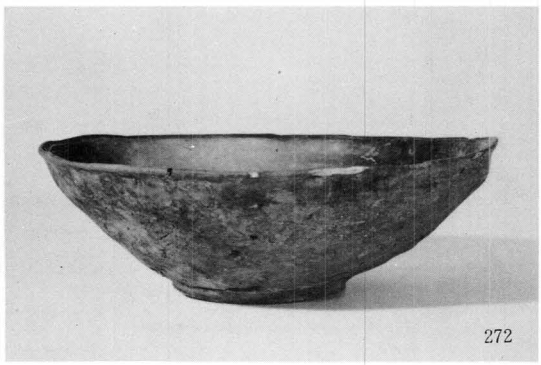
図版四十八　A地区遺物





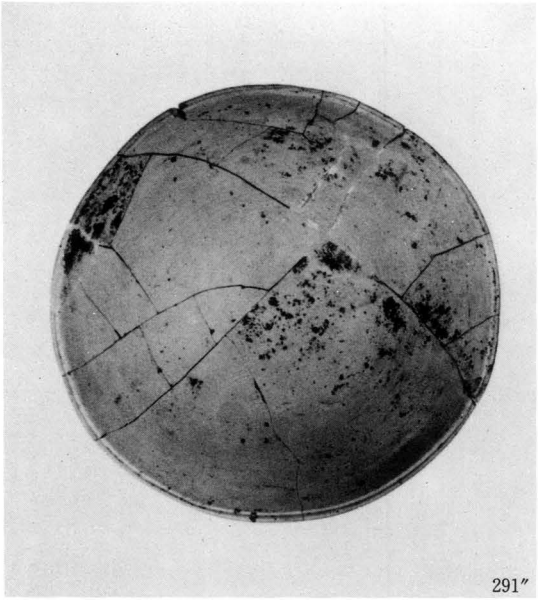


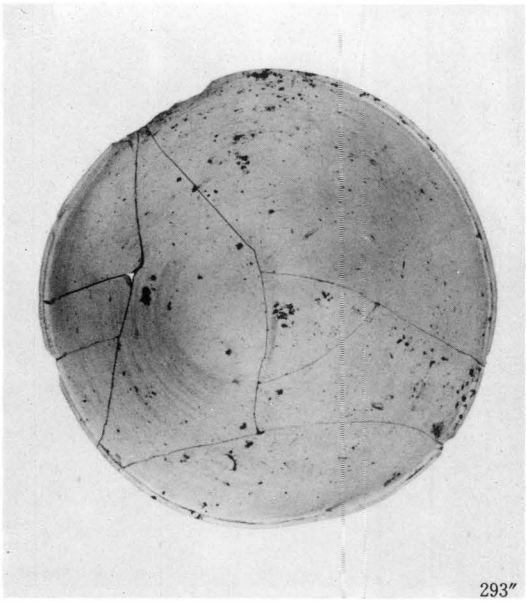


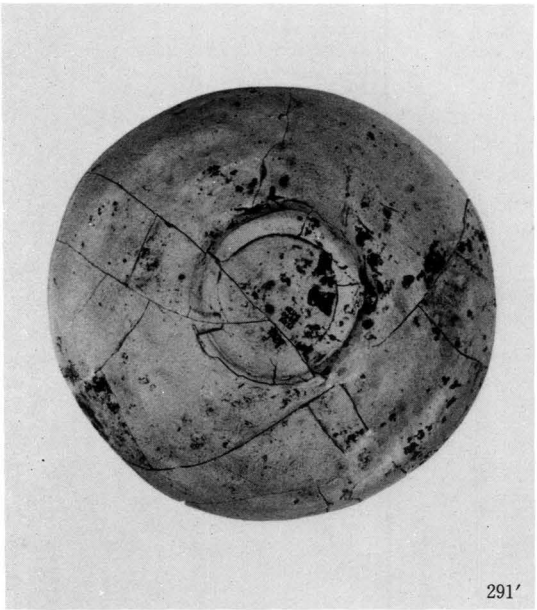


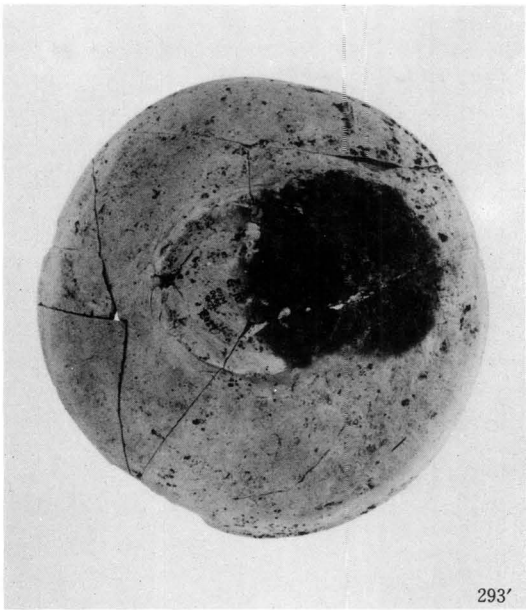
ＳＥ06　瓦器椀

図版四十九　A地区遺物

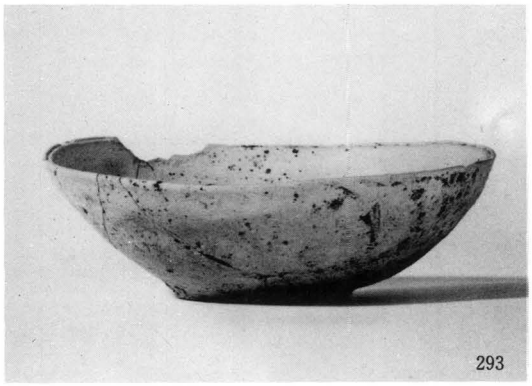

291″


293″


291′

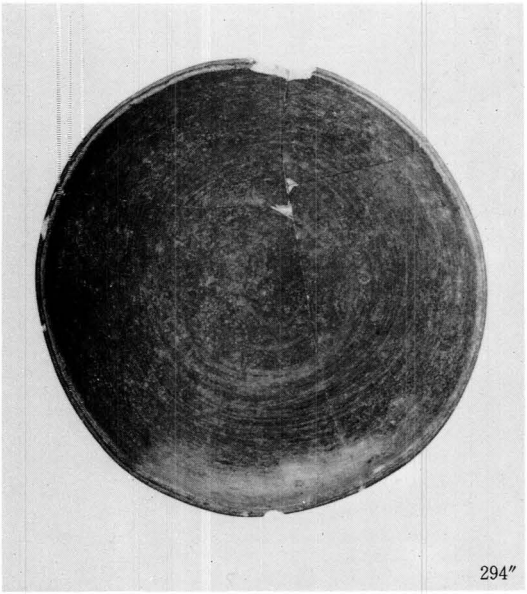

293′

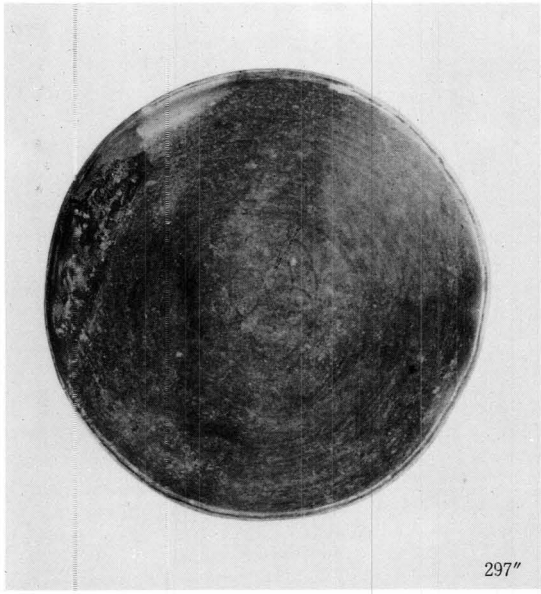
291

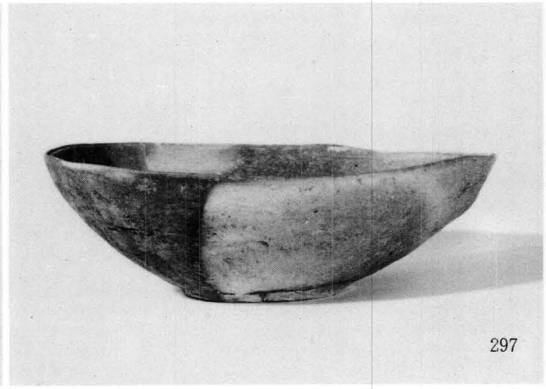

293

ＳＫ22　瓦器椀

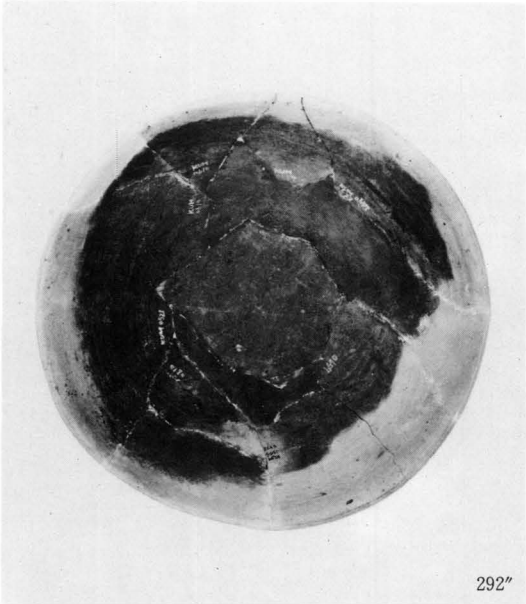
図版五十　A地区遺物



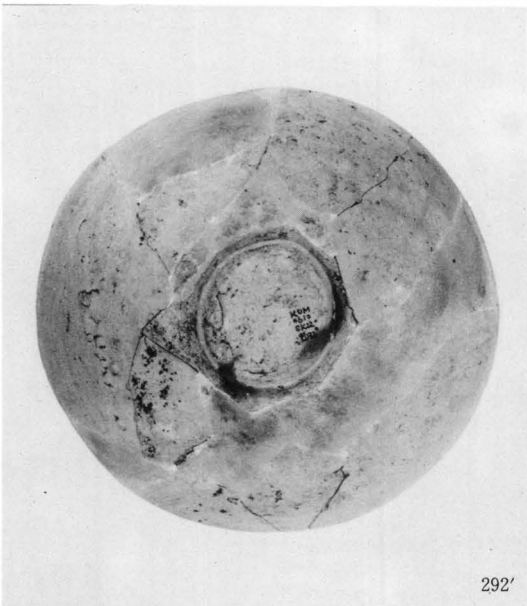




ＳＫ22　瓦器椀


292″

301″


292′

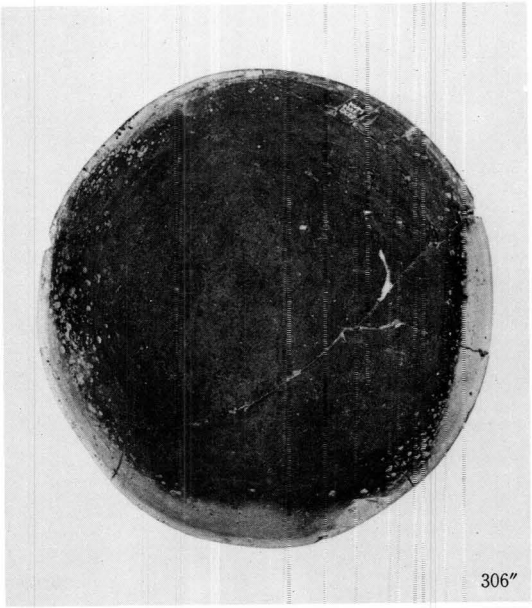
301′

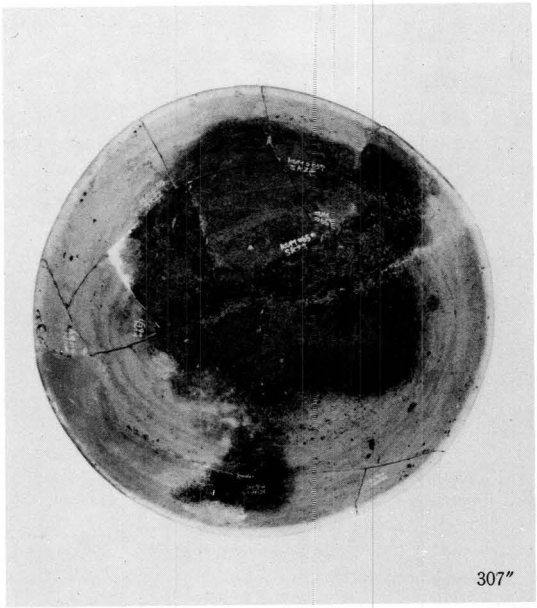
292

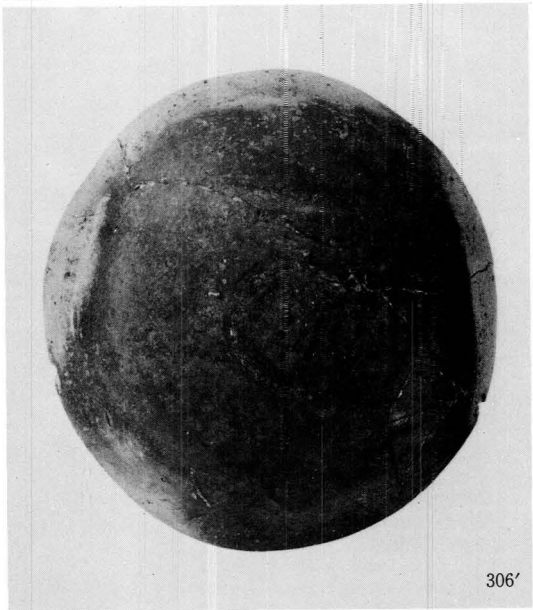
301

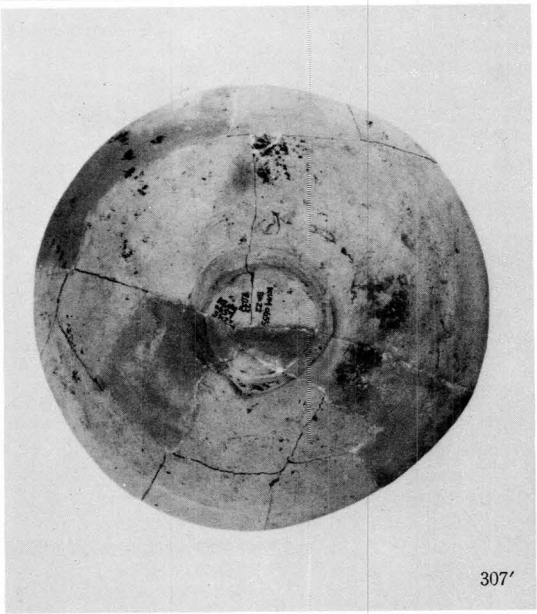
ＳＫ22　瓦器椀

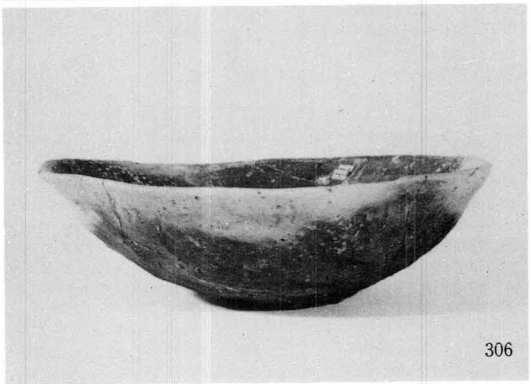
図版五十二　A地区遺物

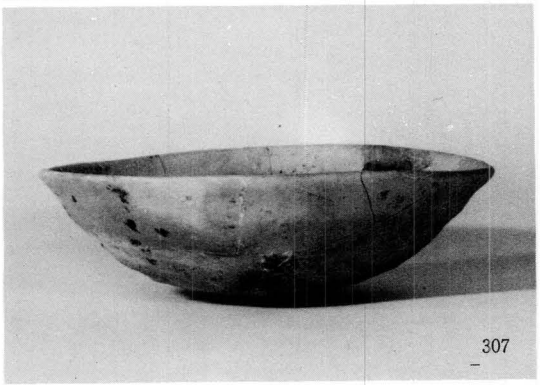

306″


307″


306′

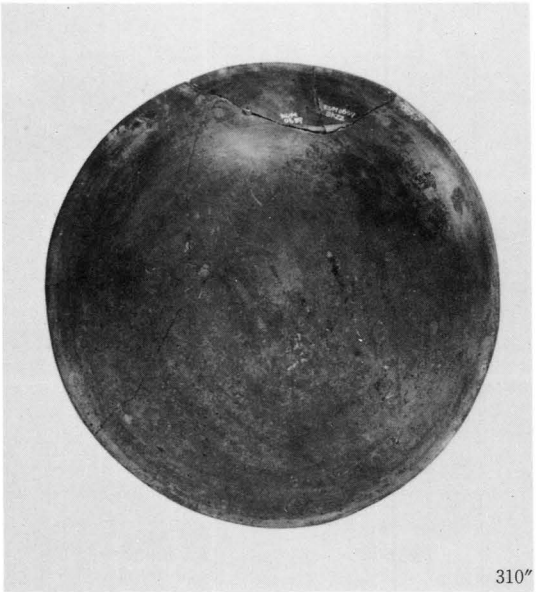

307′

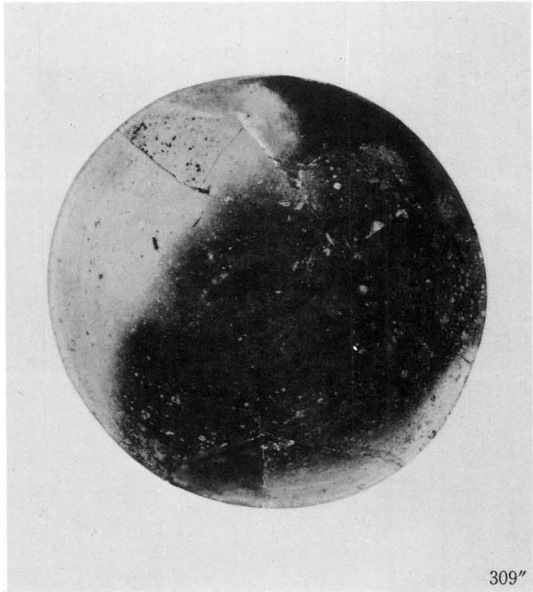

306

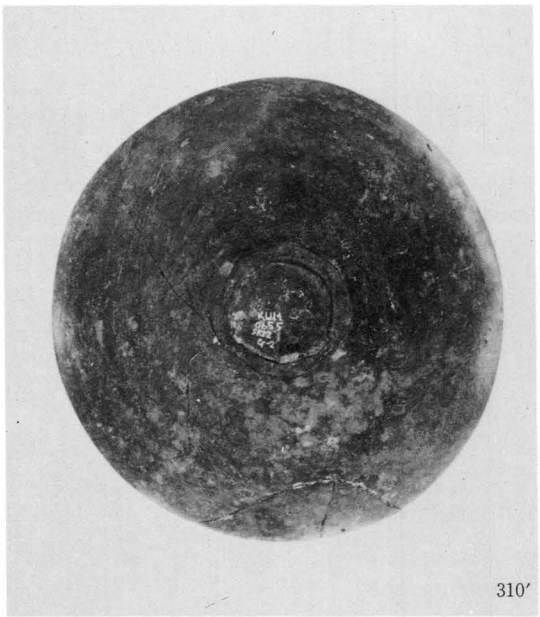

307

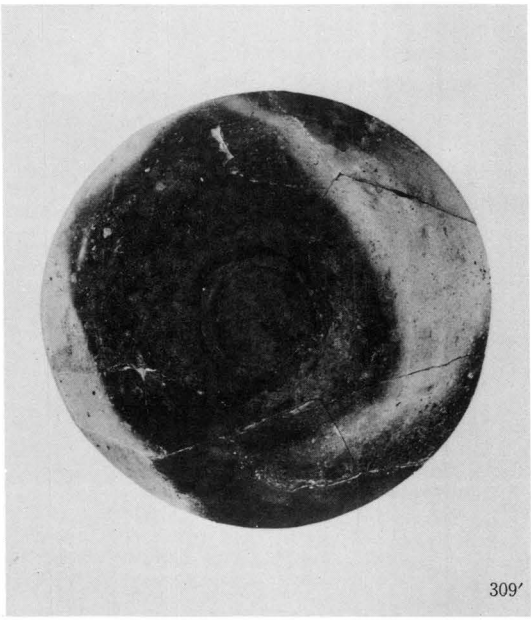
ＳＫ22　瓦器椀

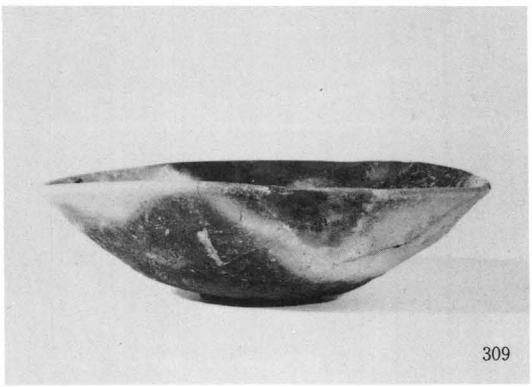
図版五十三　A地区遺物





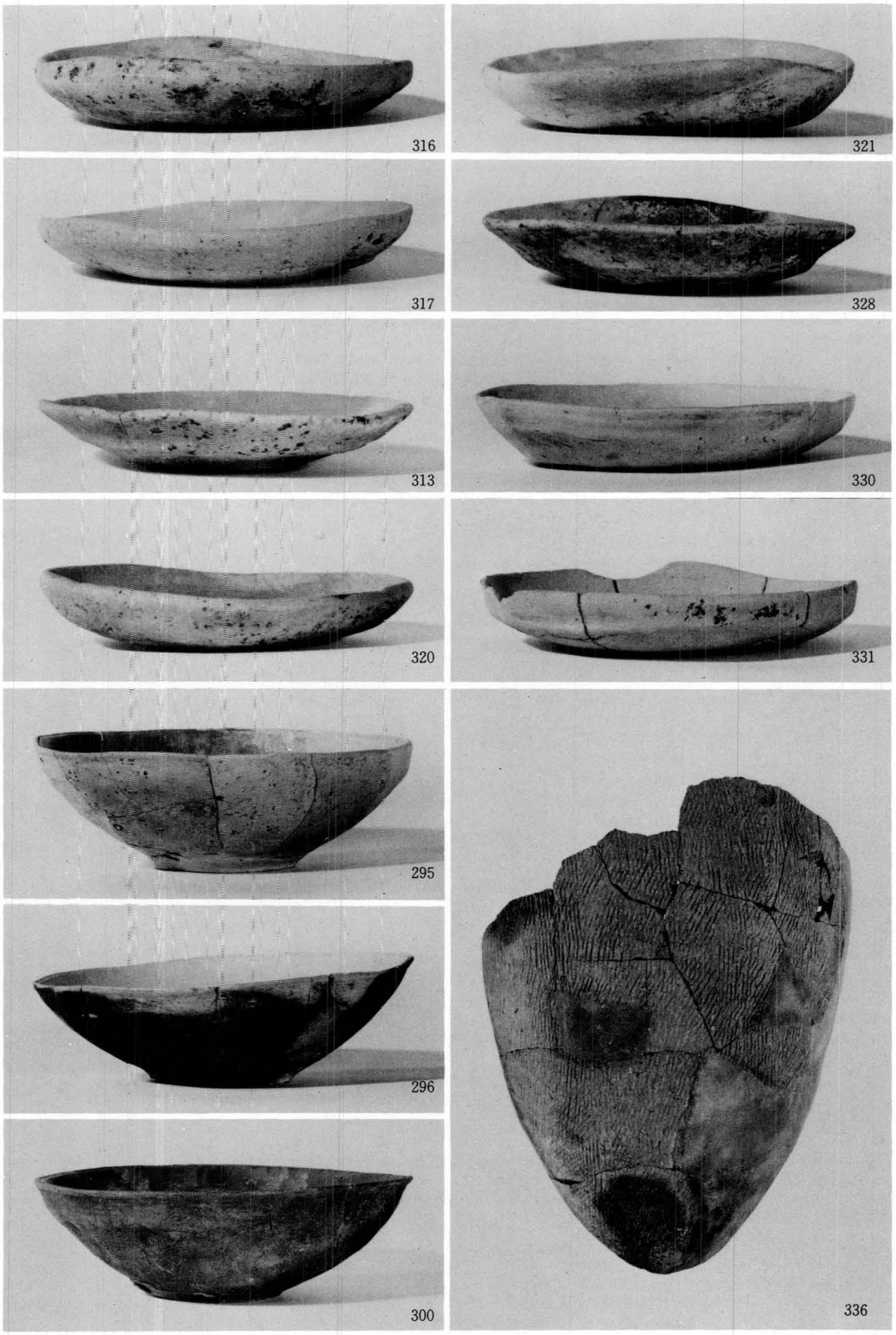






ＳＫ22　瓦器椀

図版五十四　A地区遺物



SK22　瓦器椀　小皿、土師器小皿、中皿、須恵器甕

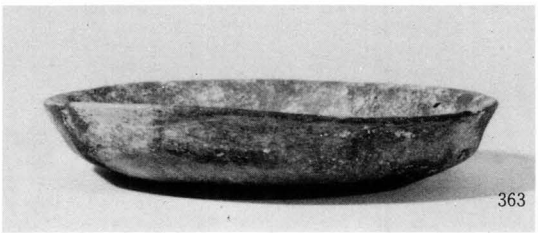
355

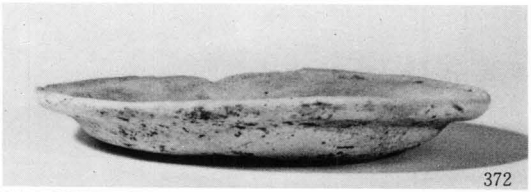
358

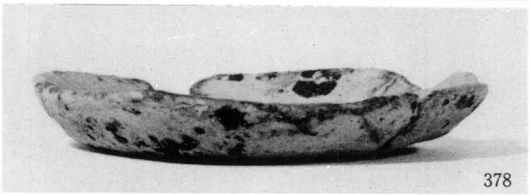
359

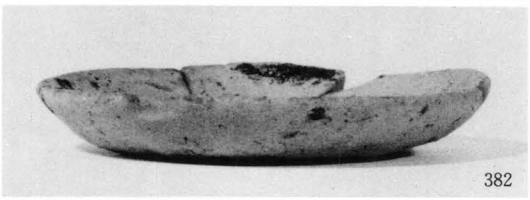
360

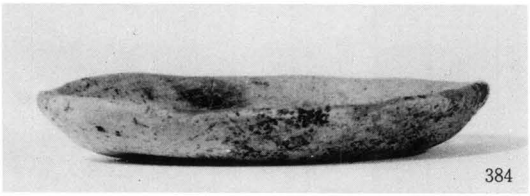
361


363

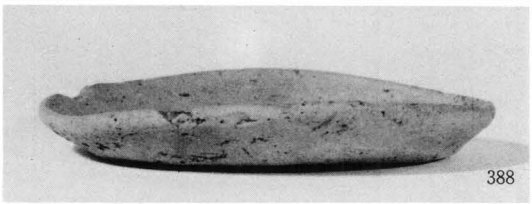

372

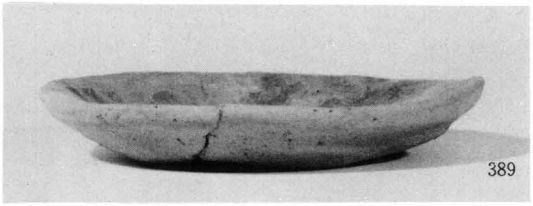

378


382


384

386

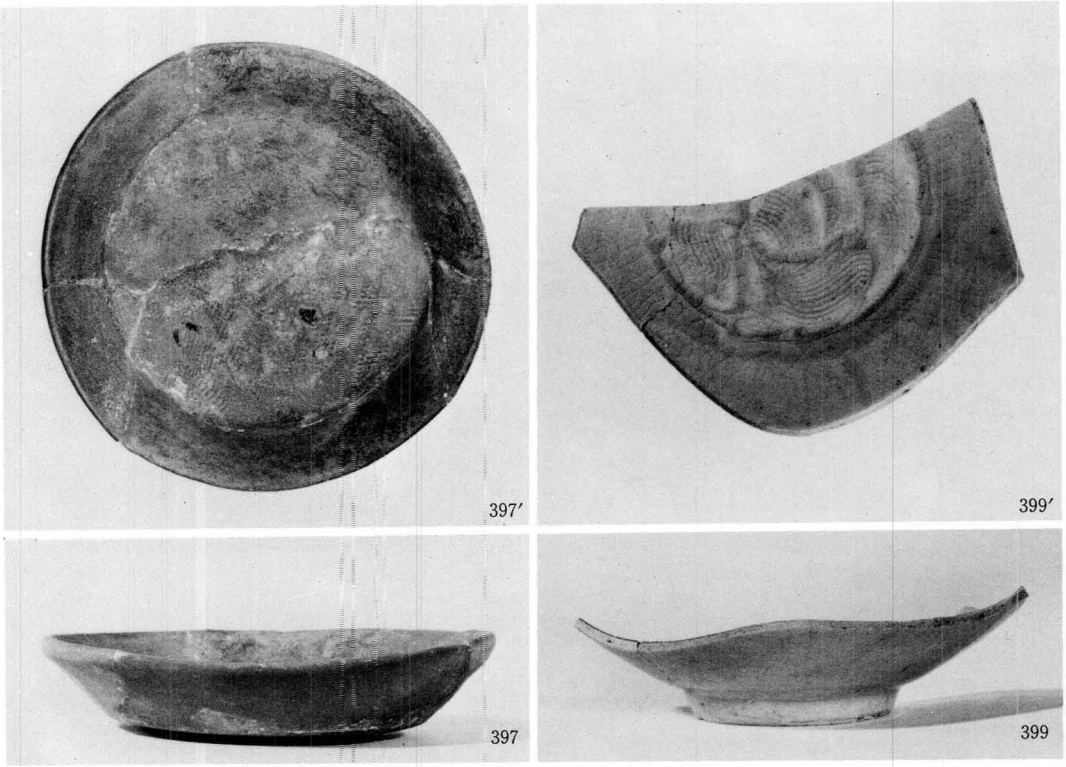

388


389

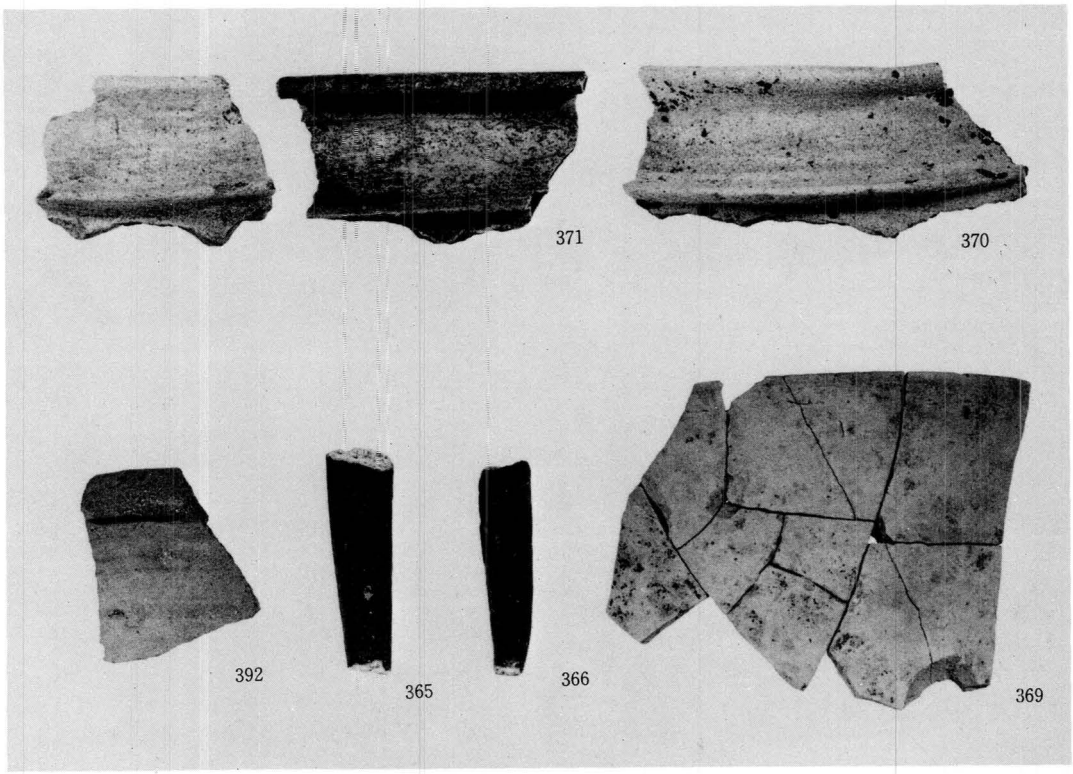
390

落ち込み状遺構２　黒色土器椀、瓦器椀、小皿、土師器小皿

図版五十六　A地区遺物

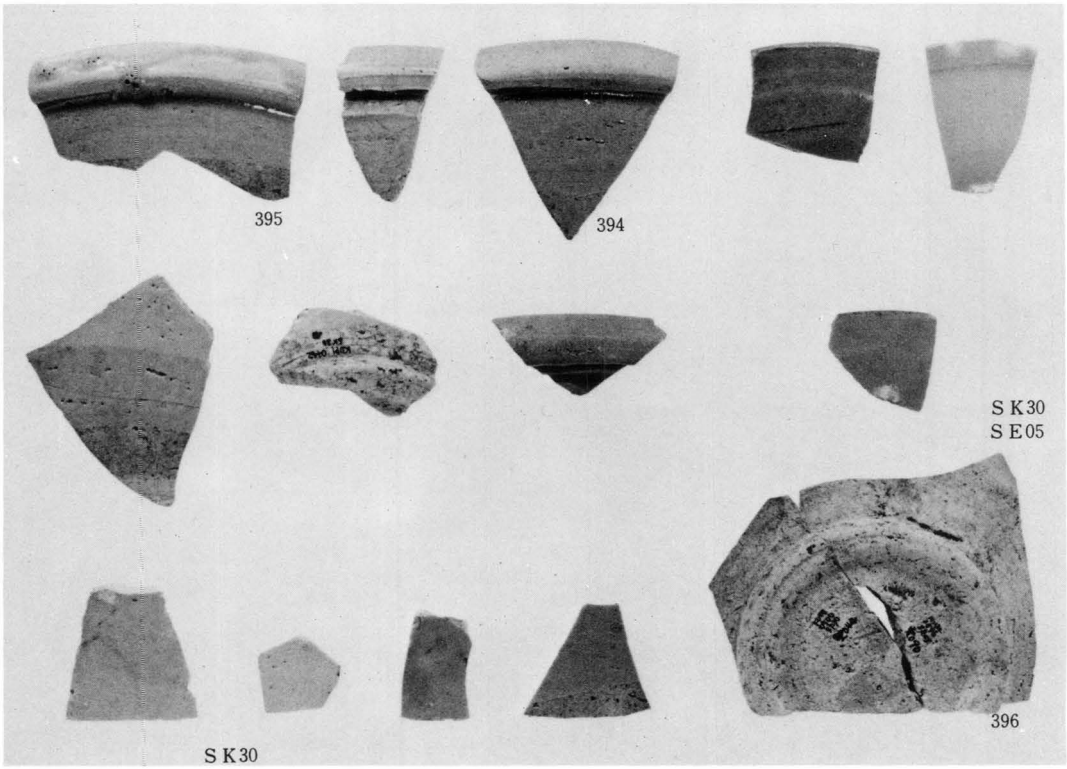


1．落ち込み状遺構２　輸入磁器

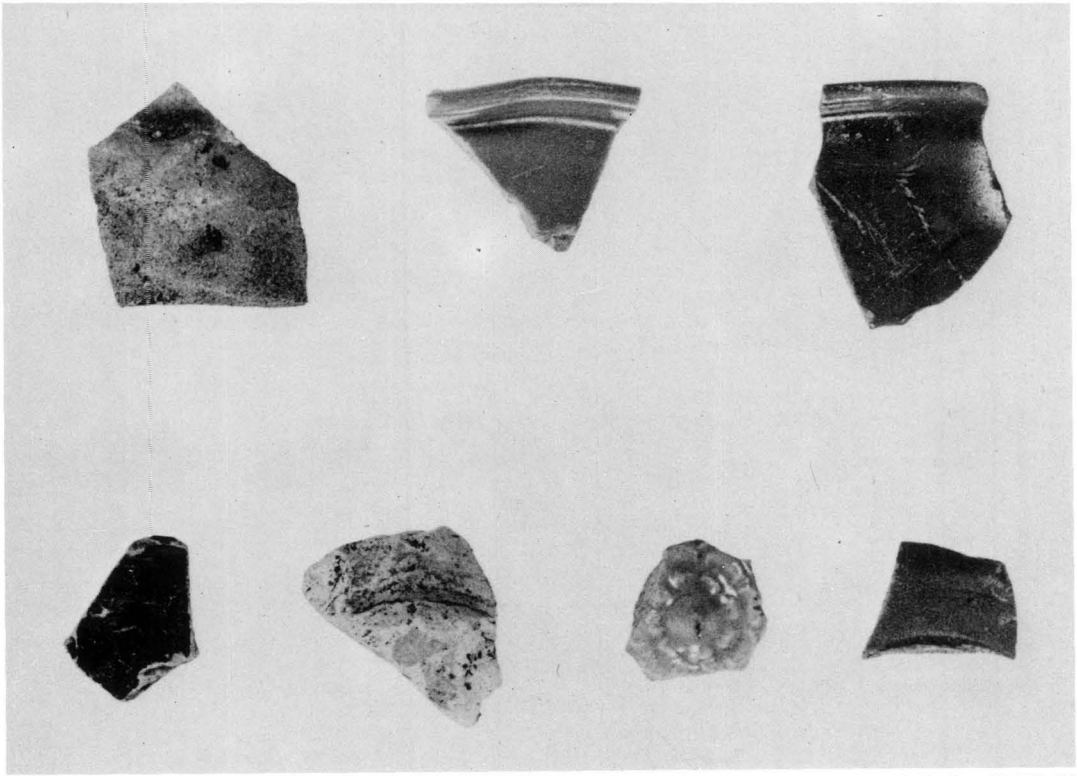


2．落ち込み状遺構２　瓦器三足、土師器甑・羽釜、須恵器揑鉢

図版五十七　A地区遺物

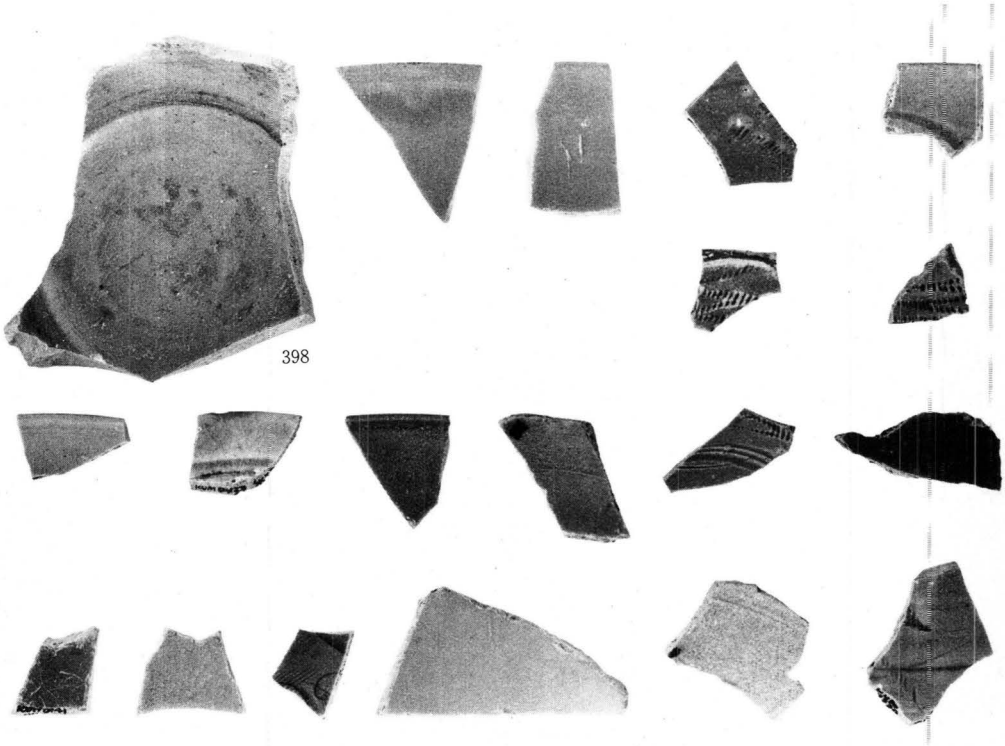


1．落ち込み状遺構2　輸入磁器

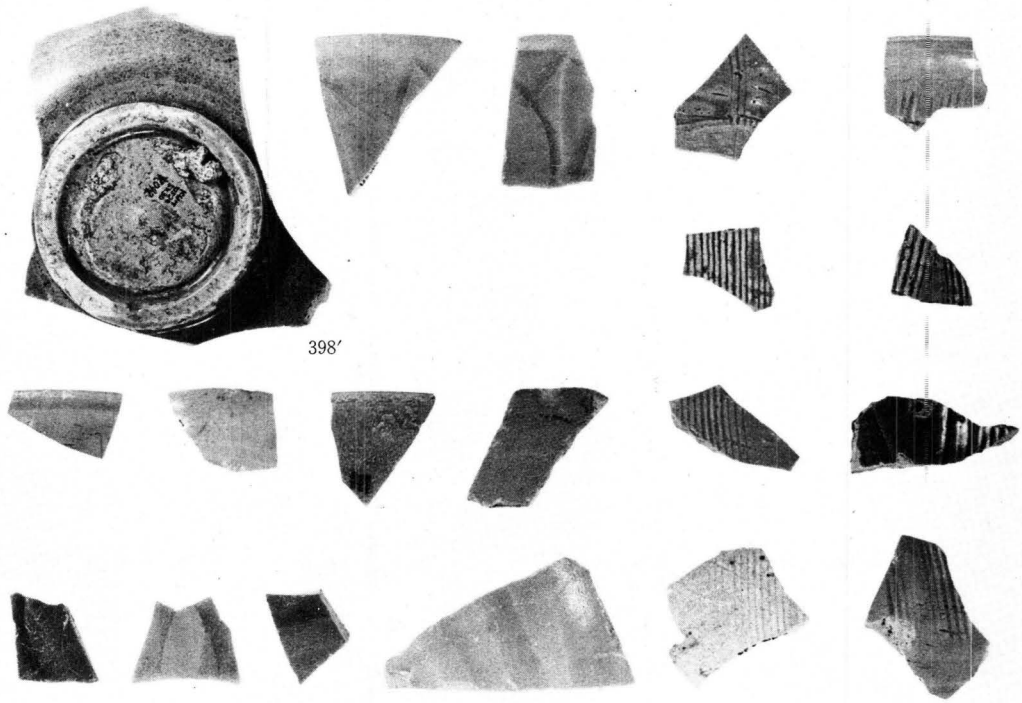


2．落ち込み状遺構2　輸入磁器、国産陶器、緑釉陶器

図版五十八　A地区遺物

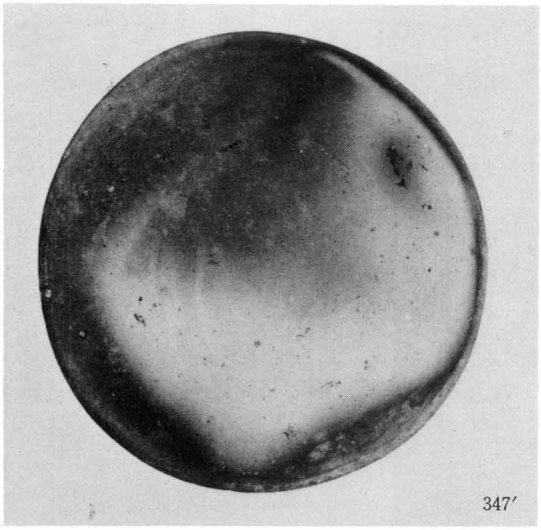


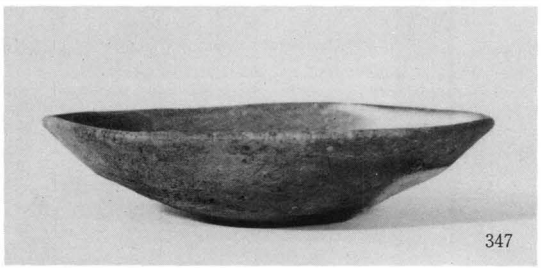
1．落ち込み状遺構２　輸入磁器（内面）

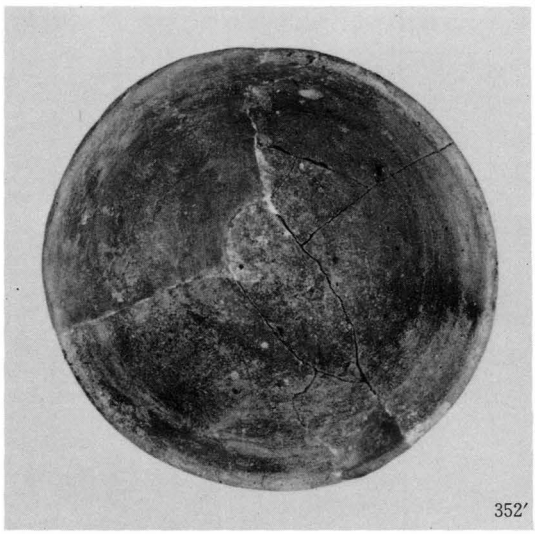


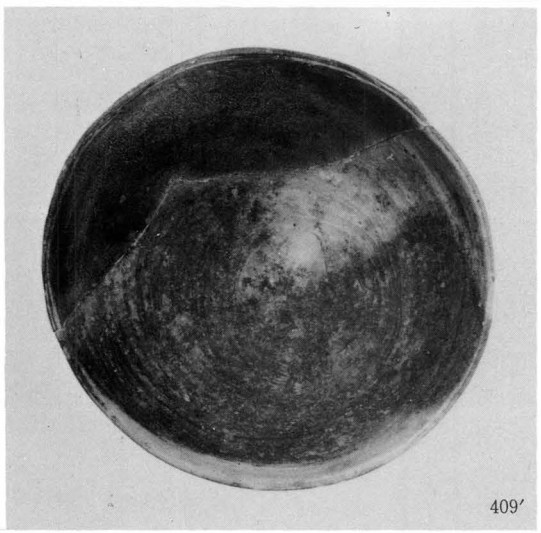
2．落ち込み状遺構２　輸入磁器（外面）

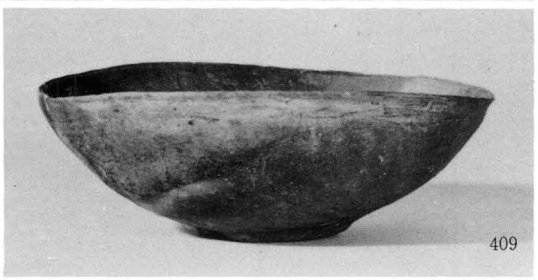
図版五十九　A地区遺物





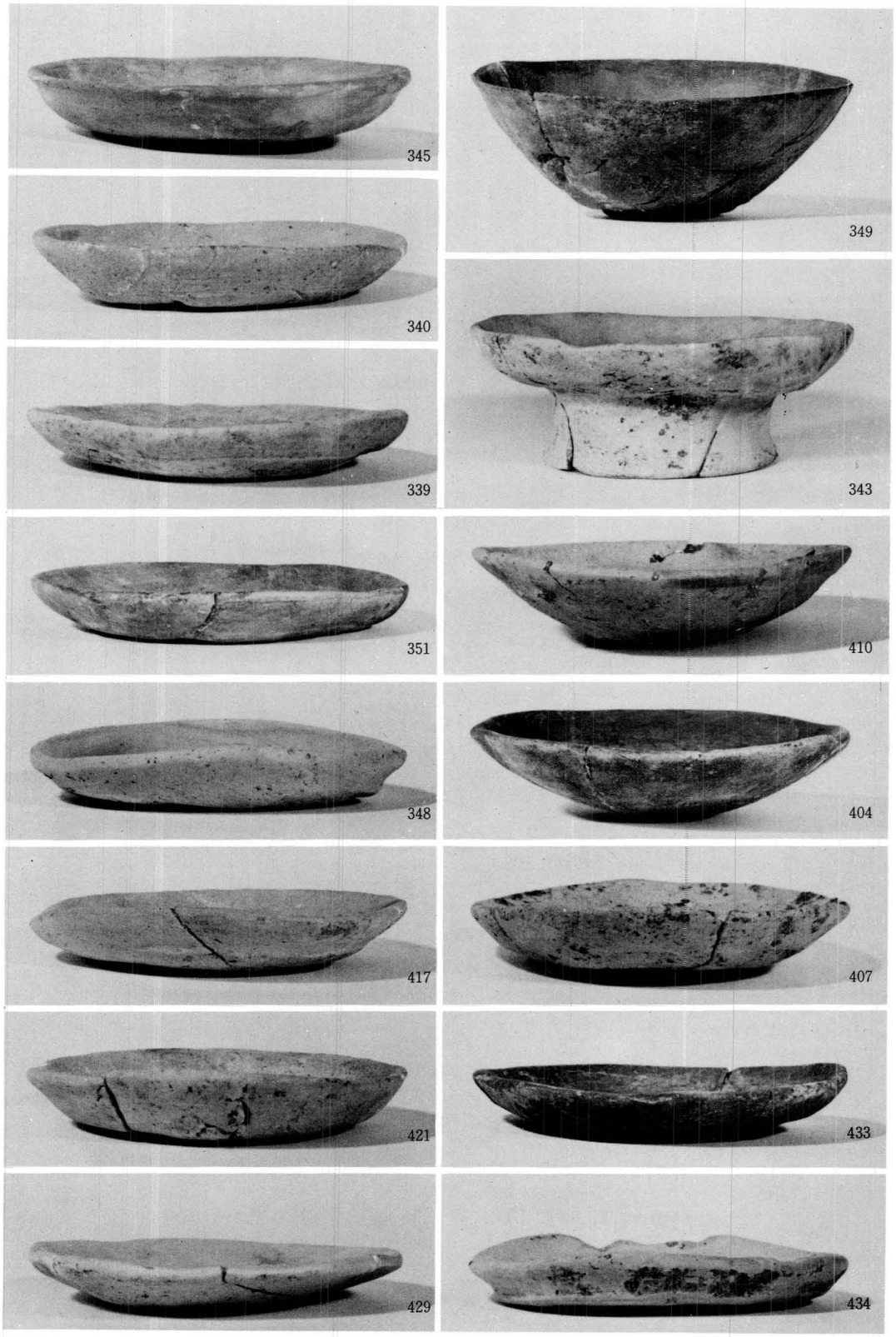




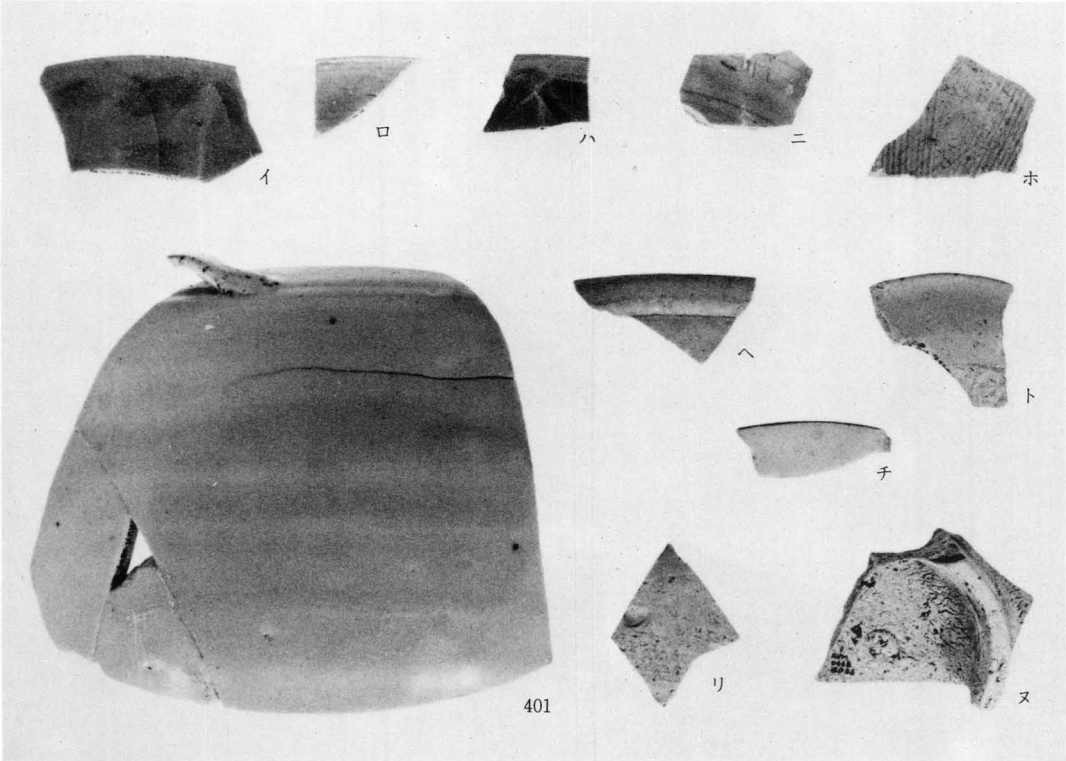


ＳＢ11輸入磁器(346)　ＳＢ189瓦器椀(347)　ＳＢ387瓦器椀(352)　ＳＤ56瓦器椀(409)

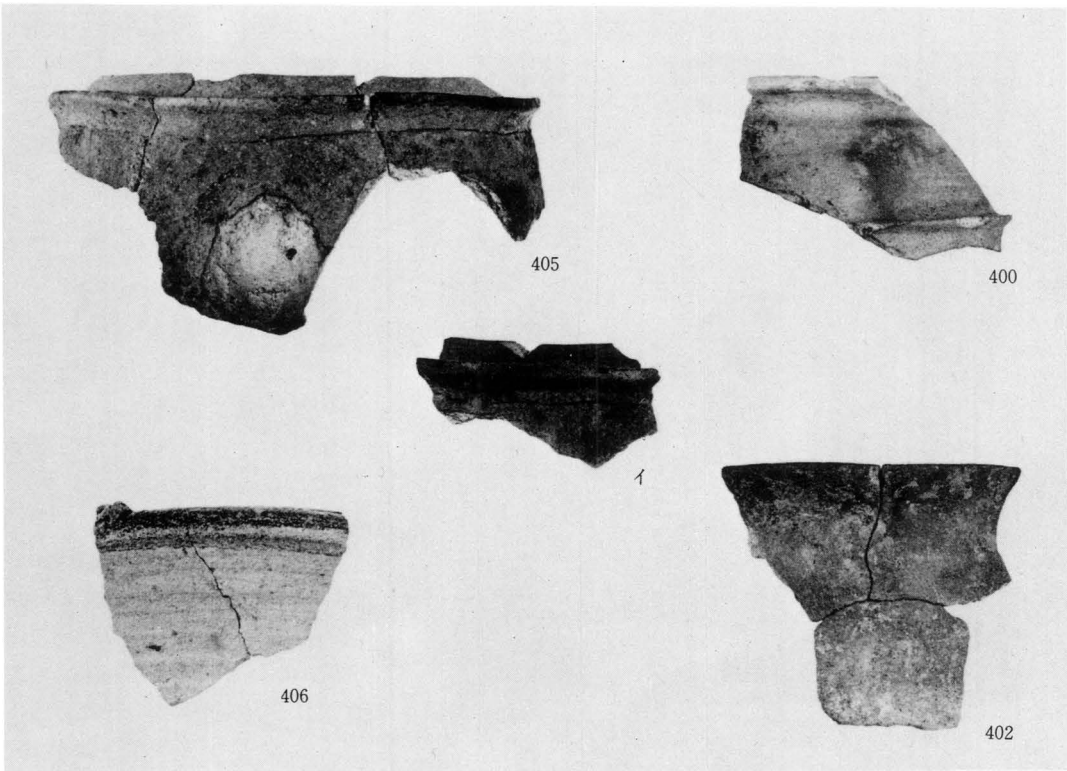
図版六十　A地区遺物



ＳＫ67土師器小皿(345)　ＳＫ37土師器小皿(340・339)　ＳＫ40土師器台付小皿(343)　ＳＢ207土師器小皿(348)
ＳＢ327瓦器椀(349)　ＳＢ332土師器小皿(351)　ＳＤ52瓦器椀(404)　土師器小皿(407)　ＳＤ56瓦器椀(410)
ＳＤ58土師器小皿(417・421・429)　ＳＤ63土師器小皿(434・433)

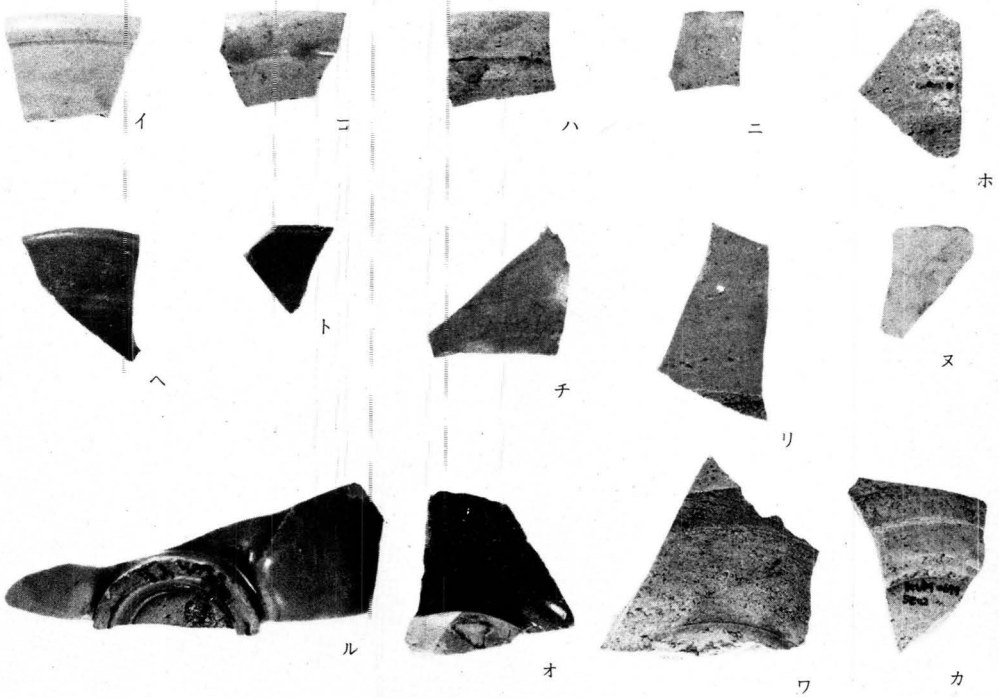


1．輸入磁器　ＳＤ16(401)　SD3(へ)　SD52(ハ・ニ・チ)　ＳＤ56(ホ・ヌ)　ＳＤ58(イ)　ＳＤ63(ロ・ト・リ)

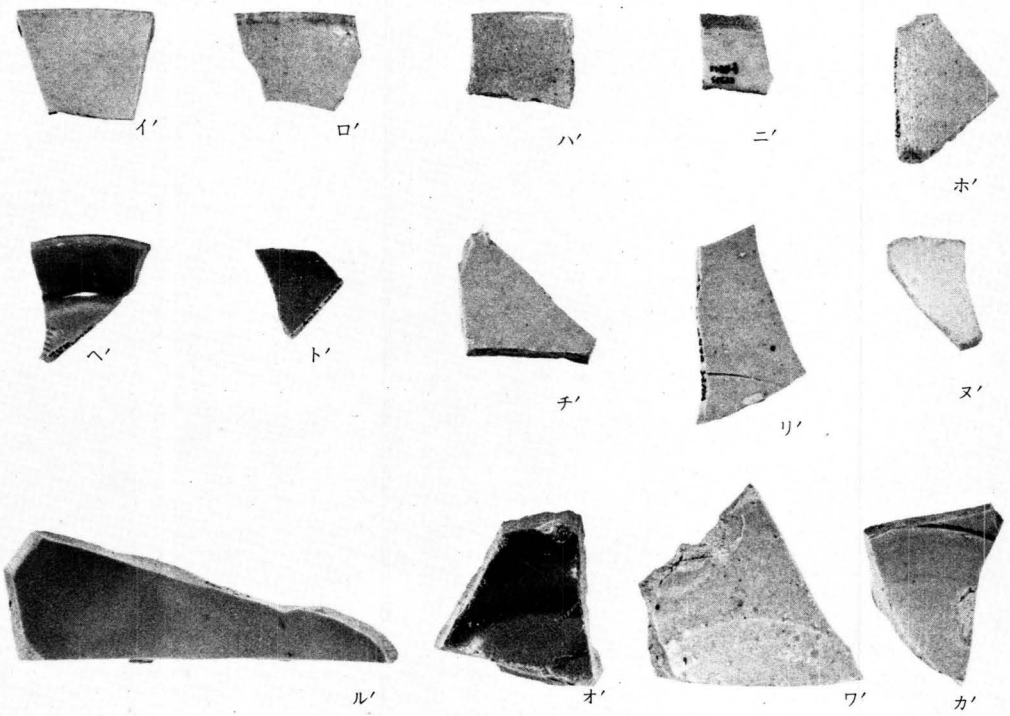


2．ＳＤ３土師器羽釜(400)　ＳＤ40土師器甕(402)
ＳＤ52瓦器羽釜(405・イ)　須恵器揑鉢(406)

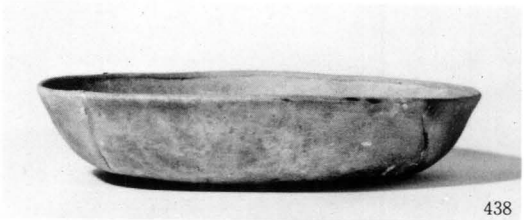
図版六十二　A地区遺物

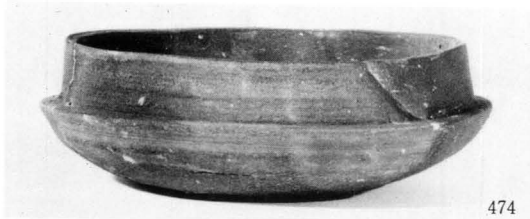


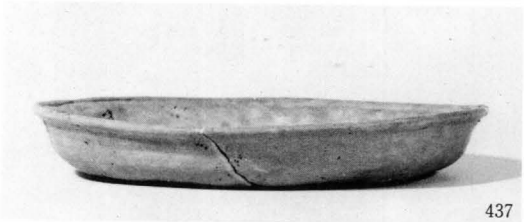
1．輸入磁器　ＳＥ01(へ)　ＳＥ02(イ・リ・ワ・カ)　ＳＤ06(チ・ヌ・ル)　ＳＫ47(ロ・ハ・ホ・ト)
ＳＥ22(ニ)　ＳＢ64(オ)(外面)

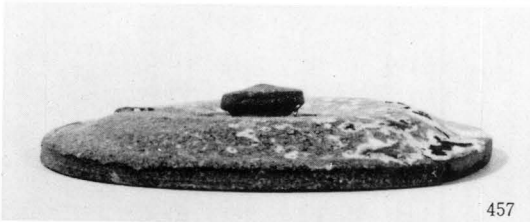


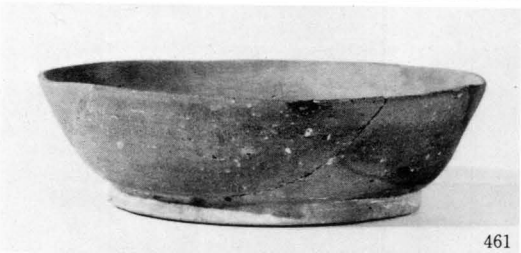
2．輸入磁器(内面)


438


474


437

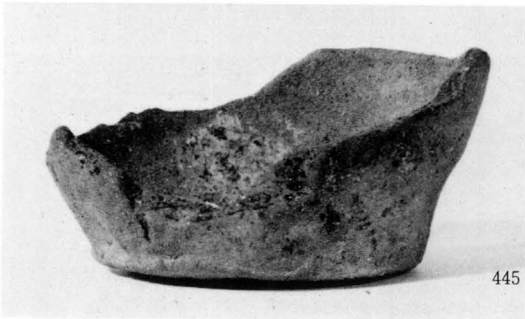

457


461

439

463

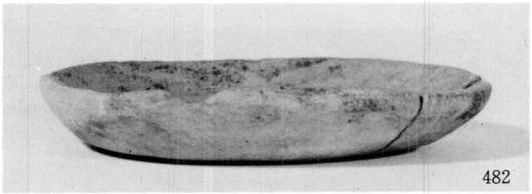
462


445

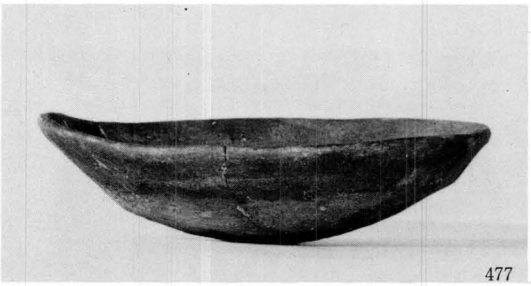
468

包含層　土師器杯・丸底壺・鉢・須恵器杯・壺・蓋

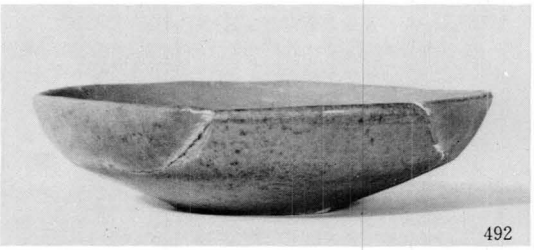
図版六十四　A地区遺物

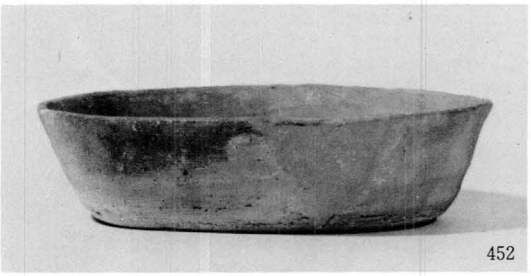

482

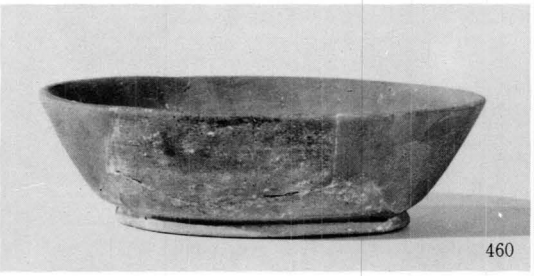
476

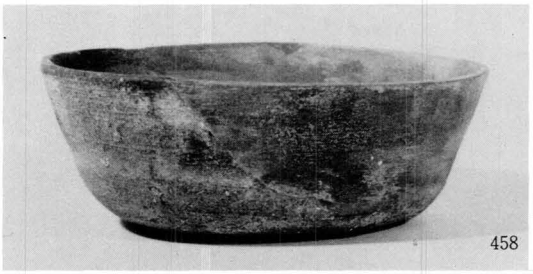

477

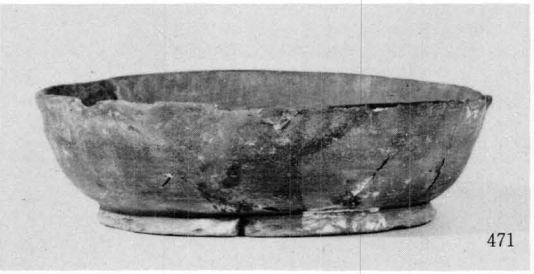
492′

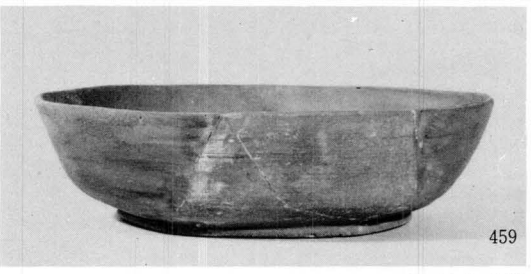

492

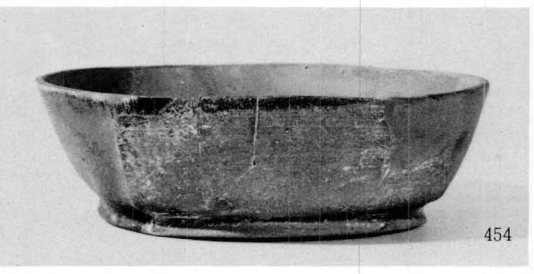

452


460

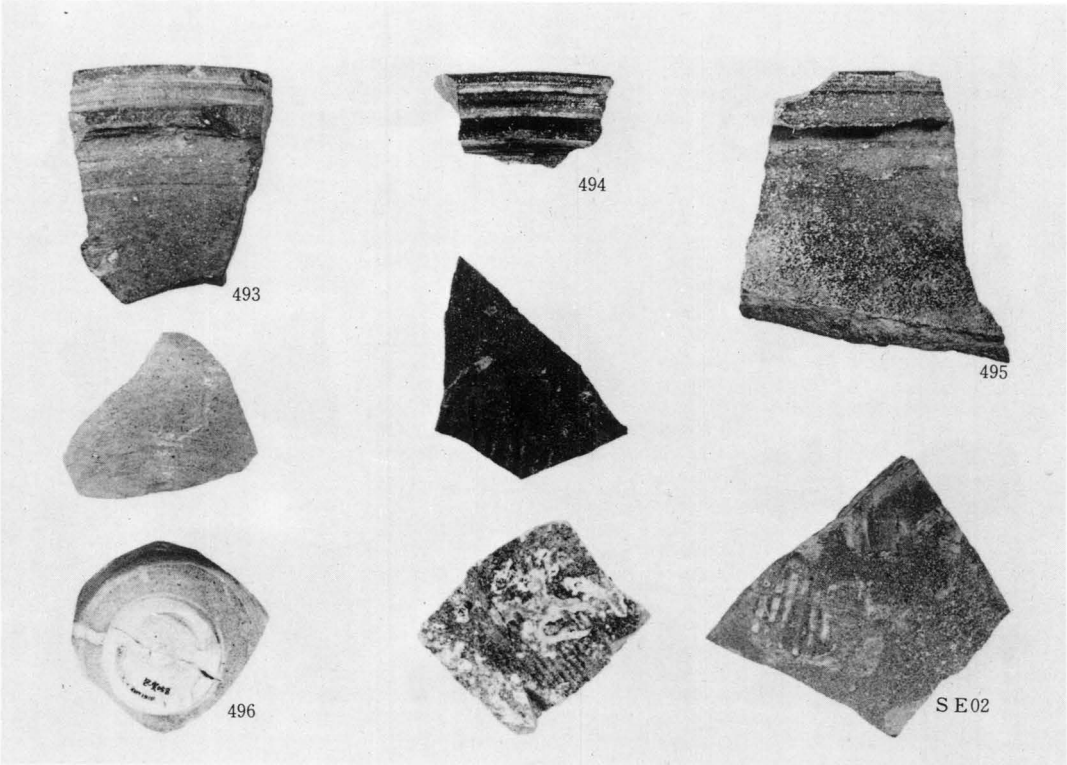

458


471

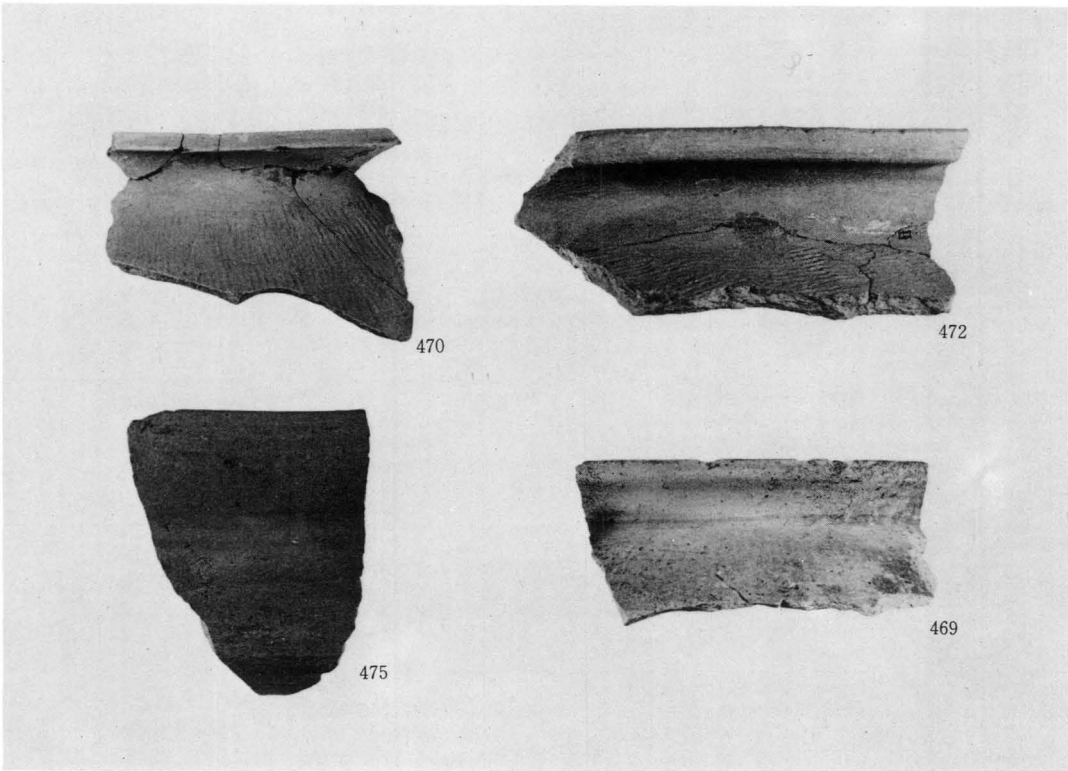

459


454

包含層　土師器小皿、瓦器椀、須恵器杯、輸入磁器

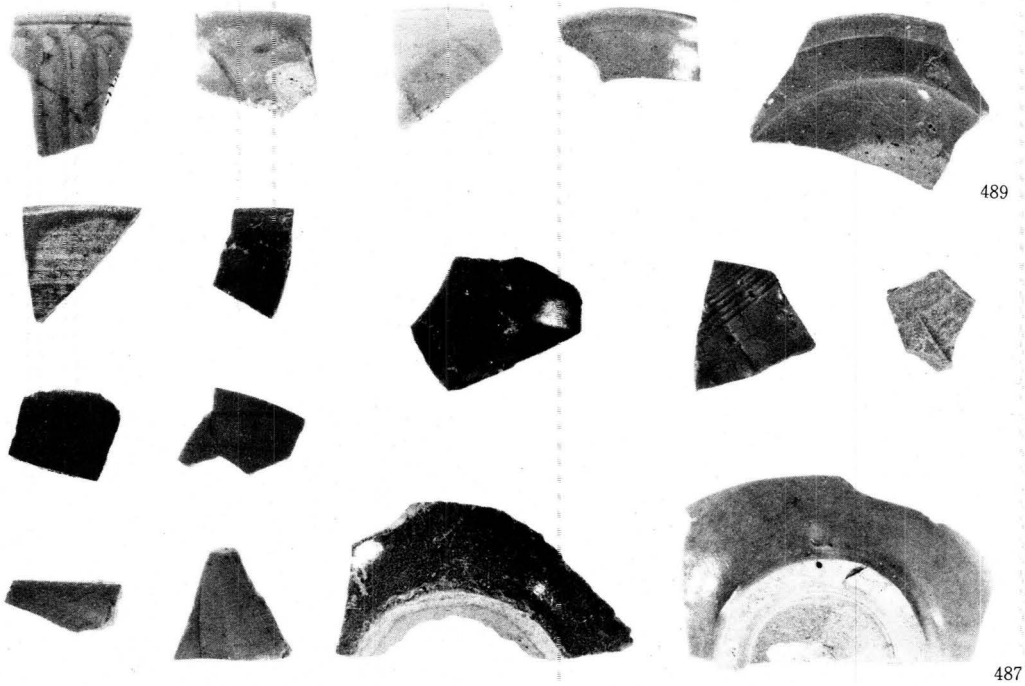


1．包含層　陶器

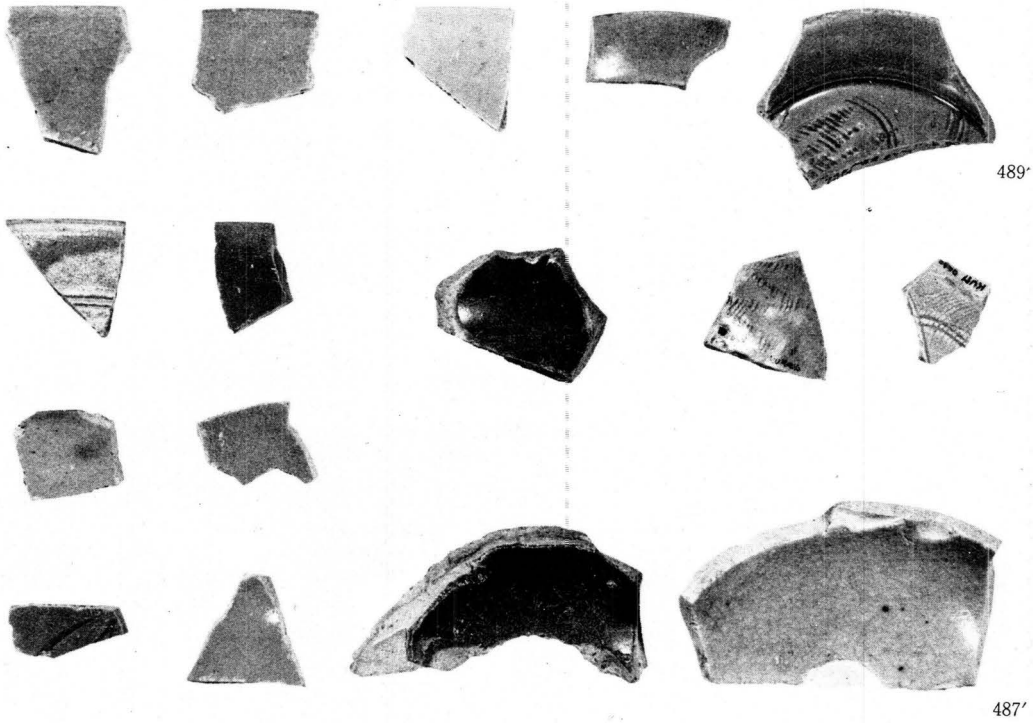


2．包含層　須恵器甕、鉢

図版六十六　A地区遺物

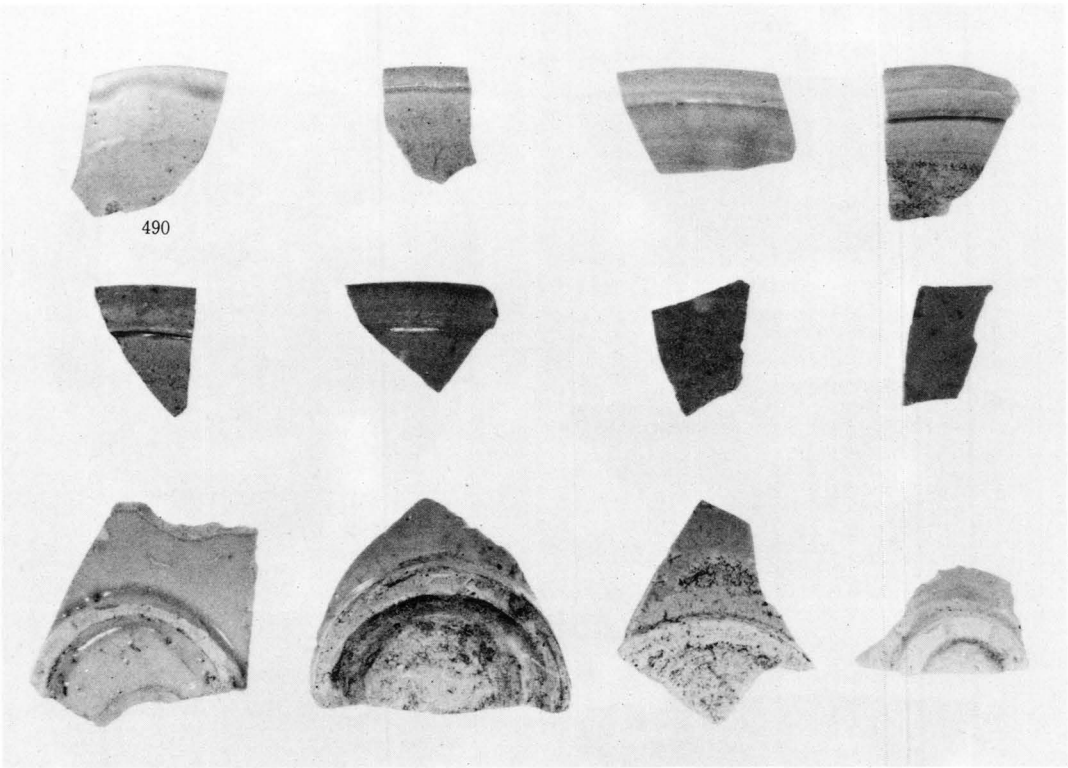


1．包含層　輸入磁器(外面)

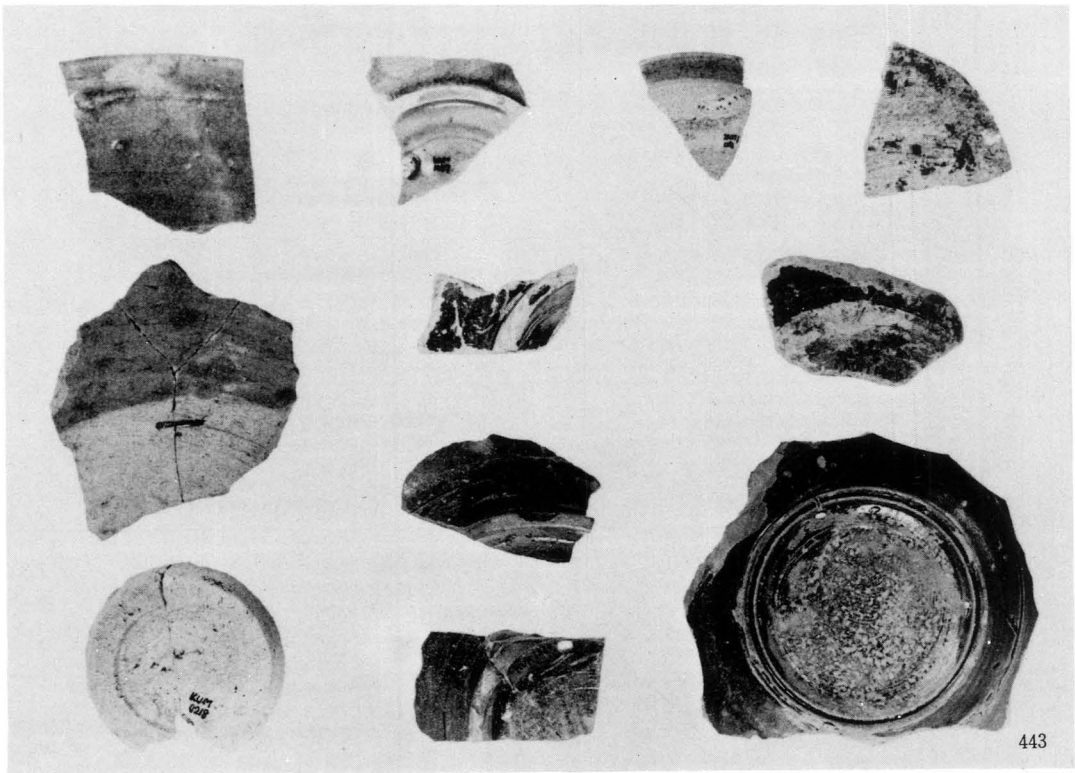


2．包含層　輸入磁器(内面)

図版六十七　A地区遺物

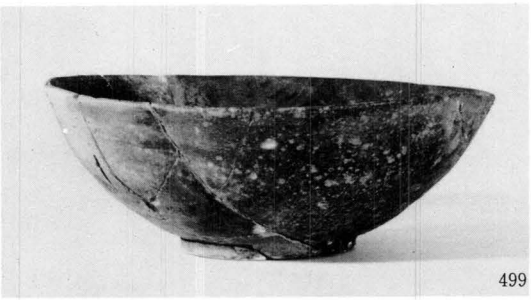


1．包含層　輸入磁器

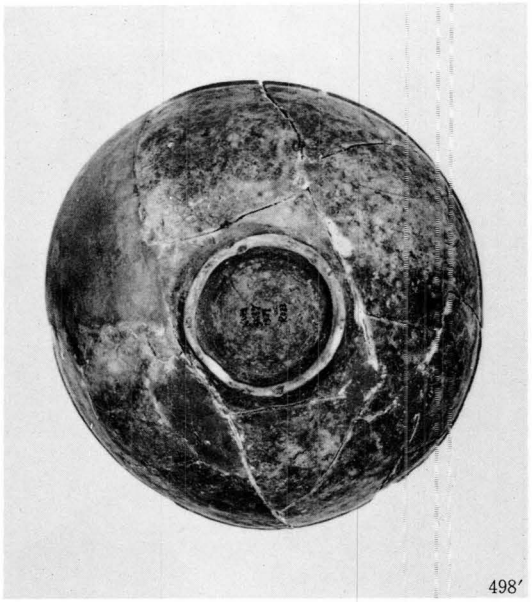


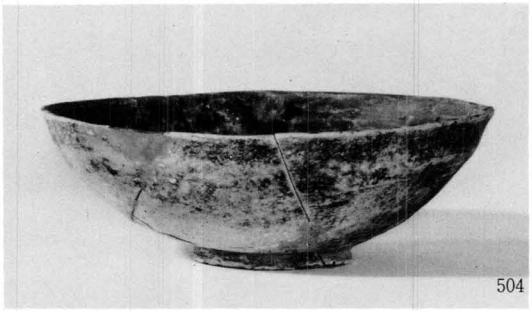
2．包含層　国産陶器・緑釉陶器

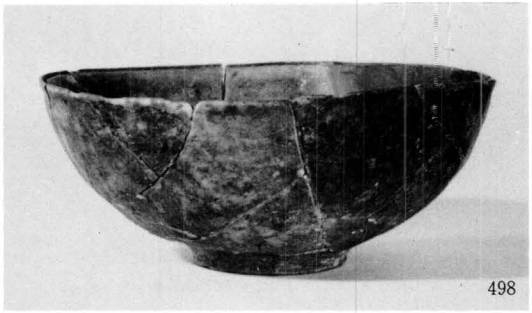
図版六十八　A地区遺物

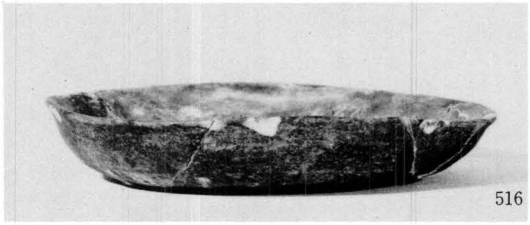

499

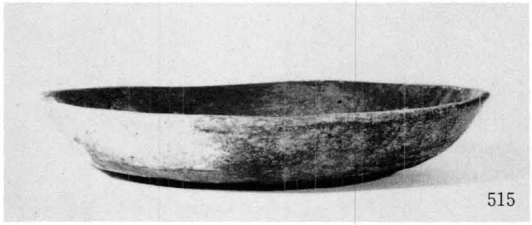
500

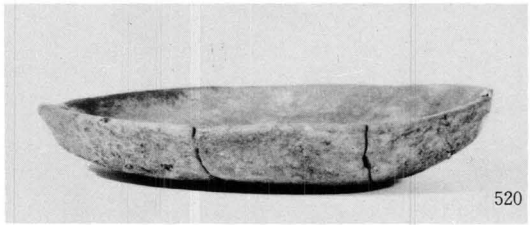

498′

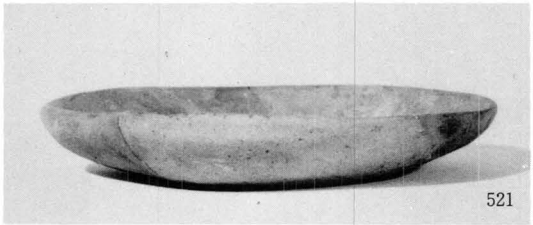

504

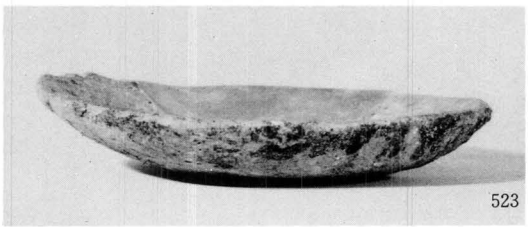

498

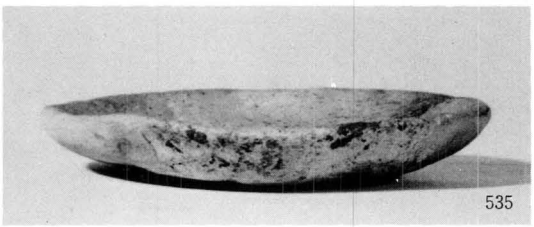

516


515

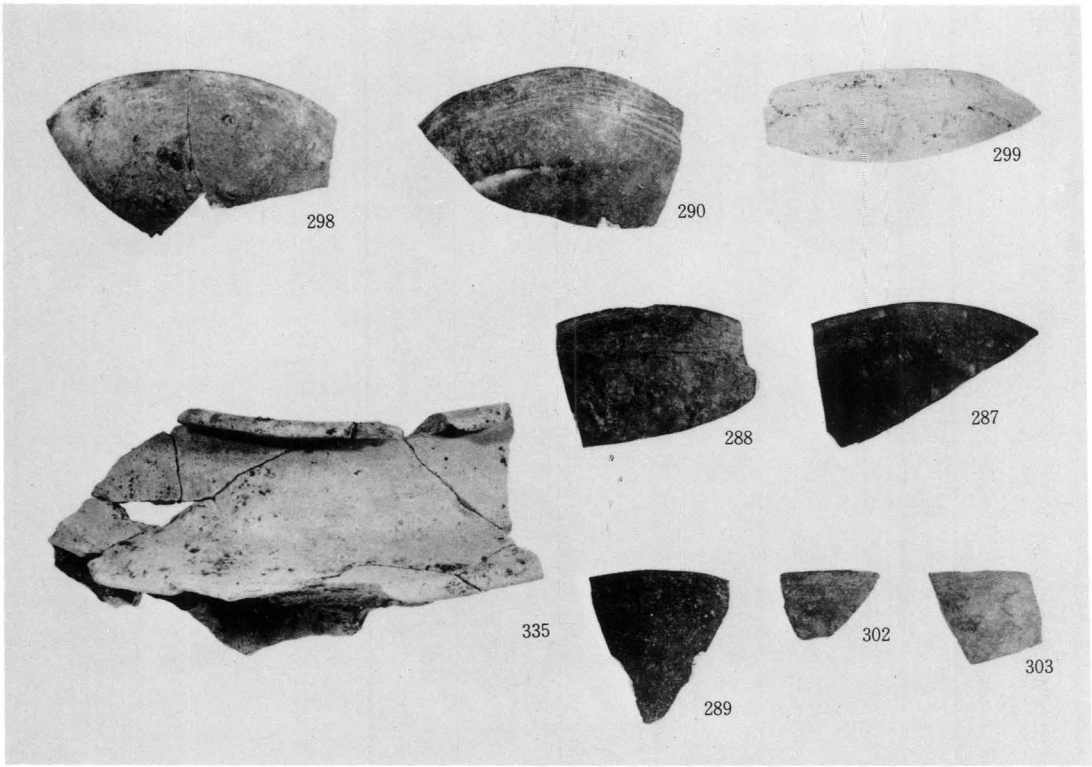

520


521

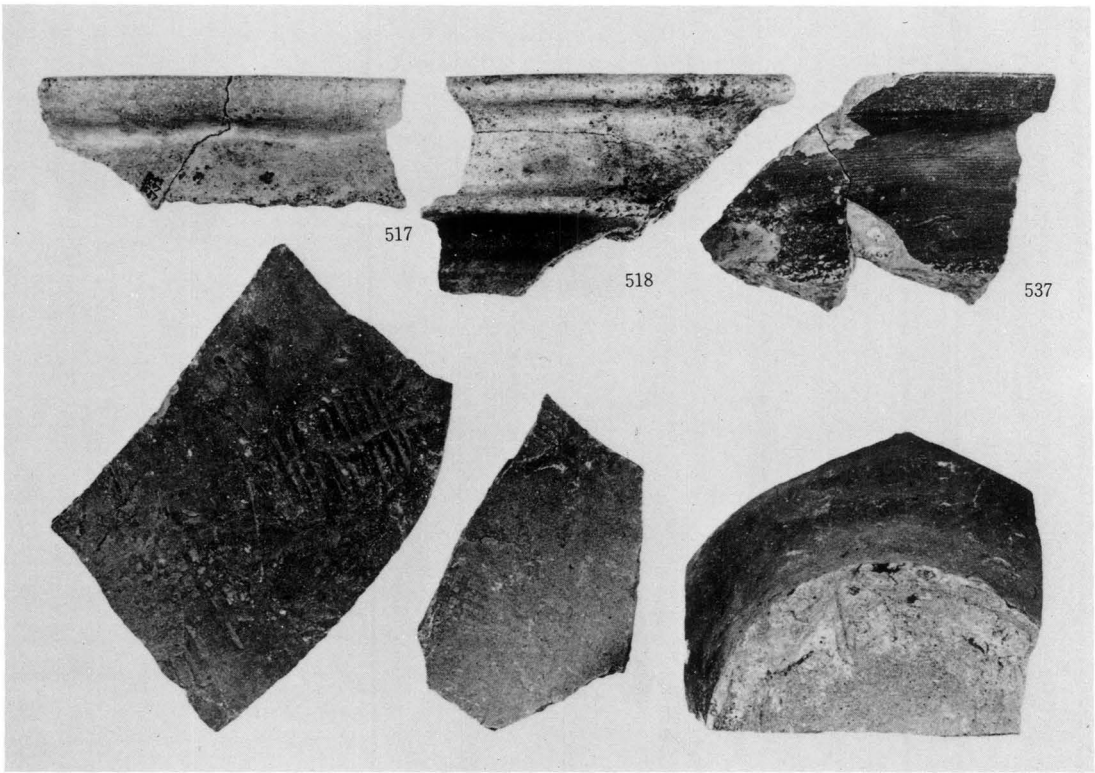

523


535

ＳＫ47　瓦器椀、小皿、土師器小皿

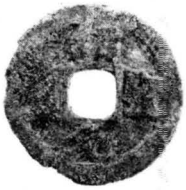


1．SK22　瓦器椀、土師器羽釜



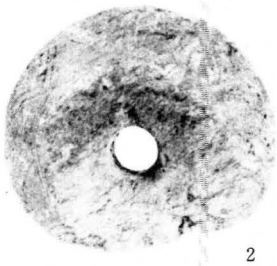
2．SK47　土師器羽釜、陶器

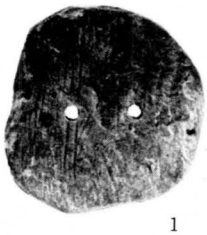
図版七十　A地区遺物


101

103

102


2

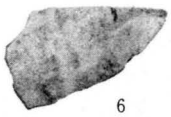

1

3

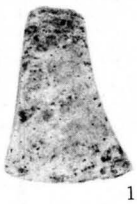
1．包含層　紡錘車（2）　銭貨（102）　ＳＥ05銭貨（101）　ＳＫ30銭貨（103）　ＳＤ52耳環（3）　ＳＢ225双孔円板（1）

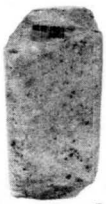
4

2


6

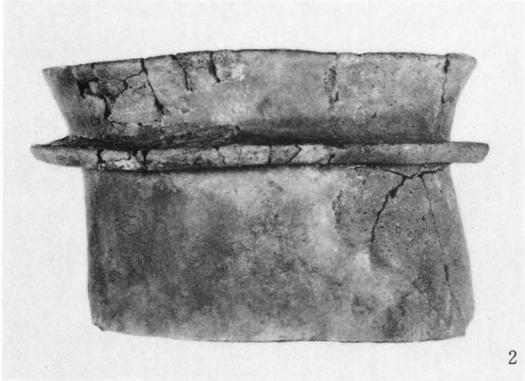
7

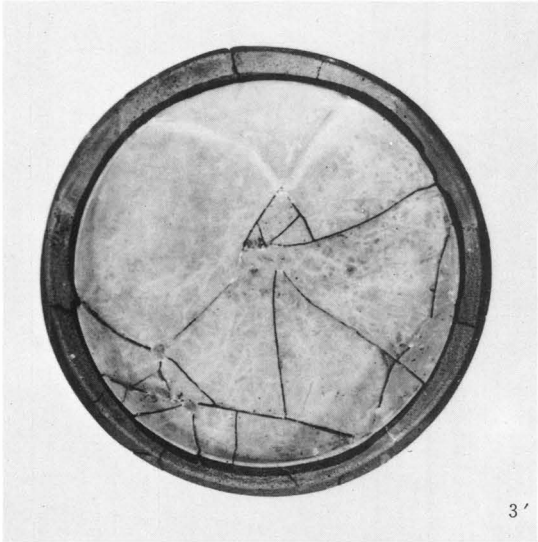

1


5

3

2．砥石　ＳＥ02（3）　ＳＫ22（4）　落ち込み状遺構（5）　包含層（1、2、6、7）





羽釜棺１　土師器鉢（１）・羽釜（２）、羽釜棺２　土師器皿（３）・羽釜（４）

神　並　遺　跡　Ⅰ

1986年10月1日

発　行　東大阪市教育委員会
　　財団法人 東大阪市文化財協会

印　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所